闇堕ち士郎のリスタート

流れ星0111

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

救えないものがある。たとえ犠牲を黙認したとしても、護れない幻想がある。

どれだけ自分を摩耗させても、運命には勝てない。

どれだけ夢に焦がれても、現実はそれ以上に悲惨だった。

そんな運命を認めきれなかった衛宮士郎のお話。

理想という器を捨ててさえこぼれ落ちてしまう幻想をそれでも諦めきれない。

救えきれない幻想を救うために力を求めた衛宮士郎の、やり直す聖杯戦争。

ここにいるのは正義の味方などではない。自身の目的のためあらゆる手を尽くす。ただのたった一人の小さな男の物語。

イリヤと桜と士郎の笑いあった未来を。

注意　正義の味方の士郎が好きな人はキャラ改変がされているため気をつけてください。

今後とも流れ星０１１１を応援よろしくお願いします。

この「闇堕ち士郎のリスタート」をお読み頂いている全ての方に感謝を申し上げます。

目次

第1話 …… 1
第2話 …… 17
第3話 …… 32
第4話 …… 46
第5話 …… 66
第6話 …… 88
第7話 …… 107
第8話 …… 128
第9話 …… 149
第10話 …… 182
第11話 …… 209
第12話 …… 234

第1話

少女を初めて見たとき。感じたのは困惑だった。白髪の髪に朱色の目。浮世離れしていた姿。その発言の意図を理解することができなかった。

少女を二度目に見たとき。感じたのは恐怖だった。巨大な戦士を後ろに控えた姿は、足がすくむほどに恐ろしかった。

少女を三度目に見たとき。唯、無邪気だと思った。姿相応の立ち振る舞いで、愛おしいとすら思った。「私のサーヴァントになって」といったその言葉に、どれほどの重みがあっただろう。

それから何度も顔を合わせた。時に敵として、時に話し相手として、時に妹として。冷徹な表情を浮かべることもあったけれど、それでも無邪気に笑う微笑みに何度も心打たれた。

とあるお城に捕まった彼女を見たとき。彼女の覚悟と置かれた状況を実感した。自分とかけ離れた人生を送った少女に、それでも幸せになってほしいと願った。

これが終わったら、一緒に住もうといった時。彼女は切なそうな顔を浮かべていた。それでも歯痒そうに、照れて笑う少女は、とても儚げだった。

少女を最後に見たとき。ただひたすらに悲しかった。覚悟はしていた。自業自得だ。少女が犠牲になる必要なんてかけらもない。

それでも彼女は笑って。

――私はお姉ちゃんだもん。なら、弟を守らなくっちゃ。

それが最後だった。

やめろよ。そんな風に笑うなよ。満足そうに笑うなよ。まだやりたいことだって、やっと自由になれるんじゃないか。自分の幸せを第一に考えて、好きなように生きれるじゃないか。一人でさびしくない。さびしくなんてなれないように。

止まってくれ。止まってくれ。止まってくれ。止まってくれ。止まってくれ！

手を伸ばす。届きもしないとわかっている手を。知っている。そ

の先に行ってしまえば少女は終わりなことも。
「――――!!!!」
何度も何度も叫び続ける。しかし、声が届きはしない。
光に包まれる。少女の声はもう耳には届かない。
限界をとうに超えた手足は一ミリも動かない。気力もすでに使い果たした。
それでも、脳裏にささやく声はやまない。
それでも、己の魂が叫び続けている。
視界は白でおおわれる。聞こえるはずのない声が、自身の脳で木霊する。
「イリヤの手を取ったからには、最後まで守り通せ」
「衛宮。助けたものが女ならば殺すな。目の前で死なれるのは、中々に堪えるぞ」
そんな仇敵たちの声が響く。
そんなことはわかっている。わかっているさ。
それでも、手足は一ミリも動かない。魂がどれだけ主張しても、肉体の限界は超えられないのか。
こんな状況が、前にもあった気がする。
視界はつぶされ、抵抗する苦悶さえあげられない。先に進まなければならないのに指一本動かせない。
その中で、あり得ない幻を見た。
赤い外装をはためかせ、その大きな背中で、鋼のようにまっすぐに。
しかし、今回の彼はこちらを向いてすらいなかった。自分の道はこちらだと一心に前だけを見て。
そんな姿が、言っていた気がした。
――――立ち止まるなよ。
ああ、言われなくても。
背を向ける。たとえ、どんなに理想とかけ離れたとしても。たとえこの先に破滅しかないとしても。
一人にしないって決めたのは自分だから。

届かない。
もう声は聞こえない。
光に包まれて何も見えない。
彼女は、最後に。
じゃあねと微笑って、バタンと、大聖杯の門を閉め……
「させねぇよ。させるわけねぇだろうが…！」
もうすでに起動してしまった器を抱え、無理やり門をこじ開ける。
「勘違いするな。勝者は俺だ。貴様を連れて行くのは俺だ。だから…」
イリヤを返せ。イリヤヲ返せ。イリヤを…返せよ！
しかしうなだれる人形に反応はない。すでに機能を奪われた器はもう、彼女とはかけ離れていた。
未だ暖かい亡骸。これが失うということ。自ら掲げた理想から取りこぼされたもの。
この道を歩むとき。決めたのではなかったのか？自分の守りたいもののために他のすべてを犠牲にしてもよいと。
これがその結果か？あの景色を守るのではなかったのか？居間に集まったあの日の家族を。
間に合わなかった。自分の力が足りないばかりに。どれだけ決意を固めても、取りこぼしてしま物があるとでもいうのか？
違う。こんなことを招いたのは、すべて自分のせいだ。自分の力が足りないから。自分の覚悟が足りないから。
「ならよこせよ。力が必要なのならば」
手を前に伸ばす。本来求めてはいけないもの。衛宮士郎が一番拒絶しなければならないものに。
「穢れた聖杯よ。聖杯戦争の勝者として命ずる。力をよこせ。すべてを救うなんて言わない。すべてをこそぎ落としてでも、守りたいものを守る力を」
答えは得た。どんな手を使ってでも。どんな犠牲を払ってでも。
その罪をすべて背負う力を、俺によこせ。

「先輩。起きてますか？」
聞きなれた声が土蔵に響く。それはまるで頬を撫でるようで、心地よい音色と共に塞いでいた意識の扉がよみがえる。
「…桜」
「おはようございます。先輩」
開いた扉からは涼しい風が差し込んでくる。明るく、そして輝く光が目に刺さった。
とても長い時間、肌に風を感じることはなかったような気がした。
「ど、どうしました？先輩。そ、そんなに私をじっとみて」
見慣れた少女の顔が赤く染まっていた。恥ずかし気に顔を逸らすその後ろから刺す日光が、より彼女の紫色の髪をきらめかせていた。
何も答えずにいると、気まずさに耐えきれなくなったのか小さな声を桜は漏らす。
「あの、何か言ってもらえないと。さすがに私も照れるんですけど…」
手を組んでもじもじとしながら、桜はふうと息をつく。よっぽど顔が熱いのか、手で風を仰いでいた。
返答もせずにただぼっと見つめていると、流石に声を荒げ、桜はぐいっとこちらに体を寄せてくる。
「先輩！寝ぼけてないで起きてください！朝ごはん冷めちゃうじゃないですか！」
柔らかく透き通る細い指先が頬をつねった後、その手は肩に回った。抱きかかえるように肩を持ち上げて立たせようとする。しかし、あんまり力が強くないから逆に胸元に飛び込んでくる形になってしまった。
「あ、ご、ごめんなさい。すぐ離れますから」
気まずそうにそう声をあげ離れようとする桜の体を抱き寄せる。

家とは違った、いつもの桜のシャンプーの香りが鼻をくすぐる。
妙だと思ったのか、桜はつっかえ棒を差しこもうと、己の両腕を胸元へもっていく。
「え、先輩。な、何するんですか」
「いや、ちょっと肌寒くて。不快ならすぐ離すけど」
「…それなら別に良いですけど」
桜から伝わる体温は、とても暖かかった。自分よりずっと。土蔵で寝たせいか、氷のように冷たくなった手を桜の体に当てる。
少しずつ互いの体温が移っていくなかで、抵抗を辞めた桜が、困惑と照れの混じった顔をしながら小さく口を開いた。
「でも。朝ごはん冷めちゃいます」
「…それもそうだな。起きるか」
かぶさった桜ごと体をあげる。突然のことでキャッなんて声を出していたが気にしてはいけない。むーとした顔にもなっていたが気にしてはいけない。
「改めて、おはよう桜」
「おはようございます。先輩」
花のように微笑む桜。大切な日常。桜の頭を撫でる。困惑はしていたが、拒絶することはなかった。
こんな笑顔を送ってくれる彼女を。慕ってくれる後輩を。
俺はこれから地獄に堕とすのだろう。

「士郎！どうしてお醤油とソースのラベルを変えたのがわかってるのよ！」
「どうしてもこうしてもあるか。藤ねえの様子とあとは匂いでわかる」
驚きと失意の表情で睨みつけてくる藤ねえを横目に、ソースと書かれた容器に入る醤油をかけていく。
朝っぱらからタイガーが新聞なんか読んでる時点で、普通なら察す

る。というわけではない。
単に一度目ではないだけだ。ラベルを変えられたことがではなく、この日そもそもが。
冷ややかな目線を送っているのにもかかわらず、藤ねえは頬を膨らませながらまるで悪いのはお前だといわんばかりの細めた目で見つめ返してくる。
呆れたように盆に茶を乗せた桜がスッといつもの自分の位置に座るのを見届けて、藤ねえのいじけたボイスに耳を傾ける。
「むー。わかっててもー、士郎なら引っかかってくれるものと思ったのに。お姉ちゃん悲しいな」
「俺は朝から大道芸に付き合うつもりはない」
「先輩お茶です。藤村先生もほどほどにしないとダメですよ?」
「桜ちゃんも味方になってくれないの!もう良いもん学校もういくから。士郎なんて赤点真っ赤にしてやるんだから」
「勘弁してくれ…」
べーーーだ。なんて言ってタイガーはダダダダッーっと廊下を走って言った。走り去る自称トラの変わらない姿に、苦笑いがつい漏れる。
桜は、その芸を羨ましそうに眺めながら、お茶を口に含む。
「先輩。藤村先生になんかしたんですか?」
「あー。なにしたんだったか。忘れた」
「もう。あとで謝っといたほうがいいですよ」
・・・・・ほっとけば機嫌も治るのです。虎の扱いとは、その程度でよいのです。
そんなことよりもと、桜の方に向き直る。
「今日も夕飯作りに来るんだよな?」
「はい!もちろん!何か食べたいものはありますか?」
特に食べたいものもなかった。ここは先ほど駆け出して行った野獣のご機嫌取りもしなければいけないことも考えつつ、選択をしなければならない。
大きくため息をつきながら、今日の食費が倍増することを予知し

て、覚悟を固めた。
「虎を城下町に放つわけにはいかないからな。今日は少し豪華にしてやろう。手伝ってくれ」
桜はそういうとみるみる嬉しそうになる。少し手が前で上下に動いていて可愛かった。
「食材の方はどうしますか？」
「部活終わりまで待ってるから一緒に買いに行こう」
「は、はい！」
いい返事をして、学校に行く準備をする彼女の足取りは、心なしか軽かった。今からもう楽しみにしているようで、その様子のほほえましさから笑いが漏れた。
あと、と。大切なことを忘れないうちに伝えなければと居間から離れそうになる桜を声だけで呼び止める。
「それと桜。今日からうちに泊まってもらっていいかな？」
突然の発言からか、桜の足が止まる。ギギギと音がなるように振り向いたその表情は案の定何も映してはいなく、張り付けられた無表情から、機械音声のような声が漏れてきた。
「・・・・ 先輩。聞き間違いだと思うんでもう一度言ってもらってもいいですか？」
「今日からうちに泊まっていってもらえないか？」
無表情の桜の首筋からどんどん顔にかけて赤くなっていくのが確認できた。
「え、えええ、あの。な、なんででしょうか」
早口になる桜の様子はこれまで見たことがないほど困惑していて、すでに会話の節々に〝あわわ〟という言葉が挟まっていることから、症状がとても悪いということが察せられた。
「近いうちに一人客人が来るんだ。外国の方なんだけど一人で案内するのは自信がなくてな。そういうのは同性がやってもらったほうがいいと思って」
「で、でもそれなら藤村先生が」
「俺は桜に頼みたいんだ。ダメかな？」

「と、年頃の男女が一つ屋根の下って‥‥ そんなの」
顔を真下に向けながら、桜はぼそぼそと何かをつぶやいていた。嫌がっているわけではなさそうなので、ここはいったん引いてみる。
「それとも、俺と一緒に住むのは嫌かな?それなら仕方ないと思うけど」
「そ、そんなことはありません!!先輩が嫌なんて思うことなんて絶対ありません!!」
かみつくように桜は声をあげた。その際思わず状態をこちらに近づけたせいか、足の小指を机にぶち当てる。
「いったぁ‥‥‥」
「大丈夫か桜」
足をいたわるように触る。見た感じでは爪が割れているなんてことはなさそうだ。それにしてもきれいな足だ。肌は透き通るように白いのに、筋肉質な足。
「あの、先輩。あんまりじっと見られると恥ずかしいんですが」
「ああごめんな。少し見とれてた。ご家族には俺か、藤ねえから連絡をしておくから、それでも無理かな?俺には桜が必要なんだ。無理を承知で頼む」
これが決め手になったのか、深く目線を落とした桜は、決意したような目でこちらを見た。
「わかりました。許しが出れば」
「‥‥ そうか。ありがとう桜」
頭から湯気が出てるんじゃないかと思うほど顔が赤い。俺も心なしか頬が熱いかもしれない。
あと2日。あと2日だけだ。戦いが始まるその時まで、幸せな時を刻ませてほしい。
もう、数日しかこんな日はやってこないのだから。

今日も無事終わる。夕飯は藤ねえ好みの豪華な食事にしてやった。怒っていた理由は覚えていないが、藤ねえが喜んでいるのは悪い気持

ちはしない。桜と二人で長い時間調理をするのは、とても心地よかった。藤ねえに新婚みたいだね。なんて言われた時の桜の照れた顔がとても愛しく思える。

桜を泊めるといったとき、藤ねえに絶対反対されると思ったが、それほど反対されることもなかった。

むしろ始終ニヤニヤして桜に「やっとだね。」とかいう始末。もちろんその後の桜の顔は蒸気を出していた。

桜には今日から客間の一室を使ってもらっている。これから長く使うことになるんだ。早く慣れてもらいたい。

それで今どこにいるかというと、衛宮士郎の魔術といえば土蔵。肌寒い空気をもろに感じる中で足を組み、自身の内面に意識を注ぐ。

始めよう。魔術回路を開く。前の日まで衛宮士郎が行なっていた、魔術回路の製作ではなく。スイッチのオンオフを行う。

やり方は脳裏に焼き付いている。あとは体に慣らすだけだ。今はもうないやつの左腕の経験値は今でも目を閉じるだけで思い出せる。

これから始めるのは強化ではなく投影。0から1を生み出す、偽物の虚構の能力。

「投影開始（トレース・オン）」

なんの変哲も無いナイフを想像、創造する。全身にある神経を総動員し、魔術回路を走らせる。

全身を一瞬焼き尽くすような痛みが覆う。今まで使っていなかった回路を開いたからだ。それでもこの程度は慣れたものだし、気にするほどでも無い。集中力が途切れることはなく、手元には想像通りのナイフが握られる。

硬度、形状、ほぼ完璧に出来上がっている。何の神秘も経験も含んでいないものだからだろうか。

身体中の熱を抑えるよう意識し、スイッチをオフにする。やり方を知っていたからか、易々とこの体も、それに適応したようだ。

手にしたナイフを前方に思い切り投げる。直線を描いたナイフはそのまま壁に当たり、カランカランと音を立てて落ちた。

威力は無い。あのとき可能だった動きはもう不可能に近い。左腕

の加護で強化されていた身体能力も、今や一般人の能力と大して変わらない。今城から何の強化もなしに飛び降りたら間違いなく死ぬ自信がある。

もう一度同じナイフを投影する。次は詠唱なしで。少々時間は長くなるが、特にナイフの質に差異は無い。宝具となれば話は別だろうが。

次は、自身の手首まわりを魔術で強化した後、スナップだけでナイフを投げる。すると倍近くの速度で飛んで行ったナイフは壁に垂直に刺さる。

前日まで出来なかった。いや、本来ならば今できるはずのなかった魔術。

知識と経験はもちろん別物だ。あの左腕は自動的にどちらもアップデートする。言えば自動制御みたいなものだ。魔力を通し、投影するとした時点で経験と知識が自動的にリロードされて打ち出される。

しかし、今残っているのは、脳髄に刻まれた知識だけ。肉体としての経験は0に近い。

だからこそ、時が惜しい。何度も何度も投影を続ける。瞬時に使用できるよう、体に慣らすよう。気力が尽きるまで何度でも何度でも。

「先輩。二日連続でこんなところで寝たら絶対風邪ひきますよ?」

昨日と同じ声が耳元で響く。昨日よりも幾らか覇気のある声。その様子だと眠れなかったなんてことはないようだ。

「悪い桜。今起きる」

上体をすぐにあげる。いくらか汗をかいていたのか体は少しべたついているようだ。シャワーを浴びてくるか。少し違和感もある。

‥‥ 少しだが物欲しそうに見える。桜に猫耳が生えていたならば、間違いなく垂れているだろう。

「‥‥ 桜。もしかして、昨日みたいの期待してるのか?」

そんなことを言ってしまったからか、桜はすぐに顔を上げて頬を張らせる。

「何言ってるんですか!・そんな、そんなわけ・・・・ないじゃないですか」
少しずつ小さくなっていく声に説得力はないんだが。まあそれで桜の機嫌が悪くなってもしょうがない。服の汚れていない部分で手を払って桜の頭をなでる。
「抱きしめてやりたいのはやまやまなんだけど、汗だくだから嫌だろうし。これで許してくれ」
「べ、別にそんなの気にし・・・・何でもないです。だったら早くシャワー浴びてきてください」
セリフはとげとげしいが、声にはとげを全くと言っていいほど感じない。真ん丸だ。猫だったらゴロゴロ言ってるやつだ。
「それじゃあお言葉に甘えて。すぐ居間に向かうから待っててくれ」
「はい。わかりました。お待ちしています」
桜から手を離す。その間で、自分の目にも鮮明に映った。令呪。聖杯戦争マスターの証。これから赴く戦場への片道切符。
それをうまく桜には隠すように風呂に向かう。そんな後姿をほほえましく見る桜。
ふと、先ほどまで衛宮士郎がいた場所を見る。そして、見覚えのない道具の類を目にした。その中の一つに一瞬目を奪われる。しかし、直後に大河の「桜ちゃんもうご飯食べようよ～」の声に引っ張られ、まじまじと見ることができなかった。
それは、小学生の図工で作るような粘土のように歪で、とても悲惨なようで、けれどとても強く見えた。

学校に着いた途端慎二に絡まれた。主に桜が。途端に桜に近づいて。
「桜!・お前昨日はどこで何してた!?・僕の許可なく外泊なんて許されると思ってるのか?・」
なんて言って桜の手を掴むもんだから思わず引きはがして肩の関節を決めてやった。

「痛い!!なんだよ衛宮。兄妹の関係に口を出すなよ。何様のつもりだ!お前!!」
「いや、桜に頼んだのは俺だ。桜は昨日からうちに泊まることになってる。お前の祖父に連絡は入れたはずだぞ?」
「な、お、お前の家だったのか。道理で桜がしっぽ振ってるわけだ。桜!お前には衛宮の家にはもういくなって言っておいたよな!」
　この体勢にもかかわらず、桜に対して怒号をやめない。少しお灸をすえる意味を含めて、肩の関節をよりきつく決める。
「うるさいなぁ慎二。桜がどこで何してようとお前に関係ないだろ。そもそも頼んでるのは俺なんだから桜に当たるのは筋違いだろ?」
「せ、先輩そのくらいに。兄さんそれ以上したら肩外れちゃう」
　力を入れすぎたのか、もう一捻りすれば脱臼間近だった。少しばかり視線も集まってきている。ため息をつきつつ、桜の言うとうりに離した。
　それと同時に慎二は体をねじって右腕を振りかぶる。
「衛宮!お前調子に乗らせておけば!」
　奇襲だとでも思っているのか。それでも遅すぎるくらいだ。顔面狙いの右腕を右手で外に押し出し軌道をそらす。そのまま、慎二の懐に入り込み右ひじを軽くみぞ内に当てる。
「慎二。折角解いてやったのに薄情だぞ?お前」
　そのままスッと背筋を伸ばし、慎二の眼球を覗いた。奥には恐怖の色がかかっている。
「あんまりケンカを売る相手を間違えるなよ?危ない目に合っちまうからな。心配だぞ俺は」
「う、あ。わ、わかってるよそんなことは。お前に言われなくても」
「ならいいんだ。桜。そろそろ朝練始まるんじゃないか?早くいかないと美綴あたりにどやされるぞ?」
　目線で桜をこの場から離れるように言う。慎二とは少し話をつけないとめんどくさそうだ。
「待てよ桜。話はまだ」
「話が終わってないのは俺だ慎二。その話なら、お前の祖父に話はつ

けてる。それ以上文句があるならそっちに言ってくれ」
「・・・・ くそ。わかったよ。わかりました。その件に関しては黙認してやるよ」
「ならよかったよ。あと、桜も年頃なんだからシスコンが過ぎるのはどうかと思うぞ？あまり軽々しく桜に触らない方がいい」
　じゃあな。部活がんばれよって付け足してその場を去ろうとする。それなのに、後ろからまだ声をかけてくる。
「なんだよ。味見が済んだからって今度は独占欲か？いいご身分だな衛宮」
「・・・・ なんか言ったか？」
「やった感想はどうだったかって聞いてんだよ。衛宮、人の妹に手を出したんだからそれぐらいの質問答えてくれてもいいだろう？」
「慎二。さっきも言ったけどな。煽る相手を間違えるなよ。でないと」
・・・・・・・ 殺したくなるだろう？
「でないと巻き込まれるぞ～変な抗争とか。殺し合いとかに」
　最後の言葉に含まれた意味を理解したのか、目を見て萎縮したのかは知らないが、それ以上背中から声が振ることはなかった。

　で、なんでもう5時なんだ。さすがに昨日の疲れから、６限目をずっと寝ていたのだが、誰か起こしてくれないものか。主に一成とか。
「桜待たせてるかな。それとも帰っちゃったか」
　桜なら帰る前に寄ってくれる気もするし、なんなら部活中の時間帯だ。弓道場によって帰るとしよう。
　廊下を歩く、人が少ないのか足音がよく響く。夕立が窓から差し込んできている。オレンジ色の光。彼女と一緒に見た空は、似ているようで全くの別物で。
　懐かしいと思う記憶は、愛しいと思う記憶は、ここではすべて贋作

には過ぎないかもしれない。
でも、そのために拳を握ってもいいはずだ。
下駄箱で靴を履きかえて、外に出た時点で異変に気付いた。人がいない。全く。
冷や汗が流れる。体がこの状況を拒絶している。吐き気のするような違和感。これは。
「どうして。それは明日のはずだ！」
夕焼け時に、しかも一日前。そんなこと今までなかった。あり得ない。そういえば令呪の発現も一日早かった。
なら・・・・ まさか。
先ほどの雰囲気とは打って変わった張り詰めた雰囲気が流れる。
校庭から大音量の衝撃音と、刃と刃が重なる音が響く。尋常じゃない風圧と、威圧が襲う。
今すぐここから離れないと。ここにいたらそれこそ殺される。
まだ気づいてないかもしれない。すぐに体を反転させて、魔術回路を顕現。主に脚を強化し、全力で駆け出す。
運命が言っているようだった。お前は一日すら休ませないと。そんな資格お前にはないと。
上等だ。いいだろう。一日でも早く勝ち取ればいい。たとえ何を犠牲にしてでも。
後ろから、追走してくる音が、敏感になった耳に届く。気づかれたのは数秒前。いや違う。追いに来始めてから数秒。土蔵に着くまでは残り３０秒弱。
アドバンテージは無いと思ったほうがいい。追ってきているのは最速の英霊。あと１０秒足らずで視認できるほどになる。
いつもは人があふれているような道なのに、別世界のように静寂の流れる空間。自然と焦る気持ちが募る。
戦おうとは思わない。しかし、何もしなければいとも簡単に殺されるだけ。
故に、この場限りでも構わない虚像。されど実体を持つ、この世界を侵食する力の一部を使う。

言葉にするのは唯一つ。
「投影（トレース・オン）、開始」
イメージするのは宝具ではない。あれらの刺突をそらせるギリギリの境界線にあるような、名もなき無銘の剣。形状は短い青竜刀の様。まるであの男が愛用していた武器に似せた偽物を投影する。
何の憑依経験もない剣だが。それでも逸らすだけなら十分すぎるほどだ。
ついに後方に現れる青い槍兵。かと思えば次の瞬間。
「坊主。それは何の真似だ？」
側面から脳天を直接狙った攻撃を、頭を下げ、体をねじり、槍を上にはじくことで何とかかいくぐる。
一振りで形状を失った剣を瞬時にもう一本。手に出現させる。
もうすでに門は見えた。一瞬稼げた時間を活かし、最大のスピードで家に入る。
家に誰もいないようだ。よかった。これなら、桜や藤ねえに魔術を見られることも危険にさらすこともない。
しかし、追い打ちがやむことはない。神速の槍が死を運んでくる。何とか剣の側面を穂先に合わせ、衝撃を逃がす。しかし、それが精いっぱいで右足での蹴りがもろに内臓に響く。
数メートル飛ばされた。肋骨も何本かやったかもしれない。立ち上がろうにも臓器と三半規管を混ぜられていてうまく働かない。
「悪いがこれも仕事でな。気は乗らねえが、目撃者は消せとの命令なんで、潔く死んでくれると助かる」
こちらに歩いてくる。一般人なら意識を失いそうなほどの威圧感を感じさせながらも、衛宮士郎は顔色一つ変えなかった。
「おそらくは最後のマスターだろうが、これも運命だと思って受け入れてくれ」
衛宮士郎は不敵に笑う。ああ、そうだろうよ。だってここは。
最初に衛宮士郎が自身の剣と向き合った。掻き消そうにも刻みつけられた記憶の場所そのままなのだから。
左手がうずく。今回も正常な召還は出来ないだろうが不満はない。

これから召喚するサーヴァントは最強のサーヴァントなのだから。
「運命を受け入れる。笑わせるなよランサー。何のためにここにいると思ってる」
左手を握りしめる。その言葉だけは、絶対に覆す。頭にくる。俺がどれだけ奔走しても、きっと運命とやらの修正力は働くんだろう。
認めない。認めるわけにはいかない。俺がここに立つ意味をみすみす奪わせてたまるものか。
ふざけるな。貴様らが俺の大切な幻想を奪っていこうというのなら。
そのすべてを上回って。俺の幻想を守らせてもらう。
舞い上がる風。走る火花。迫る穂先をはじいた黒色。運命を変える第一歩。
「問おう。貴様が私のマスターというヤツか？」
闇に堕ちた主と、圧政に満ちた従者の、失われたものを取り返す復讐劇が始まる。
理想が幻想を討ち亡ぼすなら。喜んで理想を踏みにじろう。
運命が幻想を打ち砕くなら。喜んで運命を欺こう。
たとえ何を代価にしてでも、護りたいものがあるから。

第2話

「サーヴァント。セイバー。召喚に応じ参上した。マスター指示を」
　左手の刻印を見ながら、黒き騎士はそう高らかに言う。あの時と同じ、されど全く異なった状況が、衛宮士郎の瞳に広がった。
「ああ、戦闘だセイバー。眼前のランサーを蹴散らせ」
　不敵に浮かべる笑みに、同じように返すセイバー。その手に握られているのは、潔き精錬の剣ではなく、純黒の邪悪な聖剣だった。
「了解だ。マスター。これより我が剣は貴様と共にあり、貴様の運命は我が手中にある。
　ーーーーここに契約は完了した」
　そう言うと、セイバーは己の黒い剣から魔力を放出し、目にも留まらぬ速さでランサーに接近する。
　高速の剣戟の歓声が、夕焼けをバックに繰り広げられる。
　セイバーの放つ強力無比な攻撃を、ランサーは正面から打ち合う形になる。状況は完全にセイバーが優勢と見える。なんせそもそもの火力が違う。火力だけで言えば、拳銃と散弾銃のようなものだろう。それに今回はランサーが能力をセーブしている。一撃一撃打ち合うたびに、ランサーの穂先から火花が飛び、ランサーは後退を余儀なくされる。
　それでもさすがは英雄というものか、大振りのセイバーの攻撃の隙間を縫って致命傷を狙っていく。
　しかし事もあろうにセイバーはそれを剣で守るのではなく、見切ったかのようにかわしては、魔力放出をしながら腕につけられた鎧によって弾いていく。
　さすがに状況を不利と見たか、ランサーは一旦距離を取る。約7メートル。お互いの獲物の射程ではない。
　だが、最速の英霊。一呼吸で、距離を戻し、セイバーのその首へ穂先を伸ばす。
　しかしそれを、当然のように、いともたやすくセイバーは、片手でそれを掴む。纏った魔力によってその勢いは完全に殺された。

表情は依然笑みを保ち、見切ったと言わんばかりに叫ぶ。
「どうしたランサー！最速の英霊が聞いて呆れる！その程度なら英霊などとは名乗らぬ方がいいぞ！」
槍を右に押し出し、それとは逆側に回転し、左脇腹から薙ぎ払う。
「だめだセイバー。まだそいつは殺るな！」
セイバーの剣が一瞬止まる。その隙にランサーは弾かれた槍を体の間に入れ衝撃を逃す。しかし、トドメを狙った一撃。数メートルは吹き飛ばされる。
1秒待たずに立ち上がり、視線が向くのはこちら。
「・・・・ 戦士を愚弄するか。坊主」
さっきの発言を気にしたのか、殺意はセイバーではなくこちらに向く。
「手心を加えるとは随分と余裕があるようだな。先ほどの逃げ腰はどうした？」
不敵に笑うランサーの表情からは怒りが目に取るようにわかる。
「それはそちらも同じだろ。ランサー。様子見が目的なのがバレバレだ。それとも、それが本気なんなら、いつでも殺せる。何も今殺さなくても、泳がしておいた方が効果的だ」
お前より弱い奴もいるんだろう？と付け足したところで、ランサーの眉間に青筋が立つ。
「よく言った。ならば受けるか我が宝具。侮るなよ。そこの女一人片すぐらいの力はある」
ランサーは離れたそこから、左腕を大きく下げ、特殊な型を取る。
《ゲイ・ボルグ》因果逆転の呪いの槍。放たれた瞬間。命中するという事実を確定付ける。
躱すのに必要なのは俊敏ではなく幸運。染められたセイバーの幸運はC。放たれれば万に一つも躱し用は無い。
しかし、それは放たれればの話だ。
「・・・・ それは悪手だぞ。ランサー。止まっていれば槍兵の名が泣くぞ？」
宝具発動のリスクの一つは、何の英霊なのかが発覚しやすいこと。

そうなっては弱点や他の宝具、能力を悟られてしまう。
他にも、魔力消費量なんかもあるが、それはマスターによるから人それぞれだ。少なくとも目の前の槍兵には関係あるまい。
では何が問題なのか。それは真名解放型の宝具では、解放時決定的な隙が生まれること。
ランサーが言を紡ごうとした瞬間、一瞬、目の前の空間を黒い闇が走る。線にも見えたそれは、その場を凍りつかせた。
ランサーの首筋、その先端薄皮一枚が裂かれツーと血が垂れる。
その一瞬、セイバーの剣が伸びたのだ。いやその表現は間違っている。魔力によって剣筋に編まれた刃がランサーの首筋に達したのだ。
ランサーは見誤っていた。セイバーの間合い。聖剣の射程距離を。
「騎士道精神とやらはどうした。剣使い」
眼に見えて動揺し、同じように憤怒の気を浮かばせている。それは、こちらにも、セイバーにも向いていた。
「マスターの命だ仕方あるまい。それになランサー。そんなもので剣を振るえなくなるなら、戦場に立つ資格はない」
決着は決定的だった。仮とはいえ必死の前まで剣を滑り込ませられたのだ。今彼にはこれ以上槍を振るう資格はない。
「引けよ。ランサー。どうせ偵察が目的だろ。マスターからも指示が出てるはずだ」
「・・・ 確かに。この場は引くしかねぇようだな」
槍をくるくると回転させ、一度地にコツンとつけると、こちらを一瞥する。
「次は必ず殺してやる。それまでは生き残ってろよ坊主。お前と、あの嬢ちゃんがいるなら、この争いもなかなか楽しくなりそうだ」
そう残し霊体化して消えていく。共に夕立もそろそろ落ち夜がやってくるころだ。
そして、運命の通りに事が進んでいるのならそれは。
「外敵が二人接近中だ。マスター。撃破するがいいな?」
やはり。遠坂とアーチャーだ。すべての時間軸が一日ずれていると思ったほうがいい。

「いや、ダメだ。傷は負わせてもいいが致命傷は避けろ。いいな？」
「・・・・マスター。一つ聞いていいか？」
「俺に返答できることなら」
セイバーは立ち止まり、こちらの目を査定するかのような目で見る。色は疑念。試すような態度でセイバーは問うてきた。黒色の剣が今衛宮士郎の首の横に置かれる。
「それは、無闇に人を傷つけるなという理想論に基づくものか？戦わなくていいのなら戦わないと」
とげとげしい口調でそう攻めるように言う。確かにランサーとの時の指示とこの発言からしたら、そう思うのも無理はない。然しそれは今の自分にとって大きな侮辱だ。
「見くびるなよセイバー。これからするのは戦争だ。その先に理想を求めるほど俺は子供じゃない。殺るなということに不満があるなら、その真意は撃退してから好きなように聞け。いいな」
眉間にしわを寄せながら、強い口調でそう言う。
「・・・ああ。了解したマスター」
剣を下し、玄関へと走っていく。一応は納得してくれたようだ。疑念はあるようだが、ちゃんとサーヴァントとして命を通すあたり、彼女の芯は何も変わっちゃいないんだろう。
「待てセイバー。もう一つだけいいか」
目線をこちらに向け早く言えと示唆してくる。ったく。せっかちなところも変わらない。
「これから俺がする劇に付き合ってくれ。頼むぞ」
運命が俺を追いかけるというのなら。ことごとくそれを利用してやろう。

「なんだってまだ校舎内に人がいるのよ！」
アーチャーとランサーの剣劇の中、気配を察知したのかランサーは目撃者の殺害に向かった。アーチャーに足止めを頼んだものの、俊敏の差が出てしまい、完全に押しとどめるまでにはいかなかった。
「リン。結界を張ったのではなかったのか？」

「もちろん張ったわよ！だから驚いてるの！」
　すでに設置された結界とは別に、人払いの術をかけたはずだった。校舎内にある結界を探索するのに人がいては、いつ人質に取られるかわからない。
「全く。詰めが甘い。これでは先が思いやられるな」
「・・・　ッ！だから今急いで救助に向かってるんでしょうが！記憶を消せばランサーもそう深追いはしないだろうし」
　アーチャーに担がれながら、凛は悪態をつく。彼女のうっかりはとどまるところを知らない。
「いいから早くしなさいアーチャー！殺されでもしたら夢見が悪いでしょう！」
「全く。難儀な性格だな君は」
　すると、近くで刃の重なる音がする。応戦している？一般人が？そんなわけない。ならなぜ。
「サーヴァントはランサーだけではないようだ」
　目の前にある家は赤髪の同級生の家だ。そこから二体の気配。残りのクラスはセイバーだけ。先ほどの強大な魔力の連発。戦闘の真っ最中でしかも近接戦闘。となるとあの中にいるのは。
「セイバーとランサー。ったく。何があったんだか！アーチャー。二体同時はきつい!?」
　アーチャーはその名の通り弓兵だ。近接戦闘のプロフェッショナルではない。本来ならば、遠距離からの超高精度狙撃で攻撃するのがベストだけれど。もう相手のサーヴァントには１００パーセント気づかれてる。
「防衛だけならまだしも、撃破は無理だろうな。だがリン。ランサーの方はしっぽを巻いて逃げたようだぞ」
　霊体化したランサーが去っていくのを目撃したようだ。多少の負傷も負わせている。
「少なくとも、あのランサーを撃退するほどには強いサーヴァントってことね。アーチャー。易々と死なないでよ？」
「安心しろリン。せめてマスターが命乞いできるくらいの時間は稼ぐ

さ」
皮肉の止まらないアーチャー。ああなんてはずれを引いてしまったんだか。それなのに腕はあるってんだから憎めないのよねこいつ。
「リン。前方から来る。戦闘になるがいいな」
「うん。アーチャー頼んだわよ」
アーチャーが両手に宝具を出した瞬間。よきせぬ暗黒が、彼女らの視界を覆った。
「リン！下がれ！」
アーチャーの腕で後ろに飛ばされ、尻餅をつく。同時にアーチャーが武器を右に揃え衝撃を下に逸らす。エンカウント前の攻撃にしては、威力が強大すぎた。そして間髪入れず、その攻撃の源泉であるサーヴァント。セイバーが轟音を立てて嵐のように近づいていた。黒いフェイスに邪悪な剣。全身黒の鎧に身を包んだサーヴァント。
それが、暗黒の剣をアーチャーに向かって振り下す。至ってシンプルなその攻撃を、アーチャーは必死に受け流す。手数のランサーとは違う、一撃一撃で蹂躙するようなセイバーの攻撃。
アーチャーとの攻防が続く。セイバーの攻撃は威力は高いが力任せに見えた。まるで力をひけらかしているかのようで。対してアーチャーは、防御は相変わらず達人級のくせに、いまいちキレがない。刃を振ることに躊躇しているわけではなさそうだが、やはり相性だろうか。
先手を取れるはずだったこちらが、今は後手。状況はこのサーヴァントによってひっくり返された。
ポケットから宝石を二つほど取り出す。戦況は不利。アーチャーにはおそらく現状決め手はないし、このまま続けば撤退は厳しくなる。アーチャーをここで失うわけにはいかない。対魔力のあるセイバーには焼け石に水だろうが、一瞬の隙ぐらいは作れるだろう。
そう思っ・・・・
「やめろセイバー！一旦引いて今の状況を説明してくれ!!」
そう思った矢先に。一人の間抜けの声が聞こえた。
後ろから走ってくる赤髪の青年。先程までどんな状況だったのか、

制服の至る所が破れ、数カ所から血が出ていた。
　その言葉でセイバーの圧力が少し薄れ、その隙にアーチャーは後方へ下り体制を立て直す。
「どうしたアーチャー。距離をくれてやったのだから弓を出せ。よもやその拙い剣技で私と渡り合おうと考えているわけじゃあるまい」
「なに、君に比べれば役者不足ではあるが、それでも君以上の剣士と背を預け会った事があるのでな。我が稚拙な剣技でも、流すくらいは容易い」
　言葉とは相反して、アーチャーは体重を後ろにかけ、いつでも凛を抱えて逃走できる状態になる。
「マスター。どうする。引くが吉だと思うが」
「セイバーが動きを見せようとしたらすぐに引いて。それまでは警戒状態でお願い」
　さっきの発言からしてあのマスターは多分。
「・・・・・ 遠坂!?なにやってるんだこんなところで」
　やっぱり。何にも知らない。アホヅラぶら下げて目の前の状況に困惑してる。それもそうだろう。目の前にいるマスターは私が魔術師であることをここ冬木にいるのに知らないのだから。
「セイバーも剣を下げろ!ったくなんだこの状況は!」
　赤髪の青年はアーチャーとセイバーの間に入る。その状態がどれだけ危険なのかを理解してないのか。
　それとも、セイバーがそれを止めない時点で、ハンデとすら思っていないのか。
「・・・・ なぜだマスター。今ならこの者たちを屠る事ができた」
「マスターなんて呼ぶんならまずはこの状況を説明してくれ!何が何だかさっぱりだ。突然殺し合いとか、そんなことさせるもんか!」
「敵を目の前にして何を言う!」
　目の前にもかかわらず、口論を始める二人。今の現状がわかっているのかしら。まったく。見た目通りなんだから。あの子が慕うのも無理はないわね。
「ふーん。つまり。そうゆうわけね。素人のマスターさん」

立ち上がり、お尻をパンパンとはたく。
「とりあえずこんばんわ。衛宮くん」
少しはしゃんとして欲しいものね。一人のマスターとなったからには。

「それにしても衛宮君。その服装からして、途中まで一人でランサーと戦ってたの？」
「やりあってなんかない。ただ一方的に襲われてただけだ」
事実。反撃は一度たりともしてない。その方法については言えないが。
「ふぅん、ヘンな見栄張らないのね。……そっか。ますます見た目通りね。衛宮君は」
少しうれしそうに顔を綻ばせ、真ん中に置かれた座布団に座る。いそいそと自分も反対側に座る。セイバーは左隣だ。今は甲冑を外し、黒いドレス姿に身を包んでいる。
「で、まず一つ質問を受ける前に聞いていい？」
会釈で返答する。首を縦に振ると、真剣な顔つきに変わる。
「そこのセイバー。召還したのは衛宮君で間違いないのよね？ということは衛宮君も魔術の訓練を受けてきたの？」
「いや、全然。親父から教わったのは強化と魔術回路のつくり方だけだ」
「作り方？開き方ではなく？」
「作り方だ。なんか変か？」
「変も何も……ことは何。魔術の行使をするたびに回路を作り直してるの？」
「ああ。そうだ。お前もそうなんじゃないのか？」
遠坂の顔が驚愕から困惑、怒りへと移り変わっていく。深いため息をついた後改めてこちらを振り向く。
「まあ、その件については後で言及させてもらうとして。さて衛宮君。

貴方の番よ」
　それから、聞いたことのある質問を遠坂に聞いていった。何も知らない体をよそおい、令呪のことや今の現状のこと、サーヴァントのことを。すると何も知らないと思ったのか呆れたように遠坂は立ち上がり。
「今から監督役のところに連れて行くから、詳しいことはそいつに聞きなさい。いいわね」
　立って準備をするようせかしてくる。現在夜の6時。ていうか、そろそろ桜が帰ってこないと心配なのだが。
　そう思った矢先、ピンポンとチャイムを鳴らす音がする。全く。桜は今ここが完全に家なんだから、鳴らす必要は全くないのに。
「悪い遠坂。出てくる」
　遠坂に座ってるよう示唆して玄関を開ける。すると、買い物袋いっぱいに荷物を持った桜が経っていた。
「遅くなってごめんなさい先輩！お客さんが来るのって今日でしたよね？歓迎するためにお夕飯の食材を買いに行ったんですけど何にしようか迷ってしまって」
　食材は明らかに2人分ではなく、藤ねえを含めて4人と言っても多すぎる量だった。それなのに、同じくらいの量を持って歩いてくる縞々がいるのは気のせいだろう。
「士郎～それならそうと話してくれればよかったのに。切嗣さんのお知り合いなんでしょ～だったら私もあいさつしないと」
　そういって、玄関をくぐる藤ねえ。多分あれはただ自分の食べたいものを買ってきただけだ。
「先輩。今からの準備になりますけど。大丈夫ですか？」
「ああ、大丈夫だよ桜。それに、言ってくれれば荷物持ち位したから次からは言ってくれ。あまり夜遅くに女の子一人で歩かせるのは忍びないしな」
　荷物をすべて受け取り、一緒に廊下を歩くと、なぜか藤ねえの叫び声が聞こえた。
「な、なんで遠坂さんがいるのよ！士郎！いつの間に女なんて連れ込

んで！そ、それにこんなきれいな外国の方まで！」
　それはセイバーのことだろうか。まあ、超美人なのは認めるが、ここにいる人はみんなきれいなんだよな。より取り見取りというか。
「はいはいわかったわかった。藤ねえは黙ってせんべいでも齧りながらテレビでも見ててくれ」
　桜も少し萎縮しているようだ。逃げるようにキッチンに向かう。ここは、紹介すべきだろう。
「こちらがセイバーさんだ。今日からここに居候してもらう。それと今逃げて行ったのが間桐桜。うちの学校の後輩。それでそこでだらけてるのが、藤村大河。姉替わりで保護者みたいなもん」
　一通り説明をする。遠坂は有名人だし紹介する必要ないだろう。
「とりあえず、今から飯にしようか。いい時間だし」
　遠坂にアイコンタクトで、すまんと言って、キッチンに向かう。後ろで藤ねえとなんでいるんだーみたいな口げんかが始まったが、ほっといても遠坂が勝つだろうから心配はいらない。
「先輩。セイバーさん？はわかりますけど。どうして遠坂先輩がいるんですか？」
「あー。なんていうか。セイバーの身元の保証とかその辺遠坂にやってもらってたんだ。切嗣の知り合いだっていうし、あんまり事情は聞けないし、その辺詳しくないからさ俺」
　あのセイバーかどうかは別として、アルトリア・ペンドラゴンは前の聖杯戦争でもセイバーで、切嗣がそのマスターだ。遠坂の件も、状況だけ見ればあながち間違いではない。
「何も説明しなくてごめんな。驚いただろ」
「い、いえ。いいんですそれなら」
　下を向いて調理を始めようとする桜。ここの隣はなんというか、こんな状況でも落ち着くものだ。
「この量も無駄にはなりそうにないな。改めてありがとう桜。それで何を作るかは決めてるのか？」
「ああ、それはですね」
　桜があたふたしながらもうれしそうに手振りを使いながら説明し

てくる。これは大変になりそうだが、二人ならそれもいい。

一時間ほどで料理を作って、5人で食卓を囲む。口論は案の定遠坂の勝ち、それも、ちゃんと言い訳は俺たちのことを考慮して合わせてくれた。さすがは仮面優等生。口裏合わせはお手の物だった。

セイバーの口に合うか心配だったが、から揚げにマヨネーズをつける藤ねえをマネして食べてみたようで、大変口にあったようだ。

「美味だなこれは」

そんなことを言ってマヨネーズを凝視している。確かにそれは万物を超越するものだが中毒性があるから乱用は控えるべきだ。

そんなこんなで夕食が終わり、今は夜9時過ぎ。そろそろ時間だろうかと、遠坂に声をかける。

「遠坂、もう夜遅いし送っていくよ」

「え、いいわよそんなの」

すっかりくつろいでいる自称優等生。残念ながらもう正体は知ってるんだこっちは。そしてそうじゃない。目的を忘れるな目的を。そう目線で強く伝えてみた。

「あ、ああ。それじゃあ。お言葉に甘えましょうか。衛宮君の顔に泥を塗るわけにはいかないしね」

そうして、立ち上がる遠坂。お前絶対さっきまで忘れてただろ。

「でも、間桐さんを送ってあげなくてもいいの？私はそのあとでもいいけど」

「いや、桜はうちに泊まってるから心配するな」

無言で食後のスイーツを見るセイバーにも声をかける。セイバーはとりあえず生活必需品を買いにいくってことでいいだろう。

じゃあ行ってくると声をかけて廊下に行こうとすると、肩をすごい力で掴まれる。

「意識が飛んじゃってたわ衛宮君。もう一度言ってくれるかしら。間桐さんが、なに？」

「桜はいまうちに住んでるから送る必要はないぞ」

はて、そんな驚くようなことを言っただろうか。しかし、相反して、

遠坂は握り拳を作って腹にさしこんできた。
「ブッッ。何すんだ遠坂！」
「それはこっちのセリフよ！何勝手に家に後輩泊めてんのよあんた！そんなの犯罪よ犯罪！大体なんで間桐さんがここに泊まらなきゃいけないのよ！」
そ、そういえば。桜がここに寝泊まりしているのが当たり前になってた節がある。ここは何とか言いくるめないと。
「遠坂先輩それは……」
「遠坂。それは、俺が頼んだからだ。慎二が最近荒れてるみたいだし、大事な人がそんなところにいるのを黙って見過ごせない。それに俺自身桜にはここにいてほしかったからな」
「せ、先輩……」
慎二のことには心当たりがあるのか遠坂はそれ以上文句をいうことはなかった。桜もそれ以上説明をはさむことはなかった。頭からは湯気がもくもくと出ているようだった。
「士郎…　あんたいつの間にそんな風に育ったのよ」
つい最近ですよ。藤ねえの知らないところで衛宮士郎は成長しているのです。
「わかったわ。それじゃあ行きましょう衛宮君。ちょっと長めにお借りするわ。間桐さん」
「お、お構いなく」
いまだもくもくとしている桜。頭を撫でたい気持ちを抑え、遅くなるだろうから先に寝てていいぞと言っておいた。

さっきの騒動から歩き出して早３０分ほど、時刻は１０時を回ろうとしている。
「今向かっているのは新都にある教会。あともうちょいで着くから覚悟しといてね。その中にいるのは悪魔みたいなやつだから」
「了解だ。覚悟固めとくよ」
今回では初めての会話となるだろう。覚悟は必要だ。遠坂の言っ

ている意味とは違い、死ぬほど理解できる相手だからこその覚悟というものを。
「リン。これ以上肩入れする必要があるのかね？」
「仕方ないでしょ。私のミスで巻き込んじゃったんだし、ご飯も頂いちゃったし」
　遠坂が何もない空間とお話を始める。何も知らない人からすればそれは病的に見えるだろう。
「マスター。少しいいか」
　隣に歩いているセイバーが声をかけてくる。相変わらず黒いドレスに身を包んでいるが、闇に溶け込んで今はあまり目立たない。昼間その格好だとどれだけ目立つのだろう。
「ああ、端的に頼む。もちろん聞こえないように」
「サクラといい、タイガといい。態度や食材の量からして客人をもてなす準備ができているようだった。居候についても、存知のようだ」
　話を続ける。いくらか言葉に刃を感じる。
「リンに桜を泊めている理由を聞かれた時、あわてて桜の言葉を遮ったな。考えられる理由は一つ。貴様、最初から知っていたな？」
「‥‥　何をだセイバー」
「とぼけるな。今から聞きに行くことも先ほど聞いたこともすべて知ったうえで、リンをだましているな」
　さすがというか、騎士王の目はごまかせないというわけか。まあ、いずれ知れることだから構わない。
「‥‥　正解だセイバー。もっとも、食材の量はあれくらいなら3日もたないよ。うちには大食がふたりいるからな」
　前との距離を遠ざける。向こうも向こうで内密な話をしているタイミングだった。それを見計らってだろう。
「サーヴァントを殺すなというのも引っかかる。だが、覚悟がないようには見えない。ランサーとの戦いのとき、お前の目は戦いを拒否してはいなかった」
「単刀直入に言えよセイバー。何が聞きたい」
　彼女にしては遠回りだ。まだ心を開かれていない証拠だろうか。

「貴様の行動の動機はなんだ。教えるといったのをよもや忘れたわけではあるまい」
アーチャーとの初見時の前の発言か。そんな約束をしたものだ。しかし。
「……百聞は一見にしかずだ。セイバー。教えるのは簡単だが、所詮は言葉。それでは物の真意は伝わらない。空虚なもんだ。悪いが今いえるのは、今の行動は目的があってなされていることだってことだけだ」
「それでは、今は黙って貴様に従えと？」
「そうだ。それに急がずとも直に視える」
そうすれば、すべてわかる。俺が何を成し。何を成すのか。
「了解だマスター。精々それまでに死んでくれるなよ」
言葉にもう刃はなく、むしろ楽しんでいるかのような声色。
「衛宮君。お話し中のところ悪いけど、着いたわよ」
坂を上った先に在った、高台のほぼすべての敷地を使った教会。
「マスター。私はここに残る」
「了解だ。それと武装をしておいてくれ、いつ敵が来るかわからない」
今は１０時半。あの時の時間とは全く違うが、予測はできない。警戒するに越したことはない。
「それと、マスター。名を聞いておこう」
ああ。まだ言ってなかったな。
「衛宮士郎だ。好きに呼んでくれてかまわない」
「ではシロウ。健闘を期待している」
月夜に照らされた、透き通る肌と金の髪が、浮世離れしていて神々しかった。

広い、荘厳な礼拝堂にかつんと響く足音。祭壇の後ろから現れた長身の男。聖職者としては優秀なそれが、コツコツと音を立てて近づいてくる。顔に張り付く気持ちの悪い笑み。今すぐ殴り飛ばしてやりたいくらいだ。

「私はこの教会を任されている言峰綺礼というものだが。君の名はなんというのかな、七人目のマスターよ」
知っている。知っているとも。その名を。その忌々しいまでの理解者の名を。
生まれながらの欠陥品。ありきたりな幸福を感じれず、いや、もともとそんなものを持ち合わせなかった、悲しき欠陥品。
同じような在りかたでありながら正反対であった者。懐かしさすら感じる。
自己紹介は自分にとっては不必要。だが、不思議と不快感は無い。
「――――衛宮士郎。よろしく、言峰神父」
己が幻想の為ならば、悪魔にだって魂を売ろう。この肉体を罪科で浸そう。なあ言峰。互いに目的がある者、欠陥品同士、精々利用し合おうではないか。

第3話

「ーーーーマスターとして戦う。
　十年前の火事の原因が聖杯戦争だっていうのなら、俺が戦わないわけにはいかない」
「それでは君をマスターとして認めよう。この瞬間に今回の聖杯戦争は受理された」
　神父はこちらを一瞥し、邪悪な笑みを浮かべた後。息を大きく吸って言った。
「――――これよりマスターが残り一人になるまで、この街における魔術戦を許可する。各々が自身の誇りに従い、存分に競い合え」
　意味のない宣言は教会を木霊し、開幕の狼煙。鐘を鳴らす。この場で聞いているのは自分と遠坂だけだが、それでも一つのピリオドが今打たれた。
「決まりね。それじゃあ帰るけど、私も一つぐらい・・・・」
　途中で遠坂の声が止まる。喉から出かけた声を、直後に別の声に打ち消されたようだった。・・・・ 状況から察すれば、何があったかは容易に想像できる。
「悪いけど綺礼。失礼するわ。狼煙に一人群がる小娘がいたそうなのよ。引き金が引かれてしまった以上、油断はできないから」
　そういって背中を翻して、教会の扉を開ける。すでに手には宝石が握られ、隣には長身の男が控えて、そこにいたのは一人の魔術師だった。
「衛宮君。送ってくれてありがとう。でも、もういいわ。早く家に帰って今日はさっさと寝なさい。あと、泊めるって決めたなら護りなさいよ。何かあったら承知しないんだから」
　そういって立ち止まることなく、教会に二人を残し、遠坂は走って戦場に向かってしまった。
　背後には気配を消して近づいていた神父の姿が見える。臆することなく、言峰の顔を見返す。そこに張り付いた神父としての気持ちの悪い笑みが、より一層この男に邪悪さを付け足す。

「行かなくていいのか？衛宮士郎。君は十年前のようにならないために戦うんだろう？」
「ああ、そうだな。あんなことはもう起こってほしくはない」
その気持ちは事実だ。目を閉じればいくらでも思い出せる。目の前に広がる灼熱の海。憎悪と救済を求める感情の渦。そこから流れ出る悪意という名の結晶体。黒く浮かんだ太陽は、何度も何度も自身の体をむしばんでいく。
ああ、起こってほしいわけではない。あんな現象を人生で何度も得たいというのはそれこそ狂った狂人くらいだろう。それでも、あの光景よりは何倍もましだ。目の前で、何よりも大切なものを奪われて、手が届く距離にいるのに届かない。
そうなるくらいなら。その手を届かせるため、今から自分はあの景色をもう一度。
たとえ、世界を染めようとも。
そう思っている時点で、この存在は何ら狂人と変わりない。
「――――喜べ少年、君の願いは、ようやく叶う」
そう、神託を下すように言う神父を、つい嘲笑ってしまった。
きっと、過去の自分なら困惑もしただろう。敵を必要とする正義の味方という理想を掲げるくせに、すべてを救いたいなんてことを言った、あの理想の自分なら。
もしも衛宮士郎が願いを叶えていたならば、ここに立っているのは自分ではない。
「叶うのか？俺の願いは」
煽るように言った質問を、言峰はいとも容易く受け流して、口に嗤いを貼り付ける。
「ああ、叶うとも。これから先、君の目の前には明確な、これ以上に無い悪が現れる。たとえそれが君にとって容認できないものであったとしても、正義の味方には倒すべき悪が必要だ」
「・・・ そうだな」
何かを護ろうというのなら、同時に何かを犯すものがあることと同義だから。

「・・・・その通りだよ神父。俺の願いはようやく叶う」
簡単なことだ。いつかの日常(幻想)を護ろうというのなら、正義(理想)の味方と戦うことは目に見えている。
「ひとつ問おう。衛宮士郎。君は魔術師か？」
帰り際に、ぽつりと。言い忘れたことがあるように言峰綺礼は問うてきた。
その問いの意味がわかるものが果たして何人いるのか。遠坂なら迷わずイエスというだろう。だがこの質問の真意を。言峰綺礼が、衛宮士郎に問う意味を真にわかるのは、この場にいる二人だけかもしれない。

昔。憧れだった男に言われたことがあるセリフを思い出す。
「一番大事な事はね、魔術は自分の為じゃなくて他人の為だけに使う、という事だよ。そうすれば士郎は魔術使いではあるけれど、魔術師ではなくなるからね」
理想だった男の、吐き出すような想いがそこに詰まっていた気がした。
衛宮士郎の根底にある言葉。正義の味方の説明書のようなセリフが、脳裏に鳴り響いた。
返答は決まっている。ここにいる俺は最初から。
「魔術師だよ。紛れもなく」
俺は自身の願いをかなえるために、衛宮士郎の願いを殺すのだから。

教会の門を開けると、ツゥと寒気が背中に流し込まれる。突き詰めた神経をさらに機敏に、鋭利にするような風。少し前には黒い甲冑に暗黒のフェイスを付けた我がサーヴァントが、威風堂々と佇んでいる。
もう、赤い二人の影は無い。きっと、この先の下で戦闘を始めるん

だろう。すでに空気が通常の物とは異なり、異色の殺気と魔力が向き合っているのを肌で感じる。
「セイバー。救援に向かうぞ。次の相手は桁違いだ。出し惜しみはしなくていい」
「了解だ。殺す気でいいということだな？」
戦闘狂のように嗤うセイバー。その手にはすでに黒色の剣が、解放を今か今かと待っているようだった。
首を縦に振って走り出した時、轟音が鳴り響く。続いている音のように聞こえるがよく聞けば、高速で別の音が奏でられている。
坂を全力で走る。こうなるくらいなら、遠坂を先に行かせるんじゃなかった。ここでアーチャーが易々殺されるとは思わないが、それでも可能性はある。
見える。前方に。こちらにいるのは赤いコートを着た悪魔と、それを守護する朱色の騎士。
対するのは、黒色の化身。立ちふさがる姿はまさしく野生の神性。
何度か打ち合ったのか、赤い騎士の礼装は少しばかり破れ、武器も方翼が破壊されていた。
悪魔の方にも少し見受けられる。この少ない時間で、魔術戦もしていたのだろう。
こちらを振り向いてにらむ悪魔。だが、その中には安堵と期待も含まれているように見えた。
識っている。アーチャーの通常の戦い方では、バーサーカーには傷一つ、つけられない。
その中で、気づいたのだろう。白髪の少女がちょんとバーサーカーの陰から出て、こちらに微笑んだ。
「初めまして。遅かったね。お兄ちゃん」
月の光が彼女の滑らかな髪と、朱色の目を輝かせた。氷点下のようにも思える声色だけれど、自分の心を溶かしていくには十分すぎるほどだった。
その一瞬の隙を、眼前の巨人は見逃さなかった。風圧で前方にいる二人を後退させ、振り上げた巨刀が命を刈り取ろうとするのが、わず

かながら見えた。
　だけれど、それが届くことはない。これまでとは違い頭上で受けた衝撃を肩の側面に沿うようにして流す。それは鮮やかで、まさしく最優のクラスと呼ばれるにふさわしい動きだった。
「――――油断するな。シロウ。戦場に立ったからには、いつ何時も覚悟を離すな」
「ああ、悪い。自分のサーヴァントは信用してるもんでな」
「ふっ。戯言を。美辞麗句はあとにしてほしいものだな」
　そういって、力任せにバーサーカーの巨体を弾く。少女から繰り出された攻撃は巨人を宙に浮かせ、その先には。正確無比な矢が大量に迫っていた。威力はもはや矢と思えないそれは巨人の肉体に襲来する。
　しかし、それでは足りない。守るそぶりも見せず、バーサーカーは落下地点で起こる次の剣戟に備える。
「チィ・・・・！」
　アーチャーの舌打ちが聞こえてくる。あの数秒間に遠坂を抱え、こちらよりも後方で矢を構えている。
　援護射撃の準備をしているが、それでは目くらまし程度にしかならない。
「衛宮君！逃げろって言ったじゃない！あれは少なくとも、単純な能力ならあなたのセイバーも凌ぐ！ここは私に任せて、早く撤退しなさい！」
　抱えられた少女はいらだつように声を荒げていた。
「それはこっちのセリフだ。遠坂、見た感じだけどアーチャーの矢は今のところ通用していない。ここにいたらお前の身が危険だ」
「だからって未熟者のあんた見捨てて逃げろっての!?今日はあんたに借りがあるんだから、あんたを家に無事に返さないと私の顔がないの！」
「借りならもうとっくに返してもらった！それと俺を思うなら、もう少し距離を取って援護するなり方法があるだろうが！」
　セイバーたちの動きから一瞬だけ目をそらして、遠坂ではなく弓の

英霊に目を向ける。
「お前の仕事はなんだアーチャー！お前の優先すべきことはなんだ！」
そう強く言うと、力強く握られた弓が、虚空へと戻る。眉間にしわが寄っているものの、納得したように背を翻した。
「・・・・ 撤退する。つかまっていろ。リン」
抵抗する遠坂を無理やり抱え、こちらを一瞥した後、飛ぶように撤退していった。
その目が、死ぬなと言っていた。それは案じていたわけではない。純に殺意のこもった目。
俺がお前を殺す。そんな風に聞こえた。
「戻りなさいアーチャー！ここであいつを死なせたら・・・・ あの子にどんな顔して会えば」
そう言っても止まらないアーチャーに遠坂は右手の令呪をむける。しかし、そんな脅しも、アーチャーは完全に無視していた。
「お前にもわかっているはずだ。リン。その行動は何の意味もなさん」
「そうだけど・・・・ でも」
「それならより早く、狙撃地点に着くことだ。それに、ここですぐ死ぬような男ではあるまい」
「アーチャー？」
その声色は、期待でも安堵でもなく信用でもなく、ただひたすらに失望していた。呆れるようなその声に、少しの哀愁を感じさせるとふとおもった。
セイバーとバーサーカーの戦闘。正直に言えばセイバーの不利に見えた。純粋に火力の違い。いくら流したところでこちらはダメージは蓄積していく。そうじゃなくても今日3戦目だ。魔力的にも限界が近い可能性がある。
しかしそれでも追いすがるように、隙を見出せば、射程の変わる黒色の剣は少しずつバーサーカーの肉体を傷つけていく。暴走する黒い暴風と、それを躱し、いなす騎士の戦い。

振り払われた横なぎを、もろに受けたかと思えば、後方に力を逃がし、空中で回転しこちらの隣に着地する。
「一つ聞くが、セイバー、俺からの魔力はそちらに流れているか？」
「……なくはない。しかし量が少ない。おそらくではあるが、パスが開ききっていない」
詠唱なしの召還。やはり多少のハンデはあるものと思ったほうがいい。
「今の戦闘スタイルで、何分持つ？」
「あと15分が限度だ。それ以上はこちらが不利になる。魔力量も、ダメージ量も」
「3分だ。宝具レベルの魔力を使ってもいいから、その時間内に一つ減らしてくれ。それと同時に即離脱する」
「可能だが、なぜ3分なんだ？」
「宝具レベルの援護射撃が来るのがそれくらいだからだ」
アーチャーの狙撃位置と、宝具詠唱を考えて、多く見積もっても3分が限度。それ以上なら間違いなく撃たれる。
それがイリヤに放たれるような羽目になれば、防衛することは難しい。
「いいな。3分以内にカタをつける。マスターの方は俺に任せろ」
「……全く。そちらの顔つきの方が私には好ましい」
セイバーが小声で吐き捨てるようにそういう。顔にはフェイスガードからでもわかるくらい笑みが映っていた。
「それともう一つ、オーダーをしてもいいか」
「なんだ、言ってみろ」
「バーサーカーとイリヤの距離をあまり遠ざけないでくれ。いいな」
そう言った瞬間。バーサーカーに向かって黒い剣士は魔力を放ちながら高速で向かっていく。迷いのない剣筋はバーサーカーと拮抗し、迫る巨刀をわずかな動きで回避し、流れるように刀傷を刻んでいく。
そして、目線を、後ろにいる少女に移す。何度焦がれたことか。何度願ったことか。つい先ほどまで共に過ごした錯覚をするくらいに

は、想っていた少女が。
　刃を交え続ける二体のサーヴァントを横目に、少女に向かって走っていく。少女はまるで待っていたかのような笑みを浮かべると、髪の毛から一体の使い魔を生み出した。
　こちらが今使っていいのは強化。それも改変しない程度のわずかな物。絶対に、投影のことは気づかれてはいけない。
　老朽化していた手すりの鉄部分を掴み、内部構造を解析、魔術を加え引きちぎる。
　それを見たとたん、失望するような顔を浮かべた。
「がっかり。そんなもので私の使い魔に歯が立つと思ってるの？あんまりがっかりさせないでよね。お兄ちゃん」
　そういうと、小鳥のような使い魔から魔弾が放たれる。それを、ギリギリで避けていく。そして避けながら、向かうのは少女の方ではなく木々生い茂る林の中。回避しながら逃げ惑うように林の中へと入っていった。
「同調（トレース・オン）、開始」
　何度ともなく口に出したセリフを詠唱する。自身のスイッチを入れる。そんなセリフを。
「基本骨子、解明」
　走りながら手元の鉄棒に意識を向ける。今この場で衛宮士郎ができるはずだったギリギリのラインを見極め、自身の腕に魔力を込める。
「構成材質、解明」
　後ろからの攻撃はやまず、何回か体に受けながら。傷をつけながらも、転がるように奥へと進んでいく。
「基本骨子、変更」
　少しでも奥へ。少しでも視認できないところへ。降り注ぐ矢が彼女に向かぬよう、走り続ける。
「構成材質、変更」
　光もわずかにしか通さないと思われるほど奥まで来た。気づけば、木々を打ち倒す轟音は今も鳴り響いている。先ほどからゆうに2分

は経った。タイムリミットは残り一分。
「全行程（トレース・オフ）、完了」
右手に持ったみすぼらしい気休めの武器を体の中心線で構え、後ろを振り向く。
同時に数発の魔弾がこちらに襲来。一撃一撃は嬲るように、威力を調節してある。致命傷になりそうな箇所だけを、棒の切っ先で軌道をずらす。
「へぇ。器用なんだね。少し見直したわ」
少しばかり木々の隙間が開いたところから光が差し込み、少女を照らしている。
照らす月が、少女を幻想的に染め上げる。その髪も、その瞳も、その佇まいも。太陽の下で光り輝く少女も、けれど確かに。
夜の中、一つ煌めく女王のように胸を誇る少女は、泣けるほどに美しい。
「追いかけっこはおしまい？それとも諦めちゃったの？」
下がらなければと思っているのに、足は言うことを聞いてはくれない。それどころか前に前にと急かしてくる。
こちらを余裕の笑みで見つめる少女に言葉が出ない。何を話したかったのか。何を伝えたかったのか。思いはあれど言葉にすることは、とてつもなく困難だった。
だから、今、一番聞きたいことを聞くことにした。
「・・・・名前を、聞いてもいいかな」
そんな、場違いな発言に、少女は素直にうれしそうに、フフッと笑った。
「イリヤ。イリヤスフィール・フォン・アインツベルン。改めてよろしくね。お兄ちゃん」
さっきとは違った暖かい声でそう言う彼女に、ダメだと思っても思考が止まってしまった。何度も何度も呼んだ名前。あの儚い少女の名前。最後に笑った愛おしい姉の名前。
「イリ・・・・ヤ」
だから、必死に思いを込めないように、か細い声でそう言った。

「うん。イリヤ。じゃあ次はお兄ちゃんの番だよ。名前、教えてほしい」
「俺・・・は・・・・」
その言葉を遮るように、二つの暗黒が視界に現れる。引くように戦闘するセイバーに、余裕は無い。そこかしこから出血も見受けられる。もう猶予はないようだ。
鉄棒を構え少女を見つめる。少女は少し不思議そうで、困惑したような表情を浮かべていた。それは、誰に向けられていたのか、少女はバーサーカーに指示を出す。
「何よそいつ。おかしい！バーサーカー！早くそいつを叩き潰しなさい！」
その指示を引き金に圧が増す。セイバーに覆いかぶさるように力を加えるバーサーカーの重圧に耐えきれなくなったのか、セイバーが横に逃がすも、ものすごい勢いで転がる。そして追撃をしようとしたところで、今の位置関係にバーサーカーが気づいた。致命的なミスを犯したことと、今の転倒は狙われたことであることを。
セイバーとバーサーカーをつなぐ線上に、二人のマスターがいることを。
「今更遅い。覚悟はいいか狂戦士」
黒き聖剣がうごめきだし、膨大な魔力の渦が形成される。あれこそはセイバーの宝具。収束し、回転し、臨界に達する星の光。星の聖剣の強大な黒い衝撃が、野生の化身を覆った。
「約束（エクス）された、――――――」
「・・・っ！ダメだセイバー。今は！」
そう冷徹に放った一撃が届く一瞬前に、螺旋状の剣のようなものが襲来した。バーサーカーの眉間をもろに命中させたそれは、着弾と同時に破裂爆散。衝撃波を生み出す。
「――――――勝利の剣（カリバー）!!!」
それに上乗せする形で、全力ではないもののセイバーの宝具が命中する。燃焼した赤い炎を闇がまとめて飲み込む。漆黒の剣が、容赦なくバーサーカーをえぐり去った。

放った瞬間セイバーはそれを後悔した。火力が高すぎる。これでは。
後ろにいるマスター二人に被弾する。少なくともこちら側にいたバーサーカーのマスターには、撤退を余儀なくされるくらいには負傷は免れない。
本来であれば、傷をつけられるかどうかわからない矢も、一方に衝撃を逃がしてはならないという条件が加われば、格段に威力が変わる。それに加えての我が宝具。手心を多少加えたとはいえ、耐えきれる威力ではない。
闇がはれ、視界が戻ると、バーサーカーの半身が消滅し、活動を停止していた。
一度にAランク相当の宝具を同時に喰らったのだ。原型を留めているだけで尊敬に値する。
だが、気になるのはそれではない。いち早く安否を確認しなければならない。
あの少年を、死なせるわけにはいかない。

セイバーが転がった時点で、その目論見と状況判断を理解した。さすがともいうべきか。その手ならバーサーカーの回避の手は防げる。
しかし、その時脳天に、響いてしまった。アーチャーが宝具を放ったことが。螺旋剣がこちらに向かってきていることが。
しかも、タイミングは理想といえる。確実にバーサーカーを行動不能にする、ここしかないというタイミングでの宝具命中。すぐに察した。セイバーの宝具はバーサーカーを貫通する。
そして、それを浴びるのは、他でもない目の前の少女。
そう思った瞬間、足が動いていた。今ならまだ簡単に動く。今ならまだ、あの時のようにはならない。
腕を大きく開いて少女の射線上にかぶさるように動き。そして、衝撃に包まれた。
自身の体がなくなったと誤解するように、視覚や聴覚が奪われる。今ここにいない感覚は何度経験してもなれないものだ。

意識を少しずつ取り戻していく。目の前にすぐに見えるのは無傷な少女。呆然と立ち尽くして言葉を発しているように見える。然し耳がやられているのか今は何も音が入ってくることはない。
目の前に立つ白髪の少女の最後を、目をつぶれば思い出す。
手を伸ばせば触れられる。喉を動かせば思いは伝わる。抱きしめれば体温がわかる。頬を撫でれば愛しく思う。
でもきっと。そうしたらきっと泣いてしまうから。
資格はあの時すでに捨ててきたから。
護るためなら何を殺したって構わないって、決めたから。
けれど、それでも一言だけ。届かないってわかっていても、それでも言っておきたかった。
――――――――ありがとう。イリヤ。
君がいたから、俺はここまで生きてこれた。
未だ動かない体に鞭を打って声を張り上げる。呼ぶのはたった一人。地獄を共に歩む契約者を。
「セイバァァァァァァァ!」
そう叫んだ瞬間。体から重力が消えた。
自身の視界から少女は消えうせ、星空が視界を包んだ。月のような金の瞳がこちらを見つめている。フェイスを外したセイバーの顔は、いくらか不機嫌そうに見える。
「痛っ……」
背の皮膚を丸ごと持って行かれたかのような痛み。焼きただれるような痛みがやっと脳髄に響く。しかし、もう修復の兆しを見せているということは、発動しているとみて間違いないか。
「全く。無茶をする」
「……　心配をかけたな」
「フン。依り代に先に逝かれてはこちらも意味がない。そのことをしかとその脳に焼き付けておけ」
そう嫌味のように言う彼女の体は、其処彼処が傷ついていた。重傷と言うほどではないかもしれないけれど、それでも、無視していいダメージ量じゃない。

そうなると分かってはいても、見たい光景ではない。自分の為に誰かが傷つくのは、吐き気がするほどに嫌悪する。
「本当に、付き合わせてしまって悪かったな」
全ての戦闘において、セイバーを縛り付ける様な指示をしていた。それで反感を買っていても、文句を言う気はさらさらない。
「・・・ その心配は見当違いもいいところだぞ。シロウ」
こちらを見るセイバーの目は、呆れるようで、どこかその雰囲気に似合わず、安心しているように見えた。
「貴様の策にも、聖杯戦争も、乗ったのは私で、決定したのも私だ。手綱を握るのは私なのだから、貴様がその様な無価値な思考はしなくていい」
後ろを見ると、すでにバーサーカーの影はなく、無事撤退した様だった。災害後の様な有様の切り裂かれた大地が、冬木の街をより不気味に染め上げている。
「そんな事を心配するのならな。下手な小芝居をやめてくれた方がまだありがたい。笑うのを堪えるのに必死になるだろう」
「・・・・ そこはあまり触れてくれないでほしい」
自分でも、無知を演じるのは抵抗がないわけではない。
「今くらいは気を抜いていい。貴様も人の子だろう。少しは気を緩めることも、戦いにおいては大切だ」
そう笑う彼女は、あの日見た気高さと何も変わらない。背負い続ける運命の上で生きる先輩が、こちらに道を示している様だった。
だが、それはセイバーにとっても同じだ。
「セイバー、そろそろ家も近い。もう下ろしてくれて構わないよ」
「了解した。舌を噛むなよ。シロウ」
そうは言うが、着地はスムーズで余計な力が響いてくることはない。
立った足には今は何ら問題はない。平衡感覚も戻りつつある。戦闘は置いといて、帰宅くらいなら問題はない。
「セイバー。いいぞ」
「何がだ？シロウ」

そうはてなを頭の上に乗せた彼女の膝から、少しずつ力が失われる。鎧は自動的に解け、華奢な女の子が前屈みになって倒れそうになっていた。
それを、正面から支える。生きているのかわからないほどの透き通った、青白い肌。冷たいけれど、生きているのがわかる。
「苦労をかけた。魔力切れだろ。ここから先は背負って行くから、寝てていいぞ」
「・・・ 舐めるな。こんなの、少し蹴躓いただけだ」
そう言って足に力を入れようとするも、なかなか動力は回らない。より深く胸に埋まるだけだ。
「・・・・ 不本意だが、仕方あるまい」
「無理ばっかして。最初っから照れずにそういえばいいのに」
「なっ!?照れてなどいない！愚弄するにも程がある！シロウ！」
そう訴えるセイバーの頬が赤く見えるのは、魔力切れのせいか、それともイかれた脳が見せている幻覚か。
「ほら、黙っておぶられてろ。抵抗すると、帰る時間が遅くなるだけだぞ」
多少文句はある様だが、あっさりと背に乗り、直ぐに寝息を立て始めた。
音も、光も薄れた、冬木の街。ここにある家の数だけ、それぞれの世界があって、それぞれの居場所がある。
それはかけがえのないもので、何物にも代え難いもので。
きっと護らなければいけないもので。
それでも、この背で背負った者を、途中で降ろそうとは思わない。
この温もりを失うのは、２度と。
そんな自分を軽蔑するかの様に、月の光は雲に遮られ、消えて行った。
月の光の残像が、視界のフィルムに焼き付いて、未だ脳裏から離れなかった。

第４話

夢を見ている。
暖かい居間。交差する声。色々な表情と声色。それら全てが、ただひたすらに愛おしかった。
窓から射す太陽が、春の訪れを囁くようで。庭には桜の花びらが舞、障子の隙間から、ささやかに居間を彩っていた。
未来を語り合う夢。明日を望む夢。光り輝く夢の中、少年の目はとても穏やかで、その手は優しく開かれていた。
白髪の少女が、台所で料理を教わっている。慣れない包丁を握るその手を、やさしく隣のお姉さんが包んで支える。
目の前には笑顔が、幸せが、普通があふれていた。
そんな景色を、意識するでもなく、唯々安らかに受け止めていた。
互いの手を重ねて、少しでも熱が移るよう、互いを支え合う、そんな理想の家族。
ありふれた。どこにでもある、日常の一時。
ただ、それだけでよかった。それだけを唯願い続けた。
いつからだろう。それが幻想（夢）と気づいたのは。

変色した降り注ぐ闇は、いともたやすく奪い去っていく。
一枚の写真に、黒い泥が浸透していった。そこに映ったものは、みるみる黒に蹂躙されていく。
目の前の景色は擦れ、色あせ。そして消えて行った。
少年はその光景を、外から見つめていた。
何を思っているのか。何を願っているのか。それを量ることはできなかった。
消されていく。壊されていく。穢されていく、大切なものを、ただ永遠に見つめていた少年。
苦しいのか。悲しいのか。怒りに満ちているのか。焦がれているのか。憎んでいるのか。
いつからだろう。夢が夢でしかなかったのは。

無数の折れた剣が、形を成さない砕けた剣が、大地に突き刺さっていた。
大地は裂かれ、赤が滲みだし、まるで彼の体を貫くように、世界は崩れ、痛々しく全てがそこにあった。
朱い線の跡が頬を伝う少年。
手を握り、空を見上げるその姿は。まるで血で染まる丘に一人。鎖に繋がれているように見えて。
きっとそれは最初から、何も持ち合わせてはいなかった。

目に突き刺さる日光が、夜の終わりを告げる。眼前に広がる白に、嫌悪感を抱きつつ目を開けた。
不思議なことに、今までのように寒気を感じることは無かった。それどころか、何かに包まれているようで、おそらく熱源が左脇にある。なぜなら少し重みを感じるからだ。
体にはフリースがかけられていた。そのせいか、左から来る熱をより鮮明に伝えてくる。
余裕のある右手でフリースをめくると、そこには紫色のハムスターが、縮こまって寝息を立ててそこにいた。
両手が口の近くにあって、自分の体と防波堤のようになっている。
その横から侵入して、頬をつねって伸ばす。
「桜。おはよう」
すると、手で目をこすって、むくっと桜が起き上がる。その拍子にフリースは剥がれ、寝ぼけた顔と、少しはだけた寝間着が、目の前に広がった。
「……おはようございます。先輩」
「気遣い。ありがとう。でも湯たんぽ替わりは明日からは大丈夫だぞ」
「いえいえ。こちらこそ、お気遣いなく。お泊めいただいている身ですから、それぐらいはやりますとも」

「それなら、明日からは布団で寝なきゃいけなくなるな。桜が隣で寝るなら、こんな固い床で寝せるわけにはいかない」
「そうですよぉ。先輩。私と寝るんですから、ちゃんとお布団に入っていただけないと困ります。・・・ 私と、寝る？」
　そういって、寒そうに少し震える桜に落ちたフリースをかける。それと同時に桜の体温が上がっていった。フリースはいらなかっただろうか。
「あ、いや、あの。せ、先輩。これはちが・・・」
「ありがたいよ。明日からは夜は寒さ知らずだな。少し冷え込むと思っていたんだ」
　そういじわるに笑ってやると、桜の目がぐるぐるとまわり始めた。
「そ、その。さ、寒そうにしてたのでフリースを持ってきただけなんです」
「ああ。ついでに保温具もセットで、文句は一つもないな」
　ぐるぐる回る桜の目が加速していく。オーバーヒートしたエンジンの様だ。土蔵の温度もいくらか上がったように感じられる。
「だ、だって先輩寒そうだったし、私もちょっと眠かったから」
「そんな中、気の使える桜は本当にできた後輩だな」
　さすがにこちらを見るのは恥ずかしいのか、下を向いてしまった。頭からもくもくと白い煙が噴き出してくるようだ。
「・・・ 先輩。いじわるです」
「悪い悪い。こんな隙だらけの桜は久しぶりで、ついからかいたくなってさ」
　そう言って、頭を撫でる。つやのある髪は、いくら触っても飽きることが無い。もはや日課にしたいくらいだ。
「別に・・・ いいですけど」
「でもちゃんと、桜は客間で寝てくれないと困る。こんなところで寝たら風邪ひいちゃうからな」
「それは先輩もです！3日間もここで寝て。だったらもうここにお布団引いてください！」
「ついでに桜も付いてくるなら考えようかな」

寝ていたのではないのだが、まあ同じようなものだし、体調のことも考えてそれもありかなと思う。
「・・・・・ 先輩が望むのなら」
・・・・・ 前言撤回。この家でそんなことをしたら、いつどこで犯罪者と罵られるかわかったもんじゃない。主に口軽な虎と、真っ赤なデーモン。そのうち一方には殺される。
「冗談だ。これからは桜の言う通り、部屋で寝るようにするよ」
「・・・・ そうですか。よかったです」
そういう桜はフリースをグーッときつく纏ってこちらを睨んでくる。からかって悪いとは思っている。反省はしないけれど。
「じゃあ、昨日と同じようにシャワー浴びてくる。今日は休日だし、朝はゆっくり一緒に作ろう」
「先輩。今日は学校ですよ?」
「そんなはず・・・・ ああそうか。そうだったな」
一日、時は早く刻まれている。しかし、起こっている現象が変わらない今。どこまで影響を及ぼしているかが少し気になる。
「急いで浴びてくるから、悪いけど先に作っていてもらえると助かる」
「お任せください。腕によりをかけます」
胸を張って桜がフン!と自身気に息を吐く。しかし、首元で結ばれたフリースを、魔女の様に羽織る桜は、マスコットの様で威厳は全く感じられない。
「任せた。期待してるぞ。桜」
「存分にしてください!いずれ私の料理じゃなきゃ満足できない体にしてやるんですから」
「湯たんぽも桜じゃないと寝られないかも」
「・・・・ ッ!それはもういいんです!先輩のバカ!」
顔を赤くしてそう叫ぶと、居間に向かってタタタと走っていった。
さすがにセクハラが過ぎただろうか。これは少し反省しないとな。
少し顔を赤らめてこちらを睨む桜の、朝日に照らされた後姿が、昨晩の残像と並んで焼き付いた。
一瞬それが、失った時と重なって、心を闇が染め上げた。

「桜。何か手伝うことはあるか？」
頭に乗せたタオルを下して、台所の後ろから声をかける。すでに制服にエプロンをつけた状態でいる桜は、いつも通り慣れた手つきで料理を進めていく。
「いえ、もう大丈夫です。お味噌汁も作りましたし、先輩はそこでバーンと座っていてください」
「そういうわけにもいかないだろ。桜に負担をかけすぎたら藤ねえに何を言われるか」
「いいんです。先輩さっき任せるって言ったんですから、だまーって座っててください」
強情にも意見を変えない。全く。その頑固さはどこから来たのだか。
「それじゃあ師匠として。弟子の手際でも拝見させてもらおうかな」
少し間を開けて、桜の料理する姿を見る。最初の初々しさと危なっかしさはもうどこへやら。もはや自分よりも手際がよさそうに思えて、少し嫉妬する。主婦顔負けである。
「桜。今幸せか？」
嬉しそうに調理する桜に、ついそう聞いてしまった。今、君は何を思っているのか。どんな思いで笑っているのか。
こちらを見て一度困惑の表情を浮かべた後。優しい、桜のような笑顔で笑って。
「もちろんですよ。先輩」
そう。安らかに言った。
「…　そっか。それならよかった」
目の前で、幸せそうに笑ってくれている彼女を見て、胸が苦しくなった。その笑顔に何が含まれているのか、知ってしまっているから。何を中にひそめて生きているのかを、知っているから。
今、自分は彼女にできる最善を尽くしているのか。答えの出ない問いをそれでも知りたい。

今、衛宮士郎は笑い返せているだろうか。笑っても、よいのだろうか。
「先輩。寝不足ですか？ぼーっとしてますけど」
そう気遣って伸ばしてくれている手を、顔に押し付けるようにした。
「ど、どうしたんですか」
「いや、桜はあったかいなって」
本当に暖かい。本当に。自分の凍えた熱を移すにはおこがましいくらい。
「心配もいらなそうだし、居間にいる。ありがと。桜」
精一杯今できる笑みを浮かべて、居間に戻った。
見られたくなかった。あんな自分を。彼女の前で弱みなんて見せたくなかった。
あの手を取ったらきっと、迷ってしまうから。
これから死地に追いやる少女を、そのまま攫ってしまいたくなるから。
「おい。シロウ」
そんなことを思っていたからか、障子をあける音に気付けず、つい肩が上がってしまった。
「お、おはようセイバー。よく眠れたのか？」
「ああ、おかげさまでな」
セイバーの機嫌は発言とは相反してとても悪そうだ。布団が体に合わなかったんだろうか。
「どうしたセイバー。腹でも減ったのか？」
「腹は減っている。が、そうではない。わからないか？シロウ」
いや、絶対それが原因だろう。図星だからごまかしているに違いない。事実、少し顔が引きつっている。
「桜の朝飯もうできると思うから、おとなしく座ってような」
セイバーを隣に座るように示唆して座布団に腰を下ろすが、いつまでたってもそこに到達しない。はて、仙人のように浮く。そんな魔術は覚えた覚えがないのだが。

「そうかそうか。いい度胸だなシロウ」
すこーしずつ視界が上に昇っていく。今気づいたが、こめかみあたりに力を感じる。実際、視界の８割は真っ暗だ。
「って。痛い痛い痛い！なんだセイバー！腹が減ったなら冷蔵庫の中探してくるからその手を放してくれ」
「そうか？このできそこないの頭にも衝撃を加えたら多少はマシになるかもしれん」
益々力の大きくなるセイバーの手を何回か叩いて、ギブアップと伝える。多少の遺恨は残るようだが、話が進まないとしぶしぶセイバーは手を離してくれた。
「それで、なんだってんだ。なにかあったのか？」
「・・・・本当に分からないのか」
心当たりが全くない。いや、あるにはあるのだが、本人は違うと言ってるし。
すると、胸倉をぐっとつかんでセイバーは怒りの表情を浮かべた。
「なぜ私の隣で寝ていない！常に私のそばにいろと言っただろうが！」
そんな、普通の人なら一生言わないようなセリフを、怒りを交えて少しも照れずに放ってくる。
台所からカシャンという音がする。心なしか寒くなってきた。
「いつ何時も覚悟を離すなと言っただろう！よもや、忘れたわけではあるまい！」
「いやそれは覚えてるけど。それとこれとは話が・・・」
「そばにいないでどうする！何かあってからでは遅いんだぞ!?」
セイバーは手を胸倉から服の端に持って行って、力任せにそれをめくる。冷たい氷のような手が、腹を撫でた。女性としての香りが、自身の鼻をくすぐる。
「安心した。昨日の痕はもうないようだ」
少しだけ声色が安らいだかと思えば、すぐにまた憤怒の目を向けてこちらを睨む。
「しかしな、シロウ。睡眠中は一番と言っていいほど人の弱い時間帯

だ。その時に傍にいないのは、いくらか非効率だろう」
「まあそれはそうなんだが」
「ということでだ。明日からは必ず私の隣で寝るように」
「いや、それは」
「ダメです!!」
　ドン。という音と同時に、唐突に大きな声が居間に響いた。よく見ると桜の後ろで包丁が垂直に立っている。いつの間に曲芸師になったのだろうか。
「セイバーさん!お泊めいただいている身分でその態度はあまりよくないと思います!それに年頃の男女が一緒のお布団だなんてふしだらです!」
　眉間にしわを寄せる桜から、盛大なブーメランが飛んで行ったのを間近で確認した。気をつけろ桜。それは早々に帰ってくるぞ。
「なぜそう思うんだ?」
「だ、だって。そんな密着した状態で一夜を明かしたら何があるかわかりません」
「そんなことはない。それとも、ここの主人は寝ている女性に夜這いを仕掛けるような不届き者なのか?」
「そ、そんなわけないじゃないですか!」
「ならばいいだろう。今日の朝でそれは証明されたのだし、私が隣で寝る分にも大事あるまい」
　セイバーの目が桜からこちらに向く。まるで獲物を見つけた王の目。なぶるような目線に背筋がゾクッとする。
「それとも、シロウは私が横で寝ていると欲情してしまうのか?」
「な!?先輩はそんな気の多い人じゃありません!」
　二人の目線がこちらで重なる。どう答えればよいのか。寝起きの脳をフル回転させて最善の手を探し続ける。
「そもそも先に先輩の隣を取ったのは私です!泥棒猫は黙っていてください!」
「不法侵入の間違いだろう?それに、選ぶのはシロウだ。なあ、シロウ?」

そして出た結論は。
「‥‥ 好きにしてくれ」
‥‥‥‥ 結論は、出なかった。

「なぁ桜。そんなに怒らなくてもいいじゃないか」
「うるさいです。早く支度を済ませてください」
玄関で待ってるとのことで、御冠の桜はこちらを見ないで行ってしまった。
結局、セイバーは隣の部屋で、桜は変わらず客間に寝てもらうことになった。本当に奇襲が来たとき、桜を危険にさらすわけにもいかないし、ここでも結局歴史は繰り返すということか。
「‥‥ 知らないです。もう」
当初は桜もセイバーと同室で寝るという話にしていたのだが、それに対しては自分が反対した。一番戦闘が激化しそうなところに寝させるわけにもいかない。
しかし、形としてはセイバーを選んだようになってしまったため。この通り不機嫌まっしぐらというわけである。
どうしてこんな時に限って、雰囲気ブレイカーの藤ねえがこないのか。
「それでシロウ。今日は学校に行くのか？」
「ああ、今日は学校で戦闘はまずないと思うし、遠坂の動向も一応見ておきたい」
アーチャーにどう思われたかはこの先の選択に重要だ。イリヤを庇ったところも見られていた可能性が高い。
もっとも、衛宮士郎の行動としては違和感はないが。
「遠坂に対する情報操作は重要だ。あの二人は使える」
「ということは、リンと同盟でも結ぶのか？」
「冗談だろセイバー。背中から刺されるくらいなら、正面に陣取ってくれていた方がいくらかマシだってことだ」
いつ暴発するかわからない銃を懐に入れるほど自殺志願者になっ

た覚えはない。
「基本的には敵対するけど、情報を一方的に流すことくらいはできる」
「それではこちらが不利になるだけだろう」
「嘘偽りも含めてだ。それに、情報で言ったらこちらの陣に勝るところは無いよ」
　生憎、この聖杯戦争については知り尽くしている。もっとも、今回はイレギュラーが多いけど。
「言葉通りに信じてもらえるとも限らんと思うが」
「いいや、確実に信じるよ。少なくとも今なら」
〝衛宮士郎〟の発言を、一番信じるのはあの二人。その中でもアーチャーだ。彼は〝衛宮士郎〟がそのようなことをするとは夢にも思うまい。
「その件については任せてくれ。悪いようにはしない。それと、魔力のパスなんだが」
「問題なく流れてはいる。それ以上は昨晩言った通りだ」
　容量が膨大な分、できるならば流せるだけ詰め込んでいてもらいたい。魔力切れは一番と言っていいほど足を引っ張ることになる。
「セイバー。こちらに魔力を送ることは可能だな」
「ああ、不可能ではないと思うが」
「なら、無理やりパスに大量の魔力を注いでこじ開けられないか？」
　召還前に回路を開いていたから、パス自体に問題は無いのだが。詠唱なしのせいで、パスに異物がある状態。それならば、まとめて一度無理やり開いてしまえばいい。
「・・・もっとも、正規の手段で出来るとは思わん。それにそれよりも効率的な方法はあるだろう」
「悪いがそちらは趣味じゃない」
「本気か？一時的にだが、サーヴァントの魔力がお前の体内に入る意味を分かっていない貴様ではあるまい」
「大丈夫だ。精神はともかく、肉体はお前がいるから実質無害。それに、霊格の違う魔力とはいえ、自我が消えるほどの影響はないと思う」
　試したことは無いが、確信はある。それにこんなところで逝けるほ

ど、俺は許されていない。
「そもそも、不可能でないだけで、具体的な方法がない。上流に重力を無視して水を運ぶようなものだ」
「方法ならある」
刻まれた左手の紋章を見る。やはりそれかと、セイバーは半ば呆れて大きなため息をつく。
「それこそ、物の価値というものだ。シロウ。己から苦痛を伴う方に対価を払っていくのは、愚者のすることか、自己満足にしかすぎん」
「俺にはぴったりだ。それに、かの英霊をこの手に抱くには些か経験が足りないもので」
思わず、二人ともに笑みが漏れる。ちょっとしたジョークだけど、場を解くには十分だった。
セイバーはこちらを一瞥した後、もう一度ため息をついてこちらに笑いかける。
「よい。覚悟が決まっているなら止めるのは野暮というものだ。しかし、呑まれるなよ?そうしない自信が私にはない」
「安心してくれ。俺もこの後学校があるし手早く済ませよう」
左手を握り、魔力を込める。紡ぐは命。一時的な奇跡をも可能にする魔力の一角を、ここで使用する。
「令呪を持って命ず。セイバー。パスをこじ開けろ」
そう紡いだ瞬間。流れ込む感覚と共に、既視感のある感覚が身を包んだ。熱く熱く熱く。痛く、イタイ感覚が。

眼前にした剣を抜いたとき、かの王は人ではなくなった。
騎士の王になってしまった王の、微かな願いと後悔が、流れ込んできた。
民は王を求めた。騎士たちは統率者を求めた。それが何者である

かなど、もはやどうでもよかった。
剣を振り、罪を裁き、勝利を導く。人はそのような存在を求めた。
王という名の機械。統率という名の機能を完璧に備えた偶像に、人々は希望を抱いた。
故に姿など気にもしない。蛮族の進行に耐えうる才を持った王を誰しもが疑わず、誰しもがたたえた。
当たり前だ。人々が望んで生み出した存在を誰が疑おうなどと思う。それを、押し付けられた本人ですら、疑問に思わなかったのだから。
人間として生きるすべを失った理想の王の、彼女自身が抱いた理想のかけら。後悔の残滓が、擦れながらも眼前に映し出された。
正攻法で叶わないのならば、どんな手を使ってでも。護りたいものの為なら、それ、そのものをすら縛り付ける。彼女自身がわずかに抱いた彼女の理想。こう在れたらという、人間としての迷い。

これは、他ならない。アルトリア・ペンドラゴンの記録だった。
彼女の思い。彼女の願い。望まれない理想の形。
人間としての彼女の記録。
その中で、微かに淀む世界を、瞬きの中見た。
唯一、理想の果たせなかった。このセイバーの後悔というべきものか。
暗闇の中、降ろしてしまった願いを、歯を食いしばりながら見つめまいとする彼女の背を。
ーーーーー小さいなと、想ってしまった。

「・・・ウ。シロウ！」

「・・・・何秒たった」
「安心しろ。5秒もたってはいない。それよりも、意識は保てるか？」
帰ってきた感覚。少しずつ自分の外殻を理解するような感覚が自身の体を覆う。
空いている眼になぜか光が当たらないかと思えば、セイバーの体に顔を埋めていたせいだった。昨日とは逆に、こちらの膝から力が抜けたようで、少し恥ずかしい。
「ああ。万全だ。成功したか？」
「パスは本来の回路を維持している。倍以上の魔力が供給できる。調節もできるだろう」
言う通り、流れ行く感覚が太く鮮明になっている。これなら、戦闘に支障はないだろう。
手を握り、足に力を戻す。一瞬意識が移った時に抜けたようだけど、今は影響はない。
「そうか。それならよかった。手を貸してくれてありがとう」
「礼には及ばないが、本当に大丈夫か？」
「心配するな。そこまで柔くは無い」
体にも特に異常は見られないし、令呪が一画減った以外の影響はなさそうだ。
「留守を頼む。単独で行動する気は無いけど、何かあったら流す魔力の量を変えるから、それを察して出てきてくれ」
「了解した。私が付く前に死ぬなんてことは無いようにな。シロウ」
「善処する。俺なりにあがいてみるよ」
「それと、急いだ方がいい。女は機嫌を悪くすると面倒だぞ？」
そうか？桜はちゃんと待っててくれると思うが。そんなことで機嫌が悪くなる人なんて心当たりがあるのは一人くらいしかいないぞ。
部屋から鞄を取ってきて、桜が待つ玄関に向かう。すでに準備を終えた桜が、頬を膨らませながら、素直に待っている。からかってやりたいけど、これ以上困らせるのも忍びない。
「待っててくれてありがとう。さて、行こうか桜」
「そうですね。遅れると美綴先輩に怒られますし」

早くしましょうと桜に急かされながら、ガラガラと音を立てる扉を横にやる。
ピンポンの近くに人影を感じたが、きっと幻覚だ。だって理由がない。今回に至っては絶対に。
「どうしたんですか？先輩」
扉を出た直後に止まってしまったから、桜が心配の声をかけてきた。うんそうだよな。あるはずないあるはずない。
「いやちょっと変なものが見えて。寝不足かな」
「そうですよ。あんなところで毎日寝てるから風邪ひいたんです」
「体調は悪いようには思えないんだけどな」
そんなたわいない話をしながら、門の前までくる。やっぱり幻覚に動きは無い。さっきのことで脳がやられたか？
「お、おはよう。衛宮君」
後ろから不吉な声が聞こえてくる。脳に干渉する魔術というのもある。もしかしたら、寝ている間に、何かを駆けられている可能性も捨てきれない。
「・・・・なんか聞こえないか。桜」
「奇遇ですね。私も寝不足なのかな」
「ほら。入り込むなんてするから」
照れて顔を落とす桜。よし。しばらくこのネタは使い続けていこう。この顔が見れれば一日のエネルギーは摂取できる。
「さて、急ごう桜。寝ぼけも太陽の光を浴びればじきに覚める」
「そうですね。弓を引けば早々に断ちきれます」
「間桐さんも、おはよう」
・・・・・まずい。さっきから完全に幻聴が聞こえてる。セイバーの魔力にはこんな力があったのか。ダメージ量をゼロと過信したのは間違いだったか。
「先輩。私。呼ばれた気がしたんですけど」
「耳を貸してはいけないぞ桜。幻聴に返答するとよくないことが起きるのはホラーの基本だ」
「脅かさないでくださいよ。怖いじゃないですか」

「大丈夫大丈夫。冗談だから。そんなわけないから」
だって、後ろから聞こえる声も、後ろに人なんていないはずなのだから。
二人で同時に後ろを向く。ぜんまい人形のようにギギギと動いて目がとらえたのは。
「お、おはよう。二人とも。いい朝ね」
そうばつが悪そうに答える。赤いコートの魔王の姿だった。

早朝だからよかったものの、多少の視線が集まってくる。望んでこういった状況になっているわけではないのだから、そういう目はどうかと思うのだが。さっきから誰も話さない状況が続いてこっちも参ってる。
「ていうかセイバー気づいてただろ・・・」
そろそろ学校に着きそうだと思ったので、こちらから話を振ることにしよう。
「それで、遠坂。弁明をどうぞ」
「いや、朝のご挨拶にと」
「ご近所さんじゃないんだから。朝っぱらからなんでわざわざ俺の家まで押しかけてきた」
いろんな意味で心臓に悪い。結界が作動していなかったのも心臓に悪い。一度入れたことのある相手だし、悪意がないからだろうけど、それでもあっさり入られるとは思ってなかった。
「しょうがないでしょ。一応昨晩のお礼も言いたかったのだし」
「それなら電話するなり、いろいろ方法があるだろ？」
「私、衛宮君の家の番号知らない」
なぜさも当たり前のように悪びれもせずにいるのか。報連相は人間の基本だと思うんだけど。
「それに玄関前にいなくても、入ってくればよかったのに。それともあのタイミングで家に来たのか？」
「そ、そういうわけじゃないけど」

「だったらこれからはちゃんと押せよ？ピンポンにビビるなんて小学生じゃないんだから」
　知らない顔ではないのだし、追い返す気は今は無い。対立関係もそこまで深く無い今、そこまで警戒されるとあまりいい思いはできない。
「わかったわよ。これからはちゃんとご飯前に伺うわ」
「・・・・そういうことか」
　要は、朝ごはん自分の分気を使われるのが嫌で、今日は険悪でもあったし、入りづらかったのね。
「気を使うなんて、遠坂も人間らしいこと出来たんだな」
「・・・・なにかしら、私も幻聴が聞こえてきたのだけど」
「気にするな。最近冷えるから、体調が万全じゃないことなんてざらだって」
　だから、そんな青筋立ててこちらを見ないでほしい。これくらい言わせてくれてもいいじゃないか。
「遠坂先輩は・・・・」
　一歩後ろを歩いていた桜から、声が上がる。少しか細い、緊張したような声。
「これから朝、うちに来るんですか？」
「いやそれは困・・・・」
「安心して間桐さん。今日は昨日のお礼も加味してお邪魔させてもらっただけで、明日から衛宮君を取る気は無いわ」
　いい返答だ。褒めてやりたいところだが。やっぱりこっちを睨んでくるのをやめない。口が滑ることぐらい誰にだってあるだろう。
「変な心配してないで、部活のことでも考えなさい。もう着いたことだし」
　３人の登校もやっと終わり、朝練のある桜とはここでお別れだ。
「そうですね。今日はありがとうございました。先輩も、授業中寝たらだめですよ」
　頭を一度下げて、弓道場の方に走っていった。見たところ美綴が入口あたりでこちらに手を振っている。

「衛宮君それで話が」
「悪い遠坂、ちょっと待っててもらっていいか？」
　遠坂に断わって、自分も弓道場へ足を向け、小走りで向かう。美綴がこっちに来るとは思わなかったのか、少し驚いたような顔をしていた。
「どうしたの衛宮。朝っぱらからこんなとこ来て。もしかして復帰する気になった？」
「それは後々決めるとして、明日って弓道部部活あるのか？」
「うーん。あんまり最近みんな体調良くないみたいだし、一回自主練にでもしようと思ってるけど、どうして？」
　無視できない一文があったが、まあ許容範囲だ。動き出すタイミングにはわずかに誤差はあるだろうし。
「それなら、明日一日桜を借りていいかな」
「お、なんでだい？」
「家が大人数になってな。調理道具なんか一新したいなと思ってさ。桜も使うし、一緒にいたほうがいいかなって」
「まあ、私が決めることじゃないけど」
　美綴の目線が桜に向く。桜は無表情で固まっていた。いや、一番反応してほしいのは君なのですけれど。
「桜、明日一日付き合ってもらっていいかな？」
「あ、あの。はい。私でよければ」
　上ずった声で、噛みながら必死に返答する桜。そんな顔ほかの奴にしてないだろうな。弓道部にも男はいるし、少し締めといたほうがいいのかもしれない。
「そっかそれならよかった。悪かったな、部活の邪魔して」
「いえいえ。朝からいいもん見せてもらいましたから」
　ニヤニヤする美綴を無視して、桜に笑いかけた後、なぜか真後ろにいた遠坂を伴って校舎に向かう。
「悪いな待たせて。で、話って？」
「ていうか、衛宮君って結構正直なタイプなのね。少し意外」
　感心したような、勘が外れたような複雑な声を上げる。

「そうか？言わなきゃ伝わらないと思うけど」
「そういうところよ。私、衛宮君って天然の鈍感さんだと思ってたから自分の気持ちにもそうなのかなって」
　間違ってはいない。それどころか完全に的を射てる。むしろ逃げていたという方が正しいかもしれない。そう言った感情も、伝えることも。失ってからでは遅いというのに。
「まあ、あんまり気にしないで。それで昨日の件なんだけど」
「なんかあの後あったのか？」
「いえ、何事もなく帰宅したわ。衛宮君は見た感じ怪我してなさそうだけど、どこか痛たいところある？」
「特にない。手加減してたのか致命傷は一つもないし」
　嘘ではない。あの程度は致命傷でもなんでもないし、今は無傷だ。
「なんでそんなこと聞くんだ？」
「私に癒せる程度の傷なら治さなきゃフェアじゃないでしょ」
「そうでもないだろ。昨日援護もしてもらったし」
「でも、前衛に素人のあなたを置いて逃げたのだから、そのくらいのケアはしておきたいのよ」
　結局は、自分の為にけがをしたなら、それを治さないと、傷つけられないってこと。本当に、遠坂は変わらない。理知的であるくせに、人間らしい魔術師。
「それなら大丈夫だ。ねぎらうならセイバーにしてやってくれ」
　だから、君は強くて、これ以上に無いくらい弱い。
　一つため息をつくと、遠坂はまっすぐな目をこちらに当ててきた。
「それならいいわ。わかってると思うけど」
「敵同士。だな。遠坂とは戦いたくないけど、遠坂にも信念ってものがあるだろうし」
「なんだ、物分かりがいいじゃない」
「おほめいただき光栄です」
　教室の分かれ道に差し掛かる。遠坂に一つ会釈をして、教室に入ろうとしたとき後ろから最後の声がかけられた。
「衛宮君。どうしてあの時私を庇ったの？」

そんな、答えの決まった問がかけられた。振り向かずに、模範解答を答えた。
「当然だと思ったからだよ。誰かを護るのは」
そんな忌々しい返答が、自身の口から流れ出ていった。

教室の扉を開けると、意外な人物がこちらを覗いてた。
「おはよう衛宮。遠坂と桜連れて登校か。いいご身分じゃないか」
気色の悪い笑顔を浮かべてこちらを睨む男。
「部活は行かなくていいのか？」
「こっちはそれどころじゃないんだよ。お前らとは違うからな」
「そうか。特別ってのは大変なんだな」
自分の机にかばんを置いて、正面から慎二と顔を合わせる。
「それで、どんな気分だ衛宮。奇跡的にでも遠坂と登校した気分は」
「笑わせないでくれよ慎二。気色の悪い発言する暇があったら、今すぐ隣のクラス行って口説いてくればいい」
「・・・・お前」
彼にとっての精一杯でこちらを睨んでくる。全く持って威圧にもならない。か細いゴミのような目線。
隣にまで歩いて行って、背中を叩く。別に力を入れるでもない。唯々ポンと背中をたたいた。押し出すように。
「別にお前にたいして優越感を抱きたいから二人と登校したわけじゃないんだ」
いつもと違う態度に、おびえているのか困惑しているのか、少し震えが伝わってくる。
こう見ると哀れだ。大した器もないくせに、目標は達者で、プライドと自尊心だけはすくすくと育てて来た。
不安なんだろう？自分が無力だと、平凡だと現実に言われないよう。目をそらすので精一杯なんだろう？
しかし、同情する気も共感する気もさらさら無い。
お前には、進んでもらう。底なしのそれ以上に無い暗黒に。

「あがけばいい。得意だろ？何もないところから始めるのは」
お前には溺れてもらう。最低の絶望に、一番深く。
「安心しろよ。誰もお前に希望なんて抱いちゃいない。そもそもお前は何も持っちゃいない」
眼を開けようと目を閉じようと延々と迫ってくる死と絶望の音色に。
お前が逃げた、本当の異端に。
お前が押し付けた、報われない世界に。
「踏み出してみろよ？憧れてるんだろ？」
ありがたく思ってほしい。
特別にしてやるのだから。俺の手のひらの中で、踊る駒に。
よろこべよ。慎二。
お前の願いはようやく叶う。
たとえそれが、どんな形であろうとも。

第5話

日が落ちる。あっという間に最後の授業の鐘がなり、終業の合図が鳴り響いた。

ありふれたはずの日常が、なんとなく、別の次元のように思えた。

見つめる景色全てが、新鮮で、色褪せて、遠くて。すぐそばにあった時の流れも、今となっては孤独すら感じさせる。

きっと、少女はこんな世界を生きていたのだと、そう実感した。

そこかしこに走っていく生徒を横目に、ふと窓の外を見つめる。

放課後になればもう、太陽は落ちかけていた。懐かしい夕暮れが、目に安らかに差し込んでくる。包むような明かりが、自分を纏っていった。

刺すような寒気とは裏腹に。それは暖かくて、心地よくて。目を細めてそれを見つめた。まるで、焦がれるように。懐かしむように。

きっと、こんな日だったのだろうか。少年が唯々ひたすらに挑戦していたのは。

越えられない壁を、それでも唯々望み続けた。はたから見れば哀れで、愚かな少年。

それを、ただ見つめていたと。少女は言っていた。失敗しろと。そんないじわるなことを思っていたと、懐かしむように言って笑う少女の横顔を今でも目を閉じれば思い出す。

ただ愛おしい記憶。今思えば、その顔に何が隠されていたのか。きっと計り知れない思いがそこにはあったのだろう。

今は無い。今は遠い世界のお話。ただ笑い合って。何も知らず、ただ愛しく思った時の記憶。

もう届かない彼方の思い出。自分しか持ち合わせてはいない、偽りの思い出。

階段を下りて、靴を履きかえて。ただの日常を何事もないように過ごした。もしかしたら最後になるかもしれない。そんな日常を。

通りかかった道場には笑った少女が、ペコペコしながら。それでも背筋を伸ばして、一生懸命弓を引いていた。

そんな中。目の前を、幻覚が通り過ぎて行った。きっと、何も知らない頃の自分がする一幕。何事もないように弓道場に入って、他愛ない話をして、ただ過ごす愛おしい時間。

今となっては遠い。清く美しい桜のような記憶。

けれど、自分の足はもうそっちには向かなかった。知っていたから。どれだけ焦がれても、向けるべき方向が異なるから。

眼の端にある景色を無視して、一人歩いていく。その先に待つものが何か、よく知りながら。今ある幸せに背を向けた。

帰り道、手持ち無沙汰だったので、ふと足を商店街へと足を運んでいた。別段、買わなきゃいけないものがあるわけではない。セイバーの身の回りのものは藤ねえが協力してくれたし、食料は昨日たくさん桜たちが買ってきていた。

しかし、今すぐやることがあるわけでもなく。だから、ふと足を運んでいた。

小さいながらも活気のある商店街だ。同じように学校帰りなのか、小さい子たちがにぎやかな声を上げてはしゃぎまわっていた。

魚屋の前では、ベビーカーを押しながら買い物をする女性が、御主人と笑顔を交わしながら。今日の献立は何にしようか。そんな話をしているのを耳にした。

花屋の前では、贈り物なのか真剣な顔で花を頼む青年の姿があった。スーツに身を包んで、これから戦場に行くような顔をした青年を、花屋の店員は笑って花を選んでいた。

決して静寂なんかではない。音にあふれた日常が、眼前に大きく広がっていた。

すると突然。服の裾がスッと引かれた。小さい力で、存在を示すように。

その手は裾から指先へと延びていく。握られていた手を開くよう

に触れる指先。少し冷たくて、小さい手。
スッと目線を後ろへと移した。突然のことだったけれど、驚くこともなく、自然に。
「……生きてたんだね。お兄ちゃん」
作られた笑みと共に。似合わない、か細い声が耳元に響いてきた。

「とりあえず、座ろう」
公園のベンチに腰を掛けて、手にした袋から一つどら焼きを取り出し、目の前の銀髪の少女に手渡す。おずおずと伸ばした手にそれを乗せた。自分の分も取出し、一口それを齧る。
冬。吐く息が白く染まる季節。ただ何の音も発さず。ただ、甘い香りが口内に広がっていく。
「お兄ちゃんは、名前。なんていうの？」
手にしたどら焼きを半分ほど食べたあたりで、少女の高い声がやっと耳に届いた。
「衛宮士郎」
「エミヤシロ？言いづらい名前だね」
「衛宮、士郎だよ。言いづらいならシロウでいい。そっちが名前だから」
「シロウ。簡単でいい名前だね。単純だけど孤高な感じがするもの」
そう、こちらを見つめて言ってきた。煌めく朱色の目が、こちらの瞳を見つめる。何か、言いたいことをのどに詰まらせたような目線をこちらに投げかけて、また目をどら焼きに戻した。
「イリヤはさ。ここまで何をしに来たんだ？」
「お兄ちゃん。シロウに会いに来たんだよ。昨日の今日だけど、大丈夫だったのかなって」
「襲ってきたのはイリヤだけどな」
そう少し皮肉っていうと。いじけたように指先をいじりつつ、悪そうに目線を下した。
「気にするな。聖杯戦争なんて言う括りにいる以上仕方ないことだ

よ」
「……うん。そうだよね」
どら焼きをリスのようにちびちびと齧りつつ、少し明るさを取り戻した様子でフフッと微笑む。
どこからどう見たって年相応の女の子でしかない。これが、生み出された道具であるなど誰が想像できるだろうか。
「イリヤは、なんで聖杯戦争に参加してるんだ？」
いつか。問うた事のある問いを再度投げかけた。
「私は、このために生まれてきたから」
そう、何の感慨もなく。諦めるでも悲観するでも誇りにするでもなく、ただ当然のようにそういった。
「私は、生まれる前から。生まれてからずっとマスターになるために。この戦いの為に生きてきたから」
「今までずっとか」
小聖杯として。未来のない、決められたピリオドに向かって、背中を押され続ける少女の姿がそこにはあった。
「聖杯を手に入れて、どうしたいんだ？」
「うーん。あんまり考えたことない。目的ならあるけど、それは聖杯とは関係ないし。しなきゃいけないことはあるけど、それは私の意思じゃない」
「その役目を、嫌って思ったことは無いのか？」
「わかんない。最初からそうだったもの。シロウだって学校っていうのに行って社会に参加してるのと同じ。最初から義務づけられたことだから嫌とかそういうことじゃないんだと思う」
義務だから。勝っても負けても、これが至って普通に進めばイリヤの人生はここで。ここにいる彼女の人生は、ここで終わる。
「やりたいこととかは、無いのか？」
「……どうしてそんなこと聞くの？」
どら焼きを食べ終わったようで、見るべきものを失った瞳がこちらに向いた。計るように見つめる目線。寒空の下凍りつくような視線が射抜いてきた。

ふと頭上の空を見た。まだ明るい、落ち切っていないオレンジ色の光。きっとこう話せる時間のタイムリミットはもうすぐだ。もうすぐ、彼女の護り手が目を覚ます。
「少し、思っただけだよ。イリヤ自身の願いっていうのは何なのかなって」
「私自身の？」
「目的でも、義務でもなくて。こうしたい、こうなったらいいなっていうイリヤの願望。気になったんだ。言いたくなかったら言わなくてもいい」
「そんなの……」
眼は再度下に向いた。少し体が震えている。気を落とすようにするその表情に。つい、自分の着ていたコートをかけた。
「寒いだろ。着てていい」
きっと寒いわけではない。それでも、かけてやりたかった。自身のエゴだとわかっていても。
「いつか。それが見つかって。イリヤが願う何かが見つかって」
寒くなった体を縮こませるように、イリヤがいる方とは逆の拳を握った。もう時間は無い。こうできる時間は、あと数えるほどしかない。
「そうなれば。心の底からいいなって思う」
君が奉仕するのではなく、望む立場になって。誰かの為ではなく、自分の為に生きられたらどんなにいいか。
だってそれは、イリヤの人生だから。
「昨日今日会った奴が言うことじゃないな。忘れてくれ」
「……だったら」
下げた目をこちらに向けずに。そのまま消えそうな声で語りかけてきた。
「シロウの願いは。何？」
「……無いよ。願うことなんてない」
願ったところで、かなうものでないのは知っているから。
だから、願うのは辞めた。もう、無力に願うのはこりごりだから。

でも、それでも何か願うとしたら。イリヤの味方に。
君が未来を望めるように。
君が明日を歩めるように。
「なんてな。俺にも俺なりに人並みの願いくらいあるよ」
「・・・ そっか」
イリヤが立ってくるりと回った後、こちらを向いて、にこりと笑う。
「バーサーカーが起きちゃったから帰るね。これは借りていくから。次会った
時に返すからそれまで生きててよ？」
「任せろ。死ぬつもりはないからな」
立ち去っていくイリヤの背中を見送る。あの時とは違う軽い足取りが、少し心にズキリと痛んだ。
「それと、最後に一つ聞いてもいい？」
もう一度反転したイリヤの顔には、無表情が張り付けていた。冷たい。氷点下の目線。そこには、先ほどの少女ではなく、バーサーカーのマスターが立っていた。
「どうして、あの時私を庇ったの？」
何の感情も含まない声が、容赦なく襲ってきた。見定めるように。殺気を纏った問いが、衛宮士郎を計るようだった。
「特に理由は無いよ。そうしなきゃって思ったから」
そう答えるとき、彼女の目を見ることができなかった。見抜かれると思ったから。どうしても、どうしても出てしまう感情を。どうやったって彼女にだけは見られてはいけない。
「そろそろ日が完全に落ちる。そしたらもう敵同士だ。イリヤも、早く家に帰った方がいい」
そのまま彼女に背を向けて歩き出した。先ほどと同じように、自分の足を引きずって。振り向いてはいけない道をただただ歩いた。
「……うそつき」
そんな声が後ろから聞こえてくる気がした。

「シロウは、嘘ばっかり」
ぽつりと。吐き捨てるように、去っていく少年の背中に投げかけた。
何故かはわからない。でも、会わなきゃいけないと思ったから。次の日だったけれど、彼を探し回った。
確認したいことがあった。どうしても、確認しなければいけないことが。
昨日までは、どう殺そうか。なんて考える自分がいて。復讐っていう単語が、彼に会う前には、脳内に鳴り響いていた。
ただ、奪って行った少年が憎い気持ちがあって。一人にした憎しみがあって。裏切ったなんて思っていて。衛宮を名乗ることが、狂おしいほどに妬ましくて。
でも、昨日。何故かわからないけど、どうしてもそんな気持ちが浮かばなかった。撃つ魔弾にもどうしても力が入らなかった。
きっと嬲り殺しにしたいんだと。この程度では終わらないと。そう自身の根底で思っているのではと、自身を納得させていた。
でも、何故かあの時。護られなくても致命傷になんてならなかった。それでも、庇われたあの時。
シロウと名乗る少年の頬に、流れるはずのない水滴が見えたような気がして。
その時に、違和感に気づいた。何故かはわからない。けど足が震えるように前に、手が前に伸びるように動きそうになった。
どうしても、その違和感の正体を知りたかった。あの時、どうしてそんな顔をしていたのか。
だから、探し回って。見つけたと思った時。彼は。
シロウは、同じような顔で周りの人々を見つめていた。手から血が出そうになるほど、それを握りしめて。
辛そうで、苦しそうで。だから咄嗟にその手を取ってしまった。
その顔が。昔最後に見た、今はいない父の顔と重なった。
「うそつきだなぁ。シロウは。気づかないわけ、無いのに」

それはきっと、いろんな感情が入り混じった顔で。
何故それが自分に向いたのかはわからないけど。胸の奥が痛むのを感じた。

「言い訳を。シロウ」
「いや。その。悪気があったわけではないんだ」
「隠れて自分だけ甘味を食べてくるとは。貴様を見誤っていたようだな」
セイバーの手元にはどら焼きを包んでいた紙袋が握られている。眉間が寄り、心なしか気温が氷点下に陥っている気がする。うっすらと暗黒の宝剣が姿を現した。
「大体、外に行くならばサーヴァントを連れて行くのが基本だというのに、こちらは譲歩して単独行動を許している。このようなことがこの先あるのなら、今後の方針に支障をきたすぞ」
そのセリフはマスターが負傷して帰ってきたときに言ってほしい。断じて今じゃない。食い意地が張ったセイバーがいじけて言うべき言葉じゃない。
「わ、悪かったとは思ってる。だから学校から帰ってきたときホットケーキ焼いてやったろ？」
「ああ。それは大変美味だったぞ」
さすがにセイバーの分を買い忘れたのは悪いと思って、帰ってきてそうそう焼いてやったのだ。随分と驚いた表情で「さすが私の見込んだマスターだ。貴様に剣を預けて正解だった」なんて目を輝かせて言っていたくせに。
「だからさ。これから見回りに向かおうって時にこんな話しなくてもいいと思うんだ」
夕食後。ささやかに談話を楽しんでいた俺と桜を引き裂くように、セイバーが自室から居間に戻ってきたかと思えば、手には茶色い紙袋と殺意のこもった視線。思わず桜も「そ、それじゃあ先輩。おやすみ

なさい」なんて気を使って出て行ってしまう始末。まあ、結果的にはよかったのだが。
「それとこれとは話が違う」
「……わかった。明日帰りに買ってきてやるからそれで勘弁してくれ」
「倍は買ってこい。いいなマスター」
　この英霊は魔力より家計を切り詰める気か。大体、お前今回はちゃんと回路つなげたんだから食べる必要性は無いだろ。っと。そんなことは絶対に言えないのだが。
「はぁ。それじゃあ、巡回に行こう。この先の展開も気になるところだし」
「ため息をつくな。それでも私のマスターか貴様。しゃんとしろしゃんと」
　背筋を伸ばすように叩いてくる。元凶はセイバーなんですが。
　そんなことには脇目も振らず、セイバーは一人玄関から静まった街並みを睨む。時刻は夜１１時。未だ生活感の匂う住宅街には、途切れ途切れに光がともっている。
「セイバー。確認だが、交戦することになっても、変わらず撃破はやめてくれ」
「マスターは殺してもいいのか？」
「やむを得ない場合は構わない。けど今はそこまでの事態にはならないよ」
　バーサーカーは置いておいて、今のセイバーをそこまで追い詰められるサーヴァントは現時点ではいない。警戒するべきは敵ではなく、この戦争自体の動き。
　自身の敵は、マスターではなくこの流れそのものなのだから。
「とりあえず今日は自分たちの足場を固めよう。セイバーもわかっているとは思うが他のマスターも動いているようだし、警戒は怠らないように」
　セイバーは素直に首を縦に振る。セイバーは自身の魔力感知で地脈の流れのわずかな隔たりを理解している。俺はそうゆうわけでは

ないが、おおよその状況ぐらいは予測できる。
セイバーを隣に、住宅街を回りながら少しでも何か判断材料になるものを探す。違和感のある場所は見受けられないようだから特に異常事態は発生していないようだ。
交差点に差し掛かる。今日ではないのか?そういう事態もあるのかもしれない。まあ、洋館方面の丘まで見回ったら今日は終わりで……
そう思っていた矢先、膨大な魔力の気配を感じる。既視感のある知った魔力。セイバーの洗練された魔力というよりは、おどろおどろしい邪悪な気配。
それが、涼やかな風と共に背筋を貫いていく。鳥肌が全身を覆う中、冷静にそれが発言した方向を見る。そこは新都ではなく、より近い住宅街の一角。ここからそう時間はかからない。
やはり今日。動いたか。ある意味では筋書き通りの一手に安心しつつ、セイバーと目線を交わし、すぐにその方向へと走り出す。魔力を纏い、人外の膂力で走るセイバーに追いすがるよう全身に魔力を通す。つま先から下半身を重点的に強化の魔術をかけ。セイバーに及ばないけれどそれでも距離をそこまで離されないよう並走する。
夜の街を、走る稲妻のように二つの影が断ち切っていく。同時に自身の体に通る冷たい冷気に、武者震いが体を走る。
響くようなそれは、先ほどまでの自分にスイッチを入れるように、冷徹に鋭利に、心を塗り替えていく。
薄く光の立ち込める路地。家と家との間に、捨てられたように女性が崩れていた。生気は微塵も感じさせず、一般人が見れば死体と何ら変わりあるまい。
しかし、呼吸は続いていた。見捨てていけば間違いなく死ぬであろうが、今適切な処理をすれば息を吹き返すだろう。
首筋に二つ点が並んでいる。ツッと血がそこから滴っていた。
「セイバー。この人を背負って教会へ向かってくれ。あそこの神父なら、これに対応できるはず」
「それはできない。優先すべきはマスターの安全。この人間を助ける

のは二の次だ」
　セイバーはすぐに背を向け、手にした剣を強く握る。彼女もこの所業を許しているわけではないのだ。ただ優先順位が少し異なるだけで。
「それよりも、これを行ったサーヴァントを始末すべきだ。幸い、魔力の残滓が道を示している。見たところそこまで思慮深いマスターではないようだ。次を出さないためにも、ここで手をこまねいているわけにはいくまい」
「わかっている。だから、セイバーはこの人を背負って向かってくれ」
「……死ぬ気か？」
「何度も言わせるな。頼んでいる間にしてくれると助かる」
　令呪の使用をにおわせると、明らかに怪訝な顔つきになったセイバーが、女性を肩に背負う。眉間にしわが寄り、白い肌も少し青筋が立っているように見える。
「それは、何らかの意図があってのことなんだな」
「もちろん。でなければこんなことしない」
　深いため息を一度つくと、すぐに凛々しい顔つきに戻ったセイバーは、剣を収め、魔力を足に周知注させる。
「くれぐれも無理はするな。私が来るまで持ちこたえろ」
「出来なきゃもともと頼んだりしない。俺がしとめる前に戻ってきてくれよ？」
「頼もしい限りだが、あまり心配をかけるような言動は避けてもらいたいものだ」
　すぐに視界から消えたセイバーは、一瞬後には視認できるぎりぎりの距離の屋根にいた。彼女の俊敏はそこまで高くなかったはずだが、サーヴァントというものはやはり常識で、計れるものでは無いらしい。
　運命というのはなかなか頑固というのか。今はありがたいが、先が思いやられる。少しの差異はあるとはいえ、順調に道を進み始めたようだ。
　魔力の残滓。ここまでの目立つ魔力だ。正直他のマスターたちも

気づいているだろう。特に遠坂は。彼女にはあまり知られたくは無い。もっとも、一番嫌なのはそのサーヴァントなのだが。美綴が言っていた通り、もうキャスターが動いている。遠坂はこの街のオーナーだし、そっちに目を向けていると考えるのが自然だろう。

意外にも、そこまで遠くに行っていたわけではなく、すぐに視認することができた。

妖艶な髪に、色気のある肉体。邪眼を封じ込めた向くはずのない目が、こちらをなめるように覗いている。その手には獲物が横たわっていた。首筋に歯が突き刺さり、何か大切なものを奪われていっているようだ。だんだんと生気を失っていくそれは、あと少しというところでストップがかかり、魔物はそれを優しく横たえた。

怪物の後ろにいた一つの影が、こちらに気づくとあからさまに顔を歪ませる。それは、困惑か、それとも怒りなのかはわからないが、どちらにせよ不快な表情に変わりはなかった。

「へぇ。誰かと思えば衛宮じゃないか。凄いな。お前の間の悪さもここまでくると長所だね」

張り付いた笑みに焦りは感じられない。サーヴァントの姿が見えないからか、それとも自分が少し手にした力に酔いしれているのか。どちらにしろ、賢明なマスターの反応ではない。

「何をしてるんだ。慎二」

「それぐらい見ればわかるだろ？餌を与えてるんだよ。食事」

「随分と豪勢なもんなんだな」

倒れた女性の息は先ほどと同じようにか細い。今すぐではないにしろ、対処しなければ間違いなく死ぬだろう。

「僕もどうかとは思うんだけどね。仕方ないだろ？こいつらの口には生しか合わない。サーヴァントの魔力を維持するために魔力が必要なんだから。衛宮だってこんな夜遅くに出歩いている理由はそれだろ？」

「殺すのか？」

「そんな野蛮な言い方はやめてくれよ。僕だってやりたくてやってるわけじゃないんだ。こいつらが必要だっていうから餌をあげてるだ

けだよ」
　悪びれる様子もなく少女を見下ろしながら、口角を大きくあげて自信満々に胸を張る。
「僕だって被害者みたいなもんだよ。だからその目をやめろよ衛宮」
「……哀れだな」
　慎二の顔色が変わる。それに沿ってサーヴァント。ライダーも一歩こちらに近づいてくる。明らかに敵意を含んだ目線。発言を間違えれば今にも襲い掛かってきそうだ。
「お前。今、なんて言った？」
「哀れだよ慎二。お前はどこまでいったって、恐怖も、感動も、憎しみも生まない。生むのは小さな同情と、蔑みだけだ」
　ライダーの足がまた一歩こちらに近づく。随分と調教したようで、体裁だけはご立派だ。
　片手に手にした本を強く握り、慎二はこちらを強くにらんだ。静まった空気が流れる中、耐えきれなくなったのか肩の力を抜くように目をそらした。
「サーヴァントを出せよ。衛宮。そのためにこんな機会まで用意したんだ。今更抜いた刀。収められるとは思ってないだろ」
「生憎、今俺のサーヴァントは出払っててな」
「……ぷっ。あはははは。何を言うかと思えば、放し飼いとは。僕を笑い殺す気か？」
　腹を抱えて慎二は笑い出す。口角を裂き、それはそれは愉快に。
　本を閉じてライダーに目配せをした後、自分が優位に立ったことを確信したのか、ライダーの前に出て指を下へと指す。
「媚びろよ。待ってくださいって。僕も今日はサーヴァント同士の戦いが見たいんだ。お前が無様に死ぬのはそのあとにしてやるから。いまは無様に頭を擦り付けろよ」
　価値を確信した慎二に半ば習うように、膝を少し曲げる。その間に一歩一歩こちらに慎二は足を進める。数にして４歩ほど。ライダーと俺のほぼ中間だ。
「……慎二。盛り上がっているところ悪いんだが」

状態を少し下げ、全身に魔力を回す。均等に、全神経を戦闘用に塗り替える。今ここに立っている影は衛宮士郎ではなく。
ただ一振りの一刀。意識を、感覚を、鼓動を、ただ目の前の障害を打ち砕くための糧と変えて。
「離れろ。死ぬぞ」
踏み出した足と同時に、手に短刀を投影。一歩で距離をゼロに。首筋に刺さるはずのそれは、一瞬で差を詰めたライダーに阻まれる。
絡むようにかかる鎖を無視して、短刀の投影を放棄。砂状になって消えていくそれを横目に、ライダーの追撃の足を状態を下げることで躱す。
その流れのまま、慎二に向かって右手を差し込もうとするも、ライダーは彼を抱えて一時距離を取る。
悪いが急いでくれセイバー。余裕は無い。間に合えよ。俺が、ライダーを殺す前に。

ライダーは跳躍後、間桐慎二を敵から１０歩ほど離れた位置で降ろす。突然襲った殺意から自身を守るかのように震えている傀儡を勇気づけることもなく、ライダーは敵と向かい合う。
彼女はサーヴァントだ。今は本領を発揮できないとはいえ、人間が普通に戦うには余りある。その蹴りを、眼前の敵は当然のように躱した。あり得ない話ではない。偶然の可能性もある。しかし、そうは思えなかった。
負けるビジョンは無い。しかし油断はできない。それほどの雰囲気を目の前の少年は醸し出している。
這うように状態を落とし、短剣を前にクロスさせるようにする。そして、少年の呼吸に合わせるように、一瞬で距離を詰める。
視認するのも困難なはず。敏捷はＢ。死に気づく間もなく相手の首が落ちる。
はずだった。しかし、それは空を切る。完全にタイミングを合わせ

た少年は、わずかに状態を傾けるだけでこれを易々とかわす。
動揺せざるを得ないが、それと反して体は自動的に返しの一撃を放つ。もう一方の手で今度は回避の使用がないところへと薙ぎ払う一撃。
それすら、当然のように撃墜する。それも、今度は弾かれる。いや、流されるというべきか。力の向きを変えるように弾かれたせいで、彼に力が伝わることは無い。
いったん互いの射程距離から離れる。たったの数秒。それも数コマの剣戟だが、ライダーの肝を冷やすには十分すぎるほどだった。
彼の手には武器の類が見当たらない。最初の短刀は私が折り、何かしらの魔術の細工、もしくは代償により砂状になったと考えられる。しかし、先ほどは明らかに何かに阻まれた。一瞬視認できたのは、小さい小刀のようなもの。
刃を交わすまで視認できない武器。そう結論づけたとしても、いまいち納得ができない。あれは、そんな簡単に結論づけていいことではない気がする。
そして他者の援護なしにサーヴァントと剣を交わして死なない。そんなマスターは今回はたして何人いるのか。そして、間もなくサーヴァントが来るだろう。そうなってしまえばこちらの負けは免れない。
「信二。撤退すべきだと。彼は危険です」
「な、何様だお前！衛宮ごとき、さっさとかたずけろ！」
「……状況をよく見てはいかがです？」
「見たうえでの判断だ！さっさと衛宮を半殺しにでもしろ！」
完全に頭に血が上っているのか、それとも臆病な自分を鼓舞しているのか。まあ仕方がない。彼にとって、ライダーとの戦闘は針に糸を通すような作業だろう。見たところ、それでも彼は防御に精一杯。ならば自滅するまで殺すまでだ。
もう一度同じ体勢を取り、少年を見る。最初に見た彼とは打って違って、今の彼からは何も感じない。殺意も、恐怖も、誰しもが戦闘中に思う緊迫感すら、欠落しているように見えた。

先ほどとはタイミングをずらし、右手の短剣を少年の右肩にめがけ投げる。それと同時に、右側から少年の体に巻きつくように後ろを取る。鎖が彼の体を包む。退路を失った少年にさすがに逃げ道はないはずだ。

左首筋から右肩にかけて切り裂く軌道を描く。たとえ躱したとしても、先には先ほど投げたもう一方の短剣が残されている。

しかし、刃はあと一歩というところで届かなかった。いや、届かせることができなかった。

ライダーは全力で、自身がこの場で守護するべき存在へと目を向ける。もはや残りは1メートルもなかった。

小さな鉄の塊が間桐慎二めがけて飛来しているのを、ライダーは衛宮士郎の背を通して見た。

理由を考察している暇が彼女には無い。すぐさま、持った残りの一刀をその飛来物が描く線めがけて投げる。紙一重で間に合ったそれは間桐慎二の数センチ前で火花を上げる。

その一瞬。すでに相手は、その目に敵を映し出していた。片手にはどこからか取り出したであろう拳銃。振り上げた右手には片刃の曲がった短刀が握られている。

「詰みだ。ライダー」

振り下された剣はライダーの首を狙う。今から短剣を手にしても間に合わない。その隙にライダーの首は地を転がることになるだろう。

だから、ライダーは容赦なくその手を捨てる。

手刀を振り下される剣に合わせる。先に壊れたのは少年の剣。ライダーの小指すら落とせず彼の剣は砂状へと形を変える。

逆に防御の手を失った隙を見逃さず、そのまま彼の腹部へ横から蹴りをいれようとする。

死なないよう加減はするが、激痛を伴うであろう打撃を前にしても、彼の表情は変わらない。それどころか、彼は口を開いた。それも、敵にする表情ではなく。

「言っただろ。精々死ぬな。ライダー」

彼の本当の意図に気づくと同時に、黒い剣が自身の体にめり込んでいった。

到着するころにはもう戦闘が開始されていた。
魔術師としてはまずまずの実力だろう。だから、サーヴァントがたとえ襲ってきたとして、数分は耐えられるのではないかと予想はしていた。
しかし、それは逃げに徹した場合だ。断じて剣を交えてではない。にもかかわらず、最初に視認したとき、彼がライダーの手先に一撃いれていた。
だが、それによって武装が砕かれた。このままではと、最高速で敵の足がマスターをとらえる前に剣を挟もうとする。
サーヴァントには魔力感知ができるため、セイバーが魔力を放ち、接近すれば、当たり前のように対応してくるはずだ。アサシンのクラスでもない限り、奇襲は成功しない。
にもかかわらず、動きを止めるために振り切った一太刀は、いともたやす敵を吹き飛ばした。さすがに即死させるほどの威力を持たせてはいないが、とてもいい感じに入ったと手ごたえでわかる。
数メートルライダーが飛んだところで、やっと場に役者がそろう。初期の形勢は完全に逆転し、虫の息のライダーを見て、腰の砕けた間桐慎二は顔を青くする。
「な、何やってんだよお前。だ、誰がやられていいなんて言ったんだ。こ、こんなの命令違反」
「そういったのはお前だろ。慎二」
無表情で、衛宮士郎はそう告げる。手元には人ひとりを殺すには十分なナイフが握られている。
「状況も判断できない主に、魔力の十分な補給もできないできそこないを両立されては、そいつも可愛そうだ」
一歩一歩。先ほどとは逆転した足取りで、慎二に容赦なく死が近づ

いていく。彼の顔色に怒りや余裕は全くなかった。初めてなんだろう。明確な死が近づくのは。
引きずるように体を遠ざけ、必死に声を荒げる。
「ライダー！・さっさと立って僕を護れよ！・これじゃあ。これじゃあ僕が弱いみたいじゃないか」
腹から血を垂れ流しながら、必死に小鹿のように震える足でライダーは立ち上がる。セイバーの入りが少し浅かったのだろうが、それでも戦闘を続行は不可能だろう。
「そ、そうだ。それでいいんだ。どうせ勝てないなら、体を張って食い止めろよ」
その命に従うように、慎二と衛宮士郎の間にライダーが体を入れる。士郎との距離はもはや1メートルほどしかなかったが、互いに剣を振り上げることは無かった。
二人にしか聞こえない声で、ライダーは少年に問う。
いくつかの問答を重ね、満足そうにした後。ライダーは膝を地につけ、体は粒子となって虚空へと消えていく。死んだわけではない。現魔力量が足りず、霊体化しているのだろう。
しかし、それを理解できないであろう慎二はさらに声を荒げる。
「う、うそだろ。勝手に落ちてんなよライダー！・やめろ。くんなよ。近づくなよ！」
石や砂を必死に投げる姿はまさに滑稽だった。そして、衛宮士郎は指を下へと指す。
命乞い。頭を擦り付けろと、そう慎二は解釈した。それがわかった時、彼の体は瞬時に額を擦り付ける。頭の中では腐るほど衛宮士郎を罵倒するが、それでも体は正直だった。
「違うだろ。慎二。俺が言いたいのはそうじゃない」
しかし、彼はそれを良しとしない。
情けをかけるのではなく、ただ冷淡に、そう言い放った。衛宮士郎が指を刺していたのは慎二の手前の土ではなく、その後ろにいる少女だった。
「だからお前は平凡なんだ。一人目の少女もそうだが、お前。なぜラ

イダーに最後まで食わせきらなかった?」
　いつもの偽物の笑顔や、怒りすら見えない表情で、衛宮士郎は淡々と事実を述べていく。
「特別になりたいなんて言いながら、一線を越えないでいようとしている。魔術師になりたいなんて言いながら、まだ一般の世界を未練がましく繋ぎとめている」
　近づく足が止まり、衛宮士郎は慎二の前に手にしたナイフを投げる。
「お前がすべきだったのは、撃退の命令でも、命乞いをすることでもなく、後ろにある魔力を補給するよう命じることだった」
　慎二は目の前に落とされたナイフを、震えながら手に取る。初めて手にした明確な殺すための道具に、彼は手の震えを抑えることができなかった。
「哀れだよ。道具の価値も、使い方も知らず、ただ憧れと自尊心に任せて生きるお前は」
　何も言い返さない。慎二は目の前の少年を恐れていた。いつものにやけ面も愉快な声も出せず、口は震え、立ち上がる脚には力が入らない。
「そしてお前は理解している。だからお前を今覆っているのは恐怖なんだよ。怒りでも呆れでもなく。届かないと知りながら、それを認めるのが、諦めるのが怖い」
　士郎はセイバーに少女を保護するよう示唆し、うなずいたセイバーは少女を抱える。
「考えろ。お前がなぜそれほど特別を乞うのか。その根源たる理由を。特別になりたかった理由を」
　深い深淵のような瞳が、慎二を襲う。昨日までは別人のような印象だった少年は、まぎれもなく異次元の価値観の持ち主だった。
「そうすれば、その震えも止まる。考えろ。お前は何のために、令呪(その本)を使うかを」
「あまり、わしの孫をいじめんではくれんかの。衛宮の子倅」
　何もないところから声が聞こえるように、しわの目立つ老人が現れ

た。
「安心してくれ。無抵抗の人間を殺す趣味は俺にはない」
少女の息が持つリミットも決まっている。現れた老人を半ば無視して、士郎はこの場を離れようとする。
それをセイバーは良い顔はしなかったが、手に抱えた少女の危うさを一番わかっているのか、特に何かを言うわけでもなくしたがう。
しかし、予想外に老人から声がかかる。血は争えないのか、慎二に似た愉快そうな声で。
「聞きたいことが、あるのではないか？」
「……そうだな。一つだけ、聞いていいか？」
振り返る士郎の表情を誰も、翁でさえ読み取ることができなかった。無ではない。しかし、読み取れる感情が一つもないように見えた。
入り組んだ感情を顔に張り付け、少年は、常世を生きる亡霊に問う。
「あんたは結局、何者なんだ？」
答えを聞かずに、衛宮士郎はセイバーと共にこの場を去った。
残されたのは亡霊と、魂の抜けた傀儡が、呆然と手に握る殺意を見つめていた。

「おい待てマスター！」
教会から出てきたと思えば、こちらに脇目も振らず一人前を歩きだしたマスターを呼び止める。脚を引きずる様子もない。
本来なら心配する必要もない。だが、それでも今の彼を危ないと思った。今にも崩れ去りそうで。
「ああ、悪いセイバー。彼女の様態を言うの忘れてた」
「そういうことではないのだが」
「一命は取り留めたってさ。よかったよ」
いつもの愛想笑いをこちらに向ける。それでも、本当に安心したように白く染まる息を長く吐いて、また前を向いて歩きだした。

「怪我は、無いか？」
「無いよ。あるとすれば夜遅くなりすぎそうで明日の朝がつらいってことくらいだな」
少女の安否が確認できるまで残っていたせいか、すでに日をまたいでいる。街並みに光る生活の証も、今はほとんどない。
「だが、明日は学校は無いんだろう？」
「あ、そうか。明日は桜と出かける日か。そうだな。それなら、寝坊できそうだ」
ふふっと小声で笑う。やっと、本当に幸せそうに笑っている。それを確信できるほどに、あの少女の存在は大きいのだろう。
帰り道、何も話さないのはいかがなものかと、気づき、確認したいことを聞くことにした。
「貴様の魔術は、武器製造か？」
「……正解。まあ半分当たりってところ。投影魔術。見た武器をコピーするだけの能力だよ」
少し驚いた様子で、それでいて少しうれしそうに彼は魔術をいともたやすく開示してきた。
「では、ライダーが私に気づかなかったのは」
「俺の投影した武器に、少し周りが見えなくなるよう細工をしただけだよ」
感知阻害の呪詛を含んだ武器。聞いたところ宝具ですら投影可能ということだ。そういった改造はお手の物だという。投影にかかる時間はそれぞれ違うが、今回使用したものは壊れる前提の為、すべてノータイムで投影できるそうだ。
それに現代兵器まで構造がわかれば投影できると、一瞬拳銃を手に投影して見せてくれた。
「視たのか？」
特に感慨もなく。シロウは自分の過去を垣間見たのかと尋ねてきた。
「……気に障ったのなら謝ろう」
「構わないよ。いずれ視えるし、視ろと言ったのは俺だからな」

令呪を持ってパスを大きく開いたから、きっとさらに色濃く見えたのだろう。つい、シロウに向けた目線をそらしてしまう。
聞かなければいけない問いを、目の前の少年に問いかける。
「……貴様は、もしも必要に迫られた時、魂食いを命じるのか？」
空気が変わる。少し軟んだはずの空気も、寒気と同調するように、渇いたものへと変わっていく。
「……さっきのやつか？」
「冗談で言っているとは思えなかった」
あの時の目は、真にそう思っている眼だと確信できる。
「答えて欲しい。それに異議を申し立てるつもりもない。お前が好き好んでやるとは思えない。そういった状況になるなら、それは仕方のないことなんだろう」
深く深く息を吐いて、シロウは空に上がった月を見つめる。何かを確認するように。吐く息が白く月を包み、残像のように月が映る。
「……そうだな。もし、これ以上ない状況で、必要に迫られて、状況を打破できるのならば」
士郎はこちらを向いて、笑みを浮かべる。それは、諦めているような。それでいて決意の滲む瞳で。
「やるよ。俺は。たとえ、それでどれだけの憎悪を背負うとしても」
少年の壊れた笑みにかけようとした言葉を飲み込む。
暖かい彼の背中にのしかかる荷を僅かに垣間見た。彼にとってそれを背負うために何を切り捨てたのかも。
なあマスター。私は、貴様の助けになれているのか。そう言いかけた声も、口から出ることは無い。
ああ。この少年は。きっと今でも、あの地に縛られていて。
あの鎖は、あの光景は。あの涙は。今でも彼を蝕んでいて。
その狂わしい笑みは。私に向ける本当の笑みはいつも。悲壮的で、とても優しくて。
冬空の星が輝く光景をバックに、月を通した彼の姿を、あの日の彼と重ねていた。

第6話

暗く。重く。辛く。切なく。苦しい。

私にとっての世界は、そういうものだった。

モノクロに染まる世界には色彩なんてなくて。体を溶かす空気に包まれた世界には救いなんて、逃げ場なんてどこにもなくて。

息をするにも、心臓を動かすのも、億劫になるほど。生きるのは辛くて、苦しくて。鼓動が勝手に止まってしまえばなんて、何度も何度も思った。

私はどこにいれば、私でいれるのだろう。虚空に映る笑顔で笑う気色の悪い自分を、何度も消しながら。存在するはずのない救いを、ただ願った。

苦しくて、悲しくて、寂しくて。痛くて痛くて痛くて。

でもそれも最初のうちだけ。人とは慣れるものなのか。私は、救われる願いを、ぼろぼろと音を立てて壊れる心と共に早々に手放した。

だって。そうしなければ。ここに立つことすら苦しくてできなかったから。

羨んで、妬んで、憎んで。

憎みきった先には、ただ虚空へと続く逃避の夢。

私はこういうものなのだと、そう切り捨てるしかなかった。息をする理由も、鼓動を進める理由も見つけることができなかったできそこないは。そういうものだと自分を納得させるしか、道がなかった。

だから。怖かった。

何度も何度も。倒れても向かって行く姿が、怖くて仕方がなかった。

諦めないその背中に、どれだけ傷つけられたか。治りかけた瘡蓋をはがすように、絶望が私を纏っていった。

だから私はこう思うことにした。彼と私は違うものなのだから。私と彼の生きる世界は、価値観は、きっと交わることがないのだからと。

嫌いだった。目を背けていた現実を見せつけられて。

嫌いだった。眩しい世界を見るたび、私の世界が憎くて。
でも、それは間違いだった。
彼はとっくに壊れていた。毎晩毎晩自分に刃を向けて。誰よりもその在り方は。彼は、きっと自分より哀れで。救われるべきだった。
でも、彼は。そんな素振り一つせず。明るい世界で生きていた。自分より壊れた少年は、自分が諦めた世界に、それでも強く立っていた。
そんな彼に、私は憧れた。
焦がれて、追いつこうと、追いすがろうとして。それでも止まってしまう私の足を。
後ろにいる私を、迎えに来てくれた。
立ち止まる私を、一緒に止まって待ってくれた。
こんな私の、隣にいてくれた。
いいところなんて一つもない私の傍に、それでも微笑んで手を握ってくれた。
私に、居場所をくれた。
諦めるしかなかった眩しさを、与えてくれた。
私だけの。私のための。かけがえのない居場所を。
世界を、変えてくれた。
彼はきっと知らない。
名前を呼ばれるだけで、どれだけ心が温かくなるかを。
彼はきっと知らない。
隣を歩くだけで、体が、心が、羽のように軽くなることを。
一緒に住もうって言ってくれただけで、私がどれだけ救われたかを。
ここにいていいと。ここにいてほしいと。存在を。私を認めて、欲してくれたことが、どれだけ嬉しかったかを。
きっと彼は知らない。知らなくて、いい。彼には普通なのだから。助けを求めていれば誰でも助ける。そんな人だから。
彼の特別になりたいと思わないわけじゃない。でも、それでもいい。
彼は、私にとってかけがえのない居場所だから。

いつものように。忌み嫌うはずの朝を切り裂いて、彼の寝静まる場所へと向かう。注意したのに、彼はそんなことには気にも留めない用で。

寝ている彼の手に微かに触れる。冷たい空気のせいで冷たくなっている手に、少しずつ熱が移っていく。

わかっている。本当に彼を思うのなら、手を離すべきで。穢れた私でも、彼はきっと笑顔で背負ってしまうから。

でも、もう無理なんです。握ってくれた手を、温もりを知ってしまったから。寒いのは。一人は怖いんです。

ごめんなさい。先輩。私は、貴方のそばにいたいのです。私のそばで、貴方に笑って欲しいのです。貴方の声が、温もりが、狂おしいほどに愛しいのです。

「おはようございます。先輩」

体を少し揺らすと、薄い目を開けてこちらを覗きこんでくる。眠そうで、どこか安心した目で。

「おはよう。桜」

何気ないその声が、溶け込むように、全身を纏う。麻薬のように。痛みを、苦しみを洗い流すように。

先輩。私は、とっても悪い子なんです。先輩に守ってもらうべきな人じゃないんです。

不幸にするとわかっていて。それでも自分の為に先輩の隣に居座っているんです。

こんな私を。強欲で、傲慢な私を。それでも貴方は、許してくれますか。

「そろそろ時間だな」

少し遠くにある時計を見る。現在は９時５０分。もうすぐ１０時になる。待ち合わせの時間まで１０分を切ったところで緊張からか

少し手に汗をかき始める。
なんだかんだ、自分が体験する初めてのデートなのだ。緊張するのは無理もないと自分に言い聞かせつつ相手の到着を待つ。
折角ですし外で集合しませんか。と提案されたまま、３０分ほど時間を空けて出発したのだけれど、ここまで緊張するなら、一緒に出てくればよかったと半ば後悔をしている所存。
緊張からか、大きく息を吐く。同時に、左肩を後ろからポンと叩かれる。
「うわぁ！」
「な、なんですかその反応。ひどくないですか？」
互いに驚いて数歩距離が開く。振り返ると目の前にいるのは待ち焦がれていた女性。
少し怒ったのか頬を大きくする桜。久しぶりに見る私服。なんだかんだで家でのパジャマ以外では制服しか見ないからな。
ロングスカートにピンク色のカーディガン。清楚なイメージの桜にぴったりだ。どことは言わないが、最近成長したある部分を強調しているため、やはりというか、周りの男の視線が集まるというか。
控えめに言って、ここら辺を通った男を全員ぶっ殺そうかと思う程度には、目の前の少女は美しかった。
ちなみに昔。それを着ている黄色い野獣を見たことがある。まあ、月とすっぽんというか。やはり服というものは着るものの美しさによって見方が変わるなあ。と半ば最低なことを考えつつ、緊張をはぐらかすように桜の手を取る。
「せ、先輩!?何を」
「嫌か？」
「いえいえそんな！いやでも。緊張するというか」
「これくらいは大目に見てくれ。俺だって緊張してるんだ」
だからなのか。お互い手と足が一緒に出ていて、ヘンなダンスを踊っているようになってしまう。周りの熟年層からは暖かい目線をくらっていることだろう。
一旦手を離して、お互いに深呼吸を2，3回する。少し赤くなった

桜を見つめつつ、自分の頬の暖かさを実感する。
フッっと決意を固める息を吐いた後、桜の前に手を出す。そうまじまじと見られるとこちらもなんというか。つい目をそらしてしまう。
「さ、桜。出来れば早く手を取ってもらえると助かる」
「は、はい。それでは、不束者ですが」
スッと桜の柔らかく滑らかな手が乗せられる。
「桜。それだと握手だ」
見事なことにこちらの右手に対して同じ手での返答。やっぱり緊張するよね。うん。
「あ!ご、ごめんなさい」
誤魔化すように何度か耳に髪の毛をかけなおした後、顔をさらに赤くした桜がそっと左手を乗せてくる。
「よ、よろしくお願いします」
「ああ。今日はよろしくな」
下に向いていた目線がこちらに向く。真っ赤な顔と少しうるんだ瞳に、満面の笑み。
今日誘って本当に良かったと再確認して、桜の手を握り横に並ぶ。残念ながら、恋人つなぎを最初からできるほどの甲斐性は無いから、勘弁してほしい。これでも精一杯なんだ。
「それで、今日は料理の道具を一新するんでしたっけ」
「ああ、そういえばそんな話になってたっけ」
アレはまあ。その場で出た言い訳なわけで、本当の理由は桜といたかっただけなのだけれど。
「・・・ 別に今すぐ必要じゃないんですね?」
「ばれた?」
「もう。だったらなんで私をわざわざこんなとこまで」
「そんなもん。誘いたかったからに決まってるだろ」
何秒かの空白をはさんで、この話は辞めましょうということになった。こんな会話ずっとしてたらそれこそ寿命が持たない。
「じゃあ、今日は何するんですか?」
「せっかく新都に来たし、ショッピングモール見て回ろうか」

あそこには映画館もあるし、もしもの時はあそこに・・・・ なんて黒い思考を巡らせつつ、桜の手を引く。
「欲しい物でもあるんですか？」
「あんまりないな。俺こういったところ来ないし」
「・・・・ 私も来ないんですけど。ほんとに何しに来たんですか」
「正直に言うと、服を買いに来ようと思ってたんだよね」
バイトをしているこの俺にかかれば、財布の貯蔵は充分なのである。もっとも、高校生の範囲内の話なんだけど。だからこの際一気に使ってしまおうかと半ばやけになって口座から金をたんまり下ろしてきた。
「先輩、ジャージが多いですからね」
「ジャージは文明の結晶だぞ。甘く見ちゃいけない」
「確かに着心地はいいですけど・・・・」
さすがに今はジャージでもユニ様でもない。ちゃんと某藤村組の優しい優しい有志の方からお借りした、まあまあいけてる服を着ているはず。ちなみに、アロハシャツでもない。
「意外です。先輩明らかにそういうのに興味なさそうだから」
「確かに興味なさそうだよね俺・・・・・。あってるけどさあ」
なんというか、割とくるものがある。桜だったからいいけど、某優等生さんとかに高笑いされながら言われたりしたら立ち直れる気がしない。
「仕方ないですね。私が先輩をコーディネイトしてあげましょう！」
「その意気込みはありがたいんだけど、俺の服を買いに来たわけじゃないのだ」
フン！っと胸を張る桜が、シュンと小さくなる。
「だったら誰にって・・・・ まさか」
右側から来る空気が一転して明らかに刺々しいものに。怒気にも等しい何か邪悪なものが送られているようで、背筋に鳥肌が走る。
「いやまあ、外れてはいないんだけど。でもそれだけじゃなくて」
「・・・・ 聞かせてもらいましょうか」
「桜にさ。服、買ってあげたいなと」

「……？」
本当に何を言っているのかわからないという様子で首をかしげる。空気もいくらか落ち着いたようだ。これならもしかしたら、九死に一生を得られるかもしれない。
「いつも家に来てくれてるお礼にさ。桜、あんまり服、持ってないだろ？」
「はい。ほとんど持ってないですけど」
「家に今住んでもらってるし、今日は桜をコーディネートしてあげようかと思って」
いつも同じというのも忍びないし、どうせならいろんな服を着た桜を見たい。
見られるのが最後かもしれないし。
「え。で、でも。悪いですよそんなの」
「悪いことがあるか。俺がお礼をしたいだけだし。動機のほとんどは俺の目の保養の項目なんだから、桜は何も心配しなくていい」
瞳を少しくるくるとさせて、口をパクパクと動かして困惑する桜をニヤニヤしながら眺める。視線に気づいた桜がポカポカと殴ってくるが全く痛くない。
「……わかりました。お言葉に甘えることにします。でも、条件があります」
「何？」
「似合うと思うもの。ちゃんと、選んでくださいね」
「……ベストは尽くします」
決意を固め、二人いざ、未知の世界へと飛び込んでいった。

正直にいうと、とても楽しい。色々着てくれる桜もそうだし、何でも似合うから目の保養にもなる。それに、こういった物の意図を読むのは銃や刀身を読むのとは違った良さがある。

機能美もそうだが、着る人をどう見せるか。どう印象付けるか。極限まで試行錯誤したある意味芸術品と呼べるほどの物もあった。当たり前のように目の前に置かれた値札には脅威の数字が書かれていて思わず背筋が凍った。

さすが冬木ショッピングモール。通称「ヴェルデ」。この街はいったい何を目指しているのだろうか。

「せ、先輩。着替え終わりました」

「ん。了解」

シャーとカーテンが開けられ、中の女神が顔を出す。淡い桜色のワンピース。あまりの美しさ故に一瞬時が止まったように感じる。

「ど、どうですか？」

「とても似合ってるよ。見惚れるくらい」

さっきのホットパンツも良かったのだけれど。まあ季節もあるし、それは夏のお楽しみということで。

ちなみにそのせいで、頬に大きな椛が咲いているのはここだけの話。

「でも、ちょっと今の季節だと寒いかもしれません」

「新学期からでもいいんじゃないか？なんならコートも一緒に」

「いやいや！そこまでお世話になるわけには」

「むーー。そうか。じゃあほかの探してこようか」

俺のハートにはクリティカルヒットしていたんだけどな。正直これ以上の見つける自信がない。

「・・・・いえ。これでいいです」

「いいのか？別にまだ選んでもいいんだぞ？」

「先輩が、一番素直に似合ってるって言ってくれたから」

満面の笑みで腰を少し折って微笑む。年頃の女の子のように微笑む姿は見ていて気持ちがいい。

「それじゃあ着替えますから。待っててください」

「了解。焦んなくていいからな」

「はーい。先輩をお待たせしちゃいます」

再度シャーと音が鳴り、カーテンが閉められる。さすがに服のすり

落ちる音に興奮する趣味は無いので、少し離れて桜の帰りを待つ。
少し不安そうに見えたのか、背の高い細めの店員さんが、こちらに近づいてきた。隣に並ぶように立つと、桜の先ほどいた位置を見ながら、こちらに話しかけてくる。
「こういうところにはよく？」
「いえ。初めてです。そのせいで少し緊張しちゃって」
暖かい目で見守るように微笑む女性。藤ねえと同い年くらいだろうか。普通に奴の同級生の可能性があるから対応には気をつけねば。と表情には出さずに決意してみる。
「微笑ましいです。彼女さんですか？」
「いえ。違いますよ。友人の妹で、部活の後輩です」
色気のない事実だけを並べる。しかし、目の前の女性の表情は変わらず穏やかで、驚くようなそぶりを見せない。
「そうですか。でも、とても仲がよさそうに見えたもので」
「仲はいいですよ。心を許していますから」
「好きなんですか？」
「……　そうですね」
特に笑うでもなく、流れるようにそう聞いてきた。話のタネにするには些か反応がドライだと思うが、とても真摯な声に、少し落ち着きを感じさせる。だからつい、話に乗ってしまった。
「とても、大切な人です」
「……　少し、彼女がうらやましいです」
フフッと笑う店員さんと同じときに、ガチャガチャと試着室から音が鳴る。きっとハンガーを落としたのだろう。あわてる桜の顔が目に浮かぶ。
「そうですか？」
「見てればわかります。大切にされているのが。それも、気を使うとかではなく。何というか、愛って物を感じさせるというんでしょうか」
「先輩。お待たせしました」
カーテンをめくり桜が前と同じ格好で出てくる。手にはしっかり

と折りたたまれたワンピースが握られていて、少し赤くなった顔が先ほどの一幕を感じさせる。
「先輩？どうかしましたか？」
「何でもないよ。すみません。お会計お願いしてもよろしいですか？」
「もちろんです。それではこちらに」
引っ張るように、レジへと案内される。桜の手にあるワンピースを受け取り、お会計をお願いした。
「きっと、伝わっていますよ」
そんな優しい言葉と瞳と共に、服が入った紙袋を渡される。
「ありがとうございます」
「さすがは藤村さんの弟さんですね」
「やっぱり知ってたのかあんた！」
ふふふ。と手を口元にやり微笑む店員さんを一度睨めつけつつ、礼をし、桜に振り替える。
「えっとその。なんというか」
「なんかこう照れますね。こういうの」
お互いに目線を合わせられない。他人に何かを送るという行為をしたことがないからか、とても緊張する。
それでも、互いに顔を向き合わせながら、頬を赤く染めながら見つめあう。
「これからもよろしくな。桜」
手にある紙袋を渡す。嬉しそうに花咲く笑みで受け取る桜。本当に嬉しそうに、光る笑顔。
その笑みを焼き付けると同時に、胸に走る傷を何事もないように無視した。

「今日は楽しかったです!!」

「それは良かった」
日が沈み始める時間。二人となりを歩きながら、帰路についている。もう二月に入ったからか、さらに肌寒くなった空気。しかし、二人の間は少し暖かくなっているようにも思えた。
「映画なんて見たの初めてでしたし、服を買ってもらったのも初めてです」
「そっか。初めての相手になれて光栄だよ」
「先輩は私に初めてをいっぱいくれましたからね」
「・・・ 桜。それ外で。特にあの二人の前じゃいうなよ」
まあ、控えめに言えば半殺し。悪ければ遺体すら残らないだろう。悪魔を同時に二体狩猟とか、絶対に無理だリタイヤさせてください。
「言いませんよ。ぜーったい。これは、私だけの思い出なんですから」
紙袋を片手に持つ桜は、スキップするように前に出ては、くるくると回りロングスカートを咲かせる。
突然ピタッと止まると、桜は遠い目をしながら太陽を見つめる。
「――――先輩。覚えてますか？」
思いついたかのように桜はこちらを向きなおして呟く。その瞳を。その笑みを。既視感のある光景を思い出す。
「・・・・・ 何を？」
「ずっと昔の話です。私がまだ、先輩を知らなかった時のころの話」
オレンジの、暖かい日に包まれながら、桜は過去に思いをはせる。
「私が進学したばかりの頃です。まだ新しい学校に慣れてなくて、当てもなく廊下を歩いているとき。私、不思議なものを見たんです」
懐かしむように、こちらを真に見つめる瞳に、思わず吸い寄せられそうになる。
桜は、とても落ち着いた。とても暖かい声で話を続ける。
「・・・・ うん。あれはいったいどんな経緯だったんでしょうね。
もう放課後で、グランドには陸上部の人もいないっていうのに、誰かが一人だけで走ってたんです。何をしてたのか気になってみてみたら、その人、たった一人で走り高跳びをしていたんです」
その笑顔に。抑えつけていた胸を締め付けられる。その話を。そ

の声を。その思い出を。俺は知っている。
桜は、何事もない思い出を、美しい宝物のように語り続ける。
「真っ赤な夕焼けだったんです。校庭も廊下もみんな真っ赤で、とっても綺麗で幻想的でしたけど、でもとっても寂しかった。
そんな中でですね、一人でずっと走ってるんです。走って、跳んで、棒を落として。それを何回も繰り返して。周りには誰もいないのに、その高さはきっと跳べないってわかってたはずなんです」
太陽を背に背負って、かげのように暗くなる彼女の顔はとても安らかで。どれほどそれが大切なのか。伝わってくるからこそ、深く深く心を抉る。
「頑張ればなんとかなる。そんな次元じゃないんです。その人の背よりずっと高くて。私がそう思うくらいですから、その人にだってわからないはずないんです」
「私、その時よくない子だったから、その人が諦めて挫かれるところが見たかったんです。失敗しちゃえ。諦めちゃえって何度も思いました。
でも、そんなことは意にも介さないで、何度も何度も跳びつづけるんです。
それが、とっても怖かった」
「その人は一度も越えられずに、片づけをして帰ってしまいました。悔しいはずなのに、疲れてるはずなのに。なんでもなかったように平然とどっかに行ってしまったんです」
「きっと、羨ましかったのかもしれません。私、気づいちゃったんです。その人、別になんでも良かったんだって。たまたま出来ないことにぶつかって、負けじと意地を張っていただけだったんです。最後は自分にはどうやっても越えられないって納得して」
「結局、そいつは跳べなかったんだな」
「いいえ。跳んでたんです。越えられなかったけれど、その人は何度も跳んでいました。誰が何と言おうと、私にはその人が越えているのを、確かに何度も見ていたんです」
自分にその記憶はない。それくらい日常の出来事だったんだと思

う。でも、見たことはある。その男が最後まで跳べずに、ただ何も思わせずに帰る姿を知っている。
　でも、桜は嬉しそうに。憧れの人を話すように、言葉を紡ぎ続ける。
「心配になるくらい真っ直ぐな人を、その時初めて見ました。きっとすごく頼りがいのある人なんです。けど、そこが不安で、とても寂しかった」
「・・・・・　もう一度その人には、会えたのか？」
「はい。何度も何度も会って。何度もお話をして。私のすべての時間が、その人と共にいるといってもいいほど。今もずっと、隣にいます」
　照れくさそうに、にへっと桜が笑う。その目がとても澄んでいて、思わず顔が赤くなる。
「そういうことです。私を先輩が知るずっと前から、先輩のこと知ってたんですよ」
「・・・・・　初耳だ」
　嘘だ。忘れるわけがない。いくら摩耗しても、あの日の出来事を忘れるわけがない。
　それでも、目の前の桜から聞くのは、初めてだから。
「はい。私たち。おなじものをみていたんです」
　目の前にいる少女は、祈るような姿で、いつか聞いたことのあることを口にする。
「さて、家も近くなってきたことですし、お夕飯のことで・・・・　も・・・」
　倒れこむようにする桜を正面から支える。腕に伝わる体温もいくらか熱く、力が入らないのか体重全体がこちらに乗る。
「え・・・・　あ。た、たちくらみが。ごめんなさい」
「いいよ。無理させちゃったかな。今日は、いろんなことをしすぎた」
「そんな。無理なんて。・・・・　またいつか行きたいくらいです」
　よいしょという声と共に状態を上げようとすると、今度は後ろに倒れそうになる。それを背中から抱きしめるように支えて、少ししゃがんで背に乗るように言う。
「そ、そこまでしていただくほどのことでは」
「家までもうちょっとですし、最後までエスコートするよ。桜」

「…　いいんですか？」
「もちろん。今日ぐらい。背負わしてよ。たまには桜に頼られたい」
「……　ありがとう、ございます」
　首に柔らかい腕が回され、ふわりと桜のにおいが鼻をくすぐる。合図を出して立ち上がると、背中に柔らかい感覚が襲う。じわっと熱が広がって、桜の体温と、重みを深く感じる。
「桜」
「なんですか？」
　少し疲れて眠そうな、それでいて落ち着いた言葉が耳元に響く。
「ちょっと太った？」
「……　なにか、言いましたか？」
　……　気のせいかな。冗談のつもりだったんだけど、背中が凍り付いているのは。

「どうだ。桜。体調は」
「もう大丈夫です。明日の朝には元気いっぱいです」
「とかいって、いつも桜は無理ばっかりするんだから。今日ぐらいは何もしないで寝てなさい」
「ごめんなさい。あの後何もできずに部屋まで運んでもらっちゃって。ご飯まで」
　手元にある小さな鍋を見つめながら、桜は悪そうに顔を下げる。外はもう完全に日が落ち、いつもなら夕食を食べていた時間より、少しばかり時間がたっている。
「少し寝れたか？」
「ちょっとだけ。でも、体調のほうは楽になってますから。大丈夫です」
　言葉とは裏腹に、少し赤くなった頬と、苦しそうな呼吸が桜の体調

を物語る。これからの体調は、悪化の一途を辿るだろう。
顔に出さないよう、桜のおでこに手を当てる。燃えるような熱が、手から伝わってくる。
「・・・・ 先輩の手。気持ちいいです」
「お気に召して何よりだよ。食欲はあるか？」
「あまり。でも、先輩が作ってくれたから、食べれるだけ食べてみます」
布団から上半身だけ起き上がる桜の近くにお盆を下ろして、鍋から雑炊をよそう。
スプーンと一緒に手渡すと、少し物惜しそうな表情を浮かべる。
「・・・ なんだ。食べさせてほしかったのか？」
「ち、ち、違います！からかわないでください！」
手に熱いものを持っているからか、大きい動きのできない桜があわあわとしながら恥ずかしそうな目線を向けた後、照れくさそうに笑う。
「こんなこと。してもらったの初めてだったから」
「慎二の奴は看病とかできる奴じゃあないからな」
「兄さん。不器用ですから」
幸せそうに笑う桜を見るたび、心にひびが入る。そのたびに心に巻き付いた鎖がギシギシと音を立てて心を縛り付けていく。
「大丈夫だよ。これから先。いくらでも看病くらいしてもらえるさ」
「・・・・ 本当ですか？」
「もちろん」
「それなら、今のうちに慣れとかないといけませんね」
「いや、慣れるほど病気になってほしくはないんだけど」
微笑みながら桜は雑炊を少しずつ口に運ぶ。熱かったのか口でそれを転がせながら、何度もお礼を言ってくる。
この笑顔は守るべきだ。たとえこの場に自分がいなくなるとしても。
あっさりと、持ってきた雑炊をすべて平らげて、桜は眠そうに目をこする。さすが大食漢といったら殺されるとそれぐらいはわかるの

で、微笑みだけでこの場は切り抜けるとしよう。
鍋を洗面台に戻すと同時に、タオルを水で湿らせて、桶に少し水を張る。さすがにまだ寝たわけではなく、それでも布団をかぶっている桜をゆっくり起き上がらせる。
「タオル持ってきたけど、体ふけるか？」
「ありがとうございます。えっと、それじゃあ」
「外に出てるから、終わったら呼んでくれ」
外の渡り廊下に出て、桜が体を拭き終わるのを待つ。中から服の擦れ落ちる音がかすかに聞こえてくる。
別のことに意識を集中させようと、ポケットに入れていた小さな箱を取り出して、それを少し開ける。
中を見ると、思わず苦笑いが漏れる。
でも、これくらい。この程度の証なら、少しは情状酌量の余地はあるだろう。
「先輩。終わりました」
中に入ると、ベットに腰を下ろしている桜が、こちらを見つめている。やはり少し眠そうで、瞳がすこし溶けている。
布団の中に桜を寝かして、椅子に腰を掛ける。天井を見つめる桜と目線は重ならないが、代わりに呼吸が互いを重ねる。
「……　ありがとう、ございます」
「気にすんな。これくらい」
「普通のことですもんね。先輩にとっては」
少し悲しそうな声色で、桜はこちらに視線を移す。
「……　先輩には、いつも迷惑をかけてばっかりですね」
「そんなことないぞ。いつもおいしいご飯をつくってもらってるし、毎朝起こしてもらってる」
「そうですね。私、もう先輩より料理できるようになりましたから」
「……　それは挑戦と受け取っていいのか？」
ふふっ。と互いに笑って、互いに目線を交わす。ゆっくりと桜が布団からこちらに手を出して、やさしくそれを包み込む。
「本当に。本当に今日はありがとうございました。私、初めて生まれ

てきてよかったって思えた気がします」
「大袈裟だな」
「いえ。そんなことないんです。私、悪い子ですから」
後ろに続いた言葉は聞こえないふりをして、やさしい笑顔を桜に向ける。
「ごめんなさい。私、なにも先輩に返してない。先輩に押し付けてばかりで。私、何も」
「それは違うよ。桜はたくさんの物を俺にくれた」
「でも、私は」
「いいんだ。もう、一人で抱える必要なんてない。桜が背負う必要なんてないんだ」
強く。強く桜の手を握り締める。少しでも、この体温が消えないように。この熱が、この想いが。彼女に刻まれるように。
「大丈夫だよ。桜。俺が傍にいるから。たとえ何があったって」
この体温が、この記憶が、いつか彼女を支えてほしいと願って、手に願いを集める。
「だからさ。いつか、桜がよくなって、好きなように生きられるようになったら。その時は」
誰かの隣で。桜の思うがままに、一人で抱え込まないで、桜の人生を歩いてほしい。
「風邪の時って心細くなるからな。桜の弱音なんて初めて聞いたかもしれない」
「‥‥ 先輩」
「なんだ?」
「風邪くらいで大袈裟です。明日になって恥ずかしくなっても知りませんよ」
「‥‥ それはお互い様だ」
少し恥ずかしくなったのか、手はそのまま反対に顔を向ける。のぞかせる耳は赤く染まっていて、ますます熱を持つ。
「‥‥‥ ありがとう。先輩。私、あなたに救われました。あなたに出会えて、本当に良かった」

照れくさそうだけどはっきりと、こちらを向いて微笑む桜に、心臓をちぎられるように持っていかれる。
「今日だけじゃない。先輩との思い出は私の宝物です」
あまりにも美しくて。あまりにも切なくて。
その言葉の裏にどれだけの思いがあるのかを知っているから。桜がどれほどその時を大切にしていたか。知っているから。
握りしめた手。
心の底から自分を軽蔑する。無力な自分も。惚れた女を救えない自分も。愛してくれた少女を見送ることしかできなかった自分も。
「先輩、泣いて、るんですか？」
「・・・・ッ」
そんなはずはない。頬に水滴が落ちることはないし、枯れ果てた瞳からそんなものが流れ出るはずがない。
それでも、心配そうにこちらを見る桜の頭をスッと撫でて、やさしく手を離す。
「じゃあ。俺は部屋に戻るよ。ちゃんとゆっくり休んで、明日は元気になって朝、俺を起こしてくれ」
「・・・・もちろんです。私を甘く見ないでください。こんなのへっちゃらですから」
フフっと笑う桜から半ば無理やり目線を離すようにドアを開けた。暖房の効いていない空気が、境界のように線を引く。
「・・・・・帰って、きますよね？」
後ろから。呟くように、小さな問いが投げかけられる。
「・・・・・変なこと言うなよ。俺はここにいる」
「そう、ですよね。わかってます。先輩は、ここにいます。だから、大丈夫です」
「一人で寝るのが怖いのか？」
「子供じゃないんですから。でも、先輩がいるなら、安心です」
安心したように言った後。それ以降は、吐息のみが響いていく。
スッと、足を前に出して戸を閉める。すぐ突き当りにいたセイバーに、出ることを伝え、玄関先へと出る。

もう。戻ることはできない。
自分の為に。叶うはずのない願いの為に。目の前で苦しむ女の子を、黙認した。
惚れた女が地獄へ落ちていく所を黙認した。傷つく彼女を、すでにない幻の為に見捨てた。
だから。救われる資格なんてない。
裁かれるべきなのは、他でもない自分なのだから。
覚悟はすでに。この道は。この旅は。俺が選んだことだから。
胸にともる気持ちを必死に押し殺して、かみ砕くように表情を固めた。
弱みを見せるな。足を止めるな。涙を流すな。顔を背けるな。
自身を偽ってでも。己すら騙してでも。
弱音を吐くな。鋭く。硬く。
鋼のように強くあれ。
誰よりも、強くあれ。
それが、唯一できることだから。
流れる涙も、溢れ出る想いも全て。
噛みしめろ。そうしなければ打開するのは自分だ。
忘れるな。その資格は最初に切り捨てたものだということを。
たとえ、人を喰らう化け物になったとしても。
たとえ、世界を滅ぼす悪魔になったとしても。
俺は君の傍で、その罪科と憎悪を背負おう。
どれだけその身を堕とそうとも。世界を敵に回したとしても、俺が君の全てを護ろう。
だから桜。君は。君だけは俺を、赦さないでくれ。

第7話

月明かりが、一筋だけ部屋を貫く。寝静まる夜。静寂の中、唯一聞こえるのは自分の呼吸の音だけ。自分の中にいる怪物を押し殺して、歯を食いしばりながら夢を見ようと目を閉じる。

いや、夢ならもう見ていたなあと。先ほどまでの幸せな時を、手に残る感触を思い出しながら想う。本当に夢の中の出来事のような、二度とない愛しい時だった。

もう今更この重い体に対して思うことはない。自分の体だ。そして、私の旅の終着点が近づいていることくらいわかる。

最初で最期の思い出を、深く深く心に刻み付ける。温かかった手が、握りしめられた手が、折れそうになる心を少しずつ補強していく。

本当に、楽しかった。人生で一番、幸せだったかもしれない。

ほんの少し、自分の体が他のものになっていく。わずかに、けれど確実に、私という存在が塗り替えられていく。

怖い。途方もなく。自分の傍に誰もいない。自分の隣に誰もいない。今、手を握ってくれる人はここにいないのだ。そしてこのまま、きっと私は私ではなくなるのだろう。

一人は怖い。今すぐ助けてって叫んで、先輩の胸に飛び込んだら、少しはこの熱も和らいでくれるのだろうか。それでも、布団を翻して先輩のもとに向かおうとは思えなかった。

「‥‥せん、ぱい」

頭をなでてくれた時の表情を思い浮かべながら、今はいない先輩の残像に手を伸ばす。初めて、彼のあんな表情を見た。

いつも、いつも笑っていた先輩が。なぜかわからないけど。強く、通った芯で貫いていたはずだった。あんな脆い先輩を、初めて見た。

必死に繕った、壊れかけの心。細々と空いた穴から、冷たい空気が音を立てて通り過ぎているようで。必死に鎖でがんじがらめにして、必死に押し殺そうとした何か。

そして、同じくらい。軋むほどのやさしさが、失ったはずの心を呼び覚ましていくような気がした。

きっと初めて、衛宮士郎という人間を、正面から目にしたのだろう。
「・・・・ 本当に・・・・・・ 隠し事が苦手なんですから」
穏やかな表情とは相反するように、寂しそうで切なそうで。そして、それを一生懸命隠そうとしていることも。誰かの表情を伺うのに慣れすぎた弊害が、こんなところで私を苦しめる。
初めて、その背を支えたいと思った。その崩れそうな背中を、崩れそうな体を。
初めて、一人にしたくないと思った。先輩の背中を見送るのが、こんなに切なくなったのも、不安になったのも初めてだった。
初めて、誰かを背負いたいって想った。優しい先輩の小さな背を抱きしめたいと思った。
目を細めて机の上を見る。月夜のせいか僅かながらに見える小さな箱。半開きにされたその中には、五枚の花弁がやさしく咲いていた。

物干し竿を持った門番が本来立っていた場所を、一人音と気配を消しながら歩く。
目の前に敵がいないことを二重で安心しながら、唇から流れてくる血を拭う。蟲の気配はない。予期せぬ第三者の介入はないとみていいだろう。
静まり返る境内。こもる空気には、全くと言っていいほど生きた様子がない。暖房の温かさや、人の声はなく、ただそこにあるだけの空気は、不気味なほど自然に存在していた。
風も、闇も、塗り潰す様に深く、場を濃密に染め上げる。
月夜のはずなのに、光は一筋もさしてはいない。

空間そのものが眠っているようだ。いや、死んでいるといっても差し支えはないだろう。
寺の人たちは皆、静かに眠っていた。
寝ごとや寝返りどころか、呼吸音すらしないくらい静かに。
薄く脈はある。しかし、例外なく全員が憔悴しきっていた。これなら、何をしようと誰かに聞かれる心配もない。
息を殺す。セイバーは合図まで境内には入らないように命じた。セイバーの気配を感じて動きを変えられると困る。
待ち望んでいた音が鳴る。聴覚を過敏にして拾った音は、サクッという肉を突き刺す音と、一瞬短く鳴った小さな叫び声。
セイバーとの回路に流れる魔力を意識的に変え、合図を出す。境内の外からは、短く強く大地を蹴る音が鳴る。
同時に、息を潜めていた部屋から出て、唯一死の香る部屋へと足を延ばす。
奥の本堂。この寺の中心にしてキャスターの生命線の心臓部。
通路を渡ると遠目にでも、荒れようがわかる。前に見た時の整った内装は、所々が破壊されて、見る影もない。襖はボロボロに破け、畳は下の床を貫通して穴が開いている。
そして、中心にはひざを折り大量の血を流しながら倒れる男と、呆然と立ち尽くし服を赤く染める女がいた。
血は壊れた蛇口のように溢れ、板張りの床を赤く染め上げる。唯々震えながら歪んだ短刀を胸の中心に抱く女は、自分の現状がわからないようで。敵が迫っているのにもかかわらず、その瞳は変わることなく何も映さない。
まさしく絶望。愛した男の命を刈り取った彼女の心境は計り知れない思いが渦巻いているだろう。
何も感じてはいけない。感じる資格もない。同情も、蔑みも。この景色こそ自分がこれから起こそうとしていることの前兆。その一部分にしかすぎないのだから。
何も映していない瞳で振り向く彼女に、ただ機械的に問いかける。
「

「……え？」
慣れているはずの感覚が、脳髄に突き刺さるように伝わる。何度も行ってきたはずの。あらゆる人に、憎い人も、愛しい人にも。
肉を突き刺し、生命を絶つ音が、嫌みなほどに耳に響く。
「ぁ……ぁあ」
自分の声とは思えない何かが自分の口から洩れ、手を温かく何かが包む。望まない熱。温かく心地よい熱が、赤い液体とともに頬をなでる。
なぜ目の前の愛しの人は、安らかな瞳でこちらを見ているのか。
なぜこんなにも距離が近いのに、抱きしめられる距離なのに、自分の手に握られているのは忌まわしい短刀なのか。
二度と失うまいとしたのに。どうしてまた自らの手で、愛しのものを傷つけるのか。
わからない。わかるはずもない。冷静に、冷静にならなくてはいけないとわかっているのに、手の震えが止まらない。記憶が、体を支配する。
熱は少しずつ足元を覆っていく。つい数時間前には隣にいたはずの。これから隣にいたいと思っていた人を自らの手で切り落とした。
叫びも、怒りも、何も浮かばない。
目線を横にやると、場違いのはずの少年が堂々と佇んでいた。手の甲にある痣が、少年が何であるかを何よりも証明する。
口を少し動かして少年は何かを唱える。知らないはずの異国の言葉も、この霊基なら問題なく聞き届けるはず。それなのに、何と言ったのか、音が頭を通って抜ける。

しかし、それで分かった。
ああ。また私は、愛しの人を失うのだ。
同じ。いつもと同じ。私の結末。変えようと、逃れようと、願っても付きまとう鎖。
ありきたりで、安い言葉で言うなら。私の運命というもの。
何かを思う前に、スッと左手が上がり空間に閃光が走る。自分の意識の範囲外で、自分は少年に殺意を抱いた。
誰かが描いたストーリーを少しでも歪めてやりたかったのか。きっと、八つ当たりのようなものだろう。
だが届かない。彼のサーヴァントと思わしき人影は、剣を一振りするだけで、閃光を打ち消す。
思わず自嘲的な笑みが漏れる。ここにきて、現れたのが高い対魔力を持つセイバー。これでは、万に一つの勝ち目すらない。
「貴様。主を自らの手にかけたのか」
黒剣を携えた騎士の軽蔑する目線が突き刺さる。幾度も受けた視線。慣れているはずの視線も、これほどまでに自身の感情を逆なでしたことはなかった。
空っぽの脳内にスイッチが入る。怒りという名の感情が、瞬く間に内部を埋め尽くす。
「はーーーーー私が、マスターを殺した?宗一郎様を私が?
あはははははは!それは愉快ね。ええ、こんなことになるくらいならいっそ、本当にそうしてしまえばよかった!」
口元が勝手に歪む。漏れ出るはずのない笑みが穢れた肉体から溢れ出る。
血の付いた短刀をローブに戻して、もう一度左手を敵に向ける。
魔力を込める力がいつも以上に強まる。意味のない行動、意味のない争い。けれど確かに、手に宿る力は今までで一番強く、切なかった。
「目障りよセイバー。主もろともここで消え去りなさい」
「・・・ 頼むぞ、セイバー」
互いに視線を交わしながら、セイバーはこちらへ進軍を開始する。
近接戦闘では勝ち目はない。距離を取るために魔弾を十数発撃ち

こむ。しかし、目隠し程度にしかならずセイバーは瞬時に懐にまで入る。
下から上にかけて打ち上げるような攻撃を、接触部に防壁を張ることで何とか持ちこたえる。しかし、衝撃を逃がすことはできず、庭の外まで壁を破りながら飛ばされる。
まだ負けていない。庭に防壁を張るように、竜牙兵を召喚。目視で30ほど。数秒程度なら稼げるはず。
空間転移で上空に飛ぶ。下に広がるのはすでに残り二割ほどしか原型をとどめていない、体を支えられなくなった骨。
「神殿内の魔術師を舐めないことね！セイバー！」
ローブを広げ、砲門を展開。セイバーに撃ち続ける。
神殿内故のAクラス魔術の掃射。残魔力を考えずに撃っているからもはや視界には魔術しか映っていない。これならほとんどのサーヴァントにも対応できる。
はずだった。土煙の奥に見えるのは、鎧に数か所入った程度の傷。全くもって太刀打ちができていない。
「アハ……　ハハハハハ」
敵わないとわかっていて、それでも魔術を行使し続ける。
もう、乾いた笑いしか出ない。呆れるしか、できることがない。
ああ、なんて茶番。とっくに、終わっていた。
全て。全てが、無駄だった。私がこの時を過ごした時間のすべてが。
「…　もういい。もう、何もいらないわ。せめて。全て、毀れて。何もかも」
死して残った骨を集めて竜を形作る。空には大きな魔術式が描かれ、空間を埋め尽くす。
それすら、次の瞬間には灰になっていた。黒く伸びた線が数回走った後、バラバラと全てが壊れ去った。そして、私の体も地へと落ちていく。
数か所切り裂かれた。落下時に骨を数本折っている。魔力の補給もない。

ああ、でも。それでも、震えた足が必死に立ち上がろうと足掻く。生きぎたないとわかっていて。散るべきと分かっているはずなのに、体は言うことを聞かない。

だって、諦められないから。一度ぬくもりを知ったのだ。手を差し伸べてもらったのだ。それだけで、立ち上がるには十分すぎる理由だった。たとえそれが、復讐という足掻きでも。

霞む視界。必死に照準を合わせ、鎧のない顔面に向けて魔弾を放ち続ける。かすりもしない。撃てば撃つほど体は乾き、肋骨は悲鳴を上げる。

ついに反動を身体がこらえきれず、視界を夜空が埋める。

きっと、地に体がついた瞬間、粒子になって風に流されるのだろう。得たぬくもりも、新たに得た願いも、きっとなかったことになって砂塵に消える。

わかっている。私の座には同じ記録が刻まれる。なかったことになるわけではない。この記録は、救われた記録として、他のコピーに受け継がれる。

それでも、私の手からあの熱が離れるのは。あの人がくれたこの命が失われるのは、やっぱり嫌だ。

「あ……　あ……」

必死に足に力を込める。全身に痛みが走り、霊格が悲鳴を上げる。それでも、迫る地が引かれることはない。

しかし、体が地につくことはなかった。抱きしめるようにセイバーが背を支える。

「何の……　つもり？セイバー」

「マスターの命だ。仕方あるまい」

「自分の手自ら粛清でもしようというの？なんともまあ悪趣味なマスターね」

「……」

「否定しないのね。あなた」

もはや何も言うことはない。負けたのだ。どれだけ足掻いたところで、もはやこの外敵をすべて退ける力などもうどこにも残っていな

い。
セイバーが肩を差し出すように身体を支えてくる。痛みは多少響くが、ぎりぎり歩けるほどの物だった。
先ほどまで宗一郎がいたところまで歩かされる。案の定未だ血を流し続ける宗一郎がそこにいるだけだ。致死量をすでに超えたであろう血の海が、主の死を鮮明に伝える。
「……　もう、終わりなのね」
涙は出なかった。心の起伏を無視することに慣れた身体が、無駄なものを外に出さないようにしているのか。
全く。これのどこが人間なのか。結局、忌み嫌うはずの魔女という言葉を、きっと今の自分が一番自覚している。
「……　殺しなさい。そのために、貴方たちはここに来たのでしょう」
絞るように唱える音には、何も返事は帰ってこなかった。反論も、同情も、憎しみも、敵対心も、何も、ぶつけられることはなく、ただ風だけが流れていく。
きっと普段なら答えてくれた人は、二度と返事をすることはないのだから。
「殺さないのなら、せめて一人にしてくれないかしら」
「断る。俺は、お前の自己満足に付き合う暇はない」
見下すように言う少年に、殺意を向ける力すら、もう使いたくはない。せめて最後の一滴くらいは、主のために使いたかった。
無視するように少年の脇を通って、倒れる主の手に触れる。未だ手に残るほんの少しの熱が、鮮明になった感覚の上を走る。
グッと、目を覚まさせるように肩をつかまれる。振り回された頭が、少年の手の甲と向かい合う。そこには、刻まれた痣が色濃く示されていた。
「何を……　するのかしら。坊や」
「時間がない。もしも、その男を助けたいのなら、その被害者面した顔をやめろ」
「……　貴方に死者をよみがえらせることができるのかしら。それとも、時を巻き戻すとでも？」

「俺にはできない。するのはお前だ」
下を向く顔を、グイっと持ち上げて、無理やり目線があう。少しだけ、新たな感情が芽生える。
ああなんて。こちらの神経を逆なでする目をしているのか。
「こちらからの要求は一つ。お前の魔術の知識と力が欲しい」
「‥‥ 私のマスターはそこにいる方です。彼が死んでしまえば。いえ、もうすぐ私は消えます。今すぐ彼を救うことができない以上それはできないでしょう?」
「マスターならもう一人いるじゃないか」
「坊やはセイバーと契約済みなのでは?」
それに、契約を切ろうものなら今度はセイバーが彼を襲う。それではなんの意味もない。
「ああ。だけどそんなこと関係ないだろ?」
「‥‥ 多重契約」
確かに、理論上不可能ではない。しかし、聖杯を取るのは一人のマスターと一人のサーヴァント。厳密にいえば6体分のサーヴァントの魂が必要なはず。
それを、セイバーが許すはずがない。最後に消されるのが目に見えているのなら、この少年と契約する意味はない。
それにもう一つ、重要な問題がある。宗一郎を救う手段が提示されていない。
「どうやって宗一郎を蘇生するつもり?それができなければ話は進まない」
「するのはお前だ。キャスター。俺とセイバーには何もできない」
「‥‥ 確かに、魔力さえあれば心臓の再生程度なら可能でしょう。しかし、宗一郎はもう」
未だ温かい体も、もうこれから熱を生むことはない。それは手にかけた私が一番よくわかっている。そして、それを救うということは。
「死者は、甦らせられる」
「‥‥ 不可能です。いくら魔力があったとしても、魔術では」
「聖杯はお前にやる」

根本から覆すような発言を、何事もないかのように少年は口にする。セイバーも特にそれに反応する様子はない。
「セイバー。あなたは」
「・・・・この私には聖杯を取ってかなえたい願いはない。戦いに勝つために使うというのなら、反対はしない。この事は、ここに来る前から同意している」
「しかし、聖杯は経路の短縮しかできないはずです。本来不可能な膨大な時のかかる魔術を、サーヴァントの魂で無理やり可能にすることしかできない。それでは、そっくりな誰かを生み出すだけで」
それでは、宗一郎に似た何かを生み出すだけだ。手を差し伸べてくれた人を引き上げるのではなく、同じ人形を用意するだけ。
「できる。他の聖杯なら不可能でも、冬木の聖杯なら」
「なぜそう言い切れるのですか？」
「本来冬木の聖杯は、その機能に特化したものだからだ」
「・・・・・・第三魔法」
正直、彼の言っていることが真実かどうかはわからない。たとえ真実だとしても、本当に宗一郎を救えるかどうかは、その時になってみないとわからないだろう。
「一つ聞かせて」
「時間が惜しい。できるのなら」
「一つだけよ。・・・・この状況。坊やたちが起こしたの？」
「・・・・・俺たちじゃない。信じてもらえるかわからないが、俺たちが起こしたものではない。それでも、俺は」
「いいわ。それで十分」
結局のところ意味のない質問をしてしまった。真偽はわからない。実際は彼らが仕組んだことかもしれない。
それでも、事実だけをみても。この話に乗らなければ私の物語は終わる。
それに、賭けてみてもいいと思ったのだ。女の感なんて根拠もないものだけれど、最初に聞いた少年の声だけは、真実だったような気がしたから。

「わかりました。坊やたちの策略に乗りましょう。それで、具体的にはどうするつもり？」
「葛木は紛れもなく瀕死だ。もう死んでいるといっても過言じゃない。だが、まだパスは生かせているはず」
「パス？」
「肉体と魂をつなぐ回路のようなものだ。少しでもこのつながりを残せれば、死んでいても蘇生できる」
　魔術回路や記憶とか、そういったものは魂のほうにある。この世界は肉体という媒介を通して魂がそれを動かしているに過ぎない。死はその接続が切れた状態。しかし、痕跡さえ残っていれば、もう一度繋ぎ直せばいい。
「第三魔法というものかしら？」
「そんな大層なものじゃない。魂の質量化は肉体とのパスが切れた場合の最終手段だ」
「で、具体的にどうパスを維持するのかしら」
「仮死状態にして、この肉体をそのまま保存する。何もかもこの時と同じ状態で。言うなれば、葛木の時間だけを停止させる」
　そして、聖杯を取った後、もう一度その接続を繋ぎ直す。第三魔法の下位互換といったところか。これが、宗一郎を救う現時点での方法。
「方法はキャスターに任せる。それにその魔力は俺が注ぐ」
「肉体修復にある程度纏まった魔力が必要です。それだけの魔力源が、今のあなたにあるのかしら」
「あるだろ？ここに」
　少年は皮肉に笑って、手のひらを向けて残り二つの刻印を示す。
「……　いいのね？残り一つも失えば、あなたを傀儡にすることくらい私には」
「いい。その程度のリスクは最初から分かっているつもりだ」
「しかし、その後はどうするのかしら？坊やに二人分のサーヴァントを保持して戦闘を進めるほどの魔力があるとは思えないのだけれど」
「存命できるほどなら供給できる。それに、今までキャスターは、魔力

のないマスターと共にしてきたんだ。方法はキャスターが一番よくわかるだろ？」
「……　坊やは、止めないのね。魂食いを」
「今まで死者が出てない時点で、お前を信用している。それに、それを止める資格ほど俺にないものはない」
「……　いいでしょう。手を出しなさい」
右手を水平に上げる。同じように少年は左手を上げる。二度と行うはずのなかった儀式。
契約を重ねたとしても、私のマスターは永久に一人だけ。だからこれは、ただの同盟にすぎない。
忠誠などない。裏切れるのならいつでも背中を刺す。その程度のことは、今までだって腐るほどしてきた。なら。
「――――告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯のよるべに従い、この意、この理に従うのなら我に従え。ならばこの命運。汝の剣に預けよう」
目の前の悪魔に魂を売る程度のこと、できないわけがない。
もう二度と、愛する人を失いたくはない。
――――私は。
「キャスターの名に懸け誓いを受けましょう。貴方を我が主として、戦うことを誓います」
差し伸べてくれた手を、もう二度と離したりはしない。

「悪いセイバー。痕跡を消し忘れた。少しここで待っていてもらえないか？」
正門を通る直前、前を歩いていたシロウが後ろを振り返る。
先ほどまで戦闘をしていたとは思えないような声色で、悪そうにつ

ぶやく姿を見て、思わず素で覇気が消える。
「仕方ない。私も共に行こう」
「いや、いいよ。セイバーは霊体化できないし。甲冑つけた女の人がそばにいたら、さすがに言い訳できないだろ？」
「また単独行動か？」
　シロウにも聞こえるように大きくため息を吐く。さすがに悪いと思っているのか、大きく肩を窄める。
「いつものように切羽詰まった状況で、仕方のない選択ならばいい。しかし、今回は違うだろう？」
「・・・・ 悪いとは思ってるよ」
「だいたい、貴様はサーヴァントの役割を正しく理解していない。うろうろ一人で出歩くマスターのことをなんて言うのか教えてやろうか？」
「・・・・ ごめん」
「全く。こちらの心労も少しは考えてほしいものだ」
　もう一度ため息をついたところで、キャスターからも同情の目線を送られる。
　まあつべこべ言っていても仕方がない。腐ってもキャスターの陣だ。中にまだ敵が潜伏している可能性は低いだろう。もっとも、彼はそのわずかに会いに行くのだろうが。
「それで、私たちは正面を見張ってればいいんだな」
「・・・・ お願いします」
「あまり遅れると・・・ わかってるな？」
「・・・・ 怒られる？」
「夕飯のおかずを１０倍は盛ってもらう」
　僅かに見えた震えた冷や汗から、多少はこの脅しが効いたようだ。
「あともう一つ言い忘れたことがある」
「な、なんだよ」
「わかりやすい嘘をつくな。馬鹿者」
「・・・・ ばれてた？」
「もう、一人で何もかもしようとするのを止めはしない。どうせ貴様

は何を言ったって変わらないのだろう。けどな、シロウ」
全て自分で成して、全てを自分で背負おうという姿を、否定することなんてできない。その資格は、私にはない。
それでも、私はその姿を黙ってみていることなどできない。
「何があっても、私は貴様のサーヴァントだ。その咎を一人でなど背負わせるものか。それをしかと覚えておけ」
トボトボと捨てられた犬のように本堂に戻っていくシロウを手を払うようにしながら見送る。
人ひとり入るには十分程の大きさの袋を肩に背負いながら、階段下を覗くように見張る。乾いた冷たい風が吹くたびかさりと葉が音を立てる。外敵の音と聞き分けられるよう耳を研ぎ澄ませる内、関係のない音が耳を通る。
「セイバー。あなた。ちゃんと安全に持ちなさい」
何もない空間から音が脳に直接響く。テレパシーのようで、周りには何にも聞こえない幽霊のような声は、いくらか怒りを孕んでいる。
「安心しろ。ちょっとやそっとじゃこれは壊れん」
「そりゃあ私がそうしたから当たり前でしょう。そうでなくても、仮にも人質のような人なんだから、敬意をもって運びなさいと言っているの。引っ越し屋じゃないのだから」
「なんだ。お姫様抱っこでもしろというのか。となると足を折る必要があるな」
「‥‥‥ 本気で言ってるのなら相手になるわよ」
怒りが殺意に変わったため、左手の下に下げる形にした。多少の憤りがあるようだが、一応納得したようで耳に常時鳴り響いていた舌打ちがやむ。
「全く。これだから年増は」
「あなたには言われたくないわ。年齢詐称のくせに」
ブチリと互いの眉間が切れる音が鳴る。意識しないうちに右手には聖剣が握られていた。
それと反するように、顔面数センチの所に陣が形成されている。
「さて、必要なのは貴様の魔術師としての力だったはずだな」

「ええ、その通りよ。先程のことなのにもう忘れてしまったのかしら？ああ、ごめんなさい。見た目だけ若くて気を使い忘れていたわ。忘れ物が激しくなってくるころだものね」
「すまないすまない。サーヴァントというものは全盛期で召喚されると聞いたもので、そんな小じわだらけの年増が全盛期だとは思わなかったので、つい心配になったものでな。その力すらあるのかと」
「何が言いたいの？」
「その動かない手足は邪魔だろう？私がこの場で切除してやろうか。魔術師なのだから、衰えた肉体なんて邪魔なだけだろう？」
「あらあら。脳が筋肉でできてる尊い騎士様はご慈愛に満ちてること。お礼にあなたの脳みそ少しは人間に近づけて差し上げようかしら」
　お互い奇妙な笑みが張り付く。残念なことにこの手を振るわけにはいかず、右手に抱えた聖剣がひとりでに目の前の女を切り裂かないよう押さえつけなければいけない。本当ならば今すぐにでも肉片に変えてしまいたいのだが。
　数秒にらみ合った後、互いに互いを呆れたのか大きく息を吐いて武器をしまう。
「それで、坊やはいつもあんな感じなの？」
「正直今回はまだマシなほうだ。シロウは放っておいたらいつこの身が消えるかわからん」
「……　契約する楔を間違えたかしら」
　先ほどまで死人のような眼をしていたフードの女は、相反するように感情のこもった眼をしている。もっとも、それが呆れと落胆でなければよかったのだろうが。
「本当に聖杯はいらないというの？」
　ぼそりと、二人にしか聞こえない声でキャスターは問う。
　確認するキャスターの声色は、確認するようでどこか悲壮的で。きっと、彼女が言いたいのは事の真偽ではないのだろう。
「……　ああ。私は聖杯を求めない」
「どうして？あなたは。いいえ私たちがこの戦いに参加しているの

は、多少の違いはあれど聖杯のためではなくて？」
「英霊というものが融通の利くものでないということは貴様にもわかっていることだろう？」
　感情のこもっていない声が、二人の間に響く。どちらも事実だ。それをわかっていないわけがない。
「それでも、万能の願望器を他人に受け渡してもいいというほど。それほど貴女は未練はないと、後悔をしていないというの？」
「後悔も、未練も。数えればきりがないほどにある。でも、それは私の記憶であって私の物ではないからな」
「それは、私たちがコピー品（サーヴァント）だからということ？」
「そういうことではない。貴様の中にあるものも、そして私の中にあるものも、本物であることに間違いはない」
　空気が乾いた。そして張り詰めたものに変わる。左手に抱えたものをやさしく地面に置いて、正面からキャスターを見据える。
　きっと、これはお互いにとってとても大切なことだ。キャスターにとって。そして他のサーヴァントにとって。聖杯を願わないということはすなわち、願いはすでにかなっているということなのだから。
「それでも私の物ではないんだ。この根付いた記憶も、その時抱いた感情も」
「それならどうして、あなたは坊やのサーヴァントで居続けるの？」
　キャスターはそういうと、自分のフードを取る。初めて、月下に彼女の顔と髪が晒される。紫色の美しいウェーブを描いた毛先と、妖艶なそのいでたち。しかし、その瞳は今まで見せた中で一番。精錬で、真摯にこちらを見つめていた。
「そうだな。もしもその理由を問われるとしたら」
　彼女の瞳に映る月を見つめながら、深く、深く自分の中に刻まれた。たった一つの自分に触れる。
　そう。それこそがきっと。
「それが、私の願いだからだ」
　私自身の唯一の想いなのだから。

「１０倍は家計的にまずいよなあ・・・」
ため息をつきながら先ほどのセイバーの発言を脳内でリフレインさせる。
「大体。常人の３倍は普通に食っているセイバーに、さらに１０倍なんて食わせたら、月にいくらかかるんだ」
間違いなく家のエンゲル係数が瞬く間に地区トップに躍り出てしまう。それだけは何とか阻止しないといけない。まあ、今でもトップクラスではあるのだが。
キャスターに命にかかわる人の応急処置はすでにしてもらったから、とりあえずここにいる人は一晩はこのままで大丈夫だろう。柳道寺から出た時に救急車でも呼んでやれば、いつもよりにぎやかになる程度の弊害ですむ。
とりあえず、さっさとやることを済ませて我が従者の元へ帰らないと。これ以上上乗せされたら、決着がつく前に兵糧攻めで敗北してしまう。
流石セイバーというべきか、ここから何をしたいのかも、見当がついているのだろう。
無音の中、本堂中心に向かって歩く。人の気配はなく、生活感や生の気配を忌避するように闇が濃くなっていく。
さて、そろそろ運命という名の脚本をぶち壊す時だ。
死が、首元に差し向けられた間隔が脳髄に響く。肉体が、精神が、焼けるように熱を失い、感覚を過剰なほど鋭利に切り立てる。全身を塗りつくす回路に電源を入れ、肉体をもはや人間の領域ではないものに作り替える。目に映る情報として言えば、目の前にある血だまりか。それとも、正面から飛来する暗器か。
詠唱すらも必要ない。稚拙な一撃を、呆れるように手元のナイフで

叩き落とす。カランカランと音を立てて床に落ちる暗器を踏みつけて破壊する。なるべく持ち主を侮辱するよう最大限の配慮をするが、目の前の空間が揺れ動くことはない。
「暗殺者というよりは野獣だな。そこらに離された犬か？なあ、アサシン」
対象に対する敬意も。ましてや鈍らにもほどがある殺意。そこらの獣のほうがまだましな気配を出すだろう。
「愚かだな。自らの欲望のために、自らが賭けたものまで失ったか」
対するのがサーヴァントの一角であるというのも分かったうえで、震えも高揚感も恐怖も何も感じない。
全方位を暗器が囲む。黒色に塗られたナイフは闇に溶け、目視することは難しい。しかしそんなもの、相手にすらならない。
全武装の座標を脳内に打ち込み、一番暗器の多い正面に防御壁を展開。背後に迫る短刀を手に握る二つのナイフではじき返す。側面からくる攻撃に対しては、あらかじめ脳裏に用意していた投影を展開。自動制御で短刀を撃ち落とす。
一瞬。予想だにしていない状況に生み出された隙を、見逃すわけがない。
体を囲むように４本の剣を投影。射出。空間に潜む歪みを、逃すことなく世界に曝け出させる。
「ギィィ・・・・・！」
呻くような音とともに、壁に黒いしみが打ち付けられる。唯一色を持つ仮面が、夜の中無様にも自身の姿をさらす。
滑稽だ。自らを潜めるために着けた仮面が、これ以上にない存在の証明となっているのだから。
しかし、油断はできない。相手は仮にもサーヴァント。あの程度の拘束は平気で解いてくるだろう。
追撃はしない。アサシンを落とした場合、受け皿がどちらに行くのかまだ保証されていない。
パキンという音を立てて剣が粒子へと戻ると同時に、仮面の持ち主も闇へと再度溶けていく。

互いに動きはない。唯々沈黙と、自身の僅かな呼吸音のみが世界を彩る。
「無駄だ臓硯。その行動に意味はない」
同時にアサシンの刃が首に当たる寸前に止まり、空気のみが肌を刺す。
アサシンの動きが完全に止まる。しかし、短刀を引くかといえばそんなことはなく。依然として死が目前に迫っている。
にもかかわらず、声は紡がれ続ける。
「まずはその手を下ろせ。せっかく手に入れた権利、みすみす失いたくはないだろ？」
数センチのところで命を握られているにもかかわらず、意にも返さず後ろを振り向き穢れた仮面と目線を合わせる。
その下に、かすかに見える焼けただれた跡。人としての生を捨てたものの証を見て、くだらないとその営みを否定する。
降ろされないナイフをあざ笑いながら。仮面にも似た笑みを、表面に張り付ける。アサシンの瞳の奥にいるであろう亡霊は、こちらの様子を疑っているのか。アサシンは一向に獰猛な殺意を収めようとはしない。
「言葉、通じないほどトんじまってんのか？」
大きくため息をつき、アサシンの回避可能範囲を予測する。流石はアサシンというべきか、俊敏だけは大層なものだ。まあ、３６０度、５０センチ前の空間から射出すれば、一撃くらいは当たるだろう。
「それならそれで仕方ない。だがまあ、願いのほうは諦めろ」
ぽつりと一言詠唱を挟み、自分とアサシンを取り囲むようにして、複数の剣を投影する。投影されたものはすべて宝具。ランクは高いとは言えないが、アサシンを殺す程度なら十分すぎるもの。
サーヴァントを傷つける方法を保持していることに驚いたのか、アサシンは短剣を下ろし、剣を掻き分けるようにして数歩下がる。
相手の手札を垣間見た瞬間、手のひらを反すように態度を変えるその様子に、思わず笑いが漏れる。
「今回は特に何も言わないが、あまり相手を見誤らないほうがいい。

ご老体。慢心するのはいいが、それなら首を落とされても文句は言わないことだ」
　返答が返ってくることはない。いかに蟲の集合体とはいえ、この場に姿を現すことはさすがに不可能なのだろう。まあ、今回はやさしくお話をしに来たわけではない。
　一方的な警告と、提案。返答など初めから期待していないし、させるつもりもない。
「さて、まずはおめでとうと言っておくよ。あんたが長年追い求めてきたプランとやらに、ほんの少しだけ運命が乗った」
　一見目の前には誰もいない。しかし、確実に臓硯は話に耳を傾けているだろう。奴の命は、いつでもこの手で落とせる位置にあるのだから。
「ご老体のくせに体を張ってごみ箱を漁った甲斐が実ってよかったな。これで、アインツベルンとは別の聖杯が起動した。それも、あんたの一番近いところで」
　核心に触れる。今頃奴はないはずの汗線をフル稼働させて冷や汗をかいているだろう。なぜ、どうして。疑問の尽きないであろうその脳裏。しかし、そんなことはどうでもいい。
　今すべきなのは、どれだけ奴に恐怖を与えられるかに尽きる。
　勝手に、自身の口角が上がっていく。この凍る空間の中で、自分だけがその命を稼働させているようだった。
「勘違いはしないでほしいんだが、それに対して何かをしようとは思ってないんだ。今すぐあんたの命を刈り取ってしまおうとは思ってない」
　手元のナイフをこすり合わせて音を立てる。キーキーと甲高く脳髄に直接響く音が鳴り響き、ほんの少しだけ目の前の空間が歪む。
「まあ、それに対して何らかの対処をしてくるというのなら話は別だが、現状維持ならこちらは何もしない。勘違いしないでほしいんだが、何も今すぐ争いを起こそうとしているわけじゃないんだ」
　それは、恐喝に近いものだった。言い換えれば、桜の心臓にわずかでも指を延ばせば、その命をすぐさま刈り取るということ。

きっと、こちらが桜に手を出さないことは察しているはず。それでも、これで奴が今すぐ桜に何かをするということはないだろう。それほどまでに、奴は生に執着しているのだから。僅かに死が近くにあるというだけで、奴はその手足を凍らせる。

初めて、臓硯の呼吸が聞こえたような感覚がした。似合わない、少し早い呼吸。緊迫する目線。全てが手の上にあるといわんばかりの亡霊の感情を垣間見て、すべての感情よりも呆れが先に浮かんだ。

誇りも芯も、何も残ってはいない。ただ生きる、何物でもない亡霊。だからこそ、誰よりも扱いやすく、御しやすい。

「その上で、一つ提案をしたい」

さて、哀れな魂に少しばかり飴をやるとしよう。

「提案だ、ご老人。邪魔者が片付くまでの間、少しばかり手を組まないか？その体じゃ、手足もろくに動かせないだろ？」

返答は依然として帰ってこない。させるものか。そのような資格すら、貴様に与えるつもりはない。

そこまでその魂を腐らせるほど恐怖した存在を、最悪の形で実現させる。

安心しろ。殺しはしない。地獄すら生ぬるい。自らそこに手を伸ばすほどの絶望を、せいぜい味わってから死なせてやろう。根源に抱えた願いすら忘れて、何も成さず、何も残さず、ただ哀れなまま消えていけ。亡霊。

第8話

特別になりたかった。

誰だって思うはずだ。誰も知らないもの。誰も持たないもの。誰もが欲しがり、誰もが認め。それでも届かない世界に焦がれたことが、あるはずだ。

それが手元にあって。それを誇って生きて、何が悪い。皆誰しもが他者をどこかで見下し、見下ろして生きる。自分にしかない武器。才華という名の木の枝を手にして、恥じることなく掲げる。それが人間だ。他者に優位である何かを感じ、何かを蹴落とし、何かを踏みにじり、犠牲の上で優雅に笑いながら、自己を正当化して蜜をすする。それが人間のはずだ。

そうやって人はそれぞれの世界を形作る。瓶の中に浮かべた海賊船を眺めて、薄い透明な板を挟んで、隣のちっぽけな遊覧船を眺め嘲笑う。

そんなものでも、少しずつ、作り上げてきたはずだった。少しでも力を込めてしまえば欠けてしまいそうな脆いパーツを握って、必死に形にしようとした。

引く手に困ったような表情を浮かべて。名前を呼ぶたびにびくりと驚いて。怖がるように、それでも手を離さずに、くしゃっと笑うその顔が、当たり前のように側にいて。

その脆さを知るのは、ことごとく割れて散ってからだった。中に浮かんでいると思っていた船は張りぼてで、自分が誇りにしていたはずの立派な船は、偽物とすらいえない塵だった。

何もかもが、偽りだった。どうしてわからなかったのか、気づかないほうが不自然なくらい。

自分は特別などではなかった。

自分が手にしていたものは、ことごとくすべて空っぽだった。

偽物ですらなかった。贋作ですらなかった。大事に大事に抱えてきたその懐にあった宝物は、玩具とも言い難い塵のようなもので。

気づいたときには、それを踏み荒らした後だった。大切にしてきた

はずの物すら壊して、果たしてなにが残ったのだろう。
舵は壊れた。コンパスはすでにない。彷徨いながら歩む日々。結局、何がしたかったのかわからないまま。すがった理想郷はあっさりと崩れ落ちた。
欲しかったもの。焦がれたもの姿は、闇に溶けて消えていく。
失ったものは何だったのだろうか。
手にしていたものなんて、最初からあったのだろうか。
奪ったものは、何だったんだろうか。
今はもうわからない。
一つだけはっきりしていることは、もう、それを問う機会は来ないということくらい。
奪っていた居場所も、壊れてしまった想いも。もうきっと戻ってくることはない。それならいっそ、壊しきってしまおうか。
欲したものも見えぬなら、いっそ明かりなどなくていい。
そうすればきっと、もう一度。
君の手を掴んでも、いいのだろうか。

コツコツと、高い音が響く。こもる湿気と腐臭漂う密室の中で、唯一命としての主張を行う無数の影。生きるものすべてを穢す淫蟲。陰鬱で、淫蕩な死の色彩を放つ部屋の中央で、堂々と佇む死体は、こちらを覗くと奇怪な笑みを浮かべた。
「ようこそ、間桐の修練場へ。歓迎するぞ。衛宮の子倅」
灰のような肌に、崩れそうな肉体を携えて、老人はできる限りの笑みを浮かべる。塗りつぶした微笑みに余裕はない。張り詰める空気が、互いの緊張を高める。
自分を落ち着けるように深いため息をついて、老人は口を開く。
「突然の来訪で、あまり大層なもてなしはできぬ。だが、まあ、互いにそんな余裕はあるまい」

一歩一歩踏みしめる度、歪な音が脳に劈く。ぐちゃりと腐敗した肉を踏み散らし、カサカサと音を立てて這いずり回る蟲を数匹取り込みながら、老人はこちらに赴き、両手を広げて歓迎した。

後ろから漂う瘴気のような殺気は、既視感のあるものだ。未だに成長が見受けられない。さすがに、あの後ランサーを食う機会はなかったようだ。

顔色を変えない様子を見て、対して老人の表情はほんの少しだけ驚きと困惑を覗かせる。しかし、すぐに元の不敵な表情に戻ると、カチンと手にした杖で床をたたいた。

瞬間、統率を失っていた蟲はすべて姿を隠した。奥に隠された今にも壊れそうなイスに腰を掛けると、目の前にある空いた席に腰を掛けるよう示唆する。

未だにこびりつく滑りを投影した剣で削り落として席に着く。ギシリと音を立てるが、不思議なことに壊れる様子は微塵も感じなかった。

「もう少し驚くと思っていたがな」

粗茶の代わりに老人は蟲を吸う。怪物のようなしぐさで、こちらの動揺を狙っているのか。

きっとそうではないのだろう。彼。いやこの異形はいつもここに腰を掛けて同じように嘲笑っていたのだろう。子守歌のような慟哭を耳にしながら、酔うように蟲の体液をすすり。

「わしは貴様をここに入れた覚えはない。此処で行われていたことが察せられぬ男でもあるまい。それなのに初見で表情はおろか、眉一つ動かぬとは。いやはや、少しはその顔が歪むことを期待しておったが、どうしたものかの」

「緊張で顔が硬直していただけだ」

「面白いことを言う。聞いていた人相とは異なるものでな。少しばかり驚いた。だがまあ、しかし。此処では追及はせずにおこう。わしも柔くなったものだ」

話をひとりでに切ると老人は、話題を作るようにあからさまに懐に手を伸ばす。

取り出されたのは一枚の写真。それはそれは愉快そうに口元を歪め、そこに焼かれた光景を見せる。無数の蠢く淫蟲に包まれた一人の少女を上から撮ったのだろう。歪み、少し恍惚に頬を染める絵。続けて数枚、ほとんど同じ写真をこちらに差し出す。違うのは、少しづつ少女の年齢が増していくことくらいか。

「わしも祖父だからな。娘の成長の記録くらいつけようて。苦労したぞ。同じように場を整えるのは」

差し出された写真を受け取らないままでいると、老人は残念そうに懐へとそれらを戻す。そして、始めて明確にうれしそうな顔をした。まるで、孫との話題が見つかった老人のように。

「安心したぞ。やっと。やっと、表情が変わった。それでは話を始めようではないか。明確にわしが貴様の愛おしい後輩とやらにした所業を理解したところで。お主の思う休戦とやらを提案してみせよ」

慣れた動作。慣れた表情。きっと、何度も同じように行ってきたのだろう。間桐に連なる親族たちは、大切な人ができるたび、この老人によってこの箱庭に落とされる。

だが、残念なことに、その光景はもはや見飽きた。

「慎二にも、同じ手を使ったのか？臓硯」

「……　なに？」

「表情が変わったと。残念ながら。ならばきっとそれは、飽きからくる、失望のせいだ」

写真をしまった懐に、正確に剣が突き刺さる。老人はその場で形をとどめなくなると、数メートル奥に転移した。しかしその身を削ったことを表すように、形を失った切れ端が空を舞う。

敵意が場を満たす。アサシンから洩れる殺気は、並大抵のものでは股を濡らすだろう。

しかし残念ながら、その程度であればこの地を踏むことはない。

「効率的な人心掌握だな。気づかなかった己の無力。資格の喪失。そして自責を埋め込んでその心を壊し人形にする。狂気の操作はお手の物か？だが申し訳ないが。その程度の壁、噛み砕けなければここにはいない」

「……　正常であれば削れるはずなのだがな。慕うものの犯される姿を見て感じるものはないのか？」
「何度も言わせるなよ。その程度、もはや考えるまでもない。答えなどとうに出している」
「貴様は桜のために来たのではないのか？」
「本題に入ろう間桐臓硯。互いに時は惜しい」
　座らぬ老人を急かすように、後ろにはローブをかぶった女が陣を描く。合わせて十数個の砲門を展開する。
「それとも、ここで散るか？蟲」
　数秒の時を経。３６０度隙間を埋めた殺意に、老人は一度形状を崩壊させると、対面するイスにしぶしぶ腰を下ろした。
「では聞かせてもらおう。休戦の条件とやらを」
「話が早くて助かるよ。それじゃあ、条件を提示していこう」
　背景に載せた武具たちが粒子になって散る。互いに従えた者たちすら姿を消した。
　ここからは、正真正銘マスター同士の会話となる。
「まずは期間だ。よもや最後の二人になるまで仲良しこよし肩を組むつもりでもあるまい」
「桜が此度の聖杯として成るまでだ。ここは、譲る気はない」
　正直に驚いたのだろうか。目を見開くと老人は思惑を図るのか。しばらくすると、何か結論を得た様子で、納得の表情でこちらに微笑む。
「全く持って面白い。これは予想していなかった」
「参考までに聞かせてもらっても？」
「わしはてっきり、桜を解放しろというのが主題となると思っておったよ。いやはや。わしの目も衰えたものだ」
「質問がなければ先に進めるが、いいな？」
　左手を上げると、臓硯との間に文字が刻まれていく。空間に描かれた線はキャスターによるものだ。互いに了承を得たものが条件として空間に色づいていく。
「一つ。桜が聖杯として成るまで、心臓部に寄生した本体の行動を禁

ずる」
流石に堪える条件だったのか。それとも、手品の種が明かされたことによる動揺かは定かではない。が、しかし。目の前の怪物はようやく、こちらに対する認識をただの餓鬼から改めたようだ。
それもそうだろう。疑念が確信へと変わったのだ。彼の心情は察するに余りある。もう、明確な死の匂いがこびりついて離れまい。
「二つ。桜が聖杯になるまでの間、桜の肉体に干渉することを禁ずる」
「同化した蟲の苦痛を取り除くのは、もうわしにはできんよ」
「すでに摘出できるものは取り除いてある。それはお前自身が一番よくわかっていることだろう。後の蟲はこちらで管理する。お前自身の制御下でなければいい」
「それではあまりにこちらに不利ではないか？」
臓硯は深くため息をついて不満げにつぶやく。
「対等だとでも思っていたのか？寄生虫の分際で」
「口を慎めよ若造。桜が死んで困るのはわしだけではあるまい」
愚弄するような微笑みをした後、人の道を離れた目がこちらを向く。警戒か、敵意か。それとも恐怖か。
勘違いはここで絶っておいた方がいい。この男は、未だに自身に権利が与えられていると思っている。
客観的に場を視れば、詰んでいることなど一目瞭然であろうに。
「あんたのアドバンテージは二つ。本体の位置が特定されない限り本質的な死を迎えないこと。そして起動済みの聖杯の舵を握っていることだ。逆に言えばそれだけ。種が割れてしまえば、脅威ですらない」
表情を取り繕う老人の奥に、やっと困惑と焦りが見える。しかし止めない。最初に言っていた。ここに来た理由。警告と、一方的な提案だ。断じて交渉などではない。
「桜の命を担保に俺と交渉ができるとでも思ったのか？逆だよ。あんたは桜を殺せない。桜という最後のカードを捨てられない。あんたはわかってるはずだ。捨てたら最後明日は迎えられない。問答無用で、俺はあんたを殺す」

「さて、それはどうだろうか。小僧。追い詰められたものは、はたして手段を選べるほど利口なのかのう？」
「利口だろう。なんせ死なないために生きている亡霊様だ。生き穢さで言えば右に出る者はいない一級品の愚か者。そんなあんたが、自らの首を絞められるはずがない」
　足元の蟲が足を伝って体を這う。煽るように全身を廻る蟲を一つ捕まえて、細い胴を握りつぶした。断末魔の小さい音だけが石室の中を埋める。
「残念だよ。蟲の王。カードは切る恐れを感じさせるからこそ価値がある。どれだけ有効であっても、『切れるわけがない』と思われた時点で、あんたのそれは価値はない」
「まるで恐喝だな」
「いや、まだお願いしているだけだ。搦手を使わないあんたは脅威ですらない。ここで少し体力を削ってやってもいいが、その補充に動かれてはこちらも後味が悪い」
　年長者を気遣うように丁寧に頭を下げる。耳に響く歯ぎしりの音。苦痛と、屈辱の捻。
　であれば丁寧に、頼みこむとしようか。
「頼む。俺にあんたを脅させないでくれ。そうでなきゃ俺はあんたが思考する余裕すらないほど殺さなければいけなくなる。それは、どちらにとっても不利益しか残らない。ここは、黙ってこちらの要求を飲んでればいい。その蟲に侵された脳漿でも理解できるだろ？」
「……　続けよ」
「恩に着る」
　続けて二つの条文が空間に記載されていく。赤く熱いその線は、目を焼き残像を描く。
「三つ。存命のための捕食を禁ずる」
　反論はない。飲まねばこの場で地獄の瀬戸際まで追いつめられることを理解している。ここで朽ち果てるのは望んではいないだろう。たとえそれが、どれだけこの先苦痛を招くと知っていても。
「これらが守られる限り、こちらからの攻撃はないと約束しよう」

「……　いいのか？わしのサーヴァントのクラスを理解していないわけではあるまい」
「構わないよ。その代わり、こちらも自己防衛程度はさせてもらう。そのリスクをあんたが乗り越えられるのならば、歓迎しよう」
　互いに紡ぐ時間は終わりだ。
　話は済んだ。ここにいる理由もない。長居する場所でもない。表情を隠しきれない老人は、しばらくこちらの意図したように動くだろう。
「ギアスにはしない。此処で話したことは、心得として胸にでも刻んでおいてくれ」
　石室の階段を上がる。何度踏みしめても不快な感触を伝えてくる。もう二度と、ここを訪れることはないと信じたい。
　では最後に、老人を諭すとしよう。
「話は終わりだ。これだけは覚えておけ。俺の願いも、あんたの願いも、誰かに押し付けていいものではない。罪も願いも、あんた自身の手で背負え。亡霊に押し付けるなよ。間桐臓硯」
「……　余計なお世話だ。餓鬼」
　次に出会うのが、他でもない、間桐臓硯であることを祈る。彷徨う亡霊には、痛みが些か足りないだろう。
　いつかその膝が地につき、心が砕け消えるまで。
　いつかその本心を思い出し、その営みを拒絶するまで。

　暗い洋風の、まるで今すぐ妖怪が出てきそうなインテリアの中、存在感を示すテーブルの一角で、ばつが悪そうに、下を向く男がいた。大事そうに抱えた一つの本。彼が固執する、欲した証。今の現状が、

不相応であることをきっと本質的に理解しているのか。知るべきでなかった。知るはずもなかったものを聞いたのだろう。深く刻まれた眉間に、思わず呆れてしまった。
「盗み聞きとは趣味が悪いな。慎二」
「……　誰の許可得て、お前はそんな謀をしてやがる」
か細く、しかし根底から染み出た声。困惑と、疑念を孕んだ声色。
顔を上げて、睨むように顔をしかめる。目の前にいる男からは、いつもの感情は感じられなかった。メッキがはがれ、痛々しい素肌がやっと露出してきたのだろうか。
思えば、彼はこういう男だったはずだ。それが歪んでしまったのは、果たしていつからだっただろう。
「聖杯って、どういうことだよ。桜は、どうなるんだ」
「言葉の通りだよ。桜は、願望器として起動して、弄ばれた挙句。死ぬ」
「なんで、お前がそんなことを知ってんだよ」
勢いよく立ち上がった拍子に、椅子がガタリと音を立てて倒れる。意にも介さずテーブルに本を置いて、男はこちらに歩を進める。
強くつかまれた胸倉。背中に伝わる衝撃。やっと頭に血が昇ったのか、合わせなかった瞳が初めて正面に置かれる。
「答えろよ、衛宮。桜を使って何をする気だ」
「聞いてどうする。お前には、関係ないだろ？」
「関係ないわけないだろ。僕には、聞く資格があるはずだ」
「それは兄としてか？マスターとしてか？いずれにせよ、無意味だよ。それとも、壊すだけ壊して今更償えると思っているのか？」
未だに加わり続ける力。目の前の男の歪んだ顔。
怒りと断定できないほどに、彼の顔は醜く歪んでいた。
「桜が救われないのがそんなに気に食わないか？毎晩嬲り、犯し、蔑み、妬み、穢したお前が。それとも、悲劇のヒロインにヒーローが現れないのを知って。罪悪感にでも駆られたか？」
いつもなら燃えるであろう瞳から、熱が奪われていくのがわかる。少しづつ、体から力が抜けていく。目線も大きく下に向き、ふらふら

と千鳥足になった体が、休める場所を探していた。そうして、テーブルに座った後。男は一言も発さず、置いていた本を大事そうに抱えた。

嗤い草にもならない。自覚していない執着は、ここまで哀れなものだとは。

その様子が、少しだけ、癇に障った。

「いいよ。教えてやる。俺はな。慎二。お前が丹精込めて壊した女使って、願いを叶える。慕ってくれる後輩利用して、あるはずもない幻想追って、途方もない罪を背負う」

驚くか。怯えるか。変貌に驚愕し、その四肢を震わせるか。

震える脚で、立ち上がりもせず。何年の年月、横たわり続けたその体で、何ができる。

「嗤えよ。お前が何年もかけて壊した女は、事も有ろうに惨めな化け物になった。世界を滅ぼす悪魔になった」

左手で顎を持ちあげる。慎二は、一瞬嘔吐く声を上げた。

「お前が望んだことだ。壊して、穢して、踏みにじって。巡り巡った結末だ。嗤えよ。高らかに嗤って、泣いて悦べよ。そうでなきゃ、何のためにここまで来たのかわからないだろ？」

無理に合わせた生気の無い目。止まらない震え。

「なあ。どんな気分なんだ。妹が、穢れていくのを見るのは」

一文字一文字を男の脳裏に刻む。その言葉から逃げられぬよう。犯した罪が、背筋を伝うよう。

「ああ、そういえば、決まったか？令呪（その本）、何のために使うのか」

「そんなもの、元から、わかってる」

ようやく出したか細い声からは、何か取り繕うようで。

「奪われたものをすべて取り返して、僕の思うがまま、人生をやり直す。何もかも」

「それで、元に戻せるとでも？残した傷も、刻んだ跡も。なかったことにすれば、もう一度日の下を歩けるとでも、本当に思ってるのか？」

逃げ続け、逸らし続けた結論。しかし、目の前に転がる現実は、これ以上変わることはない。一度入った黒を、もう落とすことなどでき

るわけがない。
「無理だよ。色付いた白は元には戻らない。一度堕ちた身には、日の下は明るすぎる。何しろ、お前が望む世界は、その深淵にある場所だからな」
　掴み続けた手を離す。止まらない震えを抑えるように、慎二は強くその身を抱く。
「それにな。たとえお前の願いを叶えたとして、特別な存在になって、その先に何が残る。無力な自分を殺して、自分に与えられるはずだったものを手にして。その先に得たかったものは、本当にあるのか？」
　照らすことを辞め。目を開くことを辞め。向き合うことを辞めた。
　そうしていつか帰ってくると星に願いながら、そばにあるものを壊し続けたんだろう？
　諦観したと思い込んで、結論付けて、目の前の光景から目をそらしたんだろう？
　その姿が、ほんの僅かに、重なった。
「お前が本当に欲しかったものは、そこにあるのか？」
　身を翻す。これ以上は、己のみでなければ気づけまい。
　だから、ここからはただの自己満足の決意表明だ。
「俺は、もう迷わない。何を捨てて、何を叶えるか。たとえ、その想いが間違いで、偽物だとしても、背負うと決めた」
　たとえこの先が、光などなくても。もう二度と、手にできない未来があるとしても。走り続けると決めた。
「退路はない。止まれるのは、心臓が止める時まで。それが、魔術師として生きるということだ」
　大義名分を掲げて、降りやまない刃受けながら、己のために道を進む。
「自分の根底にある願いのために。己のために引き金を引け。それが、お前の目指すものだ」
　愚者のまま終われると思うな。お前の償いは、そんな容易いものでは終わらない。
「慎二。逃げようと、進もうと、お前の道だ。お前自身の手で、舵を取

れ。他の誰かに譲るな。夢の中を彷徨うのは、もう終わりにしろ」
負け犬のまま、その身を横たわらせるのは終わりだ。
震える脚で立ち上がれ。お前自身の理由のために。

悪趣味な石室や、家の意味を成していない洋館を出て、思わず深呼吸をした。
腐臭のする魔術。おぞましい怨念。醜悪な姿とその魂に、何度吐き気を催したか。きっと私がサーヴァントではなく、一人の魔術師としてここに立っていれば、今ごろ塵一つ残ってはいないだろう。
しかし、魔術とは多くの場合同じような側面を持つものだ。洗練されたものはあれ、何かしらの犠牲と代償が必要なのも事実。この道の一端を極めた者として、蔑みはあれど否定はできない。
そも、誰より穢れたこの体で、その営みを根本から否定するなど、到底できるわけもない。
「キャスター。いるか？」
先ほどまで能面のような表情をしていた少年は、さも当たり前のように私の仮の名を呼んだ。契約してから一日すら経っていないのに、何の違和感もなく。息を深く長く吐いて、顔から力を抜くように表情を取り戻していく。
どことなく憂うその表情に、わずかに心が揺れる。
「ここに。何か用かしら、坊や」
「悪かったな。無駄なことに魔力を割かせた」
「構わないわ。坊やの仕事は使うことだもの。道具にいちいち気を使っているようなら、その性根から叩き直すわよ」
一日。たった一日だけで、わかることがあった。
彼は、自分自身を魔術師と定義していた。「根源」なんていう、私からすれば呆れるようなものに手を伸ばすということではなく。もっ

と広義で、本質的に。己が目的、欲のための従順な僕と、自らならんとしている。
だが、素に近ければ近いだけ、その言動は魔術師からかけ離れていく。普段の一挙手一投足が、自然な作法振る舞いが、彼を引き戻している。
その歪んだあり方が。心の底から吐き気を催す。
「軽蔑するか？」
「しないわ。だって、私もきっと、同じことをするもの」
庇うわけじゃない。単純明快。私自身に同じ問いを投げれば、同じように返しただろうから。
愛する者のために、本人すら地獄の淵に追いやる。正しいわけがない。間違った行いを、それでも、私はきっと選ぶ。
それが、魔術師というもの。いやきっと。それが、叶えるということだ。
少年は、ばつが悪そうに頭を掻くと、小さくこちらに微笑んだ。
気に入らない。本当に、この男の表情は私の心を荒立たせる。
無理やり自分に鎖を巻いて微笑むなど、魔術師の生き方ではない。魔術師であろうとすればするだけ、少年は自分からその資格と形相を殺していく。出来上がるのは、かけ離れたものだというのに。
自身を偽り、己を騙し。そうしてきっと、この少年は死んでいくのだ。自覚していながら、己の意志で、その感情にふたをするのだ。
もう話は終わり。そもそも、馴れ合うために彼のサーヴァントとなったわけではない。ここで私が彼の前から姿を消すことを、咎めるものは誰もいないだろう。
また、たった一人になった少年は、屋敷を一瞥した後、踵を返した。
行く先を言うこともなく。目的を語るわけでもなく。少年は歩を進める。
「キャスター。聞いてもいいか」
ぽつりと、きっと誰にも聞こえないような声。どことなく消えそうな声。
まるで、この少年自身のような声が、私の耳元にだけ、鮮明に響い

た。
「どうして、お前は戦うんだ？」
自分自身が、訪ねたことのある問い。
ああ、深く考えるのは、ここにきて初めてかもしれない。
「……　戻りたかった。居場所があったのよ」
間違いではない。そのために、ここに降り立ったのは、まぎれもない事実なのだ。
「今も、そうなのか？」
「……　変わらないわ。ええ。変わるわけがないですもの。何があったって、私の根底に根付いたものは、そう簡単に失われないわ」
雨に打たれて。立ち上がれない時があった。
いつものごとく裏切られ、いつものごとく捨てられた。ルーティーンのように代わり映えのない運命。
不器用なやさしさなんて、私の辞書には無かった。英霊メディアの辞書に、こんな感情があるわけなどない。
でも、知ったのだ。もう、得てしまえば、捨てることなどできるわけもない。
「決めたのよ。もう、失わないと。もう、奪わせないと」
ただ。たった一つの願い。私は、帰りたいのだ。そんな資格はないかもしれない。すでに背負い。これから生み出す業の数も、計り知れるものではないのかもしれない。
それでも、与えてくれた家を。居場所を。彼の待つ家に、私は帰りたい。
おかえりといいたい。ただいまといいたい。そんな、ありふれた日常を、万能の願望器に願うのだ。
それだけは、何があったって、これから変わることはない。
「これが正しいなんて思わない。それでも、間違いになんてさせないわ」
「……　そうか」
変わらない少年の表情に、ほんの少しだけ憤りが生まれる。
顔が赤くなるような年ではないけれど、少しは真剣に答えてやった

のだ。それ相応の対応があって然るべきだろう。
「そこまで言わせるほどの対価を、すでに得てるのか？」
「当たり前でしょう。そうでなきゃ、英霊である私がここまで言うわけがないじゃない」
ここまで話したのなら、もう最後まで話してしまえ。こんな年で、乙女じみていると笑うのなら笑えばいい。表情が少しでも変われば、私の心もきっと少しは晴れるだろう。
そう。くだらない。他者に言えば笑われてもおかしくない。単純で、ありふれていて。何よりも希少な、宝物。
「手を差し伸べてくれた。戦う意味なんて、それだけで十分でしょう？」
目を見開いて、そしてすぐに、儚い笑みを浮かべた。
散りゆく花のような、本物の笑み。心の底からの同意に、思わず息を飲んだ。
何かを再確認するように、少年は手に力を込めて、見えるはずもない私に、その瞳を向けた。
「十分だよ。それだけで、贅沢すぎるほどの」
ほんの僅かに、光が射した。
たったそれだけの理由で、立ち上がれるのが、人間というものなのだ。
その尊さを、きっと衛宮士郎は一番理解しているのだろう。何よりも、大切にして。何よりもそれに執着したのだから。
「行こう。キャスター。たとえこの道が、正しい道でないとしても。この想いが、正しいものでなくとも。目に焼き付いた光景は。たった一度の奇跡は、きっと何物にもかえられないものだから」

望まない客の来訪を、床に刻まれた痕跡が告げる。この客は、訪れ

た家で靴を脱がないのだろうか。そういった疑問も、足跡の向く方向でかき消される。
この先は、人の立ち入ってならぬ魔境。腐臭と汚泥にあふれかえった墓場が広がっているだけだ。
誰かなど問うまでもなく一人しかいないだろう。日ごろからずれを感じることはあった。今でも、カバンに入ったナイフを見るたびに、あの日の震えがよみがえる。それでも、あれは自分の知っている男ではない。
従者に護衛を命じて、先へと歩を進める。ここで、奴から逃げるのは得策ではないだろうし、何しろ自分が望んでいない。
それでも、どうしても、最後の一線を越えなければいけない足は、固まったように動くのをやめた。どれだけ言葉を並べたところで、この扉の奥は別世界だということを知っている。そんなことは、最初から知っていた。
怨恨と恩讐が、石ころのように転がっている世界。信念。願いのためなら何の躊躇もなしに他者を害する世界。
そんな世界を、日の届かない世界を、自分は夢見ていたのだろうか。
隠し扉の奥から、声が響いてくる。ずいぶんと深い地下のはずだ。音も、微々たるものでしかない。それでも、この耳はそれを大音量にして脳裏に刻む。
その声色に、足が震えた。奥に潜む闇を。喰らう闇が、体を蝕んでいく。
ふと、笑いが漏れた。何故かはわからない。それでも、あっさりと、その笑みによって自分の何かが抜けて行った。
それとも、欠けただけなのだろうか。
すでに震えの止まった足で、崩れそうな体を椅子に据えた。大きくため息をついて、手にした本を強く握りしめた。
驚くそぶりも見せず、どこかあきれたような顔で、男は自分の名前を呼んだ。
今、湧いている感情が、何なのか。それでも、問わねばならないことがある。

そうして初めて、男は驚いた表情を浮かべた。つい、体を寄せて胸倉をつかんだ。何のために、何故、これほどの声と力を出しているのかわからない。勝手に動き出しただけなのかもしれない。ただ、言葉に対する反射として、行動をとっているだけなのかもしれない。

それでも、強く、壁へと体を叩き付けた。

男は嗤った。

愉快でも、爽快でもない。

わからなかった。孕んだ意味を。

その笑みは、こちらに向けられてはいなかった。

力が抜けていく。思考も、熱も失って。残ったものは告げられた言葉だけ。

漠然と、言葉だけが脳裏に流れる。文字だけを書きなぐったキャンパスが、スライドショーのように流れていく。

ふと、何かがあふれてきた。口内を酸性の臭いが立ち込める。あわてて口を押えて、溢れることを許される場所へ走る。

いまだに声が止まない。いまだに声が病まない。

眼前の鏡に映った自分の像の、たった一部分だけが、奇怪に歪んでいく。

〝なあ。どんな気分なんだ。妹が、穢れていくのを見るのは〟

「うるさい」

〝お前が望んだことだ〟

「うるさい」

〝嗤えよ〟

鳴りやまなかった声は、別の音にかき消された。脳を劈く叫び声。何かを叩き付け続ける低い音。嬉しいことに、音源は自分のすぐそばで、蝕む声は消えたように思える。

それでも、何度殴りつけようと、目の前の歪みは消えない。満面の嗤いで、微笑む自分。

血が抜けたからか、少しだけ奪われた熱が戻ってきた。

騒音が止むと、この家は恐ろしいくらい音を失う。生活音を奏でるのは、今はもう自らの肉体のみ。ここは生きていない。いや、いっそ

のこと心地よいのだが。
決まった時間。決まった部屋から、決まった場所へ移る音。あれほどに重い音というのは、ほかに探すほうが難しい。
毎日処刑台から、懺悔と甘い叫び声が鳴る家の、どこに居場所を探せというのか。
ああそうか。どうして、先ほど、深い部屋の奥からの声が、あれほど聞こえたのか。
毎日繰り返していたじゃないか。人間というのは大層精巧にできているようで、望まない音ほど鋭敏に拾う。自分を刺し貫く声というのは、中々に聞こえやすいものだ。
ついた個室。机の上には、書店には売っていないような本が所狭しと並び、実験用の道具で埋め尽くされていた。
自分の部屋。というには些か器が足りていない。だってここに、自分のものなど一つもないのだから。
机に置かれた何度ともなく読み直し、擦り切れるほどに時を過ごした魔道書さえ、自分にとってはＳＦ小説と何ら変わりない。
無音で、隣にたった従者が、血の滴る手を触る。治療される筋合いはない。治療魔術が使えるわけでもないだろう。
「傷の治療を。応急処置程度なら私にもできます。機材はありますか？」
「自分でつけた傷だ。自分で治す。お前に触れられる筋合いはない」
皮肉めいた言葉をかけられたにもかかわらず、フフッとライダーは微笑んだ。
「そうですね。穢れた魔獣の施しなど、誰も受けたくはありませんでしょう」
当たり前のことを言われたと思っているのか。それとも、想定内のセリフ過ぎてあきれただけなのか。
違うだろう。きっと、この世で一番求めていない感情が、ライダーをそうさせた。
「お前に同情されるなど、まっぴらごめんだ」
言って後悔するようなセリフも、流れるように口から溢れた。

何て呆れる様だろう。こんなことをしても、何の意味もないだろうに。
「お前は、僕の従者じゃない。道具だ。借り物の、資格だけ形作るための。急造で張りぼてで、語るには力不足すぎる」
そうだ。繋いだ絆などない。あるのは唯の本と、そこに刻まれた紋章だけ。
「だから、僕にそんな感情を割くな。お前が向ける先は一つだ。その一点だけを見ていればいい」
得たのは名乗りを上げる資格だけ。それ以上でも、それ以下でもない。
わかってるじゃないか。誰より自分が、己自身のことを。今更、思い出すこともないだろうに。
悪役でも、ヒーローでもない。ただの噛ませ犬ですらない。たった一人の、哀れで無残な置物だ。最初から、手にしたものなど、何もなかったではないか。
「僕は、お前のマスターにはならない。お前が従者として立つべき場所を見失うなよ」
同情など必要ない。哀れみなど必要ない。
だって、理由がないのだから。
理由など、知りたくもない。想いたくもない。照らしたくもない。だから。
「頼むからさ。そんな顔で目の前に立たないでくれ。ライダー」
それでも、目の前の蛇は姿を消さない。たった一枚の布の奥にある視線が、甲高く心をえぐる。
違う。俺は、そんなことを望んでいたのではない。
そんな目を向けてほしかったわけじゃない。そんな思いで、隣にいてほしかったわけじゃない。
少しだけ、やっとわかった。自分は、救われたかったのだ。
誰よりも、救われたかったのに。誰よりも、救われることを拒絶していた。
向き合うことが怖かった。背負うことが怖かった。

無力な自分から、目をそらしていたかったのだと。
特別になりたかったわけでも、何かを得ようとしたわけでもない。
失ったことに気づかないように、えぐれた傷の痛みを消すために、無為と無価値から目をそらし続けていただけだった。
そのために、奥底のものまで目を背け続けていた。
だって、見えてしまえば、気づかなければいけないから。
いつだって。何をしていようと。いやむしろ、満たされれば満たされるだけ瞼の下に映るのだ。
知ってしまった日のことを。そのとき向けられた表情を。
今はもうない。最初に愛したその笑みを。

漂う刺激臭。目に刺さる赤。痛みを伴う視界。此処は薬品を扱う店だっただろうか。正直、どの建物よりも、悪の居城という言葉が似合うだろう。人類悪といわれても違和感はない。
中から肩を担がれて出てくる男の二人組が見えた。唇を膨らませ、口からあふれるほどの白い息を吐く。朦朧とする意識の中で、必死にタクシーに乗って去っていった。
可哀そうに。遊び半分に手を出せば、死は免れまい。
誰か此処いい加減家宅捜索したほうがいい。絶対、違法な薬物か、魔術を使用した調合が行われている。正規の手段、合法の調味料で人を殺す中華料理屋があってたたまるか
意を決して暖簾をくぐる。すでに客は一人だけ。昼間だというのにこれでは、いい加減ここもつぶれるのではないだろうか。いやむしろ、潰すことこそ世のため人のためであろう。
微笑みながら蓮華に赤い泥状の物質を口にかきこむ男の前に座る。
さて、最初からラスボス戦と行こうじゃないか。

「おや。こんなところで会うとは奇遇だな。衛宮士郎。この高揚を共有できるものが、君だとは。驚きだ」
「黙れ。変態人外味覚神父」
『紅洲宴歳館・泰山』
アル語族による、辛党というより痛党のための人類悪育成機関にて。似た者同士の最初の会合が始まろうとしている。

第9話

生きていることは罪を犯すことだと、誰かが言った。
死することこそ罪だと、誰かが言った。
救いなどなかった。そう、最初から指定され、規定された人生だった。
知っている。
目の前で苦しんでいる人をただ助けたくて、その身を削り続けた存在を。
知っている。
救わなければならない。その願いが尊いものだと想い続けて。胸を張って生きるために。そんな免罪符を、胸に抱き続けた少年を。
知っている。
その手で、最愛の人の命を奪った少年を。
ブリキになった四肢を。ガラスになった心臓を。がらんどうになった心を。
動かす理由が必要だった。
成果には対価が必要なように。
生きるためには、動力が必要だった。
だから願った。
だから使った。
だから差し出した。
贖罪のような日々。
奪った命も、失った心も、刻んできた道も。
何一つ、もう取返しなどつかなくて。
地獄から助けを求める魂を奪って、掠め取った命なのだから。
せめて、その周りは、幸福で、平和でなければならない。
そう、願い。そう、念じ。そう、思い続けた。
そうして、世界から自分を取り除いて。無数の対価を得た。
目を逸らし。耳を塞ぎ。無知であり続け。

慟哭と灼熱の中、必死に奪った命を抱えて。
罪という免罪符で、盲目に、ただ理想に準じた少年。
誰を救っていたのだろうか。その理想に、果たして救われていたのは誰なのだろうか。
永久に続く闇と、一筋の光指す闇。果たしてどちらが残酷なのだろう。
救ってくれるであろう人に、願い続けたその日々は。気づいて。助けてと。叫び続ける日常は。どれほど残酷で、心をどれだけ削り続けたのだろうか。
側にいてくれた人。
支えてくれた人。
想ってくれた人。
その一切合切を無視して、男は贖罪のために生きた。
たった一度の歩み寄りもなく。
たった一度も、道を違えることなく。
目の前になければならない光のために、目を潰し続けた男を、知っている。
結局、男は何も変わりはしなかった。
何一つ、前に進んでなどいなかった。
最後まで一瞬たりとも間違えることなく。
男は、与えられた責務を全うした。
どれだけ思いを馳せたとしても。
どれだけ無数の罪を贖おうと。
時は戻らない。起こしてしまった結末も。
犯した罪の数々は、背中に刻まれたままだ。
だったらせめて、この身を穢しきってでも。
救うためには、力が必要だった。
たとえそれが、どれほど穢れたものだとしても。
たとえそれが、どれほど邪悪なものだとしても。
たとえそれが、己が望んでいないものだとしても。
救うためには、対価が必要だった。

全てを平等になど空想の御伽噺で。
誰かを救うことが、罪になるのだとするならば。
無力であることは、果たして何になるのだろうか。
求めた力も、得た資格も、望んだものとは程遠く。
夢見た景色は、永遠に遠い空の下。
悪役にも、英雄にもなれはしない。
たとえそれが、偽物だとしても。
たとえそれが、幻だとしても。
その想いを、きっと世界は、間違いと呼ぶのだろう。

叫び声が、聞こえる。
反り返る女の鼓動が、痛みが、視界を染める。
歯を食いしばり、歪んだ金属音のような音を立てながら。全身から膿を吐き出す身体が、叫びをあげる。
黒色の泥が、足元を濡らす。
白い肌から流れ出る黒。ぴちぴちと音を立てて、滑らかな肌を犯す何かが、断末魔をあげて絶えていく。
目を逸らすな。
際限を知らぬ穢れは、川のように流れを作る。
足元はもうすでに泉の様だ。
源泉から溢れ出る泥は、絶えず世界を穢していく。
綺麗だったはずの思い出は、震える脚によって支えられていた。
耳を塞ぐな。
苦痛に歪むその顔を。

瞳から流れる雫を。
耳に入る叫び声。何度も呼ばれる己の名前。
それが、どことなく既視感のある光景だった。
どれだけ力強く手を握り締めようと、己の無力さが変わるわけではなかった。
遠い。途方もなく遠い。輝く世界にはもう手は届かないことはわかっている。それでも、どれだけ捨てようと、どれだけ力を得ようと。
この距離は、一向に縮まることはない。
何一つお前には、手を差し伸べる資格などありはしない。
自分に、一遍たりとも救う力など、ありはしない。
嗤ってしまう。
偽善にもほどがある。
目の前で行われる惨劇。
見慣れた光景だ。今更何を想うことがある。
出来ることなんてありはしない。
この手に許されている行為は、所詮。
救うことなんかではなく、奪うことなのだから。
たらりと、一滴だけ、赤い色が落ちた。
源泉から一滴だけ。
力のこもった手は、鉤爪のように床を削り、割れた爪から滴る血液が、黒い泉に溶けていく。
叫びが聞こえる。
慟哭が、刺さる。
糸が切れたように、女はだらりと床に沈んだ。
今までそこにあったはずの泉は、まるで何もなかったかのように、消え去っていた。
先までの服を着させて、女は元の布団に戻された。
手も足も、体も、全く傷の無い状態で。
まるで何事もなかったかのように。
居間に通る冷たい風は、いつもと何ら変わりないものだった。遠くに少しだけちらつく明かりも、段々と光を消して、夜は深まっていく。

少し目を向けてみれば、そこには日常が溢れている。
先ほどの光景なんて、何処にもあるはずもなかった。
しかし、それは悪夢などではなく。
目をそらしてはならない。ただの現実だ。
作業が終わり、居間に集まる3人の間はとても奇妙なバランスで成り立っていた。
向かう合うようにローブの女は正面に、上座の席には甲冑を外したドレス姿の女が座った。
キャスターはローブを外すと、苦虫を噛み潰したような表情でこちらを覗いた。見下すような視線で、一瞬だけ庭に目を向けると、再度こちらに向き直る。
「悪趣味なことをするのね。今代の魔術師は」
「聖杯のことか？それとも」
「どちらもよ。別に否定するつもりはないけれど。三流以下ではあるわね」
庭の方から何かを潰した音がした。小さな断末魔が、命の絶つ音を響かせる。
平行移動してきたそれは、今の机の中央に鎮座し、粒子となって消えていった。
それは、見覚えのあるものだった。つい先ほど、少女から溢れ出たもので、そして寺を監視していたもの。
「どこかで見たことがある蟲だとは思ったけど。そういうこと」
「察しの通りだ」
「まんまと踊らされてたってわけね。この寄生虫にも、あの暗殺者にも」
キャスターの声色に、わずかに怒の感情が混ざる。
握りしめる手には、わずかに血が滲み出ていた。
「それで、桜の容体はどうなった？」
上座に座るセイバーが、表情を変えずに問う。
正座しているその右足のすぐ横には、顕在化する聖剣がある。
同盟を決めてから未だ数時間しかたっていない。互いにとっての

線引きとして、彼女は剣を側に置いていた。
「言われた通りにしたわよ。駆除できる範囲の刻印蟲は死滅したわ」
「ということは、まだ残っているのか？」
「残っているというのは語弊があるわね。今彼女の中にある蟲は、もう彼女自身と言って遜色のないものだけよ」
　驚いているのはセイバーのみで、少年の表情に変化はない。
　まるで、既知の事実を聞くようなそぶりに、セイバーは何かを察したように俯いた。
　キャスターはそのまま与えられた状況と成した成果のみを口に出す。
「十年近くの時間をかけて侵食した蟲は、彼女の成長と共にその体に介入していったのでしょう。彼女の体は、蟲によって成り立ち、蟲によって傷つけられている。一種の共依存ね。どちらかが欠けてしまえば、取り返しはつかないでしょう」
「方法はないのか？」
「あるわよ。臓器移植と同じ。彼女の中の蟲の管轄内の物をすべて殺して、代替えする手段があればの話だけれど」
　そんな手段が正規にあるわけがなかった。であれば等にキャスターのマスターは蘇生され、少女の命も尊厳も安易に取り戻すことが出来ていただろう。
「まあ、それができたら苦労しないわ。宗一郎様でさえこの状態なんですもの。全身の神経と魔術回路を移植できるなら、それはもう死者蘇生と変わらないでしょうね」
　ふと、何かに気づいたかのように、キャスターはセイバーから視線を男へと移した。
「だから、聖杯の器にさせるつもりなのね」
「……　シロウ。それは」
「文面の通りだ。セイバー。桜は、小聖杯として、脱落したサーヴァントの受け皿になる」
「それは、桜に死ねということか」
　確認するように、強くセイバーは少年を問う。しかし責め立てるの

ではなく、むしろ逆の様子で。
「そんなことをしたら、桜は」
「どちらにせよ。救いはない。だったらせめて、可能性のある方を選ぶだけだ」
「無理だ。耐えられるわけがない。重すぎる重圧と痛みを与えて死なせるだけだ。そんなことになる前に、聖杯を桜の体から」
「取り除かないわよ。少なくとも私は」
場を冷やすように。キャスターは冷酷に言い放った。
セイバーまるで獲物を狩るがごとく、その視線をキャスターに向けた。
意にも介さず、キャスターは続ける。
「勘違いしないで。私が貴方たちと同盟を結んだのは、聖杯を譲るといったからよ。それ以上でもそれ以下でもないわ」
「それなら」
「どうして、わざわざ2つしかない選択肢の一つを、私自身の手で削り取らなければならないのかしら。私は、悲惨な目にあっている女を助けるためにここにいるわけではないわ。こんなもの、日常茶飯事の世界で生きてきたもの。今更ほんの少しも心は動かないわ」
一度視点を裏返してしまえば、苦痛も痛みも絶望も、石ころ以下のように転がっている。そんなことで足が止まっていたら、目的地になんか、一生つくことはない。
ここにいる全員がそのことをわかっていた。だから、それに対する糾弾なぞ、できるわけがなかった。
セイバーは、己のマスターに向き合う。
「シロウはそれでいいのか？」
「ああ。いい」
無表情で、セイバーのマスターである男はそう告げた。
まるで、作業的に。感情のこもらない瞳と声で。男は続ける。
「それに、もう、手遅れだろ？」
「……　そうね」
「そんなものが寄生している時点で、桜はもう永くない。すでに同化

も進んでいるはずだ。さっきの話と同じだよ。取り除くなら、それは命と引き換えになる」
先ほどまで、女が横たわっていた場所を眺めた。
溢れ出るほどの苦しみと憎悪。恥と悦楽。
いまだその根源が彼女の中にはあるのだ。そんな状態で、生い先が長いはずがない。
「それに、もう一つ、やらなきゃいけないことがある」
たとえ、キャスターがいたとしても、小聖杯からかかる負担が減るわけではない。
そして、それを補完するだけの、燃料が必要だ。それは、桜の保有する分では微塵も足りない。
そんな中で、やらせることなんて、一つしかなかった。
「桜に、人食いをさせる」
「……」彼女はきっと、自然にせざるを得ないわよ」
「それじゃダメだ。すでに起動はしてるが、負担が減れば停止する可能性もある」
延命はすでにできた。このままならば、本来よりも数段いいコンディションで日々を過ごせるだろう。
でも、それではいけない。
もしも思考の余地が生まれてしまったら？
早期の時点で桜が魂食いを拒絶することが出来たのなら？
彼女の泥が溢れる前に、彼女の精神が焼き切れてしまうかもしれない。
「じゃあ何。貴方は私に、彼女が自然に思えるように苦痛を調節しろっていうの？」
「そうだ」
男を一瞥して、迷いなくキャスターは腕を振るった。
描かれた陣から少女に向かって伸びた鎖は、彼女の肉体に溶け込むように蝕んでいく。これから刻む痛みを象徴するように、鎖の擦れる音が鳴り響いた。
無表情だったキャスターは、この時だけは少しだけ揺れ動いてい

た。
「私は、反対しないわ。優しくはないから。貴方に対しても、彼女に対しても」
「キャスターにならわかるはずだ。今までどれほどの苦痛を背負い。これから背負わされるのか」
「……貴方はこれからそれを、彼女に押し付けるのよ」
「ああ。だから、責任くらい、とるさ」
初めて、男は表情を変えた。
もう、その顔をみて、言葉は出なかった。
キャスターはフードを被りなおすと、セイバーに声をかけた。
「わかりました。私から、今これ以上は言いません。あなたもそれでいい？」
セイバーは何も言わない。ただ、己のマスターの瞳を見続けていた。
「あと、一つ、約束をしましょう」
キャスターは消える前に振り返り、指を3本ほど立てた。
「貴方の左手とは別に、3回だけ、私の意向とは関係なく懇願する権利をあげます。こうすれば、形だけの関係だって、わかるでしょう？」
キャスターはそういい、儚げに笑うと、ローブを翻した。
未だ夜は明けず、月明かりが部屋を射す。

キャスターが姿を消してから暫くして、男は席を立った。
均一になる床を踏みしめる音。
自然に、男は縁側に座り、月を見上げた。
ほんの少し雲で陰る月を仰いで、何をわらったのか。一瞬だけ口角が動いた。
隣にセイバーが座り、同じように空を仰ぐ。
「きっと。同じものを、見てはいないのだろうな」
ぽつりと、セイバーはつぶやいた。
台所から盗んだ日本酒をつぎ、セイバーはその喉を酒で満たす。

「桜でなければ、いけないのだろう？」
再度セイバーは酒を口に含む。
ほんの少しだけ熱を帯びた舌が、月を摘みに酒を味わう。
「シロウの進む道を、きっと誰も理解してはくれないのだろうな」
セイバーは、見ていた。
最初に共に戦った夜。自分のマスターが、何のために、あのような条件を出したのか。
何のために、あんな行いをしたのか。
撃ち放った彼女自身が、見ていないわけがなかった。
「きっと、間違いだと、誰もが言うのだろうな」
あの時の背中を。
毎朝微笑むその笑みも。
偽物でないことぐらい。痛いほど伝わってきていた。
男は何も言わなかった。
ただ、言葉を発さず、左手に器を持った。
黙って、セイバーはそれに答えた。
男は、口元に淵を当てると、勢いよく杯を傾けた。
喉が揺れ動き、液体は体にしみわたっていく。
「もう、二度とこんな問いは言わない」
セイバーは縁側から降りると、男に向き合った。
虚空から剣を取り出して、数振り演武をし、刃を水平にする。
男は、何も言わずに問いを待った。
「護りたいものが、あるんだな」
セイバーはそれ以上何も問わず、答えを待った。
数刻ののち、しかし返答はない。
それでも、セイバーは得た。
彼の瞳に映る光景が、雄弁に答えを放っていたから。
「シロウ。この先、貴様が道を違えぬ限り」
金色の瞳と、金色の髪が月の光に照らされる。
どこか既視感のある光景に、息を呑んだ。
「私は、貴方の剣となろう」

たったひとつだけ、この私が抱えた後悔を。
この場に立ち、剣を握る意味を。
少年は一度死んでいた。
目はそこで色を失い。
手はそこで熱を失い。
足はそこで意味を失い。
少年はそこで名を亡くした。
新しく生まれたはずの衛宮士郎も、今はもう死んで。
抱いた誓いも。願った理想も。遂にはすべて亡く。
だからせめて。
「たとえ幾多の罪を背負うとしても。私は貴方のために、この力を振おう」
その丘に、誰も足を延ばさず。
その背を、誰も支えはしないのならば。
「それがどれだけ罪深いことだとしても、私は」
冬の乾いた風が、結ばれた金の糸をほどく。
たなびく風に揺られる髪が、視界を埋める。
「貴方の味方で、いると誓おう」
儚げに微笑むその瞳に、映り込む感情。
どうしてと、問いたくなるほどに、精錬で、美しい瞳に。
セイバーは男に近づくと、その頬に手を当てた。
愛しい人を想うように。遠い目を向けるその瞳に寄り添うように、
声が響いた。
「それが、私の願いだ。それだけは、もう、変わらない」
騎士は初めて、少女のように、笑った。

見知らぬ天井の下で、目を覚ます。

重い体を半身だけあげて、朦朧とする意識の鍵を開ける。
窓からは暖かい日の光と、冷たい乾いた冬の風が吹き入れる。
未だに残る手の熱を、何度も握ることでかみしめた。
体調はまだお世辞にもいいとは言えぬものの、学校に行くには支障はないだろう。
この程度なら、普段とたいして変わらない。
そう、間桐桜は、体を起こして伸びをした。
掛けられた時計を確認する。
針は美しく縦に一直線になっていた。片方の針と背中合わせになるように、長針は下を向いて時を告げる。
……長針が、下？
靄む思考が一瞬にして過敏になった。
まるで脳内に直接つららを差し込まれたみたいに、脳は処理を始める。
どれだけ思考を回したところで、目の前に映る景色は変わらない。
現在昼の１２：３０。
残念ながら本日は休日ではない。
わき目も振らず廊下を走る。
ギリギリとほんのわずかに痛みを発する体を引きずりながら、着替えを抱えて洗面所へと急ぐ。
もちろん水を温めている暇などなく、容赦なく頭部に冷徹な水滴がこれでもかと降り注ぐ。
しかし、そのすべてを無視した。
跳ねる寝癖を瞬時に直し、最速の速さで寝間着から制服へとフォルムチェンジを遂げた。
これ以上ないほど晴れ晴れとした思考。
ミッションは終え。あとはどれだけ早く到着できるかの勝負だと、桜は玄関へと先を急いだ。
午後からの出席にはなるが、行かない選択肢はなかった。
もう、数えるほどしか行くことが出来ないかもしれない。そう思うと、体は考えるよりも先に動いた。

そんな時、廊下に変な音が鳴り響いた。
ぐーっと、自らの腹部から絞るようになった音。きっと聞かれていたら顔を真っ赤にしていたであろう、ある意味はしたない音を聞いて、桜は一度冷静になった。
このまま学校に付けば、恥をさらすことになるのは必至。
であれば先に、その要因を潰すまで。
きっと先輩ならば、食べられるものの一つや二つ作り置きしているだろう。
そう思って、桜は居間の襖をがらりと開けた。
ボキりと、硬いものが砕ける音がする。
光る液晶を見ながら、座布団に美しく伸びた背で座りせんべいを頬張る金髪の女性が、襖の方へと振り向いた。
「ようやく起きたか。体調はどうだ？桜」
昂然たる姿勢で覗くセイバーに、桜はついあっけらかんとしてしまった。
まるで家主のように堂々と居座るセイバーは不思議と違和感がなく、桜は常日頃と同じように冷蔵庫へと直進した。
朝食のあまりか入っていた煮物をレンジで温め、小鉢によそいつまむ。
アイコンタクトで私の分もと伝えてきた女性の前にも、同じように小鉢が置かれていた。
「なにしてるんですか？セイバーさん」
「体力回復と時間潰しだな。そろそろ昼ご飯を食べようと思っていたからちょうどよかった」
「作りませんよ。私すぐに学校行きますから」
「もう昼過ぎだぞ？病み上がりなのだから無理する必要もないだろうに」
すでに空になった小鉢を置いて、セイバーは再度せんべいに手を伸ばした。
ため息をつきつつ、桜は脇に置いていた鞄を再び手に取り立ち上がる。

居間から出ようと差し掛かったあたりで、セイバーはごくんと口に含んでいたものを飲み込む。
「シロウは今日学校には行ってない」
そう、目を向けることなくつぶやいた。
「どういうことですか」
「シロウは野暮用で出かけている。それぐらいは言うべきだと思ったのでな」
「それじゃあ、あなたが何で家にいるんですか」
相手がどういった存在であるか。自分がどういった立場であるか。わかったうえで、口調は高圧的になった。
しかし、物ともせず。それどころか少しだけセイバーは微笑んだ。
「大丈夫。シロウはそんなに弱くない」
「そんなことは」
わかっている。そう言おうとした桜は、自分の犯した過ちに気づいた。
そんなことで声を荒げてしまっていること自体が、かかわりをこれ以上なく証明してしまったから。
「心理戦が本当に苦手だな。桜は」
「……意地悪ですね。セイバーさんは」
ほんの少し頬を膨らませる桜を、セイバーは微笑ましく思った。
「そのまま学校に行っていればこれ以上話をする気はなかったんだがな。もう、行く気はなくなっただろう？」
「当たり前です。しなければいけないことが一つ増えましたから」
鞄を部屋の隅に立てかけると、その足でキッチンへと向かった。
桜は二人分の湯呑を出すと、やかんに水を入れ火にかけた。
急須に茶葉を入れ、湯が沸騰するのを待つ間、桜は反射的に行ってしまった先ほどの問答を後悔していた。
それは、少年の手の甲を見た時と、少し似た感覚だった。
ぐにゃりと、今が歪む音がする。取りこぼしてしまった砂が、さらさらと終わりを暗示しているようで。
ほんの少しだけ、唇が震えている。

しかしなぜだろう。不思議なことに手は震えなかった。
高い音で意識が戻る。少し水を指して、湯を注ぎ茶を淹れる。
湯気が立ち上る中、対面に座るセイバーが、ほんの少し茶を口に含む。
未だ変わらぬ様子に、桜は困惑した。
「私から、シロウに桜について何かを言うことは絶対にない」
端的に、それでいて大胆に。事の論点の芯を、一点の曇りもなくセイバーは射貫く。
だが、桜はその言葉を、そう簡単に信じることなどできなかった。
セイバーは、サーヴァントで。少年にそのことを伝えない利は彼女にはないはずだから。
利が無くてでも、迷いなくその道を選べる人を、桜は人生で一人しか出会ったことがなかった。そしてこれからも会うことはない。確信していた。それ故にどれほど真摯な声色だとしても、おいそれと話を区切ることはできなかった。
「どうしてですか？」
「意味がないからだ。桜が聖杯戦争に一枚噛んでいる。そんなことを言ったところで、シロウは何も変わるまい」
「そんなわけ」
「怖いか？シロウの敵になることは」
歯に衣着せぬセイバーの物言い。もう一度、変えられない現実に、引きづられていく。
どれだけ身を清め着飾ろうと。最終的に目的地にたどり着くころには、きっと対面に立っている。
それが、たまらなく怖かった。
穢されるのはいい。間桐桜は、その生き方しか知らないから。
でも、もし、それが、彼から向けられたなら。
彼に手を、離されるとしたら。
もう。どうつなぎ留めたらいいかわからない。
どう立ち上がればいいのか、きっともう。
「それでいいんだ。桜」

下がった顔をあげると、セイバーは変わらず微笑んでいた。
それは、何を見つめる目なのだろうか。
哀れみではない。同情でもない。
例えるのなら、母が子を見つめるような、そんな目をしていた。
「桜は、シロウのこと、好きか？」
火打ち石が鳴った。
凍っていた間も、失っていた感覚も戻ってくる。
緑の水滴が、空を舞う。ぽたりと、肌に王冠を描いた湯の熱が、頭に響いてくる。
ほんの少しだけ急いで箇所を濡らしてタオルで手をふく。
シンクに映る顔は赤らんでいた。
それほど熱くはなかったはずなのに、頬がわずかに温かい。
「突然どうして」
「はっきりさせておいた方がいいと思うのでな」
いたずらっこのように、怪く楽し気に笑うセイバーに、桜の肩の力が勝手に抜けた。
セイバーはにやにやと、つまみを見つけたかのように桜を見ながらせんべいをかじる。
「先輩のことは、少なからず想ってます。そうでなきゃ家になんて泊まらないですから」
そういった桜の心境は、声色とは違い、そう落ち着いたものではなかった。
初めて、口に出した好意の形。踏み出せなかった一つの線。
しかし、セイバーの顔色は変わって少しだけ暗くなった。望んだ答えを得れなかったからか。
それとも何か別の理由があるのだろうか。
コトンと、湯呑が机に置かれる音が鳴る。湯に水をさすように、衝撃で液体が凍り付くように。場は、色を変えた。
「そうじゃない。私が聞いているのは、そんな綺麗な話じゃないんだ」
「少し、話をしよう」と、湯呑を空にしたセイバーは、居間の襖をあけて、桜に目配せをした。

廊下に出るセイバーを、桜が追う。数歩分空いた距離で、桜は庭の前の縁側に座った。
セイバーは庭に降り立つと、その形相を変化させた。
その身に甲冑を纏い、その手に剣を握る。
黒く、されど澄んだ鎧。人の手に余るほどの芸術的な一刀。
しかしそれを見つめるセイバーの目は、ほんの少し虚ろだった。
「私の手は、穢れている」
そう、自戒するようにセイバーは呟いた。
「すまなかったな桜。突然、こんな状況に追いやってしまって。私も、心理戦は得意じゃないんだ」
曝け出すように痛々しい笑いをその顔に張り付けて、セイバーは桜の方へ向き直る。
「貴女のことばかり詮索するのはフェアじゃない。だから少しだけ、私の話をしよう」
砂利を踏む音だけが、場を満たす。
剣を虚空へと消して、真っ黒な鎧もすでに脱いで、漆黒のドレスに身を包んだ少女は、自嘲するように笑った。
「クラス。セイバー。霊基の器の名はアルトリア・ペンドラゴン。かのアーサー王伝説の王のものだ」
すでに、全マスターの周知ですらある、セイバーの真名。
しかしそれを、セイバーは何事もないように、他人事のようにつぶやいた。
「だが、私の名はもうない。私は、偽物だからな」
まるで、捨ててしまった思い出を話すような。そんな様子で、セイバーは淡々と自分を語る。
「もちろん。記録はある。いつ何時、アーサー王が何を想い何を決断したか。それらすべてを、私は知っている」
セイバーはその手に再び剣を握り、演武のように数振り舞う。
それは、洗練され無駄のない。理想の騎士の一振りだった。
よく言えば清純。悪く言えば無感情。
研ぎ澄まされた故に、一切の迷いない太刀筋。

「彼女の営みを。努力を。力を。私は知っている。この身には、その研鑽の成果が。あらゆる技術が身についている」
しかし、セイバーの顔は全く晴れない。今すぐその身を切り捨ててしまいそうなほど、その手は強く握られていた。
「だがそれでも。私は、彼女ではない。私は彼女の残滓を押し固めただけの、継ぎ接ぎの人形だ」
再びドレスに戻ったセイバーを、桜は見つめた。
桜にはわからなかった。
そこに立っている英霊が、いったい何を言っているのかが。
でも一つだけ。
この人は、少年に似ているのだ。
失ったものを、必死にかき集めようと。手が血まみれになりながら必死に足掻いているようで。
「私にはもう、帰る場所はない。最初から、存在しなかったものだ。そのことに、思うことはない。私を形成するもののほとんどは、借り物だからな。それを、返すだけだ」
太陽を浴びているはずなのに、辺り一面から光が失われたと錯覚するぐらい、セイバーの瞳は深かった。
「だが、一つだけ」
瞳に光が灯る。強く、滲み出た声が、桜の耳に焼き付く。
暗闇に、一点だけ。されど轟々と音を立てて燃え上がる光が、そこにはあった。
「盲目な瞳に、光を灯してくれた少年がいた。誰一人支えない背を、必死に押す愚かで愛おしい少年がいた」
セイバーの肩から力が抜ける。何かを抱えるように腕を曲げて、その手のひらを見つめて。
それはまるで、零してしまった砂を眺めているようだった。
「名も、誇りも、意味もすべて失って。それでも、歯を食いしばって立ち続けた少年がいた」
「それは」
「手を離してしまったよ。私は。誰より支えたい人を、この手で切り

つけることしかできなかった。そんなことでしか、私は少年に尽くせなかった」
目をそらしたくなるほど膿んだ傷跡。
背から血を流していると錯覚するほどに、それはセイバーの魂を鋭利に切り刻む刻印だった。
もう、取り返しのつかない罪を犯した。やり直すことなどできないと知ったうえで、その背は消えない過去を痛々しいほど鮮烈に語る。
どこか、空いた風穴を見ているようで。
「私はな。桜。もう、二度と、この手から零さないと決めたんだ。何もなくなって、帰る場所がなくなって、立ち上がれなくなりそうな少年を、支えてやると、決めたんだ」
もしもそれが、彼女への裏切りになるとしても。
そう言い捨てた英霊の言葉に、桜はそれ以上何も言うことが出来なかった。
その瞳に迷いなどなかった。
それでも、英霊はなくしたものを見続ける。
「だけど。私には、彼を救うことなどできない」
無力な自分をあざ笑うように、セイバーは笑う。誰に向けられているわけでもないその笑み。
それが。いつかみた少年と、重なったように見えた。
「力になることはできる。眼前に立ちふさがる敵を薙ぎ払うことも。背後に忍び寄る邪悪を断ち切ることも。
それでも、私は。一人ぼっちの彼を。降ろせない」
隣に立つことはできる。迫る敵に、目線だけで意思疎通を取って、殺意を胸に敵の刃を打ち砕くことも。
背後に立つこともできる。その背を狙うものから護ることも。
けれど。
「私は、奪うことしか知らない。支配することしか知らない。統治することしかできない。だから、与えることなどできないんだ」
正面から、その頬をたたくことも。
正面から、涙を拭いてやることも。

正面から、抱きしめてやることも。
何一つできやしない。だって剣なのだから。
刃では、傷つけることしかできない。
「いくらその頬に血がついていても、この手で拭ってやることすらできない。たったそれだけのことを。私には、そんな資格すらないんだ」
真っ赤に染まった手では、少年を穢してしまう。
剣を握った手では、彼を傷つけてしまう。
異端の象徴。非日常の象徴である英霊では、彼の求めるものを与えてやることは、永久に不可能だから。
「だから、もう一度だけ聞く。桜は、シロウのことが、好きか
貴女は、衛宮士郎がたとえこの先、何を成そうと、揺れ動かぬものがあるか」
「……私の感情は、そんな綺麗なものじゃありません」
「綺麗なんかじゃなくたっていい。薄汚れていても。欲と渇望に満ちたものでも。ただの憎しみだっていい」
二人の視線は重ならない。
見ているものが違い過ぎて。抱えた環境がずれすぎて。
それでも、桜にはわかることがあった。
セイバーは伝えたいのだ。
ただ、少年のために。そして桜自身のために。
誰にも、背負われない生き方を。
そんな生き方を、しようとしている人がいる。
誰よりその熱を愛しているのに、誰よりも、想っているのに。
剣で出来た体では、誰も抱きしめることなどできない。
そんな生き方を、もうさせたくない。
それを背負うべきなのは、罪を背負うべきなのは。断じて彼ではないと。
「私は、きっと先輩のことを裏切ります。わかるんです。何故かはわからないけど。私は、あの手を離してしまいます。傷つけて、嬲って、踏みつけて。大切にしてくれた熱を私は」

「そんなことは、わかってる」
「だったら……　だったら私にどうしろっていうんですか。こんな、こんなもう救いようのないからだで。そんなものを背負ってしまう勝手な人に、無力な私じゃ、力になんて」
「本当に、そう思うのか？自分にしかできないことはないって。貴女は、シロウにそこまで想われていないと。言えるのか？」
伏し目な桜の顔を、優しくセイバーは上げさせた。
その手にはもう、鎧も、剣も持ち合わせてはいない。
ただの、一人の少女だった。
ただ、強くて弱い一人ぼっちの少女が立っていた。
「桜。シロウは直視すれば目を焼く光源だ。側にいればいずれ貴女が傷ついてしまう。きっとそれは、貴女にとって酷なことだ
それでも、もう、目を逸らさないでやってはくれないか。シロウの軌跡を。痛々しいまでの傷痕を。それは、他でも無い間桐桜にしか、できないことなんだ」
泣きそうな顔で、少女はそういった。きっと誰より彼のことを案じる少女は、そう、懇願した。
わかっている。間桐桜にできることなんてほとんどない。その事実は、どうしたって変えようがない。けれど。
「シロウのことを、見ていてやってくれ」
誰にも、負けないこと。誰にも譲れないこと。
誰よりもずっと、そばでしていたこと。それだけでもと、しがみ続けた願い。
「シロウのことを、救ってやってくれ」
たったそれだけの言葉で、何かが揺らいだ。髪をまとめる糸が、風に揺らいで少しだけ緩んだ。
逸らし続けた光。凍り付いたどこかに、火が灯った。
途方もない恐怖が襲うけど、それでも。立ち上がるには、十分すぎた理由だった。

土蔵の中から漏れ出る光を、夜目になれた目で垣間見る。
金属がこすり合う音が、中からかすかに聞こえる。
見えるのは、いつか目にしたことのあった、小さな背。しかし記憶の中より大きく、強くなったように思える背。
初めてこの光景を目前にしたとき、目を疑ったのを今でも覚えている。
それと同時に、何か別の感情が生まれたことも。
鍛錬なんて言うことが出来ないほど、目の前で行われていた所業は凄絶に過ぎた。
命を捨てる行為といえばまだ聞こえがいいほど。
人としての生を、その手で削るように。何度も何度も刃で自分の体を刺し貫く姿に、口元を抑えなければ声が漏れてしまいそうだった。
今覚えばそれは、怒りだったのだろうか。
どうして、この人は、自分の手で、幸せを切り捨ててしまうのか。
喉から手が出るほど欲しいと思った。そして失ってしまった景色。
そんな世界に手が届く癖に、どうして。
どうして彼はその足を、こちらに向けてくるのだろうと。
救えないものを。壊れてしまったものを。穢れてしまった世界を。
死を。
そんなものを、背負おうとしているのだろうかと。
まるで、生きることを許されないかのように。そんな責務を背負い続けていた。
何の疑問も抱かず、何の不平も漏らさず。
ただ。こんなにも美しいほどに、研ぎ続けていたのかと。
その姿が、どうしようもなく嫌いだった。
どうして、助けを求めないんだろう。

どうして、捨ててしまわないのだろう。
重荷でしかない。捨ててしまえばいい。責務も、苦しみも、涙も、全部洗い流して笑って明日を生きればいい。きっと誰も責めないはずだ。彼が幸せになることを、誰も糾弾することなんて許されない。
それなのに、涙を噛みしめて、刺さる刃を受け止めて。そんな体で、誰かに笑ってあげられるのだろう。
もうボロボロなのに、崩れる体で手を伸ばそうとする少年。
それなのに。彼は、こんなにも苦しそうなのに、誰も助けてあげないんだろう。
そんな、刻まれた記憶。
重なり合うときの中で、凛々しくなった背だけが変化を物語っていた。
「やっぱり、まだ起きてたんですね。先輩」
ピクリと動いた人影は、手元を少し動かすと、スッと立ち上がり扉の方へと歩いた。
ガラガラと、音を立てて扉が開く。
「夜遅くに、どうかしたか？桜」
先輩は、人懐こい笑みで微笑んだ。
気づかなければ、良かったかもしれない。いや、見ようとさえ思わなければ、変化にさえ気づかないほど微々たる差でしかない。
だけど、その表情は、隠しきれないほどに霞んでいた。霞んでしまっていた。
まるで、泣きはらした後。映す表情を失って、苦し紛れに笑うようで。
握りこぶしに、力が入る。
「先輩こそ、私の言ったこと、忘れてしまいましたか？」
「あー。すまん。少し集中していたから時間を見るの忘れてたよ。少ししたら戻るから、桜も部屋に戻っててくれ」
「嫌です。先輩、そういって最近は毎晩こっちで寝てるの、知ってますから」
先輩を半ば強引にどかし、薄暗い内部に入る。先ほどまでは明かり

すらなかったのではないかと思えるほど、漏れる月明かりはか細い。
少し困った様子で、先輩は頭を少し掻いて、雑多な荷を掻き分けるようにして何かを出し始めた。
「何を出しているんですか？」
「ん。ストーブ」
「……　なんでここに居座るつもりでいるんですか？」
「部屋に戻るにはまだ目が覚めてるからさ。俺だけならいいけど、桜もいるならつけたほうがいいだろ？」
壊れていたはずのおんぼろなストーブに火をつける。短く高い音が響く。
「それに」
ストーブに手をかけながら先輩はこちらを振り向く。夜目に慣れ始めた瞳に、赤い光が残像を映す。
だから、重なった先輩の瞳が、見えなかった。
「桜がわざわざここに来たってことは、何か話したいことがあるんじゃないのかなってさ」
察しがいいのか。それとも、そこまで私は表情に出してしまっているのか。
伝わってほしくないことまで伝わってしまっているのではないかと、少しだけ不安になる。
先ほどまで使っていた座布団を、これでもいいならと差し出された。
少しだけぬくもりが残る布を敷いて、膝にスカートを織り込む形で腰を据えた。
目の前の明かりが熱を発する中、それ以上に隣の熱が心を温める。
ぴたりと、小指が手の甲に当たった。
今にも消えてしまうのではないかと思うくらい、冷え切った手。
とっさに、被せるように手の甲を包んだ。
少しは反応してくれてもいいのに。ピクリともしない手が、少しだけ不服だった。
そう、彼の横顔に目を向ける。

彼の耳は赤くなっていて、それが寒さのせいなのかはわからない。だけど少しだけ気分が晴れた気になった。
視線を、再び前に戻す。変わらず熱線を放出し続ける様子に、心が温まる。
傷だらけだった機械に、再び命が吹き込まれたのだろうと。
「これ、直したんですか？」
「うん」
「そのために、最近こもりっぱなしだったんですか？」
「まあ、それも一つの理由かな。そういえば、まだ直してなかったなって」
一点を見つめる先輩の横顔を過ぎて、明るくなった土蔵の中をぐるりと見渡す。
ごちゃごちゃで、でも少しだけ整得られている。そんな印象を裏切るように、整理整頓された道具たちがあった。
違和感が脳裏にわずかに走る。
「整理、したんですね」
「汚いままじゃ藤ねえも物の位置とかわからないかなって」
「藤村先生ってどちらかというと荒らす側だと思いますけど」
「違いない。どんだけ物押し付けられてたのか、少しわかったよ」
ようやく笑みが漏れた先輩の顔は、少しどこか既視感のあるものだった。
「羨ましいです。藤村先生は。先輩と、ずっと長い間の思い出を持っていて」
「まともなものなんて数えるほどにしかないよ」
「先生、昔からああなんですか？」
「ああって。まあ、もっと激しかったかな。此処に引き取られてから暫くは、藤ねえに引きずられっぱなしだったから」
何事もない。人並みの思い出を語るように、先輩は話す。
でもそれは、懐かしむというよりはむしろ、憂うような声色で。
「つらかったですか？」
「藤ねえからはそう見えてたのかな。でも、そんなことはなかったよ。

やるべきことが決まっていて、その環境もあった。俺にとっては十分すぎたと思う」
「……　それじゃあ先輩は。楽しかった、ですか？」
恐る恐る尋ねた問いに、先輩は答えてはくれなかった。
悩んでいるわけではなく、明確に。彼の答えは決まっていた。
楽しかったわけなんてないことぐらい、私にだってわかる。
だからこそ。
「私には、わからないんです。先輩のこと、何も知らなくて。私、私自身のことすら、わかんないことが多すぎて」
胸が苦しくなった。首から下げられた重みの分だけ、痛みが体を走った。
「私、昨日はとても楽しかったんです。貰ったネックレスも、握ってくれた手も、何物にもかえられないくらい大切で。
でも、どうしてそんなことしてくれるのかなんて、わからなくて。いくら考えても、答えが出ないんです」
与えたことが無いから、与える理由なんて知らないから。
「だって私は」
私は、裏切り続けていた。今でさえ、先輩のことなんてほんの少ししか考えられてない。
もしも言えたなら、どれだけ楽なのだろうか。貴方のことを、裏切り続けていますと。貴方が私に抱いている感情は、誤解にしか過ぎなくて。私は、私のためにここに依存しているだけで。本当は、醜く穢れた女なのだと。
でも、そんなこと、言えるわけがなかった。
「先輩は、これでよかったんですか……？」
先輩は口を開かない。
ただ、指に優しく力がこもるだけだ。
「先輩は」
唇が震える。
寒さのせいではない。手は暖かい。体も、心も。もうこれ以上ないくらい、今の自分は熱を持っている。

でも、震えている。唇だけが、己の体じゃないように、制御を奪われて思うように働かない。
言葉に詰まっているのを心配しているのか、安心させるように返された手のひらが握られる。
無理しなくてもいいと、そう伝えてくる感触に、頬が緩んだ。
超えてはならない一線がある。
踏み込んではいけない領域がある。
でも、そうしなければ届かない手のひらがある。
私は、どうしたいのだろうか。このまま与えられ続けてしまっていいのだろうか。貰って、微笑んで、そうして何も知らないふりをして、わずかな時を大切に生きればいいのだろうか。
心のどこかで、それを許す声が聞こえる。
そのくらいなら、許容されて然るべきだと。
握られて、背を押されて。
離さないまま。もう何もいらないから。せめて今だけでもこの手が握られ続けられるのなら。
そう思えたら。どれだけ幸せなまま、間桐桜は死ねただろうか。
「もし私が悪い人になったら、許せませんか？」
震えは広がるように、全身を蝕んでいく。
そんなことに気づいてほしくなくて。必死に手に力を入れて、震えが移らないようにと。
けたたましい幻聴が、脳裏に響く。
大切にしていた糸が、はち切れてしまったのか。
沈黙が場を埋める。
小さな金属音だけが、耳にまとわりつく。
「桜が」
水がほんの少しだけ溢れ出るかのように、先輩はぽつりと小さな声を出した。
視線は交わらない。
表情も見えない。
けれど確かに、目の前には先輩の心があるように思えた。

「うちに来るようになってどのくらいたつかな」
「え」
「中学のころからだもんな。もう、俺よりも料理、上手くなったかもしれない」
ゆっくりでとても暖かい声。
ふと、目線を先輩の瞳へ移す。そこには、遠き日々を映し出した瞳があった。
ほんの少しだけ、震えが収まる。
「桜」
「はい」
「これまで何回くらい、お帰りって言われたのかな」
「……　わかりません」
「俺も分からない。でも、数え切れないほど俺はその言葉を貰った。それだけは、確かだ」
熱の光が、胸元にあるペンダントに反射する。
5つの花弁を抱えて咲く花が、映し出される。
そんな光を、先輩はじっと見つめていた。
「鍵を渡した時のこと。覚えてるか？」
「はい」
喉の奥から、深く吐くように声が漏れた。
絶対に忘れているわけなんてなかった。
「桜、頑固なくらい通い詰めて、俺の手伝いをするって聞かなかったよな」
「今思えば、私らしくなかったかもしれません」
「それで俺の方が折れて、合いかぎを渡したんだったな」
鮮明に思い出せる。
その時の風景も。色褪せない暮れも。手に乗る重みも。移る温かさも。
1秒たりとも、忘れたことはない。
「そのくせ、渡したら渡したでこんなもの受け取れないなんていいだして」

「驚きます。赤の他人に、突然合い鍵を渡すなんて」
「それでも、桜は受け取ってくれた。それで今、桜はここにいる」
ポケットに入っている金属を触る。
居場所の証。私を繋ぎとめてくれる、最初の熱。
「桜」
「はい」
「俺には、わからなかった。余裕がなかったなんて理由で、目をそらし続けていたよ。今でもわからない。だから、楽しかったですかといわれて、答えるセリフがないんだ」
力強く握る手に、返される重み。
先輩の声色は変わらないはず。それでも、冷たい風が溢れていた。
空いてしまっている風穴から、びゅうびゅうと乾いた音が聞こえる。
「でも、知ったんだ」
先輩の中の何かが、音を立てている。
擦れるように聞こえていた。
だが違った。削れているのだ。
今でも彼の心が、目の前で削れていく。砂粒になって、風に吹かれて、それでも必死に、鎖で形だけはつなぎとめて。
降り積もる砂塵だけが、彼を物語っていた。
「お帰りって言われることは、とても暖かいことで。帰る居場所があるっていうのは、それだけで幸せだってことを」
握られていた手が離される。
代わりに、先輩は少しだけ体をこちらに向ける。
伸ばした手が、私の頬をなでる。
やっぱり冷たくて。それでも大きな手のひら。
先輩は、正面から私を見つめた。
逸らさずに、私に残った柔らかい部分を優しくなでた。
心が、変な音をたてた。
「だから、桜。俺は、幸せだった。鍵を渡したあの日から、俺は、幸せだったよ」

頬をなでる手に、雫が落ちる。
いつの間にか、泣いていた。
悲しいわけでも、苦しいわけでもない。
それでも、流れる涙が止まらなかった。
「誰が何と言おうと。たとえ桜自身が、それを否定しようと。答えは変わらない」
これ以上はいけない。
そう、心の中で誰かが叫んだ。
過去形な言葉も。血だらけに見えるその体も。
今にも崩れ去ってしまいそうで。脆く儚く。それでも強い心も。
もう、これ以上、目の前で傷つけないでほしかった。
「君の声で、俺はもうとっくに。救われていた」
そう微笑む少年の姿に、もう、声を抑えていることなんてできなかった。
わからないわけがなかった。
すでに壊れ切ってしまっているのに。全部飲み込んで、ついてしまいそうな膝に剣を突き刺して。
「……違います。ダメなんです」
いけないとわかっていても、漏れ出てしまう思いがあった。
こんなものが私の中にあったのか。そう思うほど、瞳が熱を持つ。
いつからだろう。
どうして、私は気が付かなかったんだろう。
知られたくなかった。
隠せていたと思っていた。
現に、今までは気づく素振りなんて一度もなかった。
だから、私はまだ浸かっていられた。
綺麗なままでいてほしかった。
だから穢れた私は、いつかこの明るい世界から、手を離さなければいけなかった。
わかっていたはずだった。
何度も何度も理解したはずだった。当たり前のように、背負ってし

まう人だってことぐらい。
それでも、重荷にならないように、いつかその手を去ろうって。
でも、もう、これ以上ないくらい。とっくに彼は。
「私は、ここにいてはいけなかったんです。私が、貴方の」
「誰だって、誰かにとっての悪い人になる」
ぽすんと、誰かの胸に、自分の体が収まった。
涙が、服に軌跡を描く。温かい体温が、強く刻まれる鼓動が伝わる。
「いいんだよ。桜。叫んでいいんだ。憎くて、妬ましくて、羨ましいって。どうして、何一つくれなかったのって」
ふわりと、包んでくる優しさが、心に刺さる。
壊れてしまう。これじゃあ。
溶かされて、もう、立てなくなってしまう。
それでも、優しく、力強く、背中に腕が回る。
「泣いていいんだ。もう何も、奪わないでって」
溢れ出る涙。
抱き寄せられた体で、肩を濡らした。
下から、両腕でしがみつくように抱きしめた。
「怒っていいんだ。どうして、そばにいてくれないのかって。どうして自分の周りは、こんなに優しくないんだって」
声はやまない。
穏やかな声色。
ギリギリと痛む心を癒すように、麻薬が体に浸透する。
超えてはならない一線。
踏み越えてしまった一線。
「どうして、私を救ってくれないのかって」
境界のガラスが、けたたましい音を立てて壊れた。
声があふれた。
抑え続けた嗚咽が、土蔵に響く。
決意があった。そこには、覚悟があった。
もう、取り返しのつかない道を進んでいた。
「いいんだよ。もう、寒くなくても、いいんだ。抱きしめてって、願っ

ていいんだ」
頭をなでる手。
もう、離したくないと願った。大きな手のひら。
「だめ、なんです。それじゃあ先輩は」
「ああ」
「だって、」
「そうだ。俺は」
何かが、崩れていく音がした。
涙が滴る音がした。高温で、光り輝く雫。
だが違った。涙なんかじゃない。
彼の背から、朱い熱があふれていただけだ。
私はその熱で、こんなにも、満たされていたのだ。
「正義の味方に、なりたかった」
答えを物語る、血潮で濡れた言葉。
「私が……貴方の場所を」
「でも、いいんだ」
顔なんて見えない。
声色は、未だ穏やかで、体を癒す。
それでも、わかった。
「これで、いいんだ」
これ以上にないくらい。わかってしまった。
見えない涙が、肩に堕ちた。
傷がつくほど、彼の背中を抱きしめた。
掻き傷が残ってしまうほど。赤くその身が染まるほど。
涙が、溢れて仕方なかった。
どれだけ撫でられても。どれだけ熱にあふれても。
声が、溢れてきてしまった。
嗚咽だけが、場を満たした。
漏れ出る思いが、止まらなかった。
ごめんなさい。
「ごめんな桜。俺は、きっと君を救えない」

こんなに、傷つけてしまって。
「だから。桜はさ。俺のこと、赦さないでくれ」
こんなに、満たされてしまって。
奪ってしまった心に、償う方法など知らなくて。
壊してしまった代償に、捧げられるものなどありはしなくて。
そんな生き方を、知らなくて。
ああどうして、こんなに月が綺麗なのに。
私たちは、こうなってしまったのだろう。

第１０話

霞む記憶の中で、父の姿が映り込む。
強く、しかし乾いた手に頭をなでられて。
その大きな背中に乗って、高くて遠い綺麗な空を眺めた。
段々と黒くにじんでいく空。
抱きしめられた体に、伝わっているはずの体温は、いつの間にか消えてしまった。
頭をなでる大きな手も。低く名を呼ぶ声色も。
思い出そうとすればするだけ、遠ざかっては霞んでいった。
伸ばす手も、いつしか届かぬことを知り。
願い続けた扉の音も、いつしか鳴らぬと思い知った。
ただ時だけが積み重なり。
体は痛みを知った。
痛みを知るたびに、何かが削れて散っていく。
痛みは希望を塗りつぶし。
時は願いを踏みしめる。
むなしさだけが心につもり。
残ったものは砂塵だけ。
欲しかったものなど等に忘れ。
見捨てられ、痛めつけられ。己を包む熱がないと知ったのは、果たしていつのことだったのか。
もう、思い出せないほど。遠き日の記憶。
いつしか想いは反転し、元の心を無くしたまま。目に見えぬ何かを呪い続けた。
今思えば、弱かっただけなのか。
誰にも抱きしめてもらうことなんてできないと知った。
誰にも温かい声色を向けてもらえないことを知った。
誰にも熱を与えられないことを知った。
いつまでも。決して。あの空の元には届かないと知った。
真っ白で、溶けそうな雪の中。

いつこの身が溶けて崩れてしまうかわからなくて。
だから、一人で立ち上がった。
弱いままでは壊れてしまうから。
弱い自分は壊れてしまったから。
壊死してしまった体を甦らすために、溶けた鉛を全身に流した。
だから、何かを憎んで進むしかない。
なぜ憎むかなんて、最初から知らない。
身体に走る痛みも、もうすでにない。
代わりに何を無くしたのかなんてわからない。
痛むことを辞めた心は、勝手に空虚を埋めたから。
そうして私は、雪の中で埋もれて死ぬ。
冷たい底でたった一人。誰の手の届かぬところまで吊るしあげられて。
そのことを、仕方がないと受け入れた。
それ以外の生き方を、知らないから。
だから。
私にはわからない。
胸に走る稲妻も。
頬を流れる雫も。
身体を流れる震えも。
どうしてこんなに、私は寒さを拒むのだろう。
私は何を、忘れてしまったのだろう。

不便だなと自嘲した身体は、未だ寒さを感じ得る。いつもより一枚多く着こんだためか、外気はより遠いものに感じた。
顔に触れる寒気とは裏腹に、中にこもる熱はまだ暑い。体内から湧き出る生の気は、外界と内界に境界線を張るようだった。
まるで、生きることは拒むことだというように、体は熱を発し続ける。熱く感じるほど、外気は寒さを増す。冷たさが、襲い掛かる。

よくできたものだと、微笑みが漏れた。人の形を模した器でも、猿真似程度なら人を演じられるのだろうか。

たどり着いた場所は、住宅の合間に少しだけできた空間で。誰一人今はおらず。しかし風に揺れる遊具が、ぎーぎーと頭に響く音を奏でた。

公園とは、公共に提供される整備された庭であるという。しかし、もちろん彼女の知る庭は比べるまでもないくらい規模が違った。

本当にこんなに狭くて。なんて閉じた空間。

それでも、彼女にとってはとてつもなく開いた場所に見えた。

いつも通り、彼の座っていたベンチに腰掛けて時間がたつのを待つ。

もしかしたらと、昨日期待を裏切られて。それでももう一度同じように待つのは、果たしてなぜだろうか。

会いに行くことは容易だ。少し自分の髪を媒介に、魔術の一つでも起動してしまえば、彼の居場所などすぐに特定できる。

でも、そうはしなかった。どうしてと。彼女自身が意図も知らぬまま、そうしてわからない彼の来訪を待った。

時計の針が進むたび、頬と手は赤らんでいく。

口元に手をやって、息を吹きかける。命を吹き入れるかのように、赤らんだ手は熱を取り戻していく。

冷たいなあと、思った。

寒いなあと、感じた。

もっと雪吹き荒れる場所に住んでいた。比べ物にならないほど。まさしく死を呼ぶ熱を知っていた。

でも、それ以上に、手から失われる温かさは、深い底から何かを奪っていく。

とっさにコートのポケットに手を入れた。少しでも奪われぬようにと、宝物を抱えるように縮こまって。

そうして、そっと眼を閉じた。

頬に当たる熱で目を覚ます。
大きな手、傷だらけの手で、光で見えない誰かは、私の頬に手を当てていた。
大気と同じくらい冷たくて、ヒヤッと背筋が凍るように、氷のような手だった。
何より、暖かい手だった。
少しだけ見える赤い髪が、同じくらい暖かかった。
「危ないぞ。こんなところで寝たら」
そんな、溶かすような声色で、彼は声をかけた。首にかけた長い布を脱いで、私の首を2周するように巻いて。
不器用な巻き方と、照れたような笑い。先ほどまで彼がつけていたせいか、他の熱とは一線を画すほど、その熱は暖かくて。
鼻まで隠したマフラーを、指で少しだけ下げて、彼と向き合った。
視線を少しだけずらす。時計は先ほどより数度右に傾いていて、僅かすぎる時間の経過を表していた。
少しだけ待っていてと少年は頭を数回なでて公園から出ていった。
見ると、赤い箱の前でコインを入れて二度ほど下から筒状の物を取り出している。
片手で握り締めるにはいくらか熱すぎたからか、両手で転がすように二つを遊ばせながら、彼は公園へと戻ってきた。
「熱いから、気をつけてな」
そう、シロウは微笑みながら片手に持った缶を差し出した。
受け取って、ラベルに書かれた文字を読む。カタカナで大きくココアと書かれた飲み物は、共に描かれた絵で味を鮮明に伝えてくる。
開け方がわからなくて昏迷していると、シロウはもう一度だけ缶を預かり、小さな音と共に空洞を作った。
缶を傾けて、中に入る液体を口に含む。一度に数滴くらいしか飲めないほど、それはまだ暖かく、そして甘かった。
きっと普段飲みなれているものより、数段以上格の下がるものだろう。リズなんかは、口にすることも許してはくれないかもしれない。

それでも、乾いた体に。温かいはずの身体に、液体は染み渡るように広がっていった。
「まるで魔法みたいね」
そう、皮肉めいた笑みに、シロウは困ったように笑った。
何も知らない私に、なんといえばいいのかわからない。そんな風な顔に見える。
同情なんていらない。それはきっと、彼が一番よくわかっていることだ。誰より私に同情する資格のない彼なら、きっとそれくらい察せられる。
首に巻かれたマフラーをほどいて、彼の腕にかけた。首元に入る寒気は鮮明に神経を傷つけるけど、耐えられないほどではなかった。
士郎は笑みを崩さずに、受け取ったマフラーを自分にかけなおす。
「私、昨日も来ていたのに、シロウは来なかったね」
自分でも不思議なくらい、冷たい声が喉元からあふれた。温かくなったはずなのに、出てくる言葉は対して、私であることをやめようとはしない。
少しだけ怯えて、シロウの表情を覗こうとした。
しかし、視野は覆われ、シロウの顔色を見ることはできなかった。
「ごめんな。間に合わなくて」
そう、頭をなでるシロウの手に、言葉を飲んだ。
すぐにでもその手を払おうと、手は力を増して委縮した。缶を握る手は強まって、痛いほど熱が伝わってくる。
それでも、私の身体は動かなかった。押し固められたように、身体は一切、関節の一つすら動かせないほどで。
両手で握る缶のせいならば、片手に持ち替えればいいだけだった。
触れられる手のせいならば、少し声をあげるだけで、その手はひかれ彼はすまなそうに微笑むだろう。
それがわかったうえで、私の身体は動かない。
時間だけが過ぎ去る。頭を動く感触だけが、私の世界を繋ぎとめるように、輪郭をとどめていく。
長い髪を解かすように、柔い何かを支えるように。

恐れを感じず慈しみを感じる手が、私には耐えられなかった。
「やめて。お願い」
そう懇願した震える声を聞いて、シロウは抵抗することなく、スッと手を引いた。
彼の顔を直視できない自分の震えに驚いて、失われた熱によりどころを求めた。
大きく息を吸うと、甘みの残骸は寒気と共に消え、視界は鮮明になった。
「私、シロウの敵だもの。そういう態度は、違うわ」
力が入る声色。ようやく重なった目線は、望んだものとは程遠いもので。
それを拒絶することが許されていないとわかっていながら、目じりに力を入れなければ崩れてしまいそうだった。
シロウはそれでも彩を変えない。
見つめる視線は白い肌を焼いていくようだった。
「そうだな。間違えた」
シロウは頭を掻いて少しだけ首を垂れるとほんの少しだけ後ろに下がった。
そういって1歩だけ距離を開けた歩幅。それが、取り返しのつかない壁だと、気づくのに時間はかからなかった。
缶に残った液体を飲み干すまでの時間、互いは一言も喋らなかった。ただ熱は身体にこもり続け、発散されない力は、内部から何かを圧迫した。
スッと立ち上がり、シロウの方に手を伸ばした。一歩分だけ縮まる距離が、空間を満たした。
それでも、シロウは困った風に笑うだけだった。
「ねえ、シロウ」
震えそうになる唇をごまかすように、声をあげた。気づかれてないはずの声は、自分にとっては思考が埋め尽くされるほど動揺しきっていて。
「キリツグに、会わせて」

そう、言い切った。精一杯張り上げた声は、吹きすさぶ突風にかき消されたかもしれないと思うほどか細くて。
「ああ。わかった」
シロウはそう、すべてを受け入れたように一言返して、歩き出した。
行こうとかけられた声に、凍った足は動き出す。そこまで早くない歩幅に、追いつくのはそう難しいことではなかった。
それでも、あと数歩。手を握るまでが遠すぎて。
「なあ。イリヤ」
目線を手から動かして、少年の方へと動かした。
笑っていたはずの顔には、もう笑みはなく。張り付けられた仮面の奥に、ありありと浮かぶ残像が、眼を焼き付けた。
「ごめんな」
少年はそう、一言だけつぶやいた。
「もういいよ。大丈夫」
そういって目線を前へと戻した。段々と頭に重力がかかって目線は下へ下へと移っていく。
歩く速度は同じなのに、歩数の違いが目について。ふと幻覚のように歩いている道を認識した。
同じ所へ向かっているはずなのに、これほど違いがあって。私とシロウのレールは、どれほど遠いものなのだろうと。
そう、私の熱に問い直した。
答えは返ってこなかった。何度問い直しても、答えは私の中になかった。
「遠いね。シロウ」
「そうだな」
口から出る白い吐息が、熱を奪う。奪われた熱は、大気と混ざって消えていった。
どれだけ熱を捧げようと、世界の温度は変わらない。身を捧げようと、それが意味を成すかとは別の話だ。
「少し、遠いな」
口元だけを動かして、シロウは最後にそういった。ぴくりとも動か

ない目線も、凍ったような手も、何も変わりはしなかった。
ねえ。シロウ。私、そんなに鈍感じゃないよ。
だってその顔、知ってるから。どうしてかはわからないけど。どんな風に知っているかも、わからないけど。
目の前にあるのに、どこまでも深い谷底にまで落ちていく背中を。
二度と振り返らない背中を。
なぜか私の手は、そこには届かないと。私は、知っていた。

気づいたときには、頬から涙が流れていた。その止め方を知らなくて、困惑することしかできなかった。
切嗣が住んでいた。そしてシロウが今住む家。感覚がマヒして、今という時間の所在がわからなくなるほど、見まわる時は一瞬だった。
もうとっくに手遅れだったのだと、この小さい箱庭に入った時点で気が付いた。それからは、本当にすぐだった。
残り香の無い部屋。しかし、霞む記憶が、誰かの面影を投影する。
ここにいる私はどこまでも異物で。存在を許容する理由は、とっくに死んでいたそうだ。
涙の意味を、私は知らない。きっと抱くはずだった感情はなく。ただぽっかりと空いた大きな穴だけが、私の胸を通っていった。
だから、止まった。立ち止まった。フクシュウという大義はいったいどこへやら。すぐにでも逃げ出してしまいたいほど、身体は震えを抑えらなくなる。
そんな私に、シロウはまた手を伸ばした。
「ねえ。シロウ」
「うん」
「シロウにとって、キリツグってどんな人なの？」
彼がどうして本来の両親と離れて、キリツグと共に生きているの

か、私は知らなかった。本来なら、私たちとは絶対にかかわらないような日の下にいて、享受するのは当たり前という特別だったはずだ。
そんな彼が、何故、英霊を従えて剣を握っているのだろうと。それでも、察することはできる。
きっと、彼の両親を殺したのは他でも無いキリツグで。直接的理由はなくても、きっと憎むのが正常な人間の反応なはずだ。
「切嗣は、俺に衛宮って名前をくれた家族だよ。それに、救ってくれた恩人だ」
シロウは用意された台本を読み上げるようにそういった。
その反応は、前回を知らないからできることなのか。それとも、知った上で同じ反応を彼は返すだろうか。
きっと後者だ。それは、確信を持って言える。
「私、悲しいって思っていいのかな」
相手が答えを持たないとわかったうえで。できないとわかったうえで口は勝手に問いを投げた。それが、彼にとってどれだけ残酷な問いかわかったうえで。
「だって、私。このために生きてきたの。そのために、どんなにつらいことでも耐えて。いつか報いを受けさせて。どうせ私には何も残らないから、せめて奪ったやつも道連れだって」
そう思って生きてきた。悲しさなんてないはずだった。あっていいのはむなしさだけ。結局叶わなかった願いを弔うための感情以外、私には許されてはいけなかった。
どんな形であれ、私を繋ぎとめて居た鎖は、もうなくなっていたそうだ。
「私は、シロウとキリツグを殺さなきゃいけないの。だってそうしなきゃ」
どんなに足掻いたって、私は、ここで終わるのだから。これ以外の目的を失ってしまえば、聖杯戦争に挑む意味はついに一つだけになる。
だから死を悲しみと感じる資格は、私にはない。そうしてしまえば、私はそんなことのためにここまで生きてきたことになる。

誇りはある。アインツベルンのマスターとして。そして小聖杯としての、生き様に今更思いもない。
でもそれならどうやって、私は殺した彼女に償えばいいのか、わからない。
「ここ、気に入ったか？」
少年はそう微笑みながら言った。
心臓を鷲掴みにされた気分だった。呼吸するのが億劫になるくらい苦しくて、歯がゆかった。
「なんで、そんなこというの」
「いい家だと思うんだ。まあイリヤの家からしたらこんなところ小さすぎるかもしれないけどさ」
「そうじゃなくて」
「意外と慣れると和室もいいもんだぞ。畳の上独特の寝心地があるんだ。うちは浴槽も純和式だから、結構気持ちがいいぞ。少し手入れが大変だけど」
なぜと。問わずとも答えは目に見える。
楽しそうに話す少年を、これ以上見てはいられなかった。
だって、そこにはまるで、
「俺が死んだら、ここに住んでやってくれないか」
シロウはいないようだったから。
「……シロウは」
「ああ」
「死ぬ気なのね」
少年は何も言わなかった。ただ、言葉が詰まって、苦し紛れに笑っただけだった。
私にこの場で言う意味を、理解していないわけがなかった。
託すという行為は、残りの無いものが、あるものに問うことだ。
いい加減にしてと大声で叫びたい思いを押し殺して。私は、自分自身に溺れた。どうやったって、この身にある価値観ではそれを否定しきれなくて。だから、肯定するしかなかった。
それは、もうあきらめた熱だから、縋ることも拾うことも許されな

かった。
「そっか。シロウも、そうなんだね」
「それは」
「でも無理。私も死ぬから、シロウの代わりにはなってあげられない」
お返しに、頬に流れる雫を無視して精一杯笑ってみた。その時の少年の顔はそれはそれは愉快で、予想通りの表情で。
何を言おうかと、何度も悩んだ様子で、最後は私と同じように微笑んで、「そっか」って一言だけつぶやいていた。
「もう行くね。ここに呼んでくれてありがとう。シロウが生きてるうちなら、また、来てあげてもいいわ」
襖を横にずらして、低い音のする廊下を通った。木製の香が鼻を刺し、かかる体重が床をほんの少しだけ歪ませる。
きっとシロウにとってはもう見慣れ過ぎた光景で、でも私にとっては真新しい世界の出来事で。
共有できない世界観を、少しだけ心地よいと思った。
先ほど通った帰り道。遠い遠いと思った通り道は、あっという間に過ぎた。答えの無い問いだけが、私の頭を埋め尽くす。
どうして、彼は仇の残した家を護ろうとしているのだろう。もちろん、キリツグだけが仇ではないし。言ってしまえば私もそのうちの一人だ。
そのはずなのに、彼はどうして憎しみをそこへは向けないのだろう。一体どう、その体を支えているのだろう。
残ったのは、躰に刺さるわずかな違和感だけ。
私は何かを忘れている。ただそれだけの、誰にでもある違和感から、私は抜け出せなかった。

古びた扉が、擦れた大きな音を鳴らし、感じる外気の風圧が全身を嘗め回すように過ぎていく。
日は少しだけ暮れ始めた。ほんの少し夕闇が訪れる一幕で、視界に映る少女がこちらを覗く。
見慣れた髪色が風に揺れる。記憶の底にある澄んだ黒色の髪色ではない、淀んだ色が視界に広がって。括られた髪留めが、まるで楔のようにその頭に蝶を描いていた。
こうして対峙するのは、果たして何日ぶりだろうか。今まで、これほど時を開けたことがあっただろうか。
じくりと痛む手元を無視して、少女と視線を交わした。瞳には色が映り。憎しみか、怒りか、どちらにせよ、それは向けられた覚えのない鋭いものだった。
「久しぶりだな。桜」
たった数日だけ顔を合わせなかっただけで、見違うほど少女は妙に伸びた背筋で立っていた。
それは奇怪に思え、それ以上に脅威だった。
「手短に済ませよう。僕も、あまりお前といるところを周りに知られたくない」
早々と漏れ出た声は、急ぎを匂わせた少し余裕の無いもので。
それが正直な感想だった。これ以上状況が変動することは望んでいない。無駄な感情を男が抱けば、どうなるか予想が出来ない。敵対することもかなわぬ力では、せいぜい命乞い程度の事しかできないだろう。
遠坂は、別に良かった。取り返しのつかない時から今まで一体いくつの時を経たのかわからない中で、彼女が手を出す理由なんてない。それに、それを飲み込めるから、未だに目の前に映る少女は間桐桜なのだ。
「先輩と、戦いましたか？」

そう、問い詰めるように少女はつぶやく。そんなこと、自分の従者に聞けばいいはずなのに。
「ああ。殺されかけたよ。ライダーも傷を負った」
「じゃあその手は」
「違う。これはあいつとは関係ない。ましてやお前にもな」
怪訝な目を向ける視線の照準に手の甲を向ける。もう血の滲んでいない傷は、戦闘によってできたものでないことは明白だった。
包帯がまかれた手を握る。すでに血は止まっているものの、力を込めるたびに感覚が蘇り脳を刺す。
痛むだけならいい。だが痛みは記憶を蘇らせる。
それは熱をもって、逃げられない苦痛になる。
「それで、だから、なんだ?」
そう、眼を逸らすように話題をずらした。
「衛宮と戦うことが気に入らなかったなら、最初からお前が戦えばよかっただろ。自由意思を持つ他人に権利を譲渡した時点で、お前がどうこういう権利もない」
「違います。そんなことを言いにわざわざ兄さんを呼ぶと思いますか」
「思わないよ。それならライダーを呼んだ方が早い」
大方、ライダーはずっと桜の方を見ているだろうし、そうでなければ困る。
間桐慎二が言うよりずっと、マスターが言った方がその言葉は効力を持つ。
であればなおさら、会う理由はないのだ。所詮向こうは本物で、こちらは奇形の仮初にすぎない。
「だが、悪いんだけど、それ以外が思い浮かばない」
実際、それが本音だった。てっきり、情けない声と被害者面を携えて懇願という名の脅迫をするのだろうと。
それ以外、間桐慎二が間桐桜に願われるものはないだろうし、叶えられるものはないはずだ。
そう、思っていた。

「私のことを、どこまで言ったんですか」
「……何？」
呼吸音と共に、伝わってきたのはわずかなズレ。
理由は定かではない。しかし目の前の女は今明確にこう言ったのだ。
〝あなたは、間桐桜についてどこまで衛宮士郎に明かしたの？〟と。
そしてそれは。
不明瞭な、違和感を感じるものだった
「お前の、不手際じゃないのか」
「確かに、その可能性も考えました。いや、きっとそれもあると思います。でも、よく考えたらありえないんです」
だってと。少女は強く息を吐いた。
その後の言葉が紡がれることはない。それを口に出すことは、彼女にとって自らの諦観を犯す行為だと知っているから。しかし、続く言葉を予想することは容易かった。
〝だって、ずっと気づかれなかったのだから〟
「だから考えました。少なくとも、きっかけがあったのだろうと。導火線に火をつけた存在がいると」
「だからそれが」
「兄さんでは、ありませんか？」
様子に不信感を覚えたのか、彼女は結論を簡潔に求めた。
もしもそうだと答えたなら、彼女はどんな表情を浮かべるだろう。憎悪だろうか。焦燥だろうか。それともそれ以外の何かだろうか。
もしもその目が変わるなら、それでもいいと思った。その手に刃物でも持ち出して、この首筋に当ててくれるのなら、喜んでそう答えただろう。
演じることには慣れていた。目を逸らし、自分の行いと想いを塗りつぶすことにも。
そうして声をあげようとしたとき、嫌でも気づかされた。
正面から見据えた目に何が映っているのか。

恐怖だと思った。それを震えをごまかす怒りだと、始めは感じた。居場所をまた奪われ、住処を追われた迷子の目だと。
違う。これは、全く持って違う。
彼女は、一切彼女自身のことなど見ていない。ましてや、目の前に映る男のことなど。
そして、声も思いも握りつぶされた。
「しらない。僕は、あいつに関して何ら干渉していない」
「それは本当ですか」
「信じるかどうかは好きにすればいい。だけど考えてもみろ。少なくとも敵対する可能性があるマスターに僕がそんなとこを言うと思うか?そうすればあいつがどうするかなんて、お前にでも想像できるだろ」
その言葉に、少しだけ女の顔は歪んだ。
身近なものを傷つけられていたと知った時の、理想主義者は何をするだろうか。
諦観か、徹底抗戦。赦すのならばそのすべてを、断じるのなら一切の躊躇なく。迷いなく機械的に正しく或る。あいつは、そういう男だったはずだ。
自分の知る衛宮士郎は、そういう少年だったはずだ。
その返答に、きっと驚くと思っていた。それか、疑うと。それを信じるということが、どういうことか分からない女ではないから。
しかし彼女は咀嚼するようにその言葉を浸透させて、それ以上の声をあげなかった。まるで、最初から出ていた結論の答えを合わせているようで。
その様子が妙に重なった。
「あれはなんだ」
気づけばそう口に出していた。目の前の女が答えを持ち得ないと知ったうえで、彼女の表情すら見ずに、言葉は勝手に口から紡がれていく。
それは滑稽で愚かな行為だとわかって。それでも止まらなかった。
「あの男は、なんだ」

日が陰る屋上から、光一つない戦場へ視界が移る。数日前の夜、ナイフを差し向けてきた男の顔が、強く映り込む。遠い光。陰る表情からは、何一つ容赦などなく。
あんな声を出す人間だったか。己の知る限り、男は、あんな顔をするものだったか。
「僕は、見たことがない。一度も、いつだって、あいつはそういうやつだったはずだ」
大切にしたものにも執着せず、抱える宝物を他人のために捨て、そうして一人遠いところからこちらを覗いて微笑むような男だったはずだ。
矢を構える男の姿が視界を埋める。見惚れるほど捨てられた余分と、洗練され研ぎ澄まされた指先。
届かないと思った光景を、容易く捨てた男の姿。そうして笑った、男の姿を。
「あれは本当に」
「やめて、兄さん」
高く傷ついた声は意識を起こす。
少女の表情を、長い時を挟んでみたようだった。まるで邂逅と思うくらい見覚えがない瞳がそこにはあった。
「それ以上は、私が許さない」
これまでにないほど芯の通った声に、本来なら動揺するべきだったのだろう。少し前の自分なら、女の決意に身が震え、己の敗北を予感し、そして逃避のための選択を模索しただろう。
小さく、しかし強く放つ言葉の、切り取られた語が、琴線を引きちぎる音がした。
許さない。なにをいまさら、この女はそんなことを言い出すのか。
許すというのは、相手に罪があるから成立するのだ。
相手から罪を奪ったお前が、どうしてそんな言葉を発する。そうしてできた余白で自分の悲劇に酔った女が、どうして今更そんな風にこちらを見る。
今まで、一度たりとも見ようとしなかったくせに。今でも、視野に

すらいないくせに。
「笑わせるなよ」
ああ。吐き出す音を聴いて、少しだけ理解が深まった。こうして、人は声を出すのか。
深い汚泥からあふれ出した声は、視界を黒く塗りつぶすようだった。場を憎悪と嫌悪で満たす、穢れた嬌声だった。
「僕がいつ、お前に罪を犯した」
吐血するように漏れた言葉は、がりがりと脳漿を削っていき、瞼の裏に焼き付いた残骸が、日の元に黒い影として照らされていく。
「二度と口にするな。その覚悟もないくせに」
侮蔑の言葉を吐いても、彼女の表情は変わらなかった。
もう、わからなかった。一度も向けられたことのないそれは、理解するには時間がかかりすぎる。そしてそれ以上に、触れようとするには手遅れだった。
「もしも兄さんが先輩を傷つけるなら」
「僕を殺すか？その手で」
手に下げた鞄の中にあるナイフに指先が触れて、意識が鮮明になる。
靄がかっていた視界を晴らすように、足元にナイフを投げたあの夜の男の意図が、つかめたような気分に襲われた。
もしも少女がナイフを握れるようなら、やってみるがいい。
表現を恐れた怒りと恐怖を、死という形で体現できるのなら。
そうしてお前がその髪留めをほどいて罪を負うことを己に課せるなら。
もしも、この身に刃を向けてくれるなら。
そこまで想って、ナイフから手を離した。
わかりきった結果を、目の前で晒される趣味はなかった。
返答を待たず背を向けた。妙に重なる姿を、眼に通したくなかった。
うるさい風の音をこれ以上聞きたくなかった。このままじゃあ、聞きたくもない幻聴で狂ってしまいそうだった。

「話はまだ終わっていません。兄さん」
ようやく訪れた返答を、無視しようとして足に指令を出した。しかし体はそれをいともたやすく拒絶して、口は今かと震えだす。
無風の室内まであと数歩というところで、耳に入る音を、無視することが出来なかった。
「もう、やめろ。僕をそう呼ぶのは」
呼吸が止まった。耳障りだった風の音も、今では些かも感じない。紡ごうとした声を飲む音だけが鮮明に聞こえた。振り返れば今頃どんな顔をしていることだろうか。
想像を消して、色を消して。言葉を吐き出した。
「桜。僕は、お前が嫌いだ」
「……知っています」
「気持ちが悪い。穢れている。お前は、感情よりも本能を優先するよう作られた獣だ」
「……はい」
その声が、否が応にも自覚を促した。
歪な視界が元に戻るようで、慣れていた神経はかき乱される。
まるで陸酔いのような感覚に苛まれながら、震える唇は言葉を止めない。
「一度聞きたかったんだ。僕にはわからない。何のためだ。何のためにお前は僕をそう呼ぶ。お前にどんな意味がある」
その身に力なく、背負うことを恐れた愚か者。
すでに手を離し、手を伸ばさなかった悲劇者。
最初から最後まで歪でしかなかった関係。ただそれだけを、なぜ呼び続けるのか、わからなかった。
「繋がりなんて、頭に付いた二文字だけだ。僕は。それに、何の価値も見いだせない」
「……意味なんて」
「どうしてだ。桜。お前は未だ、どうして間桐の名を受け入れようとする」
「今更」

「今更なんてわかってる。わかってるさ。そんなことは、誰にだって」
そのたった一言の〝今更〟にどれほどの意味が込められているのか、知ることはできても理解はできなかった。
もう手遅れなほど絡まってしまった糸は、放置するか失くすしかない。
それが、蝶を描くことなど永久にないとわかっているのだから。
「それでも」
だがそれに気づいたのだから。気づけてしまったのだから。
この異物を切り取れるのは、ここが最後だった。ここから先に道はないと知っていた。
「馴れ馴れしくそう呼ぶ関係も。繋がってすらいない関係も。互いに逸らした目線も。偽りの関係全部、もう、捨てるべきだ」
繋ぎ続けた本物は、その身に未だ付いたままだ。
きっと無意識の中で、残しているだけの形骸でしかない。
「邪魔なんだよ。全部」
手遅れで、もはや取り返しはつかない。それほどの罪を犯した。そして、負わせた。
だが少なくとも、もう偽物は必要ない。それだけは、今わかった。
「だから、もう、やめよう」
結局、奪い続けた日々。最後まで、奪うことしかしない。罪悪感など、微塵もない。
せいぜい一人彷徨えばいい。そうして、終わりを探して壊れてしまえばいい。
もう、認めよう。
この手には、とっくに何も残っちゃいなかった。
「贋作(家族)でいるのは、ここで終わりだ」
軽くなった身で、彼女の方を振り返る。
何一つ変わらぬ表情に、言われる安堵を覚えた。
「もう、家には帰ってくるな」
少しだけ驚く彼女に浴びせるように言葉をつづけた。もしかしたら、そう思いたいだけなのかもしれない。

「明日、学校には来るな。これは、警告だ」
繕った資格が、口元を歪ませた。もしかしたら、そう感じたいだけなのかもしれない。
「衛宮に伝えるかどうかは、好きにしろ。その時は、どちらかが死ぬだけだ。大方、僕だろうがな」
何も言わぬ。未だ迷う少女を前にして、足は感覚を取り戻した。
「せいぜい、安全な場所で今のままを気取るがいい。ライダーのマスター。お前の役は、愚者が奪った」
これまでも散々奪ってきたのだ。今更これだけを返却するのは矜持が許せない。赦すことなどできない。
「お前はお前の居場所に帰れ。それでいいだろ」
そうして答えを待たず、その場を後にした。
風音のならないはずの室内でも、耳障りな音はやまなかった。
「ライダー。いるか」
発した声は、コンクリートに呑まれて消える。
人気のない放課後の一幕ですら、警戒しているのか、蛇は姿を表さなかった。明かりも照り、声も聞こえる校舎。いつも通りの、放課後の一幕。
それでも、人の気配はしなかった。同じように歩む人は、一人もいなかった。
独りであることを自覚しながら進む歩は、自然と少しずつ大きくなった。ようやく自分は特別に、異端になれたのかと、心は踊るべきだった。
そうだ。背負った荷物など何もない。軽くなった体で、なんだってできる。
ただ、歩いた。街中を通り、人混みを躱し、必死に何かを求めて、当てのない歩みを止められなかった。
学校を出ても、ひたすら歩いた。幻聴がいつか鳴りやむと信じて、ひたすら進んだ。
声すらならず、光すらも遠ざかり、そうして初めて警戒を解くように長い髪を揺らしながら大蛇が姿を表す。相変わらずわからぬ表情

と視線に、少しだけ苛立ちを覚えながら、道を歩いた。
「すみません。先ほどは」
そんな、微塵も悪びれてない声が、耳元で鳴るモスキート音を打ち消す。
「謝らなくていい。それとも、煽ってるのか」
「いいえ。どちらも。あの時あの場に現れるべきでないと思いましたから。それでも一応形式的にそう声をかけただけです」
「それならいい」
わざわざ少ない魔力を消費してまで、姿を表す必要はないというのに、怪物はわかったうえで隣を歩く。
視界の端に映る、肌色と、深い紫。時折触れる毛先に、消えた神経はいらだった。
「何か用かよ。ライダー」
皮切りにしようと発した言葉を、これでもかと女は無視をした。
思いきり左腕を振り女を殴っても、軸はびくともしなかった。顔に括った鉄仮面が、眩しそうに似合わぬ夕立にさらされている。
こちらの意図を無視して、ただ黙々と側にいるなど、いったい何と形容すればいい。
「消えなくていいのか」
「邪魔ですか？私は」
「言われなくても分かってるだろ」
目障りだと。ぐっと眉間にしわを寄せてにらむと、女はふわりと表情を柔らかく微笑んだ。消える様子は、全くといっていいほどない。
似合わぬ幼さに吐き気を催しながら、視線を前に戻した。
「いうことを聞かない獣だな。お前は」
「であれば持っているそれでも使ったらどうです」
「バカを言え。その瞬間、俺の首は身体と永久のお別れするだろ」
皮肉に笑いかけると、何一つ変わらぬライダーの顔が視界に焼き付く。
鞄に入った本を掲げて、使ってしまえば資格すら失う。
そうすれば、怪物の手綱は切れたも同然だった。セーフティーなし

で武装できるほど、肝は据わっていない。
「私もそこまで落ちぶれたわけではないと思いますが」
「よく言うよ。反英霊の分際で」
軽口をたたくライダーを珍しいと思いながら、鼻につく潮の匂いが聞こえる雑音を色付けた。
すでに半分以上落ちた日が、僅かな気力を振り絞って視界につなぎ留められている。その光景が、いつもより数段綺麗に見えた。
段々と沈む太陽が、遂には視覚から手放され。天は既にその軌跡を失っている。
「慎二」
「なんだ」
「血が出ています」
目線を下へ下すと、真っ赤に染まった包帯が少しずつほどけ始めていた。痛々しく、細々とほどける布。
認識したことで、じくじくと痛みが頭に走る。強く抑えたはずの包帯は、いつしか傷つき壊れていた。
滴る血が、今までの軌跡を表している。歩いた道のりが、鮮明に残るようだった。
灰色の地面に落ちた血を、足でスッと引き延ばした。赤黒く染まった道路は、もう元には戻らないようで。
まるで過去のように、広がる血は背にのしかかる。
「手を」
「いや、いい」
「本当にいいのですか？」
「いらない。傷口は、勝手にふさがる」
すでに機能を失った包帯を、力任せに引きちぎるように外した。何度も電流が走り、それでもこもる力は衰えなかった。
だらりと垂れた赤い糸が、少しずつ切れていく。かろうじてとどめたはずの血液が、少しずつ滲み出ている。
それらを、仕方がないと思った。替えの包帯を持ってくるのは忘れたし、傷は少なくとも命の危険があるほどじゃない。

すでに一度止まった血だ。しばらくすれば、傷は癒えよう。少なくとも、痛みが消える程度には。
傷跡がいくら残ろうと、痛みは勝手に引く。
「お前、血は出るのか」
「出ますよ。それが致命傷でないのなら」
「そうか」
英霊は、その核が破壊された時点で、自身の身体の崩壊が始まる。
壊れてしまうほど傷つけば、傷を作り出す前に、消滅が決まるのだ。
それが、少しだけ羨ましくなった。
「嗤ってくれ。ライダー」
思いのほか大きく出た声に、一番驚いたのは自分自身だった。
もっと、震えると思っていた。こんなにもはっきりと発することが出来るとは思っていなかった。
きっと、握りしめた手のおかげだと、そう納得した。
何も言わず、ライダーは堤防に背を預ける。すでに黒くなった影が、大きな体を覆っていた。
「何を、嗤えばいいのですか？」
「全部だよ。さっき起こったことも。今まで起こしたことも」
きっと、ライダーは見ていたはずだ。聞いていたはずだ。
なぜ、何を、桜に伝えたのかを。その時の自分の姿も。目を逸らした、少女の表情も。
目の前の景色は、息を飲むほどに美しかった。薄暗くわずかに光る星々と、暁色に染まる視界。手を伸ばさなくても距離がわかるほど、遠く儚いこの時だけの世界。
「こうしてみると、僕はどれだけこの町を知らなかったのかって思い知らされる」
何も知らなかった。何も知ろうと思わなかった。身近な世界を恐れて、井の中すら臨むことを拒絶して。
抑え続けた視野が広がって、初めて見た世界は、途方もなく美しかった。例えようがないほど、もう見れなくなるのが惜しいほど。
初めて、腰を据えて海を見た。隣に立つのが化け物でさえなけれ

ば、どれだけ映えて、どれだけ誇らしい経験だろうか。
こんな、毎日訪れるひと時に。どうしてここまで心奪われてしまうのか。
「なあ」
声を返さずに、同じ景色を見る女に、少し安堵した。
「これは、綺麗なんだよな」
「……　そうですね。私は、そう思います」
「そうか、お前も、そう思うんだな」
化け物と謗らないのですかとつぶやく怪物の声を右から左へ流して、今までの記憶を反芻する。見たことがないわけではなかった。今までだって何度も、視界には映っていた。
「気づかなかったよ。今まで、一度も」
ただ、それだけのことだった。
そう、日が落ちるまで前を向き続けた。止まったようなときは、過ぎ去るときにはあっという間だった。
また、夜が来る。寒さと暗さの中を彷徨う時間が、訪れる。
「一人で、立てますか。慎二。あなたは」
闇に溶け込む女は、手を伸ばすことなくそういった。明るさに慣れた目は、黒く彼女の表情を隠す。
その紫の髪が。風に揺れる色が。不思議なほど綺麗に見えた。
「今更だ。今更、誰かに手を取ってもらおうなどとは思わない」
傷ついた手を地面に強く押し付けて、反動で状態をあげる。
どろりと、血は噴き出すようにして赤を地に描く。
「それに」
痛むとわかっていて、そうした。それが無意味と知っておきながら、意図的に傷をつけた。
まるでそれを、赦しと思いたいが如く。
「僕はきっと、望んでたんだ。ずっと。こうなることを」
そういえばもう冬だったと、身体にまとわりつく寒気に触れて理解した。
独りで歩く暗い空は、わが身を取り込む怪物のように広大で。何よ

り冷たく芯に侵食する。
「嗤えば、あなたは楽になるのですか」
「さあ。やってみないとわからない。少なくとも僕には」
「ではどうしてそんなことを私に求めるのです」
その感情の無い瞳は、今の自分にとって心地の良いものだった。
血まみれの手を通して、己の犯した罪を見た。誰に糾弾されることもない。ただ、十字架として刺さり続ける傷を。
責められない代わりに、誰が許すこともない。永久に続く地獄の道を。
まるで、終わりの見えない迷い道。
それでも、もう踏み越えてしまった。
「だって。そうでなきゃ」
ずっと、望んでいたことだから。
「ここまで来た意味が、わからなくなるじゃないか」
軽くなった歩と共に、身体から湧き出す汚泥と、生まれていく空洞。
受け止めた喪失感で、すべてを理解した。
かき集めて作り上げた砂の城は、波に消されて溶けていく。
プライドをかなぐり捨てて。散々麻酔を打ち続けて持ち続けた屑はもうない。
欲しかったもの。愛したもの。愛そうとしたもの。
それらすべての残骸を、この手から手放した。この手にないと、認めた。
押さえつけていた瘡蓋がはがれ、感覚は痛みを取り戻していく。
消えていく感覚と反するように、鼻につく香が脳裏をくすぐった。
髪の甘いにおいも。
あふれる喘ぎ声も。
透き通る肌も。
柔らかな四肢も。
何も映さぬ瞳も。
悦楽に歪むその顔も。
脳裏に刻まれるたび、これが一生消えないことを知った。消せない

と知った。想い出すたび、侵食されることを自覚した。
罪の証。永久に許されない、眼を逸らし続けた痛みの記憶。
手を伸ばすことのできなかった。無力な誰か。
望まぬことと知りながら、穢し続けた光景。
涙は出なかった。
嗤いは漏れなかった。
ただ歩いた。夜が更けるのを待ちながら、ただ止まった歩を進め続けた。
どこへ行くとも知れず。ただ一人、最後を探して歩む道。
二度と呼ぶことの許されない名を。
二度と握ることの許されない手を。
懐かしむことは許されないと理解した。
ただ、もう。色濃く映る目の前の光景から目を逸らすことはできなかった。

「キャスター。どうだ」
少女がいなくなった居間で、少年は一人虚空に問う。張り詰める空気は以前の形相とは全くといっていいほど異なっていた。
冷たく乾き、痛みを伴う寒気が、居間を覆う。先ほどまで動いていたはずの空調は一切の機能を失っていた。
「可能よ。あとは、時間さえあれば」
女は、無感情にそう伝えた。男は決意をその瞳に映して、再度女に問いかける。
「了解だ。どのくらい必要になる」

「せいぜい数秒程度ね。何なら先ほどやってしまってもよかったのだけど」
「それは」
「嫌だったんでしょう。わかってる。だから、この件は考えなくていいわ。別にそれは、あなたの弱さじゃない」
力ない声色と共に、見えない女は、しかしその目線を男から避けた。それ以上何かを発することもなく、けれどその身は少しずつ形を表していく。風に揺れるローブが、時折女の表情をのぞかせた。
男は庭の方向に視線を向ける。
虚空が揺れる。蠢く大気が少しずつ色めいて、現れたのは紫の影。
その大きな肢体と、長い髪が、月の光によってより蠱惑的に際立つ。
手に一切の武器を持たず、女は男の方へと歩いた。
言葉を交わすことはなく。しかし一言のみを告げて影は消えた。
その守護すべき少女を一目見ることもなく、幽霊は霊体へと戻っていった。
たった一言。言葉を残して。

第11話

電話の鳴る甲高い音が、居間に響く。耳慣れない音は痛む頭を揺らして、遠く沈んでいた意識を呼び覚ました。

眺める時計の針を見て、用件は察せられた。グッと手に力を込めて、少しだけ揺れる視界を支えながら立ち上がる。

襖をあけて廊下へ出ると、肌寒い寒気がふと頬に当たる。明かりのついていない、僅かに刺さる日光の光を頼りに、音の鳴る先へと歩を進めた。

電子音を立てる存在を目の前にして、何をすればいいのか、わかってはいたが手は動かなかった。今まで一度も取ったことがない受話器。誰かからの便りなどなかった人生。だから、それはとても遠い行為で。目の前に現れた怪物に、足がすくむようだった。

ふと、頭に浮かぶ情景。遠い昔、何度かしたことがあったシュミレーションの中で、私は最初何と言っていただろう。遠く感じなかった、待ち望んでいたころの。待ち望むことが出来た私なら、どうしただろう。きっと今それを繰り返すのは、きっと間違いで。

震える手を抑えながら、受話器に触れる。妙に冷たく感じる塊を持ち上げて、温かい耳元にそれを当てた。

〝はい。衛宮です〟

そう告げる声は思った以上に淡々と流れ出た。いともたやすく、私はその名前を名乗りに使っていた。

それは、いったい何を意味しているのか。ただ、ここの家主の代理として出した声に、そんなことを思っていた。

相手は予想していた通りの人で、耳元でなるその声に、私は動揺しないよう必死に震える手で受話器を握り締めた。

衛宮を名乗った私に、少しだけ戸惑い、少しだけ笑った彼女は、嬉しそうに言葉を続けた。

その声は、聞きなれないもので。違和感となって直接体に入ってくる。

本題はわかりきっていた。彼女がいるその場で何が起き、その結果

彼女は私がいないことを願って、電話をかけてきたのだ。
それが表すことは、少なくとも悪いことではなくて。少なくとも彼女の勘定の中に私がまだいる余地があって。
それでも、こみ上げる感情は喜びとは言えなかった。
そんなことは露ほどにも思わず、彼女はこの特別許された状況を楽しんでいた。きっとその場にはそぐわない声色で、彼女はこの行為においてはもうとっくに目的半ば、ほとんどをすでに果たした後だったけれど。その数十秒間の時の価値は、きっと私たち以外誰にも推し量ることは出来ないもので。
でも、私の時は止まったままだった。むしろ、体の中からこみあげてくるのは吐き気に近いもので。今すぐに繋がりを切ることを許されるのなら、私はすぐにでもこの手を降ろしてしまいそうだった。
何も知らない彼女は、どんな気持ちで私に声をかけているのだろう。今、彼女にとって私は、どんな彩色で描かれているのだろう。どうして、今更、電話をかける必要があったのだろう。
いったいどうして、今更私はこんなことを考えなければいけないのだろう。
そんな疑問が、私の脳裏を満たしていく。ジワリと蝕んでいく泥が、私の意思を少しずつ塗り替えていく。
耐え切れなくなって、彼女を少しだけ急かした。意図を察したかはわからない。それは期待できなかった。
彼女はすぐに二度目を示唆する一言を残して、残ったものは僅かな空気だけ。そこにはもう電子音だけが過ぎていった。
ガチャリと大きな音を立てて、受話器は元の場所へと据えられた。与えられた情報が、無機質な叫びとなって頭に甲高く響く。
襲い掛かる重さは、何と形容すればいいのだろう。
伸ばさなかった手が。傍観者でしかない傷痕が。加害者であることが。償いを知らない咎が。
いつまでも、受話器を置いたまま。進まない時の中で顔のあげ方を知らずにいる。
とっくにそこに立つ資格を失っていた。何も足掻かず、何も伝え

ず、ただ流れた時をそのまま受け入れた。
その結果、何人が死ぬのか、私にはわからない。その結果、いくつの苦しみが生まれるのか、私には知ることが出来ない。
それが望んだことだったのか。こんなことが、私の望んでいたことなのか。そう、自答すればするだけ、答えは当たり前のように突きつけられる。
いつまでも止まらない震えを抑えて、必死に態勢を戻した。
すっと口から息を吸った。籠もる熱を逃がすように体内に浸透する寒気に、少しだけ安心を取り戻した。
そうして、深く深く息を吐きだした。描かれた白い煙が目の前を紛らわしていく。
それでも、どれだけ吐き出そうとしても、鼻につく鉄臭さは、いつまでたっても消えなかった。どれだけ消そうと思っても、消えてはくれなかった。

「さて。それじゃあ行きましょうか」
校門の前に立つ少女は、そうつぶやいて先ほどまで耳に当てていた携帯をポケットにしまう。期待を込めて。あるいは確認として鳴らしたベルに価値があったことを確認した彼女は、強くにらむように待つであろう存在をにらみつけた。
「もういいのか」
「いいわよ。相手が誰かは察しがついてるから。目的は済んだし。今じゃなきゃできないわけじゃないもの」
「それならいい」
いつも通り赤いコートに身を包む彼女の目は、声色とは大きく違って冷ややかで。すでに身体はエンジンのかかったものに作り替えられていた。
その隣にはすでに赤い外装を帯びた男が立っている。その手には

まだ武器は握られていないものの、彼にとってはそれが一番の警戒体制であるかのように、その姿は泰然と当たり前のように存在していた。
「行くぞ。マスター。此処からは、ただの殺し合いだ」
その声と共に、紅い二人の男女は校門をくぐる。
応えるように、待ち構えたかのようにすぐさま視界は朱く染まっていく。
重くかかる重圧と、穢れた空気。三半規管を揺らすように歪む感覚と、わずかに体内を蝕む空間を感じながら、少女は急ぎ歩を進める。
わかっていた光景ではあるものの、一手遅れたことを認識する。
敵は待っていた。他ならぬ少女たちが訪れることを。サーヴァントにはすぐにでもわかるように反応を残し、結界に動力を流すそぶりを見せ、わざわざ奇襲の手を捨てる選択を選び。
それはまるで正面からの戦闘を望んでいるかのようだった。
しかも、起動は少女が入ってからで。それが、何のために行われているのかなんて、明確だった。
意味をまだ持ち得ないと思っていた、形だけの結界。本領を発揮するのにはまだ時間が必要だったはずのものを、なぜ敵は動かしたのか。魔術において半ば潔癖である少女には、当初はそれを理解することは出来なかった。
そこはまるで怪物の胎の中だった。飲み込まれたのは学び舎に募る多くの若者。深紅の祭壇の中に放り込まれたのは自分たちの方だと、強い敵対行動に握る手は強くなっていった。
「アーチャー。敵の居場所は」
少女は斜め上を見上げ、目を細めると、そう声を漏らした。隣の弓兵は上方を一瞥し、それに応える。
「4階、教室内だ」
「外から狙撃できる？」
「可能だが他にも生徒がいる。もちろん当てないようにはできるが」
「なしね。私を狙っていることは明白だもの。クラスがわかっている以上対策していないわけがないわ」

少女の検討は的を射ていた。その実、窓に近い場所には当然のように生徒が並ぶ配置がされていて、余波を考えればそれらを傷つけずに攻撃を加えることはできないことは明白だった。

相手の行動は、間違いなく少女を害するための、悪意のある行動だった。そして、事も有ろうにそれを彼女の学び舎で。日常の象徴で起こそうとしている。

正門から廊下へと歩を進める。そこには衰弱したというよりは糸の切れた人形のような人影が多く見えた。だらんと力の抜けた四肢と開いているにもかかわらず何も映していない瞳が、それらの形相を痛々しく、生々しく伝えてくる。このままで放置してしまえば、人の形を保てず、ものの数分でその姿は見るも無残な遺体へと変わっていくはずだ。

少女はグッと、強く歯を噛んだ。

悔しさと怒り。タブー視していた、一般人をここまで直接巻き込む行為。そしてそれが自分に有効であることが、強く彼女自身の気を逆なでしていた。

見慣れた姿が倒れている異界を流し見て、揺れそうになる感情を制御して、少女は階段を急ぎ走る。

駆け寄ったところで意味はなく、できることなどないことがわかっていて、それを見過ごすように走り去っていくことに少しの罪悪感を抱えながら、少女は敵の待つ教室の扉に手をかけた。

その姿は予想していたものではあったけれど。その形相は予想を大きく裏切るものだった。

机や椅子は綺麗に前後に寄せられ、窓の方には壁を背に十数人の顔見知りの姿があった。意識の無いことは明らかで、既に僅かに肌の溶けている重傷者もいた。

中心に待ち構えるように立つ少年は、表情を変えず少女の方へと振り返った。その後ろには紫の髪をした女性が、手に見覚えのある顔をした人形の首をつかんでいる。

その首筋から伸びる吸血痕は、普段の彼女とはかけ離れた痛々しさ

と妖艶さを演出していた。
やはりと思う反面。脳裏には疑念が走った。
しかし見えない理由に困惑する前に身体は反応を起こし、ポケットに手が伸びる。それに応えるようにアーチャーは手元に武器を持とうとした。
しかし、それは叶わなかった。首筋に当たる指先がその体にめり込んでいく姿が、本能よりも先に理性を働かせたからだ。
少年はその様子を見て少し嗤った後、少しばかり合図を出す。するとすぐに後ろの女は指先を元の位置へと戻した。
「……随分な様子じゃない。慎二。あんたにこんな度胸があったなんて」
ポケットからは手を出さず、息を吐き出すように、声を出した。漏れそうになる怒りと焦燥感を抑えて、歯を噛みちぎってしまわないように強く言葉を吐き出す。
目の前の少年は、その返答に驚くように目を見開くとともに、自嘲的に笑いながら口を開く。
「それこそ遠坂らしくない発言だ。それとも、僕に対する評価は変わりそうかい？」
「ええそうね。これ以上落ちぶれない程度には、あんたのそのまともじゃない思考に対して失望できそうよ」
「そいつは意外だよ。遠坂が僕に失望できるほど期待していたなんて」
「無関心から軽蔑になっただけよ。それとも振り向いてもらえて満足かしら」
少年の軽口に乗りながら、平静を保ち現状を観察する。
赤い空は依然として変わる様子はなく、その主は目の前にいる女とみてとれる。クラスはライダーで間違いない。
そこまで優秀なステータスを保有してはいなかった。アーチャーとの直接対決なら、万に一つも負け筋はないだろう。どれほど宝具に自信のあるサーヴァントかは不明ではあるが、自負と自信故にも、魔術師としても負けることはありえないと断言できた。

それ故に問題は、そこではなかった。
「綾子を、離しなさい」
ライダーに掴まれた少女は、ある一人を除き尤も目的に沿った人質だった。
ハリのある活気を持った表情はそこになく、息をしているかどうかも怪しいほど死に体なそれは、自身と敵の間で大きな役目を負えてしまっていた。
歯がゆさと同時に、籠る怒り。想像していた何十倍も、その感情を制御することは難しかった。
だが、それを表面に出してしまえば、効果的であると晒すとことと同義で。そしてそれは、何を意味するかは明確だった。
だからこそ、歯がゆさは増すばかりだった。
それを抑え、少女は口を開く。
「人質として使いたいのは目に見えてわかるけど、お生憎様。意味ないわ」
震える声を抑えて突き放した声が、睨み合い静寂に包まれた部屋を満たした。
少年は数秒沈黙を続けたのち、抑えきれない笑いを零した。歪む口元と同期したように身体がくの字に曲がり、抑えるように腹を抑えたのち、両手を開くようにして少女に向き直る。
「じゃあ撃てばいいじゃないか。その懐に入れたものを。もしくはお前の隣にいる今にも動きたそうな木偶の坊に命令でもすればいい」
「無駄死にだって言ってんのよ。わかってんでしょ。あんた、そんなもの使おうと使うまいと、勝ち目なんてないって」
「そうは思わないから、ここに立ってる。それぐらい、優秀な遠坂ならわかるだろ？」
一瞬だけアーチャーに目線を向ける。いつもなら余計な一言を挟みたがる隣の男は先ほどから黙ったままだ。
しかし、何が言いたいのかはすぐにわかった。それは、彼が手にすでにもった武装がすべてを象徴していた。
撃つべきだ。今すぐ。時間は、過ぎるだけ不利になる。それは、わ

かっていることだ。例え、その結果で親友が死ぬとしても。
その思考のノイズを、目の前の少年は見逃さなかった。
「撃てないよな。遠坂には」
見透かしたように少年は迷わず言い切った。それも僅かに軽蔑の混ざる声で。先ほどの笑みはそこにはなく、言い放つ声は冷たく、答えを知っているかのように断定する個々の言葉は、それぞれが凶器だった。
「撃つべきだった。お前はこの部屋に入る前に。いやむしろ、結界が展開されてすぐに、窓から遠距離で回避不能な物量をぶつけるべきだった。そうすれば、死傷者は数人。被害も最小限で済む。それが、遠坂に課せられた義務で、そして今回、お前が許容できる罪だった」
何を言っているのか、意味を理解するのに時間がかかった。その正論を、目の前にいる男が言っている事実自体。信じることが出来なかった。
だけど、今そこに思考を割くわけにはいかなかった。
「何を」
「だがお前は、こいつを離せといった。本当なら〝結界を止めろ〟というべきなのに」
ぐにゃりと少年の表情が歪む。張り付けられた笑みは、普段通りの意図とするなら、優越感と名付けるのがきっとふさわしいだろう。だが違う。それは、よく似ていて非なる感情だ。
それは、強い侮蔑だった。
「甘いな遠坂。お前がそんなだから、僕はこいつを起動した」
その言葉に込められた意味は、たった一つだけ。
〝お前の欠点が、これだけの人を殺す〟
事実だと、思考は冷静にそれが正しいことであると認識する。それは紛れもなく、言い訳のしようもないことで。
だけど、今そんなことに頭を割いている場合ではなかった。
現状を打破するために必要なのは何か。人質を無傷で奪還し、手遅れになる前に結界を止めさせる。
そのために、最も効率的で、確実な手は。

そう数コンマの内に考え抜いて、そして、口を開いた。
「それで。あんたはマスターにでもなれた気かしら」
自分自身で驚くほど、その声は狙い道理の声色だった。
「……何が言いたいんだ？」
「確かに有効でしょう。効率的だし、あんたの考える状況にするにはぴったりね。まるで、玩具の使い方を知った子供みたい」
まず、前提として目の前の少年は私たちが動くことで人質を殺せるだろうか。
おそらくは否。本当に人質の価値を吊り上げたいのなら、すでに数人は殺しておいた方がリアリティがあった。本気で運用をするなら、先にいくつか餌を喰らっていたほうが効率がいい。だが、そうしてはいない。まだ、その一線は越えていない。
「中途半端なのよ。これだけ大々的に巻き込んでおいて、やってることはてんで甘い。実際、結界なんてカードを切らなくても、人質ならすぐにでも用意できたでしょう」
本気で行動を止めたいのなら、もっと適した人がいた。少なくとも、現状絶対に選択肢が出ないような。
その一線を超えれば、あとは命の奪い合いしか残らないような選択肢もあったはずだった。
それに、結界である必要もなかった。ただ誘拐でもしてくるか、数日待って完成間近で脅しに使うべきだ。効率だけを考えるのなら。
「まるで、この宝具を使うことが目的みたいね。そんなに、そのおもちゃがお気に入りかしら」
覚悟がないのはどちらだと。カードの強さを誇示しようとしていることが目に見えてわかる。
そう考えているように見せることが、この場における最善だった。
実際は違う。現実はそうではない。現状は極めて有効的で、考えられた絶妙な配置であることは間違いない。
だがまずはその認識から崩さなければ、手綱を握られた状況を変えられないと、少女は確信していた。
「そんなことでマスターに。魔術師に成れたと思っているなら、勘違

いもいいところだわ。あんたがやってることは、責任感の無い子供の癇癪と変わらない」
まずは、彼の受動的な姿勢を崩させる。謝罪を求めるならそれも良し。力を誇示しようとすれば隙が生まれる。
だから、理由を与えてあげなければいけない。彼が、能動的に、殺意を向けてくるように。
そのためなら、彼の琴線を引きちぎってでも。
「衛宮君はいないようね」
顔色が変わる。それは、目に見えた変化だった。
「よかったじゃない。あんたが目の敵にしてる彼がいなくて。怖いでしょう。あんたにないものを持っている彼が」
「……」
「少なくとも彼はわかってるわよ。引き金を引くという行為が、どれほど重いものなのか。マスターという地位が、どれだけ重いものなのか」
選択しなければいけない。何が、敵を一番傷つけるかを。どの言葉の刃が、一番彼を蝕むかを。
耐えられない傷はなんだ。目の前の少年が、絶対に耐えることのできない痛みとは何であるかを。
「あんたは、衛宮君のようには成れないわ」
一瞬の空白の中で出た結論は、あまりに陳腐なもので。しかしそれ故に、少女の中には確信があった。
だけど、その反応は予想していたものとはかけ離れていた。
「ああ。そうだよ。僕は、あいつのようにはなれない」
その言葉を聞いて、外したと思う前に、訳のわからない正体不明の悪寒を感じた。目の前にいる存在を、何か取り間違えている。
最初から、見逃していた大きなずれと、間違い。決定的に前提が間違っていたことを。この数回のやり取りですら、何の意味すら持たなかったことを。
「そんなに困惑することか？お前があいつの名前を出して、僕が憤らないことが」

少女の心境なんて微塵も気にしないように、少年は話を続ける。その顔に怒りは一切なく、むしろ清々しささえ感じ得る。
「正解だ。遠坂。僕は衛宮のようには成れないし、成る気もない。マスターであることが疑わしいのは、僕が無力であるが故だ。そんなことは言われなくても分かってる」
「……じゃああんた、自分が何してるかわかってんの？」
「わかっていないのは遠坂だ。僕たちがしてるのは、決闘でもなければ殺し合いでもない」
少年は近くに寝る同級生の腹部を強く蹴りつけた。本来であれば嗚咽くらいは漏れるであろう威力であったのにもかかわらず、人形はばたりとその体重ゆえに床に寝転がった。
その様子を冷ややかに眺め、そして少年は明確に吐き捨てた。
「これは、戦争なんだろ」
少年は懐からナイフを取り出す。刃渡りはそこまで長くないにしろ、人を殺すのには十分なものだろう。
それを鏡のように自らの顔を映して、少年は再び嗤う。
「お前も、まだ何もわかっちゃいない。僕たちがどんな舞台に立っているのか」
「さっきから何を」
「お前はさっき言ったな。魔術師に成れたと思っているならって。悪いけど、そんなことはこれまでも、そしてこの先も決してない」
先ほどから変わらず少年を後ろにいた女は、まるで場所を調整するように少しだけ動き出す。
悪寒がする。よく見ると、その後ろの窓だけが、全開になっていた。
「さて、長話もいいが、時間がたてばたつほど有利になるのは僕たちだ。このまま話して有象無象の生徒たちを見捨てるってのがお前の矜持なら、止めないけどさ」
女は肩の高さまで持った首をあげる。
そこには意識の無い開いた眼と目線があった。しかし未だ生きている。人形なんかじゃない、苦しそうに呼吸をする親友が、そこにはいた。

「何を、する気」
　問わずともわかった。配置を見れば、意図を読めば結論なんてすぐに出る。でも、そういわざるを得なかった。体を走る慣れない悪寒が止まらなかった。
「簡単だよ。僕は今からこいつに美綴を外に向かって投げさせる。人質を解放してやるんだ」
「そんなことをして何の意味があるっていうの」
「別に。僕は人質がいなくなって無防備になる。サーヴァントは僕の方が劣っているから殺すのも簡単だろ。そうすれば、結界は止められる」
　確かに、数十秒あれば、敵対する二人を殺すことは出来るだろう。すでにずれ始めた肌を見る限り、残されたときはそう多くはない。精々が数分。それを超えれば、もう取返しはつかない。
　でもそれは。
「だが、そうすれば美綴は死ぬだろうな。あいつも普通の人間だ。４階から受け身も取れずに落ちればあっさり死ぬだろ」
　想像は容易かった。地上に拉げて真っ赤な花を咲かせる親友の姿が、ありありと目に浮かんだ。
「嫌ならそこの隣にいる男でも差し向けてやればいい。英霊様だ。落下速度より早く拾うことくらいできるだろ」
「やめなさい。慎二。あんたがしようとしてることは」
「決めようじゃないか。命の値段ってやつを。条件は同じだ。どちらも無実のただ巻き込まれた一般人。違うのは、お前との関係性くらいだ」
　美綴を救うようアーチャーに命じれば、この室内にライダーに対抗できるものはいなくなる。一人では防戦一方だ。少なくとも、数手以上不利になることは明白で。それじゃあ結界を止めるのが遅くなる。最悪、死者が出るかもしれない。
　逆に、見捨ててしまえば容易い。直接戦闘を仕掛けさえすれば、数回の打ち合いで決着はつくだろう。
　ナイフを構えた少年の瞳には交渉の文字はなく、それが数秒後に起

こる結末だということを明確に伝えてくる。
吐き気がした。選択肢を出した自分自身に、途方もない拒絶感を得た。
だってそれは。
「選択だ。たった一人の親友と、有象無象の他者。御大層なこと宣う魔術師様ってやつなら、容易い問答だろ」
この少年は、決めろといっているのだ。命の値段を。何を価値とするかを。
優先順位を、定義しろと。そんなことのために、男は美綴の命を、生徒たちの命をまるでボロ雑巾のように使っている。
一度でもそんなことをしてしまえば。
「……あんた。それは、越えちゃいけない一線よ」
「それがどうかしたか？」
「戻れなくなるわ。もう」
「その問いは些か遅すぎるんだ。むしろ、僕がお前に言うよ。もう戻る道なんてない。僕も、お前も」
手元に宝石を握る。頭に走る迷いを消して、今やらなければいけないことのみに注視する。隣に佇む男は、意図を読んだかのように手元の剣を遊び始めた。
少年は続ける。それが、当たり前であるかのように。女は、その腕に力を込めた。
「覚悟がない。それはいったいどっちの事だろう。遠坂。お前の魔術師としての誇りってやつは、いったいどれほどの強さを持ってるのか、少し興味があるよ」
軽々と投げられた人形の身体は、窓から綺麗に宙へと投げ出されていく。外へ吸い込まれていくその姿と視線が交わった。
感覚が研ぎ澄まされて、一瞬がとてつもなく長いものに思えた。コンマ送りにされる視界に、自分の身体が付いてこないことを歯がゆく思う。
洗練された動きで手に握りしめた宝石に魔力を流し、脳裏に強く刻まれた呪文が口からもれ出ていく。

すでに隣に男の姿はない。何を求められているのか、瞬時に判断しているはずだ。そう信用しているからこそ、できる限りの込めた魔力で渾身の一撃を放つ。
そう、腕を振るう前に。その先の何かと、目線を交わした。
色素の抜けた、彩の無い瞳を。

樹木の匂いが満ちる懐かしい山道を登りながら、死臭のする森を歩いていく。
さらりと乾いた香が鼻を通る。季節柄落ち枯れ果てた葉が音を立てていて、少しだけ足を取るように絡まってくる。
しかし、体力的な疲れはなかった。すでに見慣れた道だ。目をつぶっていたって、進むべき道行きは手に取るように分かる。
呆れるような顔で先ほどからキャスターは後ろについている。未だ止まらない足と、文句も言わず進んでいく姿は、彼女にとっては少し疲れるのだろう。故に、呆れるような声が後ろから響いてくるまでに、そう時間はかからなかった。
「大変ね。人間って」
「唐突にどうした」
「そんな馬鹿正直に山中を歩いている姿見てると、一言くらい挟みたくなるわよ」
「若いし鍛えてるからな。これくらいならなんとも」
「……　口の利き方には気をつけたほうがいいわよ。坊や」
強い舌打ちと共に、キャスターの冷たい声が響く。いや別に年寄り扱いしたわけではなく、単に自分はまだこういうとこは得意だということを示したかっただけなのだけど、琴線にぶっ刺さったようだ。最初とは、大きく口調が変わってしまった。
「はあ。後ろからついていってるのも退屈ね。ずっと興味もない男の

背中眺めてるのって結構しんどいのよ」
「しょうがないだろ。それが一番消費が少ないんだから」
残念なことに、魔力は遠坂とは比べ物にはならないほど多くないのにもかかわらず、現在二体のサーヴァントの飯を食わせている状況で。実際、正面から大規模な戦闘をしたり、長距離の転移なんて使ったら普通に許容範囲を超えてしまうのが現状である。
そのため、どれだけ文句を言われようとも、あまりむやみやたらに燃料を割いてはやれないのである。
「さっさと魂食いを始めてしまえばいいのに」
「もう少し経ったらな。今だと、めんどくさいことになる」
キャスターは呆れたようにそうつぶやいた。
現状キャスターは半ば脱落したという認識が強い。すでに始まっていた魂食いが止まり、そのタイミングで柳道寺の意識不明事件が起これば、大抵の魔術師なら何が起きたかは予想できる。
だが逆に確信もない。再開されればまた彼女の関心はキャスターに戻るだろう。それは多少仕方がないにせよ。タイミングとしてはまだ早かった。
どうせ、キャスターの魂食いとは比べ物にならないことが、冬木の町で起こるのだ。であれば、それまで待ったとしても支障はない。
「今だけはサーヴァントであることを喜ばしいと思うわ。霊体化って楽だもの」
「お前、受肉したとして、どうせ自力で魔力生成できるようになったら道なんて歩かないだろ」
「現代に生きていくのにわざわざスーパーまで転移使うような主婦がいるならそれもそうね。受肉するの、やめようかしら」
「……まあ。その辺はお任せしますよ」
先の未来に不平を漏らす自称主婦はさておいて、そろそろ2時間が経つ頃だ。
本来であればもう少しかかるだろうが、こちとらすでに慣れ親しんだ道である。もうすぐ到着するだろう。
「最後に確認するけど、本当にこの方法じゃなきゃいけないの？」

そう、姿の見えない背後霊は先ほどとはいくらかシリアスな声色で問う。
「散々昨日話したろ。納得してたじゃないか」
「納得はしたわ。でも理解はしてない。賛同もしてない。他の手があるなら、これまでの無駄な時間を返上してでも引き返したいところよ」
「無い。どっちにしろ、いつかはやらなきゃいけないことだ。それなら、他の手が干渉しない今が最善だよ」
今なら、一番見られたくない存在は手一杯だろう。少なくとも干渉することは出来ないはずだ。
自宅にいるセイバーには合図をお願いした。そのタイミングに合わせて突入が出来るよう時間も調整済み。あとは、返事を待つのみである。
「大体、やっぱりセイバーを置いてきたのは賛成できないわ。理由はわかるけれど」
「仕方ないだろ。現状、桜の近くにサーヴァントはいなきゃいけないんだから」
「もしそれを仕方ないと断じれるなら、私はとっくに坊やに賛同してるわよ」
怒りのにじむ声で刺してくるキャスターを苦笑いでごまかしながら、再び歩を進める。
セイバーの合図が来た。予想通り、決行にも問題はない。
「皮肉なものね。加護下にあるはずなのに、その近くに凶器がなければ成り立たないなんて」
珍しいなと、正直驚いた。今の発言は、桜を慮っての物だった。
桜は今、半ば人質の立場をとっている。もちろんそれを彼女を狙う刺客、特にアサシンから守らなければいけないということは変わらない。
だが、それはセイバーを置いてくるリスクとは比べ物にならない。そもそも、臓硯が桜を害したいなら、すぐにでもそれは可能だろう。
重要なのはむしろ、衛宮士郎という人物が、桜の肉体にいつでも干

渉できる状態を保っていることである。
　現状あり得るのは乗っ取りか殺害。そのどちらもが、奴との仮の契約によって止められている。それが成り立つ条件が、そもそも彼自身を殺すことなのだ。彼は命の脅かされている状況だからこそ、その最後の一手に踏み入ることが出来なくなっている。
　だからこそ、桜を加護下に置くには、彼女をいつでも殺せる立場になければいけない。
「やることは最初から何も変わっちゃいないさ。桜を生かしたいなら、死なない以外のことはすべて選択肢に入る」
「そんなことはわかってるわ。そのために私がいるんだもの。もし感覚を共有するまで乗っ取りなんてしたら、むしろこっちが優勢になる。だからやらないのよ、あの蟲は」
　いくら狂人とはいえ、所詮枠を外れた程度だ。欠片も残さず壊していいという条件なら、容易く壊せる。そう、隣の女は自負していた。
　そうすれば、もう一人の大切な人の魂は、死を除くどれだけの尊厳を踏み荒らされるのだろうかと、危惧する必要もないほど事実は明らかだった。
　それをしたくないのなら、そんな目に彼女を合わせたくないのなら。その引き金を容易に引けるようにならなければいけない。そうでなければ、意味を成さないのだから。
「それでも、賛同はしないわ。坊やが今からすることは、私にとってはまだ自殺と何一つ変わらないもの」
「それこそ珍しいな。そんなに心配か？」
「当たり前でしょう。それくらいわかってるくせに聞いてくるところ、本当に気に入らないわ」
　しかし怒りを何一つ見せない声色で、キャスターは言い放って姿を表した。ローブを深くかぶっているから、今はその顔を覗き見ることは出来ない。
「どんな形であれ、私は貴方に賭けた。私達の未来を。だから、それが死にに行くようなことしたら、止めない理由がないわ」
「お前は、戦力をどう見てるんだ？」

「昨日のセイバーと同じ感想よ。それすらわからないのなら、今すぐ無理やりセイバーの元に送りつけてやるわ」
フードからでもわかるほど呆れが伝わるジェスチャーと声に、頭を掻いた。
それを言われると弱かった。セイバーを盾にされてしまうと、何か言い返すことすらできない。
昨晩、計画を伝えた時、むしろ怒っていたのはキャスターの方だった。それはそうだろう。はたから聞けば無謀とすら言い難い。ただの自殺志願者だ。蛮勇ですらない。
どこまでも理性的に、対面する相手がどれだけ強大であるのか。どれだけかけ離れた存在なのか。それはキャスター自身にも当てはまっていた。だからこそ、その言葉は強く説得力を持っていた。
でも、セイバーは何も言わなかった。まだ数日間だけれど、信頼もしている。彼女は衛宮士郎の知っているセイバーではないけれど、それでも信頼しないという選択肢はない。
そんな彼女は止めなかった。彼女はただ終始無言で。キャスターとの討論が終わって、曲げない意思と理由と説明した後に近寄って。手を握った。
〝止めない。止めないから。シロウ。お願いだから、帰ってきてくれ〟
そう一言だけ言って去った彼女の瞳は、きっと忘れられないし、忘れるべきではないのだろう。そのセリフは、何よりもセイバーの心境を物語っていた。
彼女がわずかでも勝ち筋を信じているなら。浮かんでいるのなら。
〝お願い〟なんて言葉は、死んでも使わないはずだから。
「ゼロよ。絶対に。手も足も出ないわ。それでも行くのね」
「ここまできたんだ。どうせ、敵さんも逃がしちゃくれないさ」
「わからないわよ。全力で頭下げれば、転移する隙くらいくれるかもしれないじゃない」
「おっと。キャスターにはプライドがないのかな」
「命に勝るほど、私の頭は重くないわよ」

森を抜けると、大きく開けた空間へと出る。目の前には外敵を阻むよう建造された要塞にすら見える城が聳え立っていた。深窓の令嬢と、それを護る戦士の居城。ピリピリとした感覚が、強く体に走る。

死地へと挑むというのに、口からは笑いが漏れた。緊張はない。命がけで戦うことは今更だし、現状を見ればどれだけ余裕のある状況だろう。たとえ失敗したとしても、全てが打開してしまうわけではない。絶体絶命というわけでも、今から誰かを殺すわけでもない。

それでも勝手を震える手を、抑えるように握り締める。

全身に回した魔力と同様に、キャスターによる強化が入る。実際に自分の身体を通すのは初めてだった。

これなら想定通りの身体能力で挑めると、内心少し安心する。無論、今から待ち受ける存在にとっては微々たる力ではあろうが、それでも無いよりは数千倍いいだろう。

キャスターの魔術でふわりと浮き上がり、上方から大きく開けた空間へと足を降ろす。

てっきり侍女が待ち構えておろうかと思ったが、そんな様子もなく、眼前に広がる白く大きな庭は異物であろう自分たちすら迎え入れてしまうほど、存在感を放つ。

吟味するように花を横目に見るキャスターは、敵地であろうにもかかわらずその余裕を微塵も揺らさない。むしろ、そこからアインツベルンの魔術の破片を集めているようにも見えた。

「キャスター」

「何かしら。用がなければ話しかけないでほしいのだけれど」

「さっき、聞きそびれたことがあった。今のうちに聞いておいていいか？」

「いいわよ。あまり癇に障らないものなら。貴方が五体満足で帰れるとも思わないし、冥土の土産に答えてあげる」

妖艶に笑うキャスターの言葉はどこか信憑性というか、予知のようなものを感じさせる。そのためか、背中に奇妙な悪寒が走る。本当に、縁起でもない。

別に質問といっても、本当に些細なことだ。今聞く必要性はない

し、答えを聞いたからといってどうなるという問題でもない。
「魂食いだよ。お前、いいのか？」
「……　さて。あなたが聞きたいことがわからないわ」
「別にわからないならいい。それがお前にとって重要じゃないなら、俺がこれ以上問い詰めるべきじゃない」
「あら、そんな淡白でいいのかしら」
……　軽い口調で話すキャスターに、ムカッと来たのは悪くないはずだ。
「お前なあ。これは別にふざけて聞いてるわけじゃ」
「わかってるわ。だから、今はこの程度にしましょう」
声色が固まるキャスターに諭されて、前方に注意を向ける。何を言うこともなく、半身引いた体でその手が示唆するのは、招きだった。
侍女の一人が場違いなほど美しい礼をこちらに向ける。何を言うこともなく、半身引いた体でその手が示唆するのは、招きだった。
まさに、敗北を知らない強者の佇まいである。馬鹿馬鹿しくて思わず笑いがこぼれそうになった。それはキャスターも同じようで、顔を合わせると笑いをこらえるのに必死だった。彼女は手で口元を覆って、くの字になりそうな体を必死に抑えている。
落ち着きを取り戻すまでそうして、廊下を少しだけ歩いていくと、大きな玄関へと続く曲道にもう一人の侍女が佇む。その先に何がいるのかは、嫌でも察しがついた。
キャスターも覚悟を固めたように、持っていく魔力が大幅に上昇する。
互いが玄関へと足を踏み入れると、目の前にいる少女が嫌でも目に入ることになる。
「駄目じゃない。シロウ。客人は、玄関から入らなきゃ。せっかく、お出迎えしようと思ったのに」
たった一人、ぽつんと佇む少女。嬉しそうで、どこか信じられないようなものを見るように怪訝な視線を向ける彼女は、絞り出すようにそういった。
「ねえ。私の家に訪ねてきてくれたんでしょ。シロウ。だから私、わざわざ一人で待ってたのに」

そう明るい声色で語り掛ける少女は、間隔を取ったまま手招きをした。
いつもとは違う、遠くかけ離れた距離感が、そこにはあった。
「訪ねてはきたけど、公園で会うときとは、違った意味でここに来た」
「まだ昼にもならないじゃない。だったら、そんな顔するのは間違いだわ」
そう駄々をこねるように頬を膨らませる少女の隣には、守護者はいなかった。
キャスターは動かない。今動いたところで、たとえこの場に姿が見えないとしても、無為に終わるだけと知っているからだ。
少女はそんなこと微塵も考えず、まだその明るい姿を変えない。
「昨日案内されたんだから、今度は私がこの城を案内してあげる」
「いや、あいにくそんな時間はないんだ。用が済んだらすぐに帰るよ」
「……ふうん。そうやって拒絶するんだ。シロウのくせに」
いじけたように、少女はそっぽを向く。まだその姿は、いつも通りの幼さを残していた。
「そうやってシロウは女の子に冷たい態度をとるんだね。まったく。ほんと、だめだめなんだから」
「いつもはもっと優しくしてるだろ」
「あー！でたー！私知ってる。そういうのＤＶ彼氏っていうんでしょ！セラが言ってた！」
「え、ちょ。まってくれ。それはいろいろと語弊と訂正があるというか、何を吹き込まれてんだお前！」
腹を抱えて笑う少女とは反対に、キャスターからはすさまじく鋭く冷ややかな目線が送られてくる。おい。何が言いたいんだ。言いたいことがあるなら言えばいいだろ。
涙目になるほど笑う少女と、予想外の状況に収拾をつけろといわんばかりにガンを飛ばすローブの未亡人。どちらかというと助けを求めたいのはこちらなのですが。
「ねえ。シロウ」
急に抱えた手を降ろして、少女は目線を合わせる。

「なんだよ。今度は」
「夜まで待ってよ。私、今シロウと戦う意味がわからない」
そこには、本当に呆然と、そして漠然とそう告げる声色があった。
「それは、俺たちが」
「私は、少なくとも今はマスターとしてここにはいないし、いるつもりもないわ。だから、シロウが引いてくれるって言うなら」
「引かない。俺には、やることがある」
少女の顔が明確に歪む。それは失望でもなければ、失意でもなく。ただただ、哀色の。何か吐き出しそうな表情だった。
どこか見たことのある顔だ。何度も焦がれ、その手が届かないことを嘆いた顔だ。
今もまだ。それは変わらなかった。
「どうして？だって、私にはあっても、シロウが私と戦う理由はないでしょ？」
「何でそう思うんだ？」
「だったら何で護ったりするの。別にそうじゃなくても死ななかったけど、そっちの方が理由がないじゃない」
「誰かを護るのに理由が必要なのか？」
「そんな風にごまかしたって無駄なんだから。私、そんなことすらわからないほど、鈍感じゃないもの」
強く拳を握り締める少女の顔は、強く冷たいいつもの表情とはかけ離れていて。そこに強さはなく、ただわかり合いたい一心で、彼女は声を荒げていた。
その程度の表情は、痛いほど理解できた。
思い通りにならない思いと、現状に嘆くことすらしたことがない少女は、ただ持ちえるカードを必死に切り続ける。
「じゃあシロウもフクシュウなの？私のこと憎んでるから、そうやって」
「それは違う」
「私には、それ以外の理由なんて、わからないもん」
「俺は、イリヤを憎む資格なんてない」

「じゃあ。じゃあ何でシロウは私に敵意を向けるの？どうして？」
少女はそう叫んだ。そう大きい声ではなかったが、その訴えはまさしく叫び声だった。答えは彼女の望んだものではないと、それが分かったうえで彼女は問う。
答えは、最初から決まっていた。
「俺が、―魔術師≪マスター≫だからだ」
その言葉は、トリガーだった。
少女の後方から、轟音が鳴る。精神の根源に響きわたるような。背骨に恐怖をねじり込むような咆哮が、城の内部を覆いつくす。
少女の表情は一転していた。嘲るような嗤いに、軽蔑したような表情を張り付けて、少女は淡々と死を運んでくる。
「セイバーは、いないのね。鞍替えしちゃったの？偽物は捨ててきちゃった？」
「……それは」
「気づいてないとでも思った？あんな異物。その反応って。てっきり知ってたと思ったのに」
少女の顔が陰でくらむ。何か、大きな者が彼女を明かりから隠しているのだ。
黒色の肉体。手に抱えられた不格好でありながら明確に死を予見させる大斧。その肉体は生半可では攻撃すら通さず。その精神は幾度倒そうと朽ちることはないその姿。
それは、何度も対峙したけれど未だ鮮明であり続ける恐怖の証。それほど、明確な差だ。格の差。まさに英雄というにふさわしい絶対的な暴力の象徴だった。
そして、それが今まさに、己が命を奪おうと咆哮をあげようとしている。
キャスターの震えが見て取れた。彼女は知っているのだ。目の前にいる存在が、どれほど圧倒的で、それでいて絶対的な法則であることを。
それを押さえつけるように、彼女は笑う。そうして杖を両手でつかみ、後ろを支えるように背後につく。

その様子を、少女は嗤った。
「シロウ。何かと思えば、よりにもよってキャスターを連れてきたのね。本当に、死ぬ気？」
「さてどうだろう。戦わなきゃ結末はわからない」
「わかるよ。バーサーカーは最強だもん。シロウは、ただの無駄死に。それで、本当にいいのね」
「それが結果なら、力不足を憎んで死んでいくよ」
「ほんと、嘘ばっかり。シロウと話してると、こっちがバカみたい」
少女は怪物の後ろへと姿を隠す。
正真正銘。正面からの対峙に喉がかれる。交わす視線が嫌でもその重圧を鮮明に伝え、逃げることを許さない。
でも、もう震えは止まっていた。
どれほど焦がれ続けただろう。こうして、自ら戦って足掻けることが。どれだけ幸せなことか、今の自分ほど理解できているものはこの世のどこにもいない。
妙な高揚感が体を包む。身体も。強化も。回路も。思考も。理想に描いていたものに限りなく近い。
自らを作り替える。構成概念の根本から。自らがここに立つという、そのものの根本から。己のあり方を再構築する。
「いいよ。シロウは殺さないであげる。手加減するのって大変なんだから。だから、せいぜい足掻けばいいよ」
怪物が吼え、轟音を立てて一振りその斧をふるう。空気が切り裂かれ、轟音だけが耳元を掠めていく。
「キャスター。援護を頼む」
「無論よ。不本意だけど、ここまで来たら一蓮托生だもの」
安心した。振り返らず、その声色に怯えはなく、そこにいたのはまぎれもない一人の英霊だった。力及ばぬ、強大な敵にも挑む姿は、まさしく世を変えたものの表情だった。
「少しでいいから、時間を稼いで。他は何も考えなくていい。あの子は、私に任せて」
「ほんと、嫌になるほど重い責務だよ」

「あんたが言い出したんでしょうが」
「……　悪い」
「頼りにしてるわよ。坊や」
一歩、巨人は足を詰める。
間合いを測るまでもなく、一呼吸ののちに戦闘は始まる。それは対面に構えた怪物とも。そして、己自身とも。
誓いはすでに。退路はない。己が目的を果たすまで。
流れに沿うように回路が染まる。いつの日か見た見た赤い背中の幻覚が、目の前を染める。
だがそれは、もう必要ない。奴が刻んだ物語と、これから刻む物語は、違う。
すでにもうここは、俺の始めた物語だ。
「任せろ。むしろ」
「何？」
「倒してしまっても、文句はないな」
驚き目を見開く彼女を無視して、怪物と向き合う。
それは死の壁だ。明確に立ちふさがる、絶望という名の絶壁だ。
今更だ。見慣れた道だ。であれば、越えられないはずがない。
さあ告げろ。高らかに叫べ。この偽物の道は、誰の道であるかということを。
さあこの運命の心臓部を。この手で奪い取らせてもらう。
「投影（トレース）ーーーーー」
さあ握れ。形骸に塗り固めた、すでに朽ち果てた幻想を。
「――――開始（オン）」
そう、振り下ろされる死に二本の刃を合わせた。

第12話

たった数秒。たった数度の刃の交わりと共に鳴り響く轟音は、明らかと思えるほど傾いていた天秤の全容を見えなくしていた。

振り下ろされた筈の斧剣が床を大きく削ると同時に、少年は破砕した手元の短刀を投げ捨てて、再度同様の武器をその手に握り目の前の英雄に向かい合う。

その表情に不安げな様子はなく、むしろ浮かぶ不自然なほどの高揚を感じさせる不気味な笑みを張り付けて、少年は振り回される斬撃をほんの僅かな隙間を通すように躱していく。

彩るように少年の後方から放たれる光線は、しかし一つとしてバーサーカーを傷つけるには至らなかった。僅か数回の行使で、キャスターは行使できる威力と状況を判断し、その対象を後ろの少女へと切り替える。

キャスターは己が召喚しうる兵士程度ではイリヤスフィールを追い詰められないと理解していたがゆえに、直々に殺意を込めた弾倉を装填する。

驚愕に目を見開いたイリヤスフィールは、その様子とは裏腹に冷静にその状況を鑑みて、己に降りかかるキャスターの弾丸に対する防御を前提に魔術を行使する。無論英霊が放ちうる威力の攻撃を正面から受け止めることは不可能であると認識しているのか、本能で自身を護ろうと行動するバーサーカーの戦闘を援護するように立ち回る。

少年が狂戦士の込めた一撃を回避するたびに、僅かに開くイリヤスフィールまでの射線を縫うようにキャスターはその光線を放ち尽くす。

しかし当然のように狂戦士は易々とそれらをすべて撃墜したうえで、キャスターと位置を入れ替わり刃をふるう少年に再び刃を降ろす。

そのルーティンが数度繰り返された。犠牲となった部屋の内装は酷いもので、壁をぶち破った穴から入る光は怪しげに光っていた内部の光を上書きしていく。

弾け飛ぶ少年の武器がイリヤスフィールの耳元を通り過ぎる。空気を切り裂く高い音と、粒子になる刃。少年の手元から魔術を行使した様子と共に顕現する刃がそれを上書きしていく。

あり得ないと、イリヤスフィールは絶対に揺らがない勝敗と自負を抱えたうえで吐き捨てた。

少年はバーサーカーの剣戟に合わせるように刃を擦り、そして時にその死角へと。また時には危なげにもわずかな身体のひねりのみで。奇妙なほど噛み合った演武かのように紙一重に回避を行っていた。

無傷ではなかった。明らかに負担のかかるであろう二本の腕は、まだ数分立たないうちに変色して。風圧か、それとも破片がかすったのか、顔を赤く濡らしたうえで、全身にも裂傷が帯だたしいほど刻まれていた。

それでも、その様子は数日前にマスターとしての資格を手にした、ただの魔術師のなせるものではなかった。たとえキャスターの魔術による現代においては異端とすらいえるほどの強化をその身に施されていたとしても。

そもそも、バーサーカーとの戦闘が成り立つ時点で、それは異端なのだ。

それはまるでその戦いを、既に経験しているかというほどに、無駄のない戦闘だった。

それは、奇妙なほどに繊細なバランスを保った、戦いだった。

イリヤスフィールは少年を殺す気はなかったが、生かしておく気もなかった。敵対者として立ちふさがるその姿に同情も、ましてや加減などあるはずもなく、五体満足で戦闘を終えることなど微塵も考えておらず、その上で一撃で終わらせてしまえと思っていたほどであった。

最初は能力をセーブしていた狂戦士は、しかしすでにその余裕を見せてはいない。まだ無傷。まだ欠片も負傷してはいないバーサーカーは、しかし回を増すごとにその剣筋を高めていく。

しかし、それでも少年は躱し続ける。危なげに。しかしその上で顔には邪悪なまでの笑みを浮かべて。少年は砕かれる己の刃と相反す

るように歩を前に進めていた。
無論一撃も反撃を試みることが出来ていないが、それでも、それがどれだけの異常性を含有した偉業であるかは理解するのに難くなかった。
キャスターは、その姿を頼りがいがあると感じるとともに、走らざるを得ない恐怖をひしひしと感じていた。
そこには先ほど陽気で話していたはずの少年の姿は欠片も残ってはおらず、ただ異常にも闘争を臨む化物の姿がそこにはあった。
その姿に脅威を感じたのかはわからない。しかし応えるようにバーサーカーは目の前に移るものを、狩りの対象ではなく一つの敵対者として刃をふるう。
故に、バーサーカーは自身の懐近くに少年が陣取った瞬間を見逃さなかった。
主の命に逆らうようにして振るわれた斧剣は、今までとは異なった角度で振るわれた。横に、そして面制圧として振り回された一つの壁が、少年に襲い掛かる。
これまでとは違う、いなすことも躱すこともできない一つの壁が、容赦なく少年の身体に直撃した。
刃ではない鈍い音が響く。そしてその音と共に回転しながら部屋の隅に向かって飛ばされた肉塊が、壁を彩った。
勝手に漏れた小さな叫びに、イリヤスフィールは自分自身で驚く。悲痛に歪んでいる自分自身の顔。脳裏に浮かぶ〝間違えた〟という文言。そしてそれ以上に、伸ばす手の違和感と共に襲われた未知の感覚と暗くなる視界が彼女に襲い掛かった。
生きているわけがないと、誰しもが確信できる一撃。凡夫の届かぬ一線を示す瞬間が終わったのにもかかわらず、キャスターは目の前の敵対者から目を逸らさなかった。
そしてそれに応えるように、狂戦士に弾丸となった剣が飛来する。個々は力を持たないが、しかし目くらまし程度にはなるであろう宝具の破裂効果がバーサーカーの目元を埋め尽くした。
彩られていた肖像が、ぐにゃりと顔を歪める。

肉片が、奇怪にも状態を起こす。本来であれば壁のシミの一つになっていたはずの身体は、キャスターの魔術と僅かに残る再生力によって未だ形を保っていた。

立ち上がる怪物は、己の浅黒く不自然にねじ曲がったもう使い物にならない拉げた左腕を引きちぎり、それを無造作にもキャスターの方へと投げる。

流石にキャスターはその表情を苦々しいものに変えるが、意にも返さず化物は狂戦士の前へと再び立った。

不自然なほど堂々と、死に体以上になった遺骸が立ちふさがるその様子は、面妖でいて痛々しく。それ故に悲壮的だった。

纏わりついた血の仮面。立っているのが奇跡的とすら思えるほどの打撲傷と裂傷。失われた左腕とその切り口から壊れた蛇口のように漏れ出る生きた水。

そしてその上で、浮き上がる表情に変わりがないことが、奇妙を超えてひたすらに狂気的だった。

バーサーカーは化物から距離を取った。無論恐れではなく主の命によって。

その僅かに作られた空白の時間で、キャスターは少年の左腕を止血する。キャスターは少年の既に形を失いかけている左腕を己の格納庫にしまい込み、怒りに震える手を抑えるように杖を握り締めた。

イリヤスフィールは、わずか数分で変わり果てた少年の姿に、口を開くことが出来なかった。

目元を襲うすでに止まった血を、少年は残った右腕で払う。伸ばされた朱い跡が痛々しく目元を涙のように彩るが、少年は構わず再度その手に剣を握り締めた。

その様子に。少年が失った姿に。イリヤスフィールは何か既視感を覚えた。そして、同時に、頬に走る感覚に気が付く。

少女が無意識に差し出した腕をあざ笑うかのように、バーサーカーの振り下ろした斧剣が、再度少年に襲い掛かる。

それを、身体の軸をずらすことで、本来であれば左腕が残されていたはずの箇所に死が通る。

少年は数歩後ろに下がると、手に持った剣を遊ぶ。くるくると右手の中で回された刃と共に、少年は嘗め回すように今自分が通った軌跡を眺めた。
キャスターも共に少年の僅かに後ろまで距離を取って、閉じた口を開く。
「まだやれるわね」
怪訝にも、心配にもとれる声に対して、少年は嗤いで答えた。
怪物の捻じ曲がる口元が、三日月型に変化する。
「当たり前だ。誰に聞いてる」
「坊やが死に体になるから言ってるんでしょう」
「油断した。次はない」
「満身創痍で本当によくそこまで言い切れるわね。それと」
「悪いが予想通りだ。状況は芳しくない」
少年のその清々しい言い切りに、キャスターは緊張の糸がはじけ飛んだように笑った。
「なら引く?もう左腕もないし」
こらえきれない笑いを声に変えて、キャスターはそういい放つ。
絶体絶命であることは変わらず。均衡状態も崩れ始めたにもかかわらず、キャスターは楽しむようにそう少年に問う。
返すように、少年はその笑みを強め、そして断言する。
「愚問だ」
少年の足に力が入ると共に、キャスターは再度同様にイリヤスフィールに向けて弾丸を放つ。
そこにかばう様子は一切なかった。キャスターは己が運命の大半を占めるであろう男が片腕を無くし、口から血を垂らし、痛覚を失わせた状態にも拘わらず、撤退を選ばなかった。
イリヤスフィールにとって、その光景は蛮勇を超えていた。
五体満足であった少年とすでにかけ離れていたそれは、しかし無様になりながらも戦闘を継続した。時に転がり、時に必死に身体を捻じり、それでも刻一刻と伸びる戦闘時間が、少年の偉業をさらに昇華させていく。

だが、それでも戦況は動かない。魔力切れはこの程度では起きず、微塵も傷がつかないバーサーカーの姿を見れば、決着などとうについているも同然だった。
それほど有利な状況で、この戦場の舵取りであるはずのイリヤスフィールは、しかしその心は平穏ではなかった。
まるで、拷問をしているような気分だった。哀れにも跳び惑う迷い込んだ獣を、四肢を一つずつ切り離して、そうしてさらに足掻かせているような。
そして、その引き金を引き続けているのは自分だと、イリヤスフィールは自覚していた。
バーサーカーの振るう腕の風圧で吹き飛ばされ、同時に降りかかる刃を転がるように少年は避ける。すでに破壊した床の破片が、少年の左太ももを綺麗にも貫いた。
立ち上がる少年は、しかし入らない力を不自然に思い再度足元を見る。右足の土踏まずを貫通するように突き刺さる破片が、少年の動きを阻害していた。
勝てるわけがないのだ。たとえ英霊の援護があったとして。そしてたとえ少年が普通とは逸脱した力を手にしているとしても。
だが、イリヤスフィールの願いとは反するように、少年はまだ変わらない顔色で、足に突き刺さった二つの破片を引き抜く。そして溢れる血を元も子もせず、前へと歩み続けた。
果たして、ここまでで何度の剣戟が交わされ、そして何度砕かれただろうか。
既に数えきれないほどの投影。片手のみでしかし巧みにもそれらで可能である最大限の能力を発揮し、少年は狂戦士の動きに追随する。
そんな文字通り命を賭して継続し続けた戦況は、しかしたった一手の誤算によって大きく動いてしまった。
バーサーカーが蹴り放った城壁の弾丸を、少年は危なげなく回避する。風を切り裂いた高い音が耳元を掠めていく中で、少年は足元に力を入れようとして、傾いていく視界と共に悟った。

両足にいれたと思っていた力は、しかし片方のみにしか伝わっていなかった。限界を迎えたかのように折れ曲がったそれが、事の終わりを告げているようだった。
そして、自身が溢した血痕によって、少年は足を滑らす。だらりと力を失っていく感覚に、少年は前へと倒れる視界に逆らうことが出来なかった。
狂戦士は、追い打ちをかけるように、少年の頭部に向けて刃を降ろしていく。
走らせた一閃は、これまでのどの攻撃よりも少年の命を刈り取るために放たれ、その唸りは、瞬く間に場を埋め尽くした。
それは、誰の目にも映る、終わりの合図であり。そして少年の命の終着点だった。
だからだろうか、ぴたりと一瞬。バーサーカーの動きが止まる。
確実に命に届いた一撃ゆえに、イリヤスフィールはバーサーカーの行動を無理やり拘束する。
その隙を縫うように、キャスターは越えられなかった狂戦士の壁を超える。
イリヤスフィールは反射的に自分の魔術を使いキャスターに応戦した。彼女の周りを浮遊する鳥たちは刃へと変わり、キャスターに向けて飛来する。
それらを意にも留めず、正面からキャスターは受け止める。本来であれば腕を振るうことすら必要とせず撃墜できるようなそれらに割くタスクすら、今の彼女にはなかった。
頭部を狙った刃は僅かにそれ、青い髪を僅かに切り裂き、そのベールを破る。露呈したキャスターの表情に余裕はなく、杖すら投げ出してキャスターは少女の心臓部へと手を強く伸ばしていく。
だが、それでも届かない。
ほんの僅か、1秒にも満たない時間で到達できるような距離にもかかわらず、キャスターは影に呑まれる自身の身体を視界の隅に捉え、この先の末路を予見した。
マスターの意志による縛りから解放されたバーサーカーは、状態を

そのまま反転させ、捻るように力を込めると、標準を合わせ手の甲を振り抜いた。
だが、キャスターはそれでも回避をしなかった。明確な殺意と害意が襲い掛かる中で、しかし彼女は憑りつかれた様に手を伸ばす。
ガシャンと、金属が擦れる音が響く。バーサーカーの身体を纏うようにして、かかる鎖の拘束具が、狂戦士の行動を僅かに阻害した。
遂に狂戦士は吼える。その咆哮と共に、一瞬だけ時間を稼ぐことのできた鎖はしかし無残にも引きちぎられていく。
そしてさらに威力を増した拳がキャスターに振り抜かれようかというその一瞬。バーサーカーは自身の手首に残る唯一の鎖に僅かにだけ体重がかかっていることに気が付いた。
鎖の先には、倒れ込む少年の姿があった。
少年はその鎖を自分の残った腕に巻き付けて、ワイヤーアクションのように飛びあがる。バーサーカーの生み出した力によって打ち出されるかのように、少年の身体は少女の方へと吹き飛ばされた。
無論無事で済むわけはなく、少年は残された右腕が肩から引きちぎられていく感覚を客観的に受け止めていた。一つ一つ筋繊維が引きちぎられ、情報として伝わる痛みと喪失感が、少年の身体を満たしていく。
ぐちゃりと、受け身も取れず、少年は少女の前に落ちた。その音はあまりにも湿り、また重量のあるものだった。
すでに刈り取られた意識。何も映さない瞳。流れ出る血の池と、ボロ雑巾のようになった肉塊を、イリヤスフィールは目の前にした。
少女の口から声は漏れなかった。すでに手遅れになってしまったそれに何を抱けばいいのかわからず、ただ自身を温める服の熱が痛く思えて。
故に、無意識に少年を抱きしめようと、イリヤスフィールは両手を少しだけ上にあげて前へと歩く。
バーサーカーは降り抜こうとした腕を止めた。その立ち位置が、絶妙にも己が主を巻き込んでしまうことを理解した。
その数秒。少年が文字通りその身を賭して生み出した空白によっ

て、キャスターはついに少女の心臓へ手が届く。
既に余裕のない見開かれた目が、イリヤスフィールの視界を埋めた。
強く、胸に手を押し付けると、キャスターは高らかに、そして強く言い放つ。
「チェックメイトよ。いただくわ。その小聖杯」
今にも泣きそうで逃げそうになる少女を制止して、キャスターは魔力を込めた。

踏み出した一歩は、信じられないほど軽いものだった。
乾き張り付いた喉が痛みを発しだしてから、そう時間は立っていない。未だに心臓はうるさいほど鼓動を伝えてくるし、毒のように全身に回る不思議な感覚は、脳をショートさせていた。
次々と倒れていく同級生を眺めながら、ただその光景を受け入れ始めた自分に少しだけ驚く。
昨日まで特に感情を抱くことなく、それでも日常の一幕に存在していた人々は、今己の行いによって溶かされていた。
別に、深い情はないし。手放すことにも手にかけることにも罪悪感はない。
それでも、そこには何かがあった。何度か話しただけの奴も。同じ部活で日々を過ごしたやつも。ともに何度か笑いあった奴だっている。自分を称賛し、媚びる奴らだって。
そこには、名の無い日常があったはずだった。
だけど。それらを直視して、もうすでに麻痺した感覚は痛みを伝えてくることはなかった。その代わりに与えられた別の感情は、名付け

るにはまだ経験が足りなくて。
聞き覚えのある声がまだ脳裏に響く。
わかっている。そんなことはもう痛いほど。これは、他でも無い僕が引いた引き金だ。
自分に向かって声を荒げ、敵意をあらわにした少女を前にして、強くそう自覚した。
すれ違うアーチャーを横目に、ナイフを強く握りしめて前へと走る。その先。目の前には、決意したような瞳でこちらを睨む少女の姿があった。
その手にはすでに魔力を内包した宝石が握られていた。容赦のないその姿はすでに殺意であふれていて、あと一瞬ののちにそれは放たれて、己の身体とその後ろにいる女に風穴をあけようとするだろう。
設定された状況で、彼女がどんな選択を選ぶのか。手に取るように分かっていた。おおよそ万能であり続け、叶え続けた少女が選ぶ選択など、火を見るよりも明らかだった。
選ばれしものの選択ほど、察するには容易い。英雄的な行動というのは、時にわかりやすく困難であるからこそ英雄足りえるのだ。
そして、彼女にはそれを可能とする力があった。そして、だからこそできた隙で。一瞬のうちに驚愕に染まる視線が、急かすように足に力を入れさせた。
アーチャーは美綴をその肩に抱えると同時に、反転して番えた弓を引き絞っていた。すでに矢は添えられていて、放たれる一矢は間違いなくライダーとその主を射殺す威力を持つものだった。
背後から射殺す視線が背に刺さるものの、放たれるはずの弾丸は己が身を貫いていくことはなかった。
自身の背と対応するように視線を回転させるライダーの姿が、見えないながらに雰囲気をとらえる。
石化の魔眼。使用者の視界のみにならず、使用者を認識した対象にまで襲う硬直の宝具。
敵のマスターがその宝具を正面から受けたのは本当に一瞬で、少なくともその硬直は永遠とは程遠い時間しか生み出さない。更に自身

がライダーに補給できる魔力を考えれば、発動が出来る瞬間などほんのわずかの時しかない。
故に、ここで決着を付けなければいけない。そう、決意についてこない足元を必死に前へと動かした。
これほど1秒を長く感じる時は一生にないであろうと確信するほど、ついてこない足元にいらだって。少女の危機感を示す視線と交差する中で、息の吸えない感覚が襲う。頭が沸騰したように熱く、ちかちかと星が舞うように視界は少しだけホワイトアウトしていた。
明確な殺意。明確な害意を抱いて、再度ナイフを握り締める。
ポトリと、少女の手元から宝石が一つだけ落ちる。魔術の行使かと一瞬勘繰るものの、対応できるほど自身の身体能力はすでに残ってはおらず、突き出すようにナイフを首筋に向かい伸ばした。
殺したと思った。この手で、その命に手が届いたと。実際に刃先は確実に彼女の白くきめ細やかな肌を傷つけ、紅い水晶が浮かんでいた。
だが、次に身体を襲ったのは、横から急速に遠慮なく突撃する重量で。僅かな光と共に顕現した弾丸が頬を走っていった。
熱い感覚が頬に走るのと共に、視界に移ったのは動き出した遠坂と、庇うように自身を抱きしめ足元に力を込める己が奴隷の姿。そして、粒子になっていく何かだった。
ほんの数秒もしないうちに、窓際から押し寄せる閃光。弾丸が線上に空間を彩るのと同時に、身体には正面からの強い圧力が襲い掛かる。
蹴り開けた扉が奏でた轟音のせいか、耳は少し使い物にならなくなっていた。
ライダーが自分を抱えて走っていると、そう認識するのに数秒かかる。そしてその上で、何が起きたのか認識が出来ない脳みそを回転させる。
ライダーは庇いながら走れる最高速度で階を跨ぎながら移動していく。容赦なく壁ごと貫通して己らの命を脅かす弓矢を躱しながら、わざと人質を多めに集めていた部屋へと退避する。

それを理解できたのか、アーチャーからの追撃が落ち着いたのを確認して、ライダーは自身の身体を降ろした。
常人に耐えられる瀬戸際の圧力と衝撃をうけたため、意識がまとまらず、立ち上がろうとする足に力が入らなかった。
「……ジ」
離さなかったナイフを置いて、包帯を巻いた指の甲の傷口を思いきり開く。劈く痛みを対価に、曇っていた意識は少しだけ正常さを取り戻していた。
「……ジ！」
上がらなかった顔を上へと上げ、何が起こったのか記憶を逆再生する。
届きかけた刃とは裏腹に、おそらくはアーチャーの宝具かそれに類する能力によってそれは阻まれた。あのままでライダーの動きが少しでも遅ければあそこに残っていたのは遠坂の血液ではなく自身の死体であろう。
倒れそうになる体を無理やり起き上がらせて、この先を考える。今にも向かってきているであろう二人の狩人は、今では立場を真逆としている。刈られるのはこちらだ。精々残っているアドバンテージは、この結界と、そして後ろに転がる人質たちのみ。
そう、近くに転がる女の胸倉をつかもうと
「慎二！」
はたかれた頬の感覚が、白く染まりかけていた視界を元通り赤く染めた。
既に隠された瞳で見つめるライダーの姿を見て、何が起きたのかを察した。
同時に、グッと突然肺に入る力を感じて、己の身体の異常性を自覚した。息を吸えというライダーのジェスチャーに沿って、必死に忘れた呼吸法を試し新鮮な空気を肺の中へと取り入れていく。
鮮明になる意識と共に、力を明確に込めて立ち上がる。顔を逸らして周りを見渡し始めたライダーは、声が聞こえるようになったことを確認したのち、冷たい現実をその口元から吐き出す。

「敗北です。慎二。元々不利だった我々が、ここから形勢を覆す手段はありません」
「わかってる。重要なのはいつ撤退するかだ。お前、魔力は十分吸収できたのか」
「出来るのなら後1分ほど。今すぐに撤退しても問題はない程度には」
「それなら問題は、僕たちをあいつらがそうやすやすと逃がしてくれるかだが」
追撃に関してライダークラスよりもアーチャークラスの方が圧倒的に優位であることは議論の余地がなく。そもそもサーヴァント単騎の性能のみを考えても、その有利不利は明白だった。
しかし、その差を覆さなければ、逃げおおせないことなど最初から察していた。
そもそも最初から、遠坂を殺しきれることなど考えてはいなかった。首を刃が貫いた程度では魔術師である遠坂が殺せるはずもなく、回復手段を保有していることなど考えればわかる。
人質に取れれば。もしくは彼女らを撤退の二文字に縛り付けることが出来たなら。その目的のみが、あの僅かな瞬間に凝縮されていた。
確認したいことがあった。ただ、そのために、わざわざ遠坂凛を待ち伏せて、その上で危険を承知で敵対をした。
そしてそれは叶った。明確に、そして期待外れに。そのため、ここにいる必要は本来であれば既になく。もう一つのライダーの魔力補充に関しても、8割がた完了したといっても間違いはないだろう。
にもかかわらず、脳裏に残る違和感と、噛み合いかける歯車の感覚が奇妙にも襲っていた。
半ば無謀にも覚える選択を考えて、震える口を開く。
「……ライダー。提案がある」
「聞きましょう」
「アーチャーと遠坂を引き剥がせないか」
近づいてくる敵対者の雰囲気を感じながら、長い髪を振り回すよう

にして、ライダーはこちらに顔を向け答える。
「可能ではあります。意味はないと思いますが」
「頼めるか」
「アーチャーと正面から戦い勝つ余裕は今の私にはありません。それをわかったうえで、言っていますか」
「ああ。どっちを任せるかまでは、言わなくてもわかるよな」
大きなため息と共に、承諾を示す声が目の前の女からは漏れた。
その瞬間、女は視界から消える。すでに吹き抜けと化していた穴から飛び出た蛇が、上階へと進む音が聞こえる。いくつかの鋼の打ち合う音が響き渡り、そしてそれが去っていくのを確認した。
左右に寄せていた机の一つを、中央へと移動させる。
床に置いていたナイフを手に取り、僅かに息をする倒れている黄色と緑の縞模様のTシャツを着た女を、中央の机へと乗せた。僅かに息をしており、またかすかに残る意識から見つめる目は、未だ教育者としての様子を孕んでいた。
女の口から洩れる擦れた声は、しかし明確に耳元へと吸い込まれていった。状況を理解できていないのか、それとも理解したうえでそんなことを言っているのか。問いただしたくなる程度には、その言葉は重かった。
過度な力が入っていたのか、それともこれまでのどこかで負傷したのか。砕かれた奥歯の破片が、口内から零れる。
力の入らない女の背を支えるようにして後ろに立ち、その首筋にナイフを当てて前方を眺める。それこそ、僅かにも衝撃を受けたなら、刃が食い込んでしまうほど近づけたまま、来訪者を待った。
正面から、それは訪れた。微塵にも傷つかない赤い外装で、呆れるような視線をこちらに向けながら、男は何も持たぬ手ぶらな状態で教室内へと歩み入れる。
意識しなければ呼吸できないほど張り詰めた雰囲気と絶望感。背筋から登ってくる死の香と恐怖を何とか押さえつけて、無理やり口を開き言葉を放った。
「止まれ」

吐き捨てるようにそう告げた声に、アーチャーは心底期待外れな発言であるのか睨みつけるようにして近づいてくる。
女の首筋から、一筋の赤い線が漏れた。滴り落ちながら肌を彩るように、少しずつながら血液は流れだしていく。
3メートルほどの空間をあけて、男は立ち止まった。しかしその口から漏れ出た声は、その態度とはかけ離れた、予想を大きく外れるものだった。
「殺したければその女を殺せ」
冷たく、そして背筋まで凍り付くほど強い語感で、弓兵はそういい放つ。
虚ろに見えるその瞳には表情はなく、乾いた声だけがその発言の重みを支えていた。
堂々と立ちふさがる男の姿は、何故だか重なるものがあった。
「その代わり、その刃が動いたときが、お前の首が飛ぶ時だと思え」
そう告げると、弓兵は己の手に刃を抱いた。
その瞬間を、見逃さず鮮明にこの目は捉え、そして焼き付けた。
ガチャリと、何かがかみ合う音がする。あり得ない。そんなはずはないと考えるのが普通であり、そんな選択が思い浮かぶ方が異端であると理解したうえで、どこか納得する自分がいた。
無駄に力が入り働くのをやめていた表情筋が、ようやく動き出す。心の底から漏れ出た笑みが、緊張していた神経を沸騰させ、興奮に導いていった。
笑い声が漏れないように口元を少しずつ緩めていきながら、声を出した。
「いいのかよ。仮にも召喚された英雄が、この戦争に巻き込まれた被害者を見捨てても」
「ああ。犠牲者が出るであろうことなどもちろん最初から想定していた。故に、お前の先ほどの発言にも理解を示せるし、そこの女一人の命でこの場全員の命を救えるのなら、私は喜んでその首もろとも貴様の首を取ろう」
最も、と男はそう言葉を切る。

ゴキリと、異音が耳元で鳴り響く。不思議にも視界にわずかに映るのは男の表情ではなく、ナイフをつかんでいる手の感覚が、遅れてやってくる痛みとは対照的に遠ざかっていった。
何かが肩に突き刺さる感覚と共に、熱い血の感覚が、脳裏を埋め尽くす。かろうじて横にずらすことが出来た瞳は、己の肩に他人事のように刺さる杭を眺めていた。
「がっあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」
声にならない叫びが、口からあふれ出す。味わったことのない異物感と流れ出ていく血の喪失感が、からっぽの中身を埋め尽くしていった。
痛みを紛らわせようと精一杯口から洩れる嗚咽と涙を目の当たりにした男は、まるで他人事のように乾いた笑いを漏らした後、背中でくの字に曲げた腕をつかみながら口を開く。
「刺しておくのが最善だったな。間桐慎二。貴様程度がどれほど力を込めようと、化物である我々の速度に追いつけるとでも思っていたのか。であれば、既に首元に一つ穴をあけていた方がまだ交渉の余地があったというもの」
さて、と男は言うと、肩に突き刺さる小さな杭をぐりぐりと奥に突き刺した。
アーチャーは慣れているのか、巧みにも与えられた痛みで神経が焼き切れたように熱く、ちかちかと光る視界と意識はまるで自分の物ではないようだった。
どこか遠くで俯瞰するように、自分の叫び声が、耳元でうるさく思えた。
すると数秒後、アーチャーは強く押し付けるように杭を押し込んだ。貫通する感覚と共に、それが楔のように床と己が繋がれているのを目の当たりにする。
「叫び声には流石に反応せざるを得ないようだな。ライダー」
アーチャーの嘲る声を辛うじて聴き、薄れそうになる意識を総動員して顎を床に立てるように顔をあげた。
紫色の髪は微塵も揺れてはおらず、焦りの見えないその顔からは、

逆に安心すら感じるものだった。その僅かに負傷した右腕と、走ってくるもう一つの足音から、敵対した同級生の逸脱差が感じ得て、こんな状況にもかかわらず苦笑いが漏れる。
　アーチャーの作り出した短剣が、自身の首筋に当たる。ヒヤッと、それでいて食い込む感覚が襲った。
「さて。ライダー。立場は逆転したな」
「……　ええ。それで？」
「余り長らく交渉している時間はないのでな。単刀直入に言おう。解除をしないのなら、今すぐこの男を殺す」
　あまり、マスターに遺体を見せたくはないのでなと、アーチャーは言い放ち手に持った短剣を一度引く。切り裂かれた薄皮からは血液がスッと流れ、床を少しずつ濡らしていった。
　アーチャーの言葉は紛れもなく本気だった。故に、今にも到達しそうである己が敵対者がここに足を踏み入れた時には、この首はもう繋がってはいないだろう。
　にもかかわらず、ライダーは何の感傷もない表情で、ただ茫然と口を開く。
「どうぞ。構いません」
　表情が見えずとも、見開いたであろうアーチャーの瞳と、僅かにだが息をのむ音が聞こえた。
　そんなことは意にも留めず、ライダーは言葉を紡ぐ。
「既に気づいているでしょうが、その男に回路はありません。故に、私はその男の生死に興味がない」
　ライダーは先ほど付け直した目隠しを少しずつ外していく。
　突き放すようなその言葉に嘘偽りはなく、冷たくそして捨てたような態度は誰の目にも明らかだった。
「だから、私は助けませんし、貴方がその男を殺すのなら、可能な限りこの校舎の人間たちを食い散らかすだけです。残念なことに殺さぬよう命じていたのは、そこで這いつくばる男である故」
　ライダーが、己の武器を構えた音がする。
　既にその姿を視界に収めることはやめていた。見慣れた校舎の見

慣れた木造の床の筋が、視界を埋め尽くしていた。
まるで呪うかのように人に見えてきたその模様を一度笑って、切れそうになった自身の手の感覚に再度集中する。
だから、とライダーは小さくつぶやいて、身体を前傾姿勢へと移していく。
目を開こうとするライダーに対面しながら、アーチャーはグッと足元と腕に力を込めた。
そして
「立つのならば、己の足で立ちなさい。慎二。でなければ、ここで死ぬだけです」
そんなムカつく声を皮切りに、左手に持っていたナイフを身体から落とすように右手へと持ち変える。
再度左肩が完全に外れた音と激痛。引きちぎるように持ち上げた身体のせいか、ブチブチと筋繊維を引きちぎる感覚と共に貫通し、突き抜けていく杭。
身体を反転させるようにして、自身を抑えるアーチャーの肩に焦点を当て、ナイフを振り抜いた。
アーチャーは全てを見抜いた上で既にこちらを無視していた。その神経は全てライダーが宝具を展開するタイミングにのみ注視していた。
ーーーー初めて、人を貫く感覚が、手に走る。肉を掻き分けるように進む鋭利な先端が、少し気持ちいいとすら思える感覚がショートしかける脳にこれ以上ないくらい感覚を焼き付けていく。
ようやくこちらをちゃんと見たのか、その驚愕したような視線が、一瞬だけ交わされたのを確認した。
口元は、勝手に緩んで声を紡ぐ。
「ーーーーーほら。立ったぞ。ライダー」
ずるりと、そして瞬時に書き換わっていく視界と重圧が、身体を走る。

ガラスを突き破った感覚と共に、視界を埋め尽くしていた邪悪な赤が消えていく。結界が解かれた故に、普段と変わらない煌々と光る太陽が、閉じた目を貫通して赤く光る。
身体に走る尋常でない痛みと、ライダーに抱えられているがゆえに伝わる空気の抵抗が、身体の感覚をばらばらにしていく。
必死に意識をかき集めて、己の肩に突き刺さっているライダーの武装を他人事のように冷ややかに見つめた。
「他に方法があっただろ」
じゃらりと己の身体に纏わりつく銀色の鎖が不満だった。
しかし、ライダーはそんな不平の声に心底うんざりしたようにため息をつく。
「はぁ。あのまま貴方の元に走っていって身体を抱えて走り去れるほど、アーチャーが隙をくれると本当に思っているのですか？」
「思ってないけど、お前、流石にこれは乱暴が過ぎるだろ」
ほんの数十秒前、僅かに状態をあげた上半身に向かって、事も有ろうにライダーは容赦なく自身の武器を投擲した。
貫通した穴に綺麗に収まった彼女の杭は、この身体を挟んで円状にたゆんだ鎖にものの見事に入り込み、まさにアンカーとしての役割を得た。
そして目を開かぬままこの身体を自分の方へと引っ張り、空中に放り投げたまま移動して窓際にて抱え、窓を背から突き破ったのである。
アーチャーは牽制された瞳故に、マスターと合流せず追撃するか否かで悩んだ結果、解除された結界を見て追撃を辞めた。
一瞬で、それでいてあっさりとした結末だった。
血液が失われ過ぎたのか、朦朧とする意識を無理やり引きずり出すために、肩に刺さる金属を引き抜く。
すでに麻痺した感覚は、それ以上痛みを伝えてくることはなかった。
「……　死にますよ。これ以上の出血は」

「そん時はそん時だよ。その程度の運だったのなら、僕も安らかに眠れることだろうさ」
「……　帰ったら、出来る限りの治療をします。完治はしないでしょうし、この戦いが終わるまでに治るかどうかも怪しいですが」
珍しく深刻な声でそう告げるライダーの言葉は、実感として伝わっていた。
自分の物でないと誤認するほど痙攣する四肢。身体の先端から先端まで突き抜ける死の寒気は、しかし存外にも心地の良いものだった。
なぜだろうか。壊れていく自分の身体が、何となく心地よく、そして求めていた。
「ライダー」
「はい」
「思った通りだった。確証はないし、根拠もないけど。それでも、確信した」
ブラックアウトしていく視界の先に、先ほどと、そして数日前起こした騒動の結末を思い出す。
己の前にナイフを投げ。覚悟を問い。そして、侮蔑と軽蔑を口にして帰った男の姿を思い出す。明確な殺意を教えた、かつての姿とは重ならない異端の姿が。
あの時の、忘れもしない男の手元に見えた光が、重なっていた。
本来であれば、霊体を傷つけることなど叶わないはずの刃は、見事にこの手にその感触を焼き付けた。
まさしく、戻れない感覚を、この身に刻み付けた。
死が近く、本当ならば脂汗におぞましいほどの恐怖を共にしなければならない状況下で、しかし高揚する神経は脳裏を沸騰させる。
初めて、意識せずに自然に噬えた気がした。
「ああ。本当に、噬えて来るよ」
あり得ないと結論づけるのは容易く、信じるものなどこの世のどこにもいないだろう。
似たような姿。似たような戦法。奇妙な類似点。偶然としか思え

ない共通点。目を逸らそうとすれば容易で、むしろ信憑性の欠片もない結論の方が暴論に近かった。
しかし、確信があった。納得した。ストンと奇妙なほどにその事実は自分の手元に降りてきたし、受け入れるのは容易かった。
勝てるわけがない。比べるにも及ばない。同じ土台にすら立っていない。それは、あの遠坂であろうとも変わらなかった。
むしろ、アレと同じ舞台に立てるものなど、この場に一人もいないではないかと。今までいったい自分は何と戦わされていたのかと、恐怖よりも先に嘲りが前へときた。
最初から、そして最後まで。あの男に追随するものなど一つたりともなかった。
「あいつは」
どのような結末で、どのような回路で、どのような経路で。己が知る男がそうなるのかはわからない。
だが。そんなことはとっくにどうでもよかった。
だって、目の前にした奴は文句のつけようがないほどに。
「英雄だった」
今にも消えかける意識の中で、命を賭してまで勝ち得たものは、そんな餓鬼のような結論だけだった。

既に途切れ途切れの呼吸をするだけの肉塊を、キャスターは抱えて空を駆けていた。
取り繕うことなく焦るその表情は太陽に照らされており、己の姿を隠すローブをかぶる労力を割くことすら疎むほど、キャスターは鮮烈

に帰路を急いでいた。
達磨のようになったそれは、しかし僅かに残る意識を再びその目に宿らせると、小さく擦れたわずかな振動を口から吐き出した。
「……キャス、ター。無事か」
回らない首で、その肉塊はキャスターの輪郭に沿って目を動かしていく。その視線はまるでキャスターのことを慮っているようで。自身の肉体が一体どうなっているのか、わかっているであろうにもかかわらず、それの第一声はその一言だった。
もはや、それはキャスターにとって、気持ち悪さを超えて唯々痛々しかった。
キャスターは精一杯今自分にできる最大限の嫌み顔を張り付けて、その肉塊の瞳に自分の視線を合わせる。
「バカね。無事なわけないでしょ。ボロボロもいい所よ」
しかしその声色か、普段と違う呼吸からか、歯がゆさを感じ取ったそれは、ばつが悪そうに顔を歪めた。
キャスターは、今すぐ放り投げてしまいたくなるほど、その様子が腹立たしく思えた。
「悪いな、結局、こんななりに、なっちまった。我儘に、付き合わせちまった」
そう、肉塊は四肢の内3つを失った体で告げる。擦れた震えはすでに声とすら思えないほどで、必死に絞り出した残り汁を吐き出しているような必死さで、これは音を紡いでいた。
この様子を、果たして彼の家で待つ人々が目の当りにしたら何というだろうかと、キャスターは想いを馳せる。
「……本当に、治るんでしょうね」
切株からすでに血液は止まっていて、キャスターにできる治療はすでに済んだ跡だった。故に、もしも伝えられたことが誤りであり、この先もこの姿のままなのであれば、戦争終結まで生存できるかどうか怪しいくらいだった。
しかし、自分の肉体をみた少年は、自嘲するように笑った。
「治るよ。セイバーとの契約は問題なく継続してる。他の部品も残っ

てるなら、明日には問題なく動けるようになるはずだ」
「……　自分の身体をそんな」
「使うさ。こんな、化物みたいな力でも、使えるんだから」
キャスターが言おうとした言葉を先取りして、上書きする形で、そう感情の灯らない男は冷たく言い放つ。
肉塊は、彼の契約者との距離が近づいていくにつれて、その肉体を修復させていく。
裂傷や打撲痕が、段々と治っていく姿は、驚愕であり壮観ではあるが、しかし見ていて気持ちのいいものではなかった。
肉体が、不自然にも形を戻していく。その主人の感情や感傷を無視して、自動的にあるべき姿へと修復されていくその姿は、お世辞にも美しいものではない。
不揃いなねじれが、無理にぐちゃりと音を立てて元通りの形へと変貌していく。切り刻まれていた肉体が、ピンクの肌を露出させて意思を持つように引き付け合っている。まるで、肉塊が奏でる交尾のようにそれは蠱惑的で、それ以上に奇怪だった。
何と取り繕うとしても、その姿は化物だった。それは、生命に許されていい姿では決してなかった。キャスターにとって目を逸らすほどの事ではなかったが、しかし、直視するにはあまりにその背景に見えるものは重すぎて、そして凄絶にすぎた。
そんなぴくぴくとバクテリアのように蠢く身体を見ながら、少年は自身を笑っていた。笑えてしまえていた。
それが、どれほど哀れで、そして残酷であるか。理解したうえで少年は尚もわらっていた。
――――あぁ。本当に。化物だな、この身体は。と、少年は他人事のようにつぶやく。
キャスターは、それを叱咤することも、同情することもできなかった。宙ぶらりんになった感情だけが吊るされていく感覚を、噛み砕くようにキャスターは強く歯を噛む。
「怒るわね。セイバーは」
拠点についたときの、セイバーの表情を思い浮かべながら、キャス

ターはふとそう口にする。
少年にとってもそれが気がかりだったのか、手がないゆえに頭を掻くことが出来ず、困りはてたように先ほどとは違った笑みを漏らす。
「できれば、セイバーには見せたくないんだけどなぁ。こんなみっともない姿」
「遂には堪忍袋の緒が切れるんじゃない？外出禁止令が出るかも」
「それは問題だな。買い物に行けなくなる」
「残念だけど、坊やの身体は瞬間接着剤じゃないんだから、この状態でご対面は避けられないわよ」
「……　まあ、女王様の慈悲を信じるしかないかな」
にやりと普段通りのいたずらめいた表情で少年はキャスターに向かってはにかんだ。
その、年甲斐もない幼い表情が、キャスターの感情を少しだけ揺らした。
だからだろうか、
「ねえ。なんで、嗤ってたの？」
そう、己から零れる問いを、キャスターは漏らしてから気づいた。
少しだけ驚くように。そしてスッと意識が薄れていくように、少年の目からは光が消えていく。
それでも、ちゃんとその問いを聞き届けていたのか、少年は最後に振り絞るようにして声を紡いだ。
たった一言だけ。〝戦えたから〟と。そうつぶやいて少年は最後に残した僅かな気力すら使い切って、僅かながらの眠りへといざなわれていく。
そんな回答を聞くべきではなかったと、キャスターはその返答を聞いて質問をしてしまったことに吐き気を催すほど自身を嫌悪した。
情を抱く気はなく。この関係性は、己がマスターである存在を救済し、そして自身もこの世界に一つの個として根差す目的を叶えるという一点のみに集約していた。故に、どれほどこの少年が、己が身をまるで使い捨ての玩具のように用いていようと。そしてその果てが決まっていたとしても、対して関係はないのだ。

たとえ、その少年の姿に、自分自身を重ねることが出来たとしても。
たとえ、その痛々しいまでの歪んだあり方が、どこか似ていたとしても。
たとえ、己を化物と嘲り、嫌悪したうえでその力を行使できる者だったとしても。
その役割は、自身にはないと、キャスターはその思考を拒絶した。
〝魂食い〟。それは、己が魔女であり、そしてそれを受け入れたうえで行使する行為だった。
もはやいまさら、それを忌避するほど意固地でもないし、誇りや誉などこの身に宿るはずもない。その一線など、キャスターは光を得た時に超えていた。
故に、キャスターは馳せてしまった。
少年が戦いの最中に浮かべ続けた笑みの意味を。
それを半ば押し付けられ、己の願いを直視せず壊しつくした少女の、饒舌しがたいその表情を。
そのあり方を受け入れたこの小さな少年から、キャスターは目を逸らさずにはいられなかった。
遠目に、しかしサーヴァントには視認できる範囲に、ついには拠点が姿を表す。
セイバーはキャスターの手元を見ると、スッと目線を下げたのち、後ろに立っていた少女を黙って寝室へと押し込んでいった。
ああ本当に、と。キャスターは嘆息を漏らしながら、暫く使われていない布団に、少年を乗せる。
蠢く切り口に、ボロボロになった手足をつなげていく。奇妙にも、取り込むようにボロ雑巾のようなそれに噛みついた肉が、それらを取り込んでいく。
その様子をみて、キャスターは疑問視していたことを再確認した。
その哀れな有様で。壊れ果てていたその身体で。
少年は、二体のサーヴァントに魔力を供給してなお、なぜあれほどの魔術行使を続けることが出来たのかと。
疑問は、疑念へと膨らんでいく。無限に重なり合う推論が争いを始

めて、より目の前の少年が人の皮をかぶった何かであるかのように錯覚させられる。
いったい、少年は、どこからその魔力を調達していたのかと。
そして、あの時少年が使っていた武装の数々は、一体。どこで。
しかし、その疑念から、キャスターは意図的に目を逸らした。
そして、その化物としての自身を受け入れた器を、遠めにも眺めていた。
同情しているわけではない。壊れている人間など、キャスターは腐るほど見てきたし、これから生み出すことに何の抵抗もない。
しかし、その在り方と。そしてその願いを。
ぐちゃりと少女の前に転がった肉塊の、救われたような表情が、焼き付く視界から離れなかった。